たに濟まないことをしたのよ。」
「それはどういふ譯で？」
「あの、かうなの――あんたの留守にね、あんたの部屋へはいつたところ――そこに、あんたの卓の上に、詩を書いた手帳が目つかつたでせう……（ネジダーノフはぎくつとした。本當にこの手帳を卓の上へ忘れたのだ。彼は今それを思ひだした）――わたし懺悔するわ。實はねえ、どうしても好奇心が抑へきれないで――讀んでしまつたの。あれはあんたの詩でせう？」
「僕のだ。ねえ、マリアンナ！　僕がどれくらゐあんたを愛してるか、どのくらゐあんたを信頼してゐるか、それを何よりはつきり證據だてるのは――あんたに對して殆ど腹を立てゝゐないといふ事だ。」
「殆ど？　ぢやほんの少しでも、とにかく腹を立てゝるのね？　ついでに言ふけれど、あんたはわたしをマリアンナと呼んでるでせう。だけどそれかと言つて、わたしがあんたをネジダーノフと呼ぶ譯に行かないわ！　アレクセイと呼ぶことにしませうね。ぢや、『親しき友よ、われつひに死に行くときは……』といふ句で始まつてゐる詩ね、あれもやはりあんたの作？」
「僕の……僕のだ――たゞお願ひだから、そんな話しはやめておくれ……僕を苦しめないで。」
マリアンナは首を振つた。
「あれは隨分かなしい氣分のものね……あの詩は。あれはわたしと知り合ひになる前の作でせう、どうかさうであつてほしいわ。だけど、詩としてはよく出來てるのね――わたしの分かる範圍内では、あんたは文學者になる素質がありさうな氣がするわ。だけど、わたしにはちやんと分かつてゝよ――あんたには文學なんかよりもつと高尚な、もつと立派な使命があるのよ。もつと前なら、そんな事をしてもよかつたんだけれど――つまり、ほかの仕事が出來ないやうな時代にね。」
ネジダーノフはすばやく彼女に視線を投げた。
「あんたさう思ふの？　さう、僕もそれに同感だ。あつちで成功するよりも、こつちで破滅した方が遙かにましだからね。」
マリアンナは急につと立ち上がつた。
「さうよ、アレクセイ、あんたの言ふ通りよ！」と彼女は叫んだ――すると彼女の顏ぜんたいが歡喜の焰と輝きに燃え上がり、深い胸から湧き起こつた感激に充ち溢れた。「あんたの言ふ通りよ！　だけど事によつたら、わたし達もすぐには破滅しないかも知れないわ。わたし達も成功するかも知れなくつてよ。見てゐらつしやい、わたし達も役に立ちますわ。わたし達の生活が無駄になるやうな事はなくつてよ。わたし達は民衆の中へ行くんだわ……あんたは何か手に職を覺えてゝ？　知らない？　まあ構やしないわ――わたしたち働きませう、わたし達の同胞に自分の知つてるだけのものを捧げませう――わたしも必要だとなれば、料理女にでも、お針にでも、洗濯女にでもなるわ……見てらつしやい、見てらつしやい……それは手柄でも何でもありやしない――だけど、幸福だわ、幸福だわ……」
マリアンナは口を噤んだ。けれど遙かかなたにそゝがれたその目は、燃え立つやうであつた……彼女が眺めてゐたのは、眼前に開けた遠景ではなくて、まだ誰も人の知らぬ、かつて存在したことのない別なものであつたが、彼女の目にはそれがまざ〳〵と映つてゐた。
ネジダーノフは彼女の體に身をよせた。
「おゝ、マリアンナ！」と彼は囁いた。「僕はあんたの愛を受ける價値がない！」
彼女は不意に全身ぶる〳〵と慄はした。
「もう家へ歸る時刻だわ！」と彼女は言つた。「でないと、また捜し廻るに相違ないから。尤も、ヴレンチーナ・ミハイロヴナは、もうわたしに諦めをつけてるらしいわ。あの人の目から見ると、わたしは墮落した女なのよ！」
マリアンナは何とも言へない明るく喜ばしい顏をして、この一言を發したので、ネジダーノフはその顏を見ながらにつこり笑つて、『墮落した女！』と繰り返さずにゐられなかつた。
「だけどあの人は、そりや侮辱を感じてるのよ。」とマリアンナは言葉を續けた。「だつて、あんたがあの人の足もとに體を投げ出さないんですもの。だけど、そんな事は何でもないわ――それよりかね……わたしこゝにこのまゝじつとしてゐられない。わたし家出しなくちやならないわ。」
「家出？」とネジダーノフは躊躇がへしに言つた。
「えゝ、家出を……だつて、あんたもじつとしちやゐないでせう？　一しよに行きませうよ。わたし達は一しよに働かなくちやならないわ……一しよに行つてくれるでせう？」
「世界のはてまで！」とネジダーノフは叫んだ――その聲は興奮と、一種突發的な感謝のために、思ひがけなく慄へを帶びて響いた。「世界のはてまで！」この瞬間かれは本當に、マリアンナの行きたいといふ所なら、何の躊躇もなく出かけて行きさうな氣がした！
マリアンナは彼の氣持ちを悟つて――つゝましく幸福さうに溜め息をついた。

「ぢや、わたしの手を取つて頂戴……たゞ接吻しないでね——しつかり握つて頂戴、同志として、親友としてね……えゝ、さうよ！」

二人はもの思はしげな幸福らしい樣子で、一しよに家の方へ歩きだした——若草はその足もとに甘え、若葉はあたりに騷いでゐた。光りと影の斑紋が二人の着物の上を、ちら〳〵とすべりながら走つた——彼らは二人ともその忙しげな戯れや、樂しい風の鞭うちや、さわやかな木の葉の輝きや——自分自身の若さや、それからお互同志に向かつて——絶えずほゝゑみ掛けるのであつた。

第二編

二三

ゴルーシキン家の晩餐後、ソローミンが五里ばかりの夜道を元氣よく歩き切つて、工場をとり卷く高い壁の潜りを叩いたとき、もう東の空が赤らみかゝつてゐた。門番はすぐに彼を中へ入れた——そして鎖に繋がれたまゝ、毛むくだつた尻尾を大きく振りたてる、三匹の羊犬を從へて、赤〻しげな心づかひを面に浮かべながら、彼を離室まで送つて來た。彼は所長の無事な歸宅が嬉しくて堪らないらしかつた。

「どうしてこんな夜中にお歸りになりました、ヴシーリイ・フェドートゥイチ？　わたし達は多分あすのお歸りだらうと思つてゐました。」

「なあに、ガヴリーラ、夜中にぶら〳〵歩くのも、却つていゝもんだよ。」

ソローミンと工場の人々の間には、幾分並みはづれたものはあつたけれど、氣持ちのいゝ關係が結ばれてゐた。彼らは目上の人として彼を敬ふと同時に——まるで、對等の人か身内のやうに、彼を遇するのであつた。たゞ皆の目から

見ると、彼は恐ろしい物知りなのであつた！「ヴシーリイ・フェドートフの言はつしやつた事は、」と彼らは勿體らしく言つた。「神さまの言はつしやつた事もおんなじだ！　あの人はどんな難かしいことだつて、すつかり卒業してゐなさるんだから、どんな英吉利人だつて、へこまされちやうんだ！」實際、あるとき英吉利の堂々たる紡績會社の持ち主が、この工場を參觀に來た事がある。その時ソローミンが英語で應對したためか、それとも心から彼の知識に驚かされたのか——とにかく、英國人はのべつソローミンの肩を叩いて笑ひながら、一しよにリヴプールへ來ないかと勸めた。そして職工たちに向かつては、絶えず片言の露西亞語で、「この人よろしい！　おゝ！　よろしい！」と繰り返した。職工たちも同じやうに笑ひ返したが、内々得意な氣持ちがしないでもなかつた。『そら見ろ、うちの大將はどうだい！　うちの大將は！』といつた氣持ちなのである。

彼は全く『うちの人間』であつた——彼らのものであつた。

翌朝早くソローミンの部屋へ、氣に入りのパーゼルがはいつて來た。彼は技師を起こして手水を使はせながら、何やかや話しをしたり、何やかや訊いたりした。それから、二人で一しよに大急ぎで茶を飲むと——ソローミンは油じみた鼠色の背廣を着て、工場をさして赴いた——やがて彼の生活は、大きな節動輪のやうに廻轉しはじめた。

しかし、その運動は一たん休止さるべき運命を擔つてゐた。

ソローミンが歸つてから五日ばかりたつた時、立派な四頭立ての赤い馬車が、工場の庭へ乗り入つた——白つぽい豌豆色の四季施を着た侍僕が、パーゼルに案内されて離室へ來ると、紋章入りの封筒をもの〳〵しくソローミンに手渡しした——『ボリース・アンドレーイッチ・シピャーギン閣下』の手紙である。香水——ではない、何か並みはづれて洒落た英吉利の香料を浸みこませたこの手紙は、三人稱でこそ書いてあつたけれど、祕書の手を借りないで、閣下ぢきぢき筆をとつたもので、その文意はかうであつた——現代文化の代表者たるアルジャノエ村の領主は、かねて高名を聞いてはゐるけれど、直接面識のない人に、とつぜん書面を送る非禮を詫びた後、『僭越の至りながら』、極めて意義ある工業上の企畫に關し、尊臺の有益なる助言を傾聽したいから、當方の領地までご光來が願ひたい——もし當日のご來車が叶はぬならば、いつでも尊臺のご都合の日を知らせて貰ひたい。今日さし上げた馬車は、いつでも尊臺のご用に立てるであらう。それから後に、いつものきまり文句

が續いて、最後に二伸が添へてあつたが、そこはもう一人稱になつてゐた。『なほ粗餐呈上いたしたく候間、御不斷着のまゝ、フロックコートにて御出で下されたく願ひ上げ候』（御不斷着のまゝといふ一句にアンダーラインが引いてあつた）。この手紙と一しよに白つぽい豌豆色の侍僕は、幾らか極りわるさうな樣子で、封蠟もつかはない糊貼りの手紙をさし出した。それはネジダーノフから來たもので、中にはたゞ一言、『どうか、來て下さい。あなたは非常に必要な人で、非常にためになる人なんです。たゞし、シピャーギン氏に對する意味ではありません。』と書いてあつた。

シピャーギンの手紙を讀んで、ソローミンは考へた。『不斷着のまゝでなくつて、ほかにどうして行きやうがあるものか。燕尾服なんか用意がありやしない……それに、あんな所へのこ〳〵出かけて行く義理がどこにあるんだ……ただ時間を潰すばかりだ！』しかし、ネジダーノフの手紙に目を走らせたとき、彼は後ろ頭を掻いて、決心のつきかねた樣子で窓に近よつた。

「ご返事はいかゞでございませう？」白つぽい豌豆色の侍僕が、しかつめらしくかう訊いた。

ソローミンはなほ暫らく窓際に立つてゐたが、たうとう頭の毛を振るひあげて、片手で額を撫でながら口をきつた。

「行きませう！　ちよつと着換へをするあひだ待つて下さい。」

侍僕は氣どつた樣子で部屋を出た。ソローミンはバーエルを呼んで、二人でちよつと相談をした後、もう一ど工場の方へ駈けだした――それから田舍の仕立て屋が作つた、恐ろしく腰の長い黑のフロックコートを着て、少し羊羹いろになつた絹帽を被り（これを被ると、彼の顏は急にこつこつした表情になつた）、馬車に乘り込んだ――が、突然、手袋を持つて來なかつたのを思ひ出して、『影身に添うて離れない』バーエルに聲をかけた――こちらは洗濯したばかりの、白い鹿皮の手袋を持つて來た。それは指先がどれもこれも太くなつて、ビスケットのやうな恰好をしてゐた。ソローミンは手袋を衣嚢へ突つ込むと、出してもよろしいと言つた。そのとき侍僕はだしぬけに何の必要もないのに、威勢のよいところを見せて、馭者臺へ飛び上がつた――お上品なおかゝへ馭者は、妙に黃ろい音を口から出した――かうして馬は走りだした。

ソローミンが次第にシピャーギンの領地へ近づいてゐる間、この一流の政治家はわが家の客間に坐つて、半分ページを切つた政治上のパンフレットを膝に載せたまゝ、夫人と話しをしてゐた。彼は妻に向かつて、自分の工場が手のつけられないほど成績不良で、根本的な改革の必要があるので、ソローミンを商人の工場から自分の方へ引き拔いて來る譯に行かないか、つまりその瀨ぶみをするために呼んだのだ、と打ち明けた話しをしたのである。ソローミンが來訪を拒むだらうとか、ほかの日を指定するだらうとかいふやうな事は、かりにもシピャーギンの頭に浮かばなかつた。――尤も、彼自身ソローミンにあてた手紙で、日取りは當人の自由に任せると書きはしたけれど。

「だつて、家の工場は製紙の方で、紡績ぢやないんですものの。」とヴレンチーナ・ミハイロヴナが注意した。

「おんなじ事だよ、お前。向うも機械だし、こつちも機械だ……ところが、あの男は機械技師なんだからね！」

「でも、あの人は專門でやつてるかも知れませんわ！」

「なに、第一、露西亞には專門家なんてものはありやしないし、第二に――繰り返して言ふが、あの男は機械技師なんだからね！」

ヴレンチーナ・ミハイロヴナはにつこり笑つた。

「氣をおつけなさいよ、あなた。若い人のことでは、もう一ど手をお燒きになつたぢやありませんか。どうか二度目の間違ひがなければようございますが！」

「それはネジダーノフのことかね？　しかし、とにかくわたしは自分の目的を達したやうな氣がするよ。コーリャの教師としては、あの男もまんざら惡くないからね。それにいはゆる nn bis in idem! だからね！　どうかわたしのペダンチズムを堪忍しておくれ……それはつまり、もの事は續けて二度も繰り返されるものぢやない、といふ意味なんだよ。」

「あなたさうお思ひになつて？　ところがわたしはね、この世の事は何でも繰り返されるものだと思ひますわ……殊にその物の性質から言つて、さういふ傾向を帶びてるものはなほ更ですわ……とり分け赤い人達の間ではね。」

「それはどういふ積りなんです？」眉みを帶びた手つきで小册子を卓の上へ投げだしながら、シピャーギンはかう訊いた。

「目をお開けなさい――さうしたら見えますわ！」と夫人は答へた。彼らは佛蘭西語で話す時には、無論お互に vous（言葉）を使つてゐたのである。

「ふむ！」とシピャーギンが聲をたてた。「それはお前、あの書生つぽのことかね？」

「えゝ、あの書生さんのことですわ。」

「ふむ！　一體あの男がこゝの中で……（彼は額の邊で手を動かして見せた……）何か考へ出したのかね？　え？」

「目をお開けなさい！」

「マリアンナかい？　え？」二度目の『え？』は初めの分より一そう鼻へかけて發音した。

「目をお開けなさいと言つてるぢやありませんか！」

シピャーギンは眉をひそめた。

「まあ、そんな事は後でよく調べよう。――ところで、今さし向きちよつと言つて置きたい事があるんだ……あのソローミンは多分幾らかまごつくだらうと思ふ……そりや何分もつともなことだ、世馴れないんだからね。そこで、あの男になるべく優しくしなくちやなるまい……餘りびつくりさせないやうにね。わたしは何もお前のために、こんなことを言つてるんぢやない。お前は立派なものだからな、誰だつてすきな人間を、忽ち魅了してしまふ胸があるんだから――わたしはある事を知つてゐますよ、奥さん！　わたしはつまり他の人のためにこんな事を言つてるんだ。早い話しが、あの男なんか……」

彼は隅櫃の上に乘つてゐる、流行型の鼠色の帽子を指さした。この帽子は今朝からアルジヤノエに來てゐる、カルロメイツェフ氏のものであつた。

「あの男は實に頑固だからね、お前も知つての通り。あの男はどうもあんまり民衆を輕蔑しすぎる。それは實に……感服しかねることだて。それに、わたしはこの間から氣がついてゐるのだが、あの男は妙にいら〳〵して、人に突つかゝつてばかりゐるぢやないか……事によつたら、例の一件が――そら（シピャーギンは曖昧な方角をさして、頭をしやくつて見せた……けれど妻はその意味を悟つた）、はかばかしく進まないのかね？　え？」

「目をお開けなさい……わたしもう一どいひますわ。」

シピャーギンは身を起こした。

「え？　（この『え？』は全然別な性質のもので、別な調子で發しられた……前よりずつと低かつたのである。）さうなのかい？　もしさういふことなら兩方の眼を、それこそ開けすぎるくらゐ開けて見せるぞ！」

「それはあなたのご勝手ですわ。ところで、けふ新しく來る若い人のことですが――もし本當にけふ來るのなら、どうか心配しないで下さい。よく氣をつけて間違ひがないやうにして置きますから。」

ところが、事實はどうだつたらう？　まるで氣をつける事も何もいらなかつたのである。――ソローミンは少しもまごついたり、怯えたりしなかつた。侍僕が彼の來訪を報じた時、シピャーギンはすぐさま立ち上がつて、玄關まで聞こえるほど大きな聲で、「お通しするんだ！　無論お通しするんだ！」と言つた。そして客間の入り口へ向かひながら、そのすぐ傍まで來ると、びつたり足を止めた。ソローミンが閾を跨ぐが早いか（彼は危くシピャーギンにぶつ突かる所であつた）、シピャーギンは兩手をさし伸べて、愛想よく白い齒を見せ、頭をふりながら、「これは〳〵……よくおいで下すつた……實に有り難う。」と言ひ〳〵、ヴレンチーナ・ミハイロヴナの所へ案内して行つた。

「これがわたしの家内です。」掌でソローミンの背を柔かく抑へて――ヴレンチーナ・ミハイロヴナの方へ押しやるやうにしながら、彼はかう言つた。「この方は縣内一番の技師ヴシーリイ……フェドセーイッチ・ソローミンさんだよ。」

シピャーギン夫人はちよつと身を起こして、美しい睫をあでやかに下から上へさつとあげながら、まるで舊知にでも對するやうに、底意のない微笑を見せた後、肘をびつたり胴につけて、首を少し前へ傾けながら、掌を上にして手をさし伸べた……その恰好は、ちよつと無心者のやうであつた。ソローミンは夫婦にしたいだけの事をさせて置いて、二人の手を握りしめると、招ぜられるまゝに、辭退もしないで腰をおろして了つた。シピャーギンは何か入り用なものはないかと氣を揉み始めたが、ソローミンはそれに答へて、自分は何にも入り用なものもなければ、旅づかれなど少しもないから、どうぞご隨意にして頂きたいと言つた。

「それぢや工場の方へおいでが願へますかな？」客の示す一通りならぬ寛大な態度を、信じることが出來ないやうな、何となく氣がさすやうな風つきで、シピャーギンはかう叫んだ。

「今すぐでも。」とソローミンは答へた。

「あゝ、あなたは何といふ義理がたい方でせう！　それぢや馬車の用意を言ひつけませうか？　それとも歩いた方がお望みでしたら……」

「しかし、こゝからそんなに遠くはないんでせう、あなたの工場は？」

「半里くらゐなものです、それくらゐなものです！」

「ぢや、何のために馬車なんか用意するんです？」

「いや、それなら結構。おい――帽子を取つてくれ、ステッキも、早く！　それから奥さん、お前は一つ骨折つて、食事の用意をしといておくれ！――帽子だ！」

シピャーギンは客よりもずつと餘計に興奮してゐた。『一體おれの帽子はどうしたんだ？』ともう一度くり返した後、彼は（大官とも言はれる身でありながら！）、まるでいたづらな小學生のやうに、ぷいと部屋を飛び出した。彼がソローミンと話しをしてゐる間、ヴレンチーナ・ミハイロヴナは

この『新しい青年』を注意ぶかく盗み見したのである。彼は剝き出しの兩手を膝の上に載せて（彼はたうとう手袋を嵌めなかつたのである）、肘椅子の上に悠然と腰かけてゐた。そして、いくぶん好奇の色を浮かべながら、やはり落ちつき拂つて、家具や額などを見まはしてゐた。『一體これは何者だらう？』と彼女は考へた。『平民だ……間違ひなく平民だ……でも、何といふ自然な態度だらう！』

ソローミンは實際、極めて自然な態度を持してゐた。自然は自然であるけれど、いかにもわざとらしく、『どうだ、おれを見ろ、おれの態度がどんなものか、合點しろ！』と言つたやうな態度とはまるで違つて、感情も思想も堅固でありながら、しかも複雜でない人――さういふ風な態度であつた。シピャーギン夫人は彼に話しかけようとしたが――驚いたことには、何を話したらいゝか、すぐには考へがつかなかつた。

『まあ！』と彼女は考へた。『わたしは一體この工場ものに氣壓されてるんだらうか？』

「ボリース・アンドレーイッチは、どんなに有り難く思つてゐるか分かりません。」たうとう彼女はかう言つた。「貴重なお時間を主人のために割いて下すつたんですもの……」

「なに、それほど貴重でもありませんよ、奥さん。」とソローミンは答へた。『それに、さう長くお邪魔するつもりでもありませんから。』

『いよ〳〵熊が爪を出したぞ。』と彼女は佛蘭西語で考へた。けれど丁度この瞬間、帽子を被つて『ステッキ』を手にした夫が、開け放した戸口の閾に姿を現した。體を半分こちらへ向けながら、彼は氣さくな調子で叫んだ。

「ヴシーリイ・フェドセーイッチ！　お支度はいゝですか？」

ソローミンは立ち上がつて、ヴレンチーナ・ミハイロヴナに會釋をすると、シピャーギンの後からついて行つた。

「わたしの後からいらつしやい、こつちです、こつちです、ヴシーリイ・フェドセーイッチ！」まるでソローミンが深い森に分け入つてゐるので、案内者でもいるやうな鹽梅に、シピャーギンはかう繰り返した。「こつちです！　そこに階段がありますよ、ヴシーリイ・フェドセーイッチ。」

「もし父稱をつけて呼んで下さるのでしたら、」とソローミンは急がず騒がずかう言つた。「わたしはフェドセーイッチぢやありません、フェドートゥイチです。」

シピャーギンは殆ど慴えたやうに、肩ごしに後ろを振り返つた。

「あゝ、失禮しました。ご免なさい、ヴシーリイ・フェドートゥイチ！」

「どういたしまして、ご挨拶には及びません。」

二人は庭へ出た。――すると、向うからカルロメイツェフがやつて來た。

「どちらへお出かけ？」ソローミンを横目にちらと見て、彼はかう訊いた。「工場ですか？――これが問題の人物ですか？」

シピャーギンは目を剝き出して、用心しろと言ふやうに、輕く頭を振つて見せた。

「さう、工場へね……自分の失策や無能を――この技師の方に見て頂かうと思つて。一つ紹介させて下さい――カルロメイツェフ氏、この土地の地主です。こちらはソローミン氏……」

カルロメイツェフは漸くそれと氣がつくくらゐ、二度ばかり頷いて見せたが、ソローミンの方とはまるで見當が違つてゐた。彼は相手を見ようともしなかつた。しかし、こちらはカルロメイツェフをじつと見やつた――その半ば閉ぢたやうな目には、ある何ものかゞ閃いた……

「お仲間にはいつても構ひませんか？」とカルロメイツェフが訊いた。「ご承知の通り、わたしは研究ずきでしてね。」

「無論いゝですとも。」

一行は庭から往來へ出た――二十歩と歩かないうちに、教會の僧侶に出あつた。衣の裾をからげて、自分の家へ――いはゆる『坊さん村』へ歸つて行くところであつた。カルロメイツェフはすぐに二人の仲間から離れて、しつかりした足どりで、大股に僧侶の傍へ近よつた。こちらは夢にも思ひがけない事なので、幾分怖ぢ氣づいた樣子であつた。彼は僧侶に祝福を求めて、汗ばんだ赤い手に音高く接吻した後、ソローミンの方へふり向いて、挑むやうな視線を投げかけた。見うけたところ、彼はこの技師のことを『何やかや』知つてゐたので、自分の敬虔なところを見せて、この學者ぶつてゐるまやかしものゝ『鼻を折つて』やりたかつたのである。

「それは示威運動かね君？」とシピャーギンは齒の間から押し出すやうに言つた。

カルロメイツェフは鼻を鳴らした。

「さうです、今日の時代には示威運動も必要ですよ！」

一行は工場へ着いた。恐ろしい大きな髭をはやして、入れ齒を嵌めた小露西亞人が彼らを出迎へた。それは、到頭シピャーギンに追ひ出された、前支配人獨逸技師の後任であつた。この小露西亞人は臨時に傭はれたものであるが、あきらかに何一つ分からないらしく、絶えず『これは……』とか『大變に』とかいふばかりで、のべつ溜め息をついて

ゐた。

工場の檢分が始まつた。職工の中にはソローミンの顏を知つてゐる者もあつて、腰を屈めて挨拶した。彼はその一人に「あゝ、グリゴーリイ、ご機嫌よう！　お前、こゝにゐたのか？」と聲をかけたくらゐである。彼はやがて間もなく、こゝの仕事はうまく行つてゐないな、と見込みをつけてしまつた。資金はふんだんに注ぎ込まれたけれど、その使ひかたが滅茶苦茶だつたのである。機械は出來のよくないものだつたし、餘計な要らないものがごた〳〵ある癖に、必要なものが澤山不足してゐた。シピャーギンは、ソローミンの意見を察しようと思つて、絶えずその目を覗き込みながら、おづ〳〵と質問を持ちかけた後、少くとも設備だけは滿足に行つてゐるかと訊ねた。

「設備は出來てゐますが、」とソローミンは答へた。「しかし收入がありますか？——怪しいもんですね。」

シピャーギンばかりでなく、カルロメイッェフまでもさう感じた——ソローミンは工場へはいると、まるで自分の家へ歸つたやうな氣持ちで、極めて微細な點に至るまで悉く諳んじて、自分は一切の物の主人公だと感じてゐるらしかつた。彼は騎手が馬の首に觸れるやうに、機械の上へ手を置いたり、指で節動輪に觸つたりした——すると、機械は止まつたり、動きだしたりするのであつた。また桶の中から製紙原料のパルプを取つて、手のひらの上に載せて見た——すると、すぐにその缺點が暴露されるのであつた。ソローミンは餘り口數を利かなかつた。髯面の小露西亞人の方は、殆どふり向いても見なかつた。彼は依然として無言のまゝ、工場から出て行つた。シピャーギンとカルロメイッェフもその後に續いた。

シピャーギンは、誰にも見送りをしてはいけないと言ひつけて……地だんだを踏んだり、齒がみをしたりした！　彼は恐ろしく機嫌を惡くしてゐたのである。

「あなたのお顏つきから察するところ、」と彼はソローミンに話しかけた。「わたしの工場にご不滿のやうですな——あの工場の狀態が不完全で、何らの收益をも齎らさないといふ事は、わたし自身も承知してをります。しかし全くのところ……どうか遠慮なく言つて下さい……一番おもな缺點は一體どういふ所にあるんでせう、それを改良するにはどうしたらいゝんでせう？」

「製紙の方は僕の專門外ですからね。」とソローミンは答へた。「しかし、たゞかういふ事だけは言へます——全體として工場の經營などは、貴族のなすべき仕事ぢやありません。」

「ぢや、あなたはかういふ仕事を、貴族として卑しいことだと思はれるんですか？」とカルロメイッェフが口を入れた。

ソローミンは例の豐かな微笑を浮かべた。

「いや、どういたしまして！　とんでもない！　卑しいことなんかあつて堪るもんですか？　たとへ、またさういふ點があるとしても、貴族階級の人達だつてそんな事を厭ひはなさらんでせう。」

「え？　何ですと？」

「僕はたゞかう言ひたかつたのです。」とソローミンは落ちつき拂つて言葉を續けた。「貴族はかういふ種類の活動に馴れてゐません。それには商賣的な打算が必要です。何もかも別の地盤へ置き換へなけりやなりません。そして粘り强い態度が必要です。ところが、貴族はさういふ事をまるで考へないのです。僕らはよく貴族が羅紗工場や、製紙工場などを創立するのを見うけますが——結局さういふ工場が誰の手に落ちると思ひます？　商人です。實に殘念ぢやありませんか。なぜといつて、商人もやはり蛭の一種ですからね。しかしどうも仕方がありません。」

「あなたの話しを聞いてゐると、」とカルロメイッェフが叫んだ。「われ〳〵貴族は經濟問題を扱ふ資格がないといふことになりますね！」

「いや、それどころぢやありません！　貴族はさういふ事にかけたら名人ですよ。鐵道の利權を獲得したり、銀行を創立したり、何かの特權を絞り取つたり——さういつた風なことにかけたら、貴族に及ぶものは、誰一人ありませんよ！　どえらい財產をこさへてゐますからね。あなたが腹をお立てになつた時、僕はつまりその點を仄めかしたんです。しかし僕の考へてゐるのは、ノーマルな生產工業なんです。僕は敢てノーマルなと言ひます——なぜといつて、いま多數の貴族階級に屬する地主がしてゐるやうな、酒場を建てたり、兩替へ店を始めたり、十五割の利子で百姓に穀類や金を貸したりする——さういふやうな仕事は、本當の財政的事業として取り扱ひかねますからね。」

カルロメイッェフは何とも返事をしなかつた。それは彼自身、最近マルケーロフがネジダーノフとの會話で觸れたやうな、高利貸し地主といふ新しい種族に屬してゐたからである。彼は自分で直接百姓たちと取り引きしないで、番頭を通じて交渉してゐたために、却つて一そう不人情な要求を提出することが出來たのである。實際、香水のかをりに滿ちた歐羅巴風の書齋へ、百姓などを入れる譯にゆかないではないか！　まるで無關心かと思はれるやうな、悠然と落

ちつき澄ましたソローミンの言葉を聞きながら、彼は腹が煮え返るやうな氣持ちがした……けれど、今度はじつと默つてゐた。たゞ、顎と頤を食ひしばつたために生じた、頰の筋肉の動きだけが、彼の内部の暗闘を示すのみであつた。

「しかし失禮ですが、失禮ですが、ヴシーリイ・フェドートゥイチ、」とシピャーギンが言ひだした。「今あなたの言はれたことがですね、最近の過去に對するものとすれば――つまり全體として貴族階級が別種の狀態にあつて、全然ちがつた特權……を利用してゐた時代に對するものとすれば、すべて一々ご尤もです。しかし、あゝいふ立派な改革を經た今日、かういふ工業隆盛時代に再會した今日、貴族社會だつて自己の注意と能力を、そろ〳〵かういつた風な事業に向けてもいゝ筈ぢやありませんか？　單純な、殆ど目に一丁字のない商人でさへ理解し得ることを、どうして貴族に理解することが出來ないのです？　教養の不足といふ點で貴族を咎める譯には行きますまい――それどころか、ある意味に於て、彼らは文明と進歩の代表者だと斷言しても、決して誤りではないと思ひます！」

ボリース・アンドレーイッチの言葉はなか〳〵見事であつた、これがもし彼得堡の局か――それとも、もつと上の方であつたなら、彼の雄辯は非常な效果を齎したに相違ない。しかしソローミンに對しては、まるで何の印象も與へなかつた。

「そんな事業はとても貴族なんかの手に合ひません。」と彼は繰り返した。

「なぜです？　一體なぜです？」とカルロメイッェフは殆ど喚かないばかりであつた。

「なぜといつて、貴族もやはり官吏ですからね。」

「官吏？」とカルロメイッェフは毒々しく高笑ひした。「ソローミン君、君は恐らく、自分で自分の言つてることが分からないんでせう？」

ソローミンは相變はらず微笑をやめないで、

「なぜ、さう思ひます、カローメンッェフ君？（自分の苗字がこんな風に『ひん曲げられた』のを聞いて、カルロメイッェフは思はずぎくつとなつた）――いゝえ、僕はいつも自分の言つてることを、はつきり意識してゐますよ。」

「それぢや、あなたのさつき言はれた文句はどういふ意味なのか、一つ説明して貰ひませう。」

「お易いご用です。僕の考へでは、すべて官吏といふものは民衆に緣のない人種です。それは今までいつもさうでした。ところが今度は、貴族もやはり緣のない人間になつたのです。」

カルロメイッェフは一そう大きな聲で笑ひだした。

「いや失禮だが、僕なんかには、まるで分からないですなあ！」

「それはあなたのお爲になりませんよ。もう一奮發してご覽なさい……事によつたら、分かるかも知れませんよ。」

「君！」

「ご兩君、どうしたもんです！」高い所から目で誰かを搜してゐるやうな恰好で、シピャーギンは口早に言ひだした。「どうか、どうか……カルロメイッェフ君、お願ひだから氣を鎭めてくれ給へ。それに食事もすぐ始まるだらうから。さあ、お二人ともわたしと一緒においで下さい！」

「ヴレンチーナ・ミハイロヴナ、」五分ばかりたつてから、夫人の居間へ駈け込みながら、カルロメイッェフは悲鳴をあげた。「ご主人のなさることは、實に言語道斷です！　今でももうニヒリストが一人巢を食つてゐるのに、またもう一人ひつぱつて來るなんて！　しかも今度の方がもつと上手なんですよ！」

「それはなぜですの？」

「なぜも何もあるもんですか。あいつは實にとてつもない事を宣傳してるんですよ。それに、まあどうでせう、まる一時間もご主人と話しをしながら、一度も、たゞの一度も閣下と言はないんですからね！　ごろつきです！」

二四

食事の前に、シピャーギンは妻を圖書室へ呼んだ。さし向かひで話しがしたかつたのである。その樣子は何となく心配さうであつた。彼は妻に向かつて、工場がもうまるで駄目だといふことや、あのソローミンは幾分……無愛想ではあるけれど、非常に物の分かつた人間らしいから、彼に對しては引き續き、充分に氣をつけて貰はなければならない、などといふ話しをしたのである。

「あゝ、あの男を引つこ拔いて來ることが出來たら、實にいゝんだがなあ！」と彼は二度ばかり繰り返した。シピャーギンはカルロメイッェフの訪問に、恐ろしく業を煮やした……「忌々しい、何だつて、あんな奴が舞ひ込んだんだらう。誰もかもみんなニヒリストに見えて、それを退治することよりほか何一つ考へないんだからなあ。ふん、そんな者は自分の家で退治ればいゝのだ！　どうしても舌を食ひ縛つてゐられないものと見える！」

ヴレンチーナ・ミハイロヴナも、あの新しい客人に對して、充分に氣をつけるのに異存はないけれど、たゞ先方でそんな心づかひに必要を感じないらしく、まるで注意を拂

はないといふ意見を述べた。彼は別に無作法といふ譯でもないけれど、何だか餘り無關心すぎるやうに思はれた。それは共産主義を奉ずる人間として、極めて驚くべきことであつた。

「まあ、どちらにしても……ひと骨折つてくれ。」とシピャーギンは哀願するやうに言つた。

ヴレンチーナ・ミハイロヴナは、一骨折るやうに約束した——そして本當に骨を折つたのである。彼女はまづ第一着手として、カルロメイッェフとさし向かひで話しをした。彼女が何を言つたのか分からないけれど、とにかくカルロメイッェフは、たとへどんな事を耳にしても、じつとおとなしく愼ましやかにしてゐようと、『固く決心した』人のやうな面もちで卓についた。この手廻しのいゝ『讓歩』は、彼の容貌ぜんたいに輕い憂愁の影を添へたのである。しかしその代はり、何といふ品位が充ち溢れてゐたことだらう……おゝ！　その一擧手一投足に、何といふ威嚴が漲つてゐたことだらう！　ヴレンチーナ・ミハイロヴナは、家の子一同をソローミンに紹介した……（そのとき彼は誰よりも一ばん注意ぶかくゝマリアンナを眺めた）——やがて食卓についた時、夫人は彼を自分のすぐ右に坐らせた。カルロメイッェフは左手に腰をおろした。彼はナプキンを擴げながら、目を細めて、『さあ、これから喜劇を演じませうかね！』とでも言ひたさうに、にやりと笑つた。シピャーギンはその前に坐つて、いくぶん心配さうに、それとなく彼を注視してゐた。主人の新しい命令によつて、ネジダーノフはマリアンナの傍でなく、アンナ・ザハーロヴナとシピャーギンの間に坐らされた。またマリアンナの方は、カルロメイッェフとコーリャの間で、自分の名札がナプキンの上に載つかつてゐるのを見いだした（それは本式の食事だつたのである）。晩餐の設備は見事なものであつた。綺麗な模樣入りの『メニュー』まで、一人々々の食器の前へ置いてあつた。スープが濟むとすぐ、シピャーギンはまた自分の工場の方に話しを向け、それから全體として露西亞の工業狀態に言及した。ソローミンはいつもの癖で、極めて言葉すくなに返事をした。彼が言葉を發しるや否や、マリアンナはその方へ視線をそそいだ。その傍に坐つてゐたカルロメイッェフは、さまざまなお世辭を言ひながら話しかけた（それは『政治論を持ち出さないやうに』頼まれたからである）。しかし彼女は耳を貸さうとしなかつた。それに彼自身もほんの申し譯に、だらけた調子でこのお世辭を並べてゐるのであつた。彼はこの若い娘と自分の間に、到底こえることの出來ない溝があるのを自覺してゐた。

ネジダーノフはどうかと言ふと——彼とこの家の主人との間には、それよりもつと不穩なものが突如として現れたのである……シピャーギンにとつては、ネジダーノフは單に部屋の家具か、それとも何もない空間のやうなもので、まるで——それこそまるで目にも止まらないのであつた！

この新しい關係は急にかつきりと固定して了つて、食事中ネジダーノフが、隣席のアンナ・ザハーロヴナに話しかけられて、何か二こと三こと言つた時、シピャーギンはまるで『どこからあんな聲がして來るんだらう？』といぶかるやうに、びつくりしてその方をふり向いたほどである。

明かにシピャーギンは、露西亞の大官の特色となつてゐる、ある種の性情を具備してゐるらしかつた。

魚の料理が出た後で、ありたけの魅力と誘惑を右の方——つまりソローミンの方へふり撒いてゐたヴレンチーナ・ミハイロヴナは、卓ごしに英語で夫に話しかけた。

「お客さまは葡萄酒を召しあがりませんが、事によつたら、麥酒の方がお好みぢやないでせうか……」

シピャーギンは大きな聲で、『エリュー』を要求した。するとソローミンは落ちつき拂つて、ヴレンチーナ・ミハイロヴナの方へふり向きながら、

「奥さん、あなたは多分ご存じないでせうが、わたしは二年あまりも英吉利に滯在してゐましたから、英語の話しがよく分かります。從つて、もしわたしの前で密談をしたいといふ場合があるといけないから、前もつてこの事をご注意して置きます」と言つた。

ヴレンチーナ・ミハイロヴナは笑ひながら、そのご注意はご無用です、こゝではご自分にとつて有利な言葉よりほか、一切あなたのお耳にはいる氣づかひはないから、と誓つた。彼女はソローミンの態度を幾らか奇妙にも感じたけれど、しかし一種風變はりな婉曲さを認めた。

カルロメイッェフは、その時到頭我慢しきれなくなつた。

「あなたは英吉利へ行つてゐたと仰しやるが」と彼は言ひだした。「定めし向うの風習なども觀察なすつたことでせうな。一つ伺ひますが、あなたはそれを模倣する價値があると考へますか？」

「あるものはさうでもあり、またあるものは——さうでもありません。」

「どうも簡單すぎて不明瞭ですな。」シピャーギンの合圖に氣のつかぬやうな振りをしながら、カルロメイッェフはかう言つた。「しかし、あなたは今日も貴族の話しをされましたが……無論、英吉利のいはゆる貴族地主なるものを、本場で研究される機會があつたでせうね？」

「いや、僕はさういふ機會がなかつたです。全然べつの社會で轉々してゐましたからね――しかし、さういふ階級に對する觀念だけは作り上げましたよ。」
「それぢやどうです？　さういふ貴族地主は、わが國では不可能だとお考へですか？　いづれにしても、そんな事は望むべきでないとお考へですか？」
「僕は第一、さういふものは全く不可能だと考へますし、第二に、そんな事を望む必要はありません。」
「それはどういふ譯ですか、その？」とカルロメイッェフは言つた。この『その』といふつけ足しは、恐ろしく心配して椅子の上でもぞ〳〵してゐるシピャーギンを、落ちつかすべき使命を帶びてゐるのであつた。
「なぜといつて、もう二三十年も經つたら、あなたのいはゆる貴族地主なんかは、ひとりでに無くなるからです。」
「しかし、失禮ですが、その、一體それはどういふ譯なんですかね、その？」
「ほかでもありません。その時分になると、土地は門閥などの差別なしに、實際の所有者のものになつて了ふからです。」
「それは商人ですか？」
「恐らく大部分は商人でせう。」
「それはどういふ風にして？」
「どういふ風つて、つまり商人たちが買ふからですよ――その地所をね。」
「貴族の手から？」
「貴族の手からです。」
カルロメイッェフは寛大らしく微笑して見せた。
「あなたは確か工場のことについても、それと同じことを言はれたやうですが、今度は土地全體になつたんですか？」
「さう、今度は土地全體のことを言つてるんです。」
「さうなると、あなたは、たぶん愉快でたまらないんでせう！」
「決して、決して。もう前にも申し上げた通り、さうなつたからと言つて、人民は樂にならないんですからね。」
カルロメイッェフはほんの心もち片手をあげた――飛んだ人民おもひでゐらつしやる、笑はせやがらあ！とでも言ひたさうな樣子であつた。
「ヴシーリイ・フェドートゥイチ！」とシピャーギンがありつたけの聲を出して呶鳴つた。「麥酒を持つて來ましたよ！――氣をつけてくれたまへ、シメオン！」彼は小聲に言ひ足した。
けれど、カルロメイッェフはおとなしくしてゐなかつた。

「お見うけしたところ、」彼はソローミンに向かひながら、またもやかう言ひだした。「あなたは商人のことを、餘りよく思つてをられないやうですね。しかし、彼らもその出所をたゞせば、やはり民衆に屬する譯ぢやありませんか？」
「それがどうしたんです？」
「僕の想像するところでは、すべて民衆のもの、もしくは民衆に屬するものは、何でも立派なものだと、かう思つてゐらつしやるやうぢやありませんか。」
「いや、それは違ひます！　それはあなたのお考へ違ひです。露西亞の民衆は多くの點において、非難さるべき缺點を持つてゐます、尤も、いつも必ず惡いとも行きませんがね。ところで、商人はこれまで貪慾な連中でした。彼らは自分自身の財産を領有するのでさへ、貪婪な猛獸のやうな態度を示してゐるのです……併し、どうも仕樣がありません！　自分だつて剝ぎ取られるんだから……こつちも人を剝ぎ取らなくちやならないんです。ところが民衆は……」
「民衆は？」とカルロメイッェフが甲高い聲で問ひ返した。
「民衆は寢坊ですからね。」
「で、あなたはそれを起こしたいんですな？」
「それも惡くないでせう。」
「はゝあ！　はゝあ！　なるほど……なるほどね……」
「失禮ですが、失禮ですが、」とシピャーギンは命令するやうな調子で口を入れた。彼はいよ〳〵境界を設けるべき時……議論をさし止めるべき時機が到着した、と悟つたのである！　で、彼は境界を設けた。議論をさし止めた！　肘を卓に突いたまゝ、右の手首をふりながら、彼は委曲を盡くした長い演說をはじめた。一方に於て保守派を賞揚しながら、他の一方に於て自由主義者に贊同したのち、結局、後者の方に幾分の長を認めて、自分自身をもその中へ數へ入れた。彼は民衆を持ち上げながら――その弱點をも指摘した。政府に對する絕對の信賴を表白しながら――すべての官吏が政府の善良なる意圖を實行してゐるかどうかと、疑ひをさし挿んだ。文學の利益と價値を認めながら、最大級の警戒なしには、その存在を許すわけに行かないと宣言した。西の方を一瞥した時には、はじめ歡喜の念を覺えたが、やがて疑惑を感じて來た。東の方を眺めた時には、はじめ休息を感じたけれど、やがて斷然奮起した！――と語つた。最後に彼は三要素の結合の繁榮を祈るために、乾杯しようと言ひだした。それは宗教と、農業と、工業であつた！
「權力の庇護のもとに！」とカルロメイッェフが厳かにつけ足した。

「英明にして寛大なる權力の庇護のもとに。」とシピャーギンが訂正した。

乾杯は無言のうちに行はれた。尤も、シピャーギンの左手にあたる、ネジダーノフと呼ばれるむなしい空間は、何か不服らしい響きを發したが、しかし誰の注意も喚起することなしに、再びひつそりと靜まつてしまつた。かういふ風にして、もはや新しい論爭に搔き亂されることもなく、食事は無事に終つたのである。

ヴレンチーナ・ミハイロヴナは、何とも言へぬあでやかな微笑を浮かべながら、ソローミンに一杯の珈琲を薦めた。彼はそれを飲み終ると、もう自分の帽子を目で搜し始めたが……シピャーギンにそつと柔かく腕を取られて、猶豫なくその書齋へ引つぱられて行つた——そして、まづ上等のシガーを貰つた後、始めて有利な條件で、シピャーギンの工場へ移るやうに申し込みを受けた！「あなたは完全に工場の支配者となられる譯ですよ。ヴシーリイ・フェドートゥイチ、完全な支配者にね！」ソローミンはシガーを受け取つたけれど、轉任の勸告は拒絕した。シピャーギンが何と言つてすすめても、彼はどこまでもその拒絕を取り消さうとしなかつた。

「さう露骨に厭だと言はないで下さい——ねえ、ヴシーリイ・フェドートゥイチ！　少くとも、明日まで考へると言つて下さい！」

「だつて、同じことですよ——僕はあなたの申し込みを承諾する譯にゆかないんですから。」

「明日まで！　ヴシーリイ・フェドートゥイチ！　それくらゐな事は、あなたにとつて何でもないぢやありませんか？」

ソローミンは、實際そんな事くらゐ自分にとつて何でもない、といふ意見に贊成したが……しかし、書齋から出て來ると、また帽子を搜し始めた。それまで彼と一こと言葉を交はす機會のなかつたネジダーノフが、この時傍へよつて早口に囁いた。

「お願ひだから、歸らないで下さい。でないと、話しが出來ないぢやありませんか！」

ソローミンは自分の帽子に構はないこととした。それに主のシピャーギンも、客間の中を思ひ切り惡さうにあちこち歩いてゐる彼の姿を見ると、いきなりかう聲をかけた。

「あなたは無論、うちでお泊まりになるでせう？」

「どうともご都合のいゝやうに。」とソローミンは答へた。

マリアンナが彼の方へ投げた感謝するやうな目つきは、——彼女は客間の窓際に立つてゐたのである——ちよつと彼を考へ込ませた。

二五

ソローミンの訪ねて來るまで、マリアンナは彼を別人のやうに想像してゐた。彼女がはじめて一目みた時、彼は何となく曖昧な、無人格な男のやうに思はれた……實際こんな風に白つぽい頭をした、筋だらけの痩せた男を、彼女はこれまで澤山見て來たのである。しかし、じつと彼の樣子を見入つて、その言葉に耳を傾ければ傾けるほど、この男に對する信頼の念は、いよ／＼強くなつて行つた——それは實際、信頼の念であつた。この落ちつき拂つた、無器用らしい、といふより、寧ろ重くるしい人間が、嘘をついたり、空自慢をしたりする筈がない。それどころか、この人なら、石の壁と同じやうに、安心をして、頼ることが出來る……この人なら期待を裏ぎるやうなことはあるまい。いやそれどころか、ちやんと人の氣持ちを理解して、杖柱になつてくれるに相違ない。マリアンナはこんな氣持ちさへした——ソローミンは自分ばかりでなく、そこにゐるすべての人々に、同じやうな心持ちを呼び起こしたらしい。マリアンナも彼の言ふことは、別に大して價値のある事とも思はなかつた。商人とか、工場とか言つたやうな議論は、餘り彼女の興味をそゝらなかつた。しかし彼のものを言ふ樣子や、ものを言ふ時の目つきや笑顔——さういふものが無性に彼女の氣に入つたのである……

眞摯な人間……これが何より肝腎な點であつた！　これが彼女を動かしたのである。露西亞人は、世界ぢうで一番の法螺ふきでありながら、しかも何より一番に眞實を尊敬し、且それに同情する——それは、はつきり理解しにくい事であるけれど、遍く知れ渡つたことである。そればかりでなく、マリアンナの目から見ると、ソローミンには一種特別の感じが印せられてゐた。ほかでもない、當のワシーリイ・ニコラーイッチが自分で後進一同に紹介した人間といふ、一種の光輪を背負つてゐるのであつた。食事の間にマリアンナは幾度となく『彼のことで』ネジダーノフと目を見合はせた。了ひには、いつしかこの二人を比較してゐる自分自身に心づいた——しかもその比較の結末は、ネジダーノフにとつて不利なものであつた。無論ネジダーノフの方がソローミンよりも、輪廓が遙かに美しくて氣持ちがよかつたけれど、しかし顏そのものは、忿懣とか、當惑とか、焦燥とか……更に進んで憂鬱とか、さういつたさま／＼な落ちつきのない感じの交錯を現してゐた。彼は針の上にでも坐つたやうにもぞ／＼して、ものを言ひかけたり、また口を噤んだり、神經質らしく笑つたりするのであつた……ソ

ローミンはその反對に、いくぶん退屈してゐるかも知れないけれど、ゆつたり腰を落ちつけてゐるやうな印象を與へた。『彼の考へてゐるやうな事は』いついかなる場合でも、『ほかの人のやうな事情』に左右せられないだらう、といふやうな氣持ちがした。『どうしてもこの人の忠告を求めなくちや』――とマリアンナは考へた。『きつと何かためになる事を言つて下さるに相違ない。』食後ネジダーノフを彼の傍へやつたのも、實は彼女なのであつた。

その晩はかなりだらけた氣分で過ぎてしまつた。丁度さいはひ、食事の終りが遲かつたので、夜ねるまで幾らも時間が殘つてゐなかつた。カルロメイッェフは慇懃に顏をふくらまして、じつとおし默つてゐた。

「あなたどうなすつたの？」と半ば嘲るやうにシピャーギン夫人が訊ねた。「何か落としものでもなすつた？」

「正にその通りです。」とカルロメイッェフは答へた。「ある近衞師團の長官のことで、かういふ話しがあります。それは部下の兵隊が、歩調をなくしたと言つてひどく悲觀しながら、『わしの敎へた歩調を捜してくれ！』と言つたさうです。ところがわたしは、『閣下』を捜してくれと言ひませう！『閣下』といふ言葉がなくなつて了ひました――それと一しよに、長上に對する尊敬も禮儀も、すつかりなくなつて了つたのです！」

シピャーギン夫人はカルロメイッェフに向かつて、さういふ捜しものゝお手傳ひは出來かねますと言つた。

食卓演說の成功に元氣づいたシピャーギンは、更にまた一つ二つ演說を試みた。しかもその際、國家的緊急施設に關する若干の意見を述べて、二三の警句すら惜しげもなしに出してしまつた。この警句は實のところ、彼得堡で發表するために準備したもので、鋭さよりも寧ろ重みの方が勝つてゐた。そのうちの一つは、『もしかういふ事が許されるならば』といふ枕をつけて、二度ばかり繰り返したほどであつた。ほかでもない、當時のある大臣について、『彼の才智は輕薄で不眞面目で、常に空想的な目的に向けられてゐる』と言つたのである。しかしそれと同時に、いま自分の相手にしてゐるのは、露西亞人――しかも民衆出の露西亞人であることも忘れないで、一つ二つの俚諺をひけらかす機會も逸しはしなかつた。その俚諺といふのは、彼自身――單に露西亞人といふばかりでなく、生粹の『露西亞つ子』であつて、民衆生活の本質に深く觸れてゐる、といふ事を示すべき筈なのであつた。たとへば、雨のために乾し草の取り入れが遲れるかも知れないといふ、カルロメイッェフの言葉に對して、彼はすぐさま『乾し草は黑くなつ

ても、かはりに蕎麥が白くなる』と答へた。それからまた『主ない品は身なしごだ』とか、『十遍はかつて一遍切れ』とか、『麥あつてこそ柳もある』とか、『エゴールの日（二十四日）に樺の葉が銅錢ほどになつてたら、カザン聖母の祭日に麥が一庫できるだろ』とか、さういつた風な諺をふんだんに使つた。もつとも、ときゞ不意に思はぬしくじりをして、『しぎ（こはろぎの誤り）も自分の枝を知れ』とか、『家は飾りで美しい』（家は飾りのためでなく、もてなしのために美しいーの誤り）などといふやうな事もあつた。しかし、かういふ失策を聞いてゐる一座が一座なので、多くの者にこの notre bon（わが善良なる）露西亞つ子が、しくじりをやつたなどとは、夢にも考へなかつたのである。それにコヴリーシュキン公爵などといふ連中のお蔭で、人々はさういふ露西亞的『バタケース』に馴れてゐるのであつた。シピャーギンはかうした諺や格言を、一種特別な頑固らしい、いくぶん澁みのかゝつた聲で發音した――つまり彼のいはゆる『田舍風な』なのである。かういふ俚諺は彼得堡あたりで、うまく時と場所を見計らつて持ち出さうものなら、有名な勢力家の貴婦人たちに『まあ、百姓たちの風俗をよく知つてゐらつしやること！』と三嘆せしめるに充分であつた。その上に、有名な勢力家の政治家たちは『風俗と要求をね！』と言ひ添へるのであつた。

ヴレンチーナ・ミハイロヴナは、ソローミンの傍でしきりに歡待これ努めてゐた。けれどその努力も效がないらしいのを見て、彼女はすつかり悄氣てしまつた。カルロメイッェフの傍を通り過ぎながら、彼女は思はず小聲にかう言つた。

「あゝ、わたし本當に疲れてしまつたわ！」

こちらはそれに對して、皮肉な會釋をもつて答へた。

「お前は自分でそれを望んだのだ。ジョルジ・ダンダン！」（モリエールの喜劇中の一句）

やがて疲れた一座の人々の顏に、愛嬌やお世辭わらひがぱつと燃え上がる、例の最後の一瞬間が來た。急に手を握つたり、微笑を交はしたり、親しげな鼻聲を出したりした後、疲れた客と疲れた主人夫妻は、めい〳〵別れ〳〵になつた。

ソローミンにあてられた階上の一室は、家中でも殆ど一番いゝ部屋で、英國式の化粧道具や、浴室などが附いてゐた。彼は自分の部屋を出て、ネジダーノフの所へ行つた。

こちらはまづ第一番に、彼が泊まることを承知してくれたのについて、熟心に感謝の意を表した。

「これが君にとつて一種の犧牲だといふことは……僕にもよく分かつてゐます……」

「えゝ！　よしてくれ給へ！」とソローミンはゆつくりと答へた。「犧牲なんかあつてたまるもんですか！　それに、

君に對しては拒絶する譯にゆかないですよ。」
「それはまたなぜ！」
「なぜつて、僕は君がすきになつたからです。」
ネジダーノフは嬉しくもあれば不思議でもあつた。ソローミンはその手を握りしめた。それから彼は椅子へ馬乘りに跨がつて、シガーを燻らしはじめた。そして、椅子の背に兩肘を靠せながら、口をきつた。
「さあ、聞かして下さい。一體どんな話しです？」ネジダーノフもやはり、ソローミンとさし向かひになつた——しかしシガーを燻らしはしなかつた。
「どんな話しかと訊かれるんですね？……ほかでもありません、僕はこゝを逃げださうと思つてるんです。」
「と言ふと——この家を出て行かうといふんですか！　いや、それもいゝでせう。無事にいらつしやい！」
「出て行くんぢやありません、逃げ出すんです。」
「ぢや君は抑へられてるんですか？　事によつたら……前借でもしたんぢやありませんか？　それなら君は、ちよつと一こと斷つたらいゝぢやありませんか……僕でも喜んで……」
「ソローミン君、君は思ひ違ひをしてゐられるんです……僕が出て行くのぢやない、逃げ出すんだと言つたのは——ほかでもない、こゝを出て行くのは僕一人きりぢやないからです。」
ソローミンは頭を上げた。
「ぢや、誰と？」
「君が今日こゝで見たあの娘と……」
「あゝ、あの娘！　あの人はいゝ顏をしてゐる。ぢや、何だね？　君達はお互に愛しあつてゐるんだね？……それとも、たゞお互に居心地の惡いこの家を、一しよに飛び出さうと相談したんですか？」
「僕らはお互に愛し合つてゐるんです。」
「はゝあ！」ソローミンはしばらく口を噤んでゐた。「あの娘さんはこゝの親戚なんですか？」
「さうです。——しかしあの人はわれ〳〵と全然信念が一致してゐて——どんな事でも斷行する覺悟なんです。」
ソローミンは微笑した。
「ぢやあ、ネジダーノフ君、君は？　覺悟が出來てゐますか？」
ネジダーノフはかすかに眉を顰めた。
「なぜそんなことを訊くんです？　僕は自分の覺悟を實行で證明しますよ。」
「僕は別に君を疑ふわけぢやありませんよ、ネジダーノフ君。たゞ僕が訊いたのはね、君以外には誰ひとり、覺悟の出來てゐる人がなささうだからです。」
「ぢや、マルケーロフは？」
「さうだ！　マルケーロフくらゐのもんだね。しかしあの男は、恐らく生まれながら覺悟の出來た人間なんだらう。」
この瞬間たれか小さな音で、急がしげに戸を叩いた——そして返事も待たずに戸を開けた。それはマリアンナであつた。彼女はすぐにソローミンの傍へよつた。
「わたしね、」と彼女は口をきつた。「あなたはいま時分こんな所でわたしをご覽になつても、きつと驚きはなさらないだらうと、さう信じてゐましたの。——この人は（マリアンナはネジダーノフを指さした）、きつと何もかもあなたにお話ししたでせうね。——どうぞ、お手を拜借さして下さい。そしてあなたの前に立つてゐるのは、正直な娘だといふことを、信じて頂きたうございます。」
「えゝ、それは僕にも分かつてゐます。」とソローミンは眞面目な調子でかう答へた。彼はマリアンナが姿を現すや否や、椅子から立ち上がつたのである。「僕はもう食事の時から、あなたを眺めながら、何といふ正直さうな目つきをしたお嬢さんだらう、と考へてゐたのです。お察しの通り、僕はいまネジダーノフ君から、あなた方の計畫を聞きましたが、しかし正直なところ——なぜ逃げ出したりなんかなさるんです？」
「なぜですつて？　だつてわたしの同情してゐる事業が……どうかびつくりしないで下さい。ネジダーノフが包まず話してくれたんですから……この事業が必ず近いうちに始まらうといふのに……何から何まで嘘と、僞りに充ちたこんな地主屋敷に、安閑と暮らしてゐるわけに行かないぢやありませんか？　自分の愛してゐる人達が危險に曝されようとしてゐるのに、わたしが……」
ソローミンはちよつと手を動かして、彼女を押しとめた。
「興奮しないで下さい——まあお坐ンなさい、僕も坐りますから！　ネジダーノフ君、君も坐つたらいゝでせう。——そこでですね、もしほかに原因がないとしたら、あなた方がこの家を逃げ出すのはまだ無意味ですよ。われ〳〵の事業は、あなたの考へてゐらつしやるほど、さう早くは始まりませんよ。こゝはもう少し分別が必要でせう。さうやたらに前へ飛び出すことはいりませんからね。どうか、僕を信用して下さい。」
マリアンナは腰をおろして、肩に羽織つて來た大きな膝かけを掻き合はした。
「だつて、わたしはもうこの上、こゝにじつとしてゐられ

ないんですもの！　わたしはこの家にゐると、みんなから侮辱を受けるんですの。現に今日も、あの馬鹿なアンナ・ザハーロヴナがコーリャのゐる前で、わたしの父に當てこするやうに、瓜の蔓に茄子はならないといふぢやありませんか！　コーリャはびつくりして、それは一體なんのことかつて、訊いてゐましたわ。ヴレンチーナ・ミハイロヴナのことなんか、もう言ふがものはありません！」

ソローミンはまた彼女を押しとめた――そして今度はにつこり笑つて見せた。マリアンナは、彼が少しばかり自分を冷笑してゐるのに氣がついたが、しかし彼の微笑は、決して何人にも侮辱感を與へるやうなことがなかつた。

「何を仰しやるんです、お孃さん？　僕はアンナ・ザハーロヴナが何者やら、瓜の蔓といふのは何のことやら、さつぱり知らないんですが……しかし、何といふことでせう？馬鹿な女が何か馬鹿なことを言つたからつて、あなたはそれが我慢できないんですか？　それで一體どうしてこの世を渡るつもりなんです？　世の中は馬鹿な人間ばかりで出來てるもんですよ。いや、そんな事は理由になりません。何かほかにありますか？」

「僕は確かに信じてゐます。」とネジダーノフが籠つた聲で口を入れた。「シビャーギンは自分の方から、今日あすのうちに僕を斷るに相違ないです。きつと誰か告げ口をした者があるんです。その證據には僕に對して……恐ろしく輕蔑的な態度をとるんですからね。」

ソローミンはネジダーノフの方へふり向いた。

「ぢや、何のために逃げ出さなくちやならないんです、それでなくても、斷られると決まつてゐるのに？」

ネジダーノフは何と答へていゝか、すぐには言葉が出なかつた。

「もうさつき、さう言つたぢやありませんか。」と彼は言ひだした……

「この人がさう言つたのは、」とマリアンナが引き取つた。「わたしも一しよに出て行くからなんですの。」

ソローミンは彼女の顏を眺めて、さも好人物らしく首をふつた。

「なるほど、なるほど、お孃さん。――しかし、くどいやうですが、今にも革命が勃發しさうだから、それでこの家を出て行きたいと言はれるんでしたら……」

「わたし達はつまりそのために、あなたにおいでを願つたんですの。」とマリアンナは遮つた。「われ〳〵の事業がどんな狀態になつてゐるか、それを確かに伺ひたいと思つて。」

「さういふことなら、」とソローミンは言葉を續けた。「繰り返して言ひますが、あなたはまだこゝにじつとしてゐられますよ――かなり長くね。しかし、あなた方が互に愛しあつてゐて、それよりほかに結合の方法がないから、それで家出をしたと仰しやるなら、その時は……」

「その時はどうなんですの？」

「その時は、昔から言ひ習はされた通り、互に仲よく睦まじく、と申し上げるばかりです。そしてもし必要なら、出來るだけのご助力をするつもりです。なぜといつて、お孃さん、わたしは初めて會つた時から、あなたが――ネジダーノフ君もやはりさうですが――親身のやうに好きになつたからです。」

マリアンナもネジダーノフも、同時に左右から彼の傍へ寄つて――めい〳〵一本づゝその手をとつた。

「たゞね、わたし達はどうしたらいゝんでせう？　それを聞かして下さい。」とマリアンナが口をきつた。「たとへ革命はまだ先の事だとしても……いろんな準備の仕事は、この家で、かういふ狀況で暮らしてゐたら、迚も出來つこがありません――でもわたし達は、喜んでその仕事をしたいと思ひますの――二人一しよに……どうかあなた、それを教へて下さい……たゞ、どういふ方へ進んで行くのか、それを教へて下さればいゝんですの……どうかわたし達をやつて下さい！　ね、やつて下さるでせう？」

「どこへ？」

「民衆の中へ……民衆の中でなくつて、どこへ行く所があります？」

『森の中へ！』とネジダーノフは考へた。バークリンの言葉を思ひ出したのである。

ソローミンはじつとマリアンナを見つめた。

「あなたは民衆を知りたいんですか？」

「えゝ、いえ――わたし達はたゞ民衆を知りたいばかりぢやありません――實行がしたいんですの……民衆のために働きたいんですの。」

「よろしい、お約束します。今に民衆を知らせて上げますよ。實行の可能も作つて上げませう――民衆のために働く機會もね。ぢやネジダーノフ君、君も進んで行く覺悟ですね……この人の後について……民衆のために？」

「無論その覺悟です。」と彼はせき込んで言つた。『神事……』また別なバークリンの言葉が思ひ出された。『今にそいつが動き出すんだ、山のやうな事が……その轍のきしみと軋きが聞こえさうだ……』

「よろしい。」とソローミンは考へ深さうに繰り返した。「し

かし、いつ逃げ出すつもりです？」
「明日すぐにでも。」とマリアンナは叫んだ。
「よろしい、しかしどこへ？」
「しつ……靜かに……」とネジダーノフが囁いた。「誰か廊下を歩いてゐます。」
一同は口を噤んだ。
「一體どこへ逃げて行くつもりです？」またソローミンが聲を落としてかう訊いた。
「どこだか知りませんね。」とマリアンナが答へた。
ソローミンは目をネジダーノフに轉じた。こちらはたゞ頭を横へふつたばかりである。
ソローミンは手をさし伸べて、用心ぶかく蠟燭の芯をとつた。
「それぢやね、ご兩君。」たうとう彼はかう言つた。「僕の工場へいらつしやい。汚らしい所だが……しかし危險はありません。僕が匿まつて上げませう。僕の所に小さな部屋が一つあるから、あすこなら誰も搜し出せやしません。あなたがたの方で無事に着いてさへ下されば……その後は僕が引き受けました。或ひは、工場には人けが多いと言はれるかも知れないが、それが結句しあはせなんですよ。人けの多い所は隱れやすい譯ですからね。どうです、それでいいですか？」
「僕らはたゞ君に感謝するばかりです。」とネジダーノフが言つた。マリアンナは初め工場と言はれて、ちよつと當惑を感じたが、すぐに勢ひよく口を添へた。「無論ですわ！無論ですわ！　あなたは何ていゝ人でせうね！　でも、さう長くじつとして置きはなさらないでせう？　どこかへやつて下さるでせう？」
「それはあなたがた次第です……ところで、もしあなたがたが結婚したいとお思ひになつた場合には、家の工場はその點でも便利よく出來てゐますよ。ごく近所に、僕の從弟に當たる坊さんがゐます。名をゾシマといつて、ごく分かりの早い人間だから、すぐにあなた方の式を取り計らつてくれますよ。」
マリアンナはひそかに微笑を洩らした。ネジダーノフはもう一度ソローミンの手を握りしめた。けれど、暫らくたつて問ひを發した。
「ねえ、どうでせう、君の方の主人公は、つまり工場主は、別に抗議を申し出やしないでせうか？　君に厭な思ひをさせるやうな事はないでせうか？」
ソローミンはネジダーノフを横目にじろりと見た。
「僕のことは心配しないでくれ給へ。そんなことは全然いらないことです。主人公はたゞ工場さへきちんと運轉してゐればそれでいゝので、そのほかのことは無關係ですよ。君にしても、また君の可愛いゝお孃さんにしても、主人公に厭な思ひをさせられるやうなことは、決してありません。また職工なども恐れる事はないです。たゞいつ頃お待ちしたらいゝか、それを前もつて知らせて貰ひたいですな。」
ネジダーノフとマリアンナは目と目を見合はせた。
「あさつての早朝か、それともその翌日。」たうとうネジダーノフはかう言つた。「もうこの上ぐづ〳〵する譯に行かない。早速あすにも、この家を斷られるかも知れないんだから。」
「では……」とソローミンは言つて――椅子から立ち上がつた。「毎朝君がたを待つことにしませう。まる一週間うちを離れないことにしてね。準備は一切して置きます――ちやんと必要なだけ。」
マリアンナは彼の傍によつた……（彼は戸口の方へ行きかけたのである）
「左樣なら、優しい親切なゾシーリイ・フェドートゥイチ……たしかさう仰しやいましたね？」
「さうです。」
「さやうなら……ではない、またお目にかゝりませう！
有り難う、本當に有り難うございました！」
「左樣なら……お休みなさい、可愛いお孃さん！」
「ぢや、ネジダーノフさん、あなたにも左樣なら！　明日また……」と彼女は言ひ足した。
マリアンナは足早に部屋を出た。二人の青年はそのまゝ暫らくじつとしてゐた。――二人とも物を言はなかつた。
「ネジダーノフ君……」到頭ソローミンは口をきつたが、また言葉を休めた。「ネジダーノフ君……」とまた言ひだした。「あの娘さんのことを話してくれ給へな――君の話せるだけのことを。あの人のこれまでの生活はどんな風だつたんです？……あの人は一體どんな人なんです？……なぜこゝにゐるんです？……」
ネジダーノフは知つてゐるだけのことを、言葉みじかにソローミンに傳へた。
「ネジダーノフ君……」彼は最後にかう言つた。「君はあの娘さんを大切に守らなくちやいけませんよ。なぜといつて……もし……何か……あつたら、それは君、非常な罪惡ですよ。ぢや、左樣なら。」
彼は部屋を出てしまつた。ネジダーノフは暫らく部屋の眞ん中に立つてゐたが、「あゝ！　考へない方がいゝ！」と呟いて、寢臺へうつ伏しに身を投げた。

マリアンナは自分の部屋へ歸ると、卓の上に小さく折つた手紙を見出だした。それは次ぎのやうな內容であつた。

「わたしはあなたが氣の毒です。あなたは自分で自分の身を滅ぼしてゐます。正氣におなりなさい。あなたは目を塞いで、恐ろしい淵へ身を投げようとしてゐます。しかもそれは誰のため、何のためなのでせう？　V。」

部屋の中には一種特別なすが〳〵しい、微妙な匂ひが漂つてゐた。察するところ、ヴレンチーナ・ミハイロヴナは、たつた今こゝを出て行つたばかりらしい。マリアンナはペンを取つて、その下へかう書き添へた。「どうかわたしを氣の毒がらないで下さい。わたし達二人のうち、どちらが餘計に氣の毒がられなければならないか、それは神樣ばかりがご存じです。たゞわたしに分かつてゐるのは、あなたのやうな立ち場に置かれたくない、といふ事ばかりでございます。M」かうして彼女は手紙を卓の上へ載せて置いた。この返事がヴレンチーナ・ミハイロヴナの手に屆くといふことは、彼女に取つて少しも疑ひがなかつた。

翌朝、ソローミンはネジダーノフにちよつと會つた後、シビャーギンの工場へ轉任の勸告をきつぱり拒絕して、わが家をさして歸つて行つた。道々彼は絕えずもの思ひに耽つた。大抵は馬車に搖られてゐるうちに、輕いまどろみに沈む彼として、それは珍らしい事であつた。彼はマリアンナのことを思ひ、またネジダーノフのことを思つた。もし自分が戀ひをしたなら、きつと顏つきも、話しぶりも、目つきも、すつかり違つてしまつただらう、といふやうな氣持ちがした。

『しかし、』と彼は考へた。『そんなことは今まで曾て起こつた事がないから、さういふ場合どんな顏つきになるやら、自分ながら見當がつかない。』

彼は一人の愛蘭女を思ひ出した。それはある店の勘定臺で、たつた一度みたばかりなのだが、ほとんどまつ黑なすばらしい髮の毛と、靑い目と、濃い睫が、まざ〳〵と思ひ出された。それから、この女がもの問ひたげな、悲しい目つきで自分を眺めたことや、その後で自分が長い間、窓下の往來を歩きまはつて、この女と近づきになつたものかどうかと、わく〳〵しながら迷つたことなども、同じやうに思ひ出された。それはほんのちよつと倫敦に滯在してゐた時のことであつた。彼は保護者の依賴で買ひ物に行つたので、金も預かつてゐた。ソローミンはこの金を、すんでのことに保護者へ送り返して、そのまゝ倫敦にゐ着かうかとさへ思つた。美しいボーリイが（彼はその女の名を知つた。友達の賣り子が呼びかけたからである）、彼に與へた印象

は、それほど强烈なものであつた。しかし彼は自己を抑制して、自分の保護者のもとへ歸つた。ボーリイはマリアンナより美しかつた。けれど、マリアンナもやはりもの問ひたげな、悲しさうな目つきをしてゐる……それに彼女は露西亞人である……

「だが、おれは一體どうしたんだらう？」とソローミンは小聲で言つた。「人の戀ひ人のことを心配するなんて！」一さいの無用な想念を拂ひ除けようとするかの如く、彼は外套の襟を一つ搖すり上げた。それに丁度をりよく、馬車はもう工場に近づいて、離室の闇ぎはに忠僕バーエルの姿がちらと映つた。

二六

ソローミンの拒絕は、シビャーギンに非常な侮辱感を與へた。彼は急に風向きをかへて、あの露西亞じこみのスチヴンソンは、さう大した技師ぢやない、別にさう法螺も吹かないかも知れないが、正眞正銘の平民だといふ證據には、おつに氣取つてゐるではないか、と言つた。「あゝいふ露西亞人と來たら、何か少しでも知つてると自惚れるが早いか、すぐ始末に終へなくなるのだ！　カルロメイッェフの言つた通りだ！」かういふ不愉快な、苛ら立たしい感じのお蔭で、堂々たる政治家——但し修業中——は、なほ一そう無關心なよそ〳〵しい目つきで、ネジダーノフを眺めたのである。彼はコーリャに向かつて、もうそろ〳〵一本だちになる稽古をしなくちやならないから、今日は先生と一しよに勉强しなくてもいゝと言つた。しかし當の先生に向かつては、こちらで內々期待してゐたやうに、いきなり斷るやうな事もしなかつた。たゞ、依然として彼を無視するばかりであつた！　その代はり、ヴレンチーナ・ミハイロヴナは、マリアンナを無視しようとしなかつた。二人の間には恐ろしい場面が演じられた。

食事の二時間ばかり前、兩人は偶然ふたりきり客間にとり殘されたのである。避くべからざる衝突の時が來た事を、どちらもすぐに直感したので、ちよつと一瞬間ためらつたのち、しづかに兩方から近づいて行つた。ヴレンチーナ・ミハイロヴナは輕い微笑を浮かべてゐた。マリアンナは唇を嚙みしめてゐた。二人とも顏色はまつ靑であつた。ヴレンチーナ・ミハイロヴナは部屋を橫ぎりながら、左右を交る交る見まはして、ゼラニウムの葉を一枚むしり取つた……マリアンナの目は、微笑を浮かべながら近づいて來る叔母の顏へ、まともにそゝがれてゐた。

シビャーギン夫人がまづ立ち止まつた。そして指先で椅子

の背を輕く叩きながら、

「マリアンナ・ギケンチエヴナ、」と彼女は無雜作な聲で言ひだした。「わたし達はお互に、書信の往復といつたやうな事をしてるやうですね……一つ屋根の下に暮らしてゐながら、ずゐぶん妙な話しですわね。わたしがいかもの好みでないことは、あなたもご承知の筈ですが。」

「その書信の往復を始めたのも、わたしが先ちやありませんわ、ヴレンチーナ・ミハイロヴナ。」

「さう……それは仰しやる通りです。今度もち上がつた奇妙な事の責任は、確かにわたしの方にあります。たゞね、わたしはほかに方法を考へつけなかつたんですの、つまりあなたの心に……何と言つたらいゝか知ら？……あなたの心に……」

「眞つ直に言つて下さい、ヴレンチーナ・ミハイロヴナ。どうかご遠慮なく——わたしを侮辱しやしないかなんて、そんなご心配は決していりませんから。」

「つまり……嗜みといふ感じを起こさせるために……」

ヴレンチーナ・ミハイロヴナは口をつぐんだ。部屋の中には、椅子の背を輕く叩く彼女の指の音が、こつ〳〵と聞こえるばかりであつた。

「どういふ譯で、わたしが嗜みを忘れたとお思ひになりますの？」とマリアンナは訊ねた。

ヴレンチーナ・ミハイロヴナは眉を疎めた。

「ねえ、あなたはもう子供ぢやないんだから、わたしの言ふ事はよく分かつておいでの筈です。一體あなたは、自分のしてゐることが、わたしにも、アンナ・ザハーロヴナにも、また家ぢうの人にも、いつまでも祕密にして置かれると思ひますか？　尤も、あなたはそれを祕密にしようといふやうな事は、大して心配もなさらない樣子ね。あなたのやり方は、まるで大威張りなんですもの。たゞポリース・アンドレーイッチだけは、そんな事に氣を止めなさらなかつたかも知れません　……あの人はもつと興味の高い、もつと重大な仕事でお急がしいんですからね。だけど、あの人を除けたら、あなたの品行はみんなに知れ渡つてゐますよ、みんなに！」

マリアンナの顏は次第々々に靑くなつて行つた。

「ヴレンチーナ・ミハイロヴナ、もつとはつきり言つて頂きたいもんですね——一體なにがあなたのお氣に召さないんでせう？」

『生意氣な！』とシピャーギン夫人は考へたが、それでもまだ自分を抑へつけた。

「何がわたしの氣に入らないか、それをあなたは知りたいんですね、マリアンナ？——よござんす！——わたしはね、あなたが若い男の人と二人で、長いあひだ話しこんでるのが氣に入らないんです。あの人は生まれから言つても、教育から言つても、社會上の地位から言つても、あなたには丸つきり釣り合はない人ぢやありませんか。あなたが夜おそく……そんな人の所へ會ひに行くのが、わたしの氣に入らないんです……いえ、それぢや餘り言葉が弱すぎます——わたしは憤慨してゐるんです。しかも、それはどこだと思ひます、わたしの家の屋根の下なんですよ！　それとも、あなたはそれがあたり前のことで、わたしも默つて見てゐなくちやならない——それどころか、あなたの輕はずみな行ひを保護しなくちやならない、とでも考へてゐらつしやるんですか？　わたしは潔白な婦人として……えゝ、さうですとも。わたしは過去もさうであつたし、現在でもさうだし、未來だつていつまでも變はらないつもりです！——わたしは忿懣を感じないぢやゐられません！」

ヴレンチーナ・ミハイロヴナは、この忿懣の重荷に耐へないやうに、肘椅子の上へ身を投げた。

マリアンナは初めてにたりと笑つた。

「わたしは過去、現在、未來に亙るあなたの潔白を疑ひはしませんわ。」と彼女は言ひだした。「わたしは本當に心からさう思つてゐるんですの。だけどその憤慨はご無用ですわ。あなたのお宅の恥ぢになるやうなことは、わたしちつともしはいたしません。あなたの當てこすつてゐらつしやる若い人は……えゝ、わたしは本當に……あの人を戀ひしてゐます……」

「あなたがモッシウ、ネジダーノフを戀ひしてるんですつて？」

「わたしあの人を愛してゐます。」

ヴレンチーナ・ミハイロヴナは肘椅子の上に身をそらした。

「まあ、飛んでもない、マリアンナ！　あの人は家もなければ、身分もない學生ぢやありませんか——あの人は、あなたより年下ぢやありませんか！（この最後の一句は、いくぶん意地わるい喜びの調子で發しられた）。まあ、これがどうなることだと思ひます？　あなたのやうな賢い人が、あの人にどんないゝところを見つけたんです？　あの人はたゞのつまらない小僧つ子ぢやありませんか。」

「しかしあなただつて、前からさう思つてゐらしつた譯ぢやないでせう、ヴレンチーナ・ミハイロヴナ？」

「まあ、何といふ事だらう！　どうかわたしの事なんか構はないで頂戴……さう、むきにならないで頂戴、後生だか

ら。いま話してるのはあなたの事ぢやありませんか、あなたの將來のことぢやありませんか。考へてもご覽なさい！あれがあなたに釣りあふ緣ですか？」

「正直に申しますと、ヴレンチーナ・ミハイロヴナ。わたし緣などといふ事は考へても見ませんの。」

「え？　何ですつて？　それはなんと取つたらいゝんでせう？　まあ、かりにあなたが情にひかれて、夢中になつたのだとしても……でも結局は、結婚といふ事にならなくちやならないでせう？」

「分かりませんわ……わたしそんな事は考へても見ませんから。」

「考へたこともないんですつて？　まあ、あなたは氣でもちがつたの！」

マリアンナはやゝ顏をそむけた。

「もう、こんな話しはやめにしませう、ヴレンチーナ・ミハイロヴナ。こんな話しをしたつて、何にもなりやしませんわ。どうせお互に分かりつこないんですから。」

ヴレンチーナ・ミハイロヴナは、はじかれたやうに立ち上がつた。

「わたしはこの話しをやめる譯に行きません、それにまた、やめるべきものでもありません！　これは餘り問題が重大すぎます……わたしあなたの事についちゃ責任がありますからね……」ヴレンチーナ・ミハイロヴナは、『神樣に對して！』と言はうとしたが、ちよつと詰まつて「世間に對して！」と言ひ直した。「そんな氣ちがひめいた事を耳に入れながら、わたし默つてゐる譯に行きません！　それに、どうしてわたしがあなたを理解できないんでせう？　本當に今の若い人達の高慢なことと言つたら、まるで我慢できない！　いゝえ……わたしはよく理解してゐますよ、よく分かつてゐますとも——あなたは謂はゆる新思想にかぶれて、否應なく破滅の淵へ引つぱられて行つてるんです！　けれど、さうなつて了つたら、もう取り返しがつきませんよ。」

「さうかも知れません、だけどご安心ください——わたし達は破滅しながらも、あなたなんかに助けて下さいと言つて、指一本のばしやしませんから！」

「またそんな高慢なことを、何といふ恐ろしい高慢な人だらう！　ねえ、お聞きなさい、マリアンナ、わたしの言ふことをお聞きなさい。」と急に調子をかへて、彼女は言葉を續けた……彼女はマリアンナを引き寄せようとしたが、こちらは一歩あとへ引いた。「わたしの言ふことを聞いて頂戴後生だから！　わたしだつて、とても話し合ひが出來ないほど、それほど古くもなければ——それほど馬鹿でもないつもりなのよ！　わたし決して分からず屋ぢやありません。それどころか、若い時分には共和黨と言はれたほどですよ……あなたに負けないくらゐね。よござんすか。面なんか被らないで率直に言ひますが、わたしはあなたに對して、母親らしい愛情など感じたことは、たゞの一度もありません。それに、あなたの氣性としては、それをつらがる事なんかないでせう……けれど、わたしはあなたに對して責任があります。それを承知してゐましたし、今でも承知してゐます——だから、わたしはいつもそれを果たさうと努めて來たんです。事によつたら、わたしがあなたのために空想してゐた緣談は、充分あなたの理想に合ひかねたかも知れません……けれど、わたしにしろ、ボリース・アンドレーイッチにしろ、そのためにはどんな犧牲も躊躇しないつもりでした。わたしの深い心の底では……」

マリアンナはヴレンチーナ・ミハイロヴナをじつと見つめてゐた——あの美しい眼、かすかに紅をさした薔薇色の唇、指環で飾りたてた指を輕くひろげて、絹の上着に品よくあてた眞つ白な手……彼女は不意に相手を遮つた。

「緣談ですつて、ヴレンチーナ・ミハイロヴナ？　あなたは『緣談』と仰しやるんですね——それはあなたのお友達ですか、あの魂のない俗物の、カルロメイッェフさんのことですか？」

ヴレンチーナ・ミハイロヴナは、上着の胸から指を離した。

「さうですよ、マリアンナ・ギケンチエヴナ？　わたしが言ふのはカルロメイッェフさんのことです——あの立派な教育のある青年のことです——あの人は必ず妻を幸福にすることの出來る人です——あゝいふ緣談を斷るのは、たゞもう氣ちがひばかりです！　氣ちがひですとも！」

「しやうがありません、叔母さん！　わたしはさうした女なんでせうよ！」

「でも、一體あの人のどういふ所がいけないと言ふの——そんなにむきになるほど？」

「いゝえ、なんにもありやしません！　わたしはたゞあの人を輕蔑してるんですの……それつきりですわ。」

ヴレンチーナ・ミハイロヴナは、じれつたさうに首を左右にふつて——また安樂椅子へ腰を落とした。

「ぢや、あの人の話しはよしませう。もとの話しに戻りませう。で、あんたはネジダーノフさんを愛してるの？」

「えゝ。」

「そして、やはり續けて行くつもり……あの人とのあひゞ

きを？」

「えゝ、そのつもりですわ。」

「ぢや……もしわたしが止めたら？」

「あなたの言ふことを聞かないまでですわ。」

ヴレンチーナ・ミハイロヴナは、椅子の上で躍り上がつた。

「へえ！ 言ふことを聞かないんですつて！ おやまあ！……それがわたしから恩を受けた娘の言ひ草なんだからね、これが家で世話になつてゐる娘の言ひ草なのかしら……これが一體……」

「日蔭者の親を持つた娘の言ひ草か、とでも仰しやりたいんでせう。」とマリアンナが沈んだ聲で引き取つた。「どうぞ先を言つて下さい、ご遠慮なく！」

「あなたにそれを言はしたのは、わたしぢやありませんよ、お孃さん！ けれど、いづれにしても、そんな事はあまり自慢になりませんからね！ とにかく家のパンを食べてゐる娘が……」

「どうか、お宅のパンでわたしを責めるのはよして下さい。ヴレンチーナ・ミハイロヴナ！ もしコーリャの家庭教師に佛蘭西女をお傭ひになつたら、も少し高くついたでせうよ……だつて、コーリャに佛蘭西語の授業をしてゐるのは、わたしなんですからね。」

一方の隅に白糸で大きく頭字を縫つた、イランゲ・イランゲの匂ひのぷん〳〵する精麻の手巾を握つたまゝ、ヴレンチーナ・ミハイロヴナはその手をちよつと持ち上げて、何やら言はうとしたが、マリアンナはおつ被せるやうに言葉を續けた。

「もし、あなたが今かぞへ上げなすつた、至極あやふやな恩惠の代はりに、『わたしの愛してやつた娘』と仰しやつたら、それこそ幾千倍りつぱだつたか知れません。全くさう仰しやつたつて、さし支へはなかつたんですのにねえ……ところが、あなたは潔白なお方だもんだから、さういふ嘘をつくことがお出來にならなかつたのね！」マリアンナは熱病やみのやうにがた〳〵慄へてゐた。「あなたはいつもわたしを憎んでゐらしつたんです。あなたはついたつた今さき、深い心の奥底からと仰しやいましたが、今でさへその深い心の奥底から、わたしが恥ぢを曝すのを喜んでらつしやるんです——えゝ、わたしが世間のもの笑ひになつて、あなたのかねての豫言を實現させるのが、嬉しくてたまらないんですわ——たゞこの恥ぢさらしの一部分が、ご自分の貴族的な高潔な家に降りかゝるのが、不愉快なだけなんですわ。」

「あなたはわたしを侮辱してゐらつしやる。」とヴレンチーナ・ミハイロヴナは囁いた。「どうか出て行つて下さい。」

けれどマリアンナは、もう自分で自分を抑へることが出來なかつた。

「あなたはさつき家ぢうのものと仰しやいましたね。家ぢうのものが——アンナ・ザハーロヴナに至るまで——みんなわたしの品行を知つてゐると仰しやいましたね！ 誰もかれも呆れて憤慨してゐるつて……ですけど、わたしが何かあなた方に、つまりそのみんなの人に、無心でもした事がありますか？ 一體あなたは、わたしがあんな人達の意見を氣にするなんて、そんな事を考へてゐらつしやるんですの？ あなたのパンがわたしに取つてどんなに苦いか、それがあなたにお分かりですか？ わたしはね、どんな貧しい暮らしでも、こんな贅澤な暮らしよりましですわ。わたしと此の家の間には、誰も、誰ひとり埋める事の出來ない、深い〳〵淵があるのにお氣がつきませんか？ あなたがわたしに憎しみを感じてゐらつしやるとすれば、わたしがあなたに抱いてゐる心持ちだつて、お分かりになりさうなもんぢやありませんか？ わたしがこの心持ちを名ざして言はないのは、たゞ餘り分かり切つてゐるからです。」

「……出てお行き、出てお行きといふのに……」とヴレンチーナ・ミハイロヴナは繰り返しながら、その華奢な小さな足をとんと踏み鳴らした。

マリアンナは戸口の方へ一歩ふみ出した。

「今すぐ出て行つてさし上げます。でも、覺えてゐらつしやるでせう、ヴレンチーナ・ミハイロヴナ？ ラシーヌの『バヤゼー』に出て來るラシェールでさへ、この出て行けはうまく行かなかつたさうですもの、あなたなんか尙さらですわ！ それからもう一つ言つて置きませう。えゝと、何とか仰しやいましたつけ……わたしは潔白な婦人です。過去もさうであつたし、未來だつていつまでも變はらないつもりです、と言ふんでしたね？ ところがお聞き下さい、わたしの方があなたなんかより、ずつと潔白だと信じてゐますわ！ さよなら！」

マリアンナは急ぎ足に出て行つた。ヴレンチーナ・ミハイロヴナは、肘椅子から飛び上がつて、叫び聲を立てようとしたが、また泣き出したくもあつた……けれど何と叫んでいゝのか分からなかつたし、涙も彼女の意に從はなかつた。

で、彼女は手巾で顏を煽ぐだけでお了ひにしたが、その手巾から發散する薫りが、一そう彼女の神經を苛ら立たすばかりであつた。彼女は自分が辱かしめられた、不幸なも

のゝやうに感じた……彼女はいま聞いた言葉の中に幾分の眞理を認めたが、しかしそれにしても、どうして自分のことを沒義道に非難することが出來るのだらう？『一體わたしはそんなに惡い女か知ら？』と考へて――彼女は自分のまん前にある、窓と窓の間にかゝつた鏡の中を覗いて見た。鏡の中には――ところ〴〵赤いしみが滲み出して幾分曲がつたやうになつてはゐたけれど、それでも依然として魅力に充ちた艶な顏と天鵞絨のやうな柔かみを帶びた美しい眼が映つてゐた……『わたしが？ わたしが惡い女だつて？』と彼女はまた考へた。『こんな目をしてゐるのに！』

しかしこの瞬間、夫がはいつて來た――彼女はまたもや手巾で顏を蔽つた。

「お前どうしたの？」と彼は心配さうに訊いた。「一體どうしたの、ヴーリャ？」（彼は妻のためにこの愛稱を考へ出したが、しかしそれは全然さし向かひの時、それも重に田舍へ來た時でなければ、使はないことにしてゐた）。

彼女は初め言葉を濁して、何でもないと言つてゐたが……結局とゞのつまり、恐ろしく優美なしをらしい恰好で、肘椅子の上に身を轉じて、夫の肩に兩手を投げた――（彼は妻の方へ身を屈めてゐたのである）――そして、胸着の前あきへ顏を埋めながら、ありのまゝをすつかり話した。

別に狡猾な考へも底意もなしに、マリアンナの罪を許さうとした――といふのが間違ひとすれば、少くともその辯護に努めた。何もかも彼女の年の若さと、熱情的な性質と、幼い時の教育の不足に、罪を歸したのである。それから、ある程度まで――やはりべつだん底意なしに、自分で自分を責めた。

「もしあれがわたしの娘だつたら、こんな事にもならなかつたでせうに！ わたしの監督のしぶりも違つてたでせうに！」

シビャーギンは寛大な同情に滿ちた――しかも嚴格な態度で、最後まで聞き終つた。そして、妻が兩手を肩からおろして顏をそむけるまで、じつと體を屈めたまゝでゐた。彼は妻を天使と呼んだり、その額に接吻したりして、自分の役割り――一家の主としての役割り――が、いかなる行爲を要求するか、今こそ分かつたと言つて、自分の部屋へ引き上げた。それは不愉快だけれど、必要な義務を果たさうとしてゐる、人情味に富んだ、しかも精力的な人間といふ恰好であつた。

その晩の七時すぎに食事が終つてから、ネジダーノフは自分の部屋に籠つて、例の親友シーリンに手紙を書いてゐた。

「わが友ヴラヂーミルよ、僕は自分の生涯の重大な轉換期にあたつて、君にこの手紙を書くこととした。僕はこの家を斷られたので、こゝから出て行かうとしてゐるのだ。こんな事は何でもない筈なのだが……實は、こゝを出て行くのは僕一人きりでないのだ。いつか君に手紙で知らせた、あの娘が僕について來ることになつてゐる。僕達はあらゆる點において結びつけられてゐるのだ。運命の相似も、信念と目的の一致も――それに相互の愛情も、すべて僕らを緊ぐ絆ならざるはない。僕らは互に愛しあつてゐる。少くとも僕自身は、いま現に經驗してゐるものと異なつた形式で、愛の感情を經驗することは出來ないと信じる。しかし僕は君に嘘をつきたくない。實を言へば、內心ひそかに恐怖の念と、一種不思議な胸の痛みを感じないではない……一寸さきはすべて闇だ――その闇の中へ僕らは二人で飛び込むのだ。僕らが何に向かつて進まうとしてゐるか、いかなる活動の範圍を選んだか、それは今さら言ふ必要がなからう。僕とマリアンナは幸福を求めてゐるのではない、快樂を欲するのでもない――たゞ互に助けあひながら、一しよに並んで鬪ふのだ。僕らの目的ははつきり分かつてゐるが、併しいかなる道によつてそこに達し得るか――それが僕らに分からないのだ。たとへ同情や助力でないまでも、せめて活動の可能だけでも見出だし得るだらうか？ マリアンナは立派な潔白な少女だ。もしわれ〳〵が破滅の運命を擔つてゐるとしても、僕は彼女を卷き添へにしたといふ悔悟の念で、自ら責めるやうなことはないだらう。なぜと言つて、彼女にとつては、もう、それよりほかの生き方がなかつたからだ。――しかし、ヴラヂーミル、ヴラヂーミル！ 僕は苦しい……疑惑が僕をさいなむのだ。たゞし、彼女に對する自分の感情を疑ふのでは勿論ない、たゞ……僕自身にも分からない！ しかし、今さら後戻りする譯に行かない、もう遲い。どうか僕ら二人に、遠方からでも手をさし伸べてくれ――そして忍耐と、自己犧牲の力と、そして愛を祈つてくれ……何よりも愛を祈つてくれ。あゝ、汝、露西亞の民衆よ、われらの全存在を擧げ、われらの胸の血潮を悉く傾けて愛しながら、しかもわれらの未だ知らざる露西亞の民衆よ、餘りに冷たくわれらを迎へないでくれ。そして何を汝から期待すべきか教へてくれ！

左樣なら、ヴラヂーミル、左樣なら！」

この短かい手紙を書き終つてから、ネジダーノフは村の方へ出かけて行つた。――翌朝、やうやく東が白みかゝつた頃、彼はもうシビャーギン家の庭から程遠からぬ、白樺の森の端れに立つてゐた。そのちよつと後ろには、轡のない

二頭の痩せ馬をつけた百姓馬車が、廣々と絡みあひながら繁つた胡桃の青葉の蔭から、見え隱れに覗いてゐた。馬車の中には繩で編んだ腰掛けの蔭で、年とつた白髮頭の百姓が、一抱への乾し草を敷いて、つぎはぎだらけの外套を枕に眠つてゐた。ネジダーノフは、庭に添うた柳の繁みから道路の方を、じつと目も離さずに見つめてゐた。灰色をした靜かな夜は、まだあたりに立ち罩めて、まばらな星くづは、空虛な空の深みへ取り殘されたかの如く、互に消しあふやうに瞬いてゐた。長く伸びた黑雲が丸みを帶びて垂れた下の端に、東の方から弱々しい赤みがさして、それと同じ方角から、早朝の冷氣が初めて靜かに流れて來た。不意にネジダーノフは、思はずはつと身ぶるひした。どこか近くの方で庭木戸が初めぎいつと軋んで、それからかたんと鳴つた。肩かけにくるまつた小さな女の姿が、むき出しの手に包みをかゝへて、じつと動かぬ柳の蔭から、柔かい街道の埃の上へ、ゆる〳〵と現れた——そして、はすかひに道を横切ると、爪先だちでもしてゐるやうな足どりで、林の方へ進んで來た。ネジダーノフはその方へ飛んで行つた。

「マリアンナ？」と彼は囁いた。

「わたし！」かういふ小さな聲が、垂れかゝつた肩かけの蔭から響いた。

「こつちへ、僕の後について。」包みを持つたむき出しの手を不器用さうに取りながら、ネジダーノフはかう答へた。

彼女は寒けでもするやうに身を縮めてゐた。彼は馬車の傍へつれて行つて、百姓を呼び起こした。こちらは身輕にはね起きて、すぐさま馭者臺へよぢ昇ると、外套の袖へ手を通し、繩の手綱をとり上げた……馬は身うごきをはじめた。百姓はぐつすり寢こんだ後なので、妙にしは嗄れた聲で用心ぶかくそれを制した。ネジダーノフは、まづ自分の外套を繩で編んだ腰掛けに敷いて、その上へマリアンナを坐らせ、その足を毛布で包んだ後（馬車の底に敷いた乾し草は濕つてゐた）、自分もその傍に腰をおろした。そして百姓の方へ身を屈めながら、小さな聲で、「さあ、やれ、分かつてるだらう。」と言つた。百姓は手綱をしやくり始めた。すると馬は鼻を鳴らしたり、體をうねらしたりしながら、森の外へ出て行つた——馬車は小さな古い轍をがたがた躍らしながら、街道づたひに走りはじめた。ネジダーノフは片手でマリアンナの體を支へてゐた。彼女はその冷たい指で肩掛けを持ち上げて、男の方へ顏を向けながら、につこり笑つて、

「何てさば〳〵したいゝ氣持ちでせう、アリョーシャ！」と言つた。

「さうでございますよ。」と百姓が答へた。「露がさぞ酷えこんでございますべ！」

露はもう深かつた。轍は道ばたの高い雜草の頂きに觸れて、まるで珠數のやうに繋がつた、こまかい水たまをはらはらと落とした——草の綠は灰色がかつた鳩羽いろに見えた。

マリアンナはまた寒さに身に縮めた。

「さば〳〵すること、本當にさば〳〵すること。」と彼女は愉快さうな聲で繰り返した。「それに自由なんですもの、アリョーシャ、自由なんですもの！」

二七

どこかの旦那と奥さんが、百姓馬車でやつて來て、面會を求めてゐると、走つて來た取り次ぎが報じるや否や、ソローミンは工場の門口へ駈け出した。客に挨拶もせずに、たゞ幾度か頷いて見せただけで、彼はすぐ百姓の馭者に庭へはいれと言つた——そして——いきなり自分の離室まで乘りつけさせてから、マリアンナを車から助けおろした。ネジダーノフはその後から飛びおりた。ソローミンは細長い廊下を抜けて、狹い曲がつた梯子づたひに、二人を離室の裏二階へ案内した。やがて彼は一つの低い戸を開けた——そして三人は窓の二つ附いた、かなり小綺麗な、小さな部屋へはいつた。

「よく來ましたね！」といつもの微笑を浮かべながら、ソローミンは口をきつた。しかし今度はその微笑がふだんより明かるく、大きく擴がつてゐるやうに思はれた。

「これが君がた二人の住まひです。この部屋と——それからすぐ隣りに、もう一つ別なのがあります。見てくれはよくないが、しかしまあ、暮らすのに不自由はありませんよ。それに、こゝなら誰も見る者がゐないから。そこの窓の下に——持ち主の謂はゆる花園があるけれど、僕に言はせれば——野菜畠ですよ。こいつが塀まで續いてゐて——左右は垣根になつてゐます。閑靜な所ですよ！——さあ、もう一度ご機嫌よう！　可愛いお孃さん——それからネジダーノフ君、ご機嫌よう！」彼は二人の手を握りしめた。二人は外套も脫がずにじつと立つてゐた——そして半ばびつくりしたやうな、半ば嬉しさうな興奮の色を浮かべながら、無言のまゝじつと目の前を見つめてゐた。

「さて、どうですか？」とまたソローミンが言ひだした。「まあ、外套でもお脫ぎなさい！　荷物はどんなものです？」

マリアンナは、依然として手に持つてゐる包みを示した。

「わたしのはこれきりですの。」

「僕のは鞄と袋です、馬車に殘してあります――一つ僕がいま……」

「じつとしておいでなさい、じつとして。」ソローミンは戸を開けた。「バーゼル！」と彼は梯子の暗闇に向かつて叫んだ。「お前ひと走り行つてくれないか……あの馬車の中に荷物があるから……それを持つて來るんだ。」

「たゞ今。」いつも影身に添うて離れぬバーゼルの聲が聞こえた。

ソローミンはマリアンナの方へ向いた。こちらは肩掛けを捨てゝ、婦人外套の釦をはづしにかゝつた。

「萬事うまく行きましたか？」と彼は訊ねた。

「えゝ、萬事……誰にも見つかりませんでしたわ。――わたしシピャーギンさんに手紙を置いて來ました。わたしはね、ヴシーリイ・フェドートゥイチ、着物も肌着も持つて來ませんでしたの。だつて、あなたはわたし達をやつて下さるお約束でせう……（マリアンナはなぜか『民衆の中へ』とつけ足す勇氣がなかつた）――それに同じことでせう、どうせ役に立たないんですから。お金は持つてをりますの、いるものを買ふだけ。」

「そんな事は後でゆつくり相談しませう……ところで、」

ネジダーノフの荷物を持つて、部屋へはいつて來るバーゼルを指さしながら、ソローミンはかう言つた。「この工場に於ける僕の良友をご紹介します。この男には充分信頼なすつてよろしい……ちやうど僕と同じやうにね。――お前タチヤーナに、サモワールのことをさう言つたかね？」と彼は小聲に言ひ添へた。

「今すぐ出來ます。」とバーゼルは答へた。「クリームも――何もかもすつかり。」

「タチヤーナといふのは、これの家内なんです。」とソローミンは言葉を續けた。「そしてやはりこの男と同じやうに、間違ひのない女です。やがてそのうちにご自分で……まあその、馴れて來られるまで、その女があなたのお世話をしますよ、お嬢さん。」

マリアンナは隅に置いてある、小さな革の長椅子に婦人外套を投げ出した。

「ヴシーリイ・フェドートゥイチ、わたしをマリアンナと呼んで下さい――わたしお嬢さんなんかでゐたくないんですから。それに女中めいた者もいりません……わたしがあの家を出たのは、女中なんか持つためぢやありません。わたしの着物なんかに目をつけないで下さい。ほかに何もなかつたもんですから。こんなものはすつかり變へなくちやなりませんわ。」

着物は蔦色のドラ・ド・ダームで作つたもので、ごくさつぱりした型であつたが、彼得堡の仕立て屋が縫つたので、マリアンナの肩や體に美しく落ちついて――全體に流行の衣裳といふ感じを與へた。

「いや、女中でいけなければ、助手といふ事にしませう、亞米利加式にね。しかし、とにかくお茶は飲んで下さい。今はまだ早いし――それに二人とも、きつとお疲れになつたでせう。僕はこれから工場へ仕事に行きますから、も少したつて、またお目にかゝりませう。何かいるものがあつたら、バーゼルかタチヤーナにさう言つて下さい。」

マリアンナはいきなり彼に兩手をさし伸べた。

「ヴシーリイ・フェドートゥイチ、どんなにお禮を言つたらいいんでせうね？」彼女は感激に滿ちた目で相手を眺めた。

ソローミンはそつと彼女の片手を撫でた。

「お禮なんかいりません――と言ひたいのですが……それでは嘘になります。それよりいつそ、あなたの感謝はわたしに非常な滿足を與へます、とかう言つて置きませう。それでもうお互に棒引きです。さやうなら！　バーゼル、さあ行かう。」

マリアンナとネジダーノフは二人きりになつた。

彼女は男に身を投げた――そして、ソローミンを見た時と同じやうな目で彼を見つめながら（尤も、その目は一層うれしさうに、一そう感激に滿ちて、晴れ〴〵としてゐた）、口をきつた。

「あゝ、あなた！　わたし達は新しい生活を始めるのね……やつとのことで！　やつとのことで！　この貧しい住まひが、あの忌々しいお邸に比べて、どんなに嬉しく懐かしく思はれるか、とてもあんたには分からないでせうね！　尤も、こゝにはほんの四五日しかゐられないんだけれど。ねえ、あんたも嬉しいでせう？」

ネジダーノフは彼女の兩手を取つて、自分の胸へ押しあてた。

「マリアンナ、僕は幸福だ、この新しい生活を、あんたと一しよに始められるんだもの！　あんたは僕の手引きの星だ、僕の杖だ、僕の勇氣だ……」

「わたしの大すきなアリョーシャ！　でも、待つて頂戴――少し埃でも落として、身なりを繕ろつて來なくちやならないわ。わたし自分の部屋へ行つて來るから……あんたはここで待つてらつしやい。わたしすぐ歸つて來るから……」

マリアンナは次の間へはいつて戸を締めた――一分ほどたつて、半ば扉を開けながら、その間から首を突き出した。

「あのソローミンさんは何ていゝ人でせう！」と言つたかと思ふと、彼女はまた戸をぴつたり締めた――がちりと鍵をかける音が聞こえた。

ネジダーノフは窓の傍へよつて、小さな庭を眺めた……一本の古い〳〵林檎の木が……なぜか特別かれの注意をひいた。――彼は一つ身慄ひして伸びをすると、自分の持つて來た鞄を開いた――が、その中から何を取り出すでもなかつた。彼はもの思ひに沈み始めた……十五分ばかりたつた後、マリアンナが歸つて來た。洗ひたての生き〳〵した顏つきで、全體に樂しさうな快活な樣子をしてゐた。それから間もなく、パーゼルの家内のタチヤーナが、サモワールや、茶道具や、佛蘭西パンや、クリームなどを持つて現れた。

亭主がジプシイ然としてゐるのに打つて變はつて――これはまた生粹の露西亞女であつた。白つぽい髪を固く大きく卷いて、それを角の櫛でとめてゐた。發育のいゝ體をして、顏の輪廓も大ぶりながら氣持ちよく、灰色の目はごく善良な表情をしてゐた。彼女は色こそ少し褪めてゐるが、小ざつぱりした更紗の着物を身につけてゐた。手は大きいけれど、清潔で美しかつた。彼女は落ちついたもの腰で會釋すると、しつかりした齒ぎれのいゝ聲で、

「ご機嫌いかゞでございます。」と言つた。その聲には、露西亞の百姓女につき物の、唄ふやうな調子が少しもなかつた。それからすぐにサモワールや茶碗を竝べはじめた。

マリアンナはその傍へよつた。

「ご免なさい、タチヤーナさん。わたしもお手傳ひしますわ。ナプキンでもいゝから貸して頂戴。」

「構ひませんよ、お孃さん。わたくし共は馴れてをりますから――樣子はヴシーリイ・フェドートゥイチから聞きました。もし何かご用があつたら、ご遠慮なくさう言つて下さるやうに。わたし達はもう喜んで……」

「タチヤーナさん、どうかわたしをお孃さんなどゝ呼ばないで頂戴……わたしは身なりこそお屋敷風だけれど――でも、わたしは……わたしはすつかり……」

タチヤーナの鋭く注意ぶかい視線は、マリアンナをまごつかした。彼女は口を噤んだ。

「あなたはどういふ方でゐらつしやいます？」とタチヤーナが例のなだらかな聲で訊ねた。

「ぜひ聞きたいなら言ひますが……わたしはほんとに……わたしは貴族の生まれですの。でも、そんなことをすつかり捨てゝしまつて――みんなと同じやうに……普通の女と同じやうになりたいんですの。」

「まあ、さうですか！　なるほど、それで分かりました。ぢや、あなたは裸一貫になりたがつてゐる人達のお仲間ですね――當節はさういふ人が隨分ありますよ。」

「あなた何と言つたんですの、タチヤーナさん。裸一貫になるんですつて？」

「はい……この頃さういふ言葉がはやり出しましてね。つまり、平民と同じやうになることなんでございますよ。裸一貫になる――さうでございますよ、百姓たちに賢い分別を教へてやるんですから、結構なことでございますとも。でも、なか〳〵骨の折れることでございますよ！　えゝ、えゝ、骨が折れますとも！　でも、どうかうまく押し遂げなさるやうに！」

「裸一貫になるつて！」とマリアンナは繰り返した。「ねえ、アリョーシャ、わたし達はお互にもう裸一貫の人間なんだつて！」

ネジダーノフは聲を立てながら笑つて、わざ〳〵繰り返してみた。

「裸一貫になる！　裸一貫になつた人！」

「ときに、この方はあなたの何でゐらつしやいます？　お婿さんですか――それともご兄弟ですか？」大きな器用さうな手で、そつと茶碗を洗ひながら、優しい薄笑ひを浮かべて、ネジダーノフとマリアンナを交はる〳〵見比べ見比べ、タチヤーナはかう訊いた。

「いゝえ。」とマリアンナは答へた。「お婿さんでもなければ、兄弟でもないのよ。」

タチヤーナは顏を上げた。

「してみると、たゞ何といふことなしに、ご自分の好き自由で一緒になつてゐらつしやるんですね？　この節はさういふ事もやはりよくありますよ。――今まではおもに、分離派教徒の仲間にあつた事ですが、今ではほかの人達の間にも移つて來ましたよ。なに、たゞ神さまさへ祝福して下すつて、仲よく暮らしてさへ行けば、それで宜しうございますよ！　さうすれば、坊さんなんか要りやしませんよ。家の工場にもさういふ人がちよこ〳〵ありますが、決して惡い連中ぢやありませんからね。」

「あんたは本當にいゝことを言ふのね、タチヤーナさん！……『自分の好き自由』だなんて……わたしすつかり氣に入つちやつたわ。――ねえ、タチヤーナさん、わたしあんたにお願ひがあるのよ。實は着物を縫ふか買ふかしたいんですの、あんたの着てるやうなのか、それともも少し粗末なものをね。靴も、靴下も、肩掛けも――みんなあんたと同じやうにしたいの。それくらゐのお錢はありますから。」

「えゝえ、お孃さん、ようございますとも……あゝ、もう申しません、どうぞお怒りにならないで――もうお孃さんなどと呼びはいたしません。でも、何とお呼びしたらいゝのでせう？」

「マリアンナ。」

「それでは、ご父稱の方は何と仰しやいます？」

「父稱なんか訊いて何になさるの？　たゞマリアンナだけで結構よ。わたしだつてあなたを、タチヤーナと呼んでゐるんですもの。」

「それはさうでもございますが――またさうも行きませんでね。やつぱり聞かせて頂きませう。」

「ぢや、いゝわ。わたしのお父さんは、ギケンチイといふ名前でしたの。ぢや、あなたのお父さんは？」

「わたしのはオシップでございます。」

「さう、ぢやわたしあなたをタチヤーナ・オシッポヴナと言つてよ。」

「では、わたしもあなたをマリアンナ・ギケンチエヴナとお呼びいたしませう。これで具合ひがよくなりました！」

「どうですの、タチヤーナ・オシッポヴナ、わたし達と一しよにお茶でも飲んでいらしつたら？」

「初めての事ですから構ひますまい、マリアンナ・ギケンチエヴナ。一杯だけご馳走になりませう。でないと、エゴールイチに叱られますからね。」

「そのエゴールイチといふのはどなた？」

「バーエルでございますよ、わたしの連れあひで。」

「お坐んなさいな、タチヤーナ・オシッポヴナ。」

タチヤーナは椅子に腰をおろして、砂糖を囓りながら茶を飲み始めた。そして、指の先で絶えず砂糖のかけを拈り廻しながら、一囓りする度に目を細めて、そちらを透かして見るのであつた。マリアンナは彼女と話しを始めた。タチヤーナは氣とりけなしに受け答へをして、自分でも何やかや訊ねたり、話しをして聞かせたりした。彼女はソローミンを神さまのやうに崇めてゐたが、そのすぐ次ぎには自分の夫を信じきつてゐた。とは言へ、工場の生活は彼女にとつて苦しいらしかつた。

「こゝは町ともつかなければ、村でもなし……もしヴシーリイ・フェドートゥイチがゐらつしやらなかつたら、一時間と辛抱が出來なかつたでせうよ！」

マリアンナは注意ぶかくその話しを聞いてゐた。脇の方に陣どつたネジダーノフは、自分の生涯の友をじつと觀察してゐたが、その熱心な注意ぶりを見ても、別に驚きはしなかつた。マリアンナにとつては、かういふ事もすべて珍

らしいに相違なかつた――けれど彼自身は、タチヤーナみたいな女なら、幾百人となく見て來たし、また幾百遍となく話しもしたやうに思はれたのである。

「ねえ、タチヤーナ・オシッポヴナ。」たうとうマリアンナがかう言つた。「あなたはさう考へてゐらつしやるんでせう、わたし達が百姓にものを教へようとしてゐるつて――いゝえ、違ひますの、わたし達はあゝいふ人に仕へたいんですの。」

「仕へるつて、一體どうするんでございます？　教へておやりなさい、それがつまり仕へる事になるんですから。まあ早い話しが、現にわたしがさうでございますよ。わたしがエゴールイチの所へ來た時には、まるで讀み書きのすべを知らなかつたものですけれど、ヴシーリイ・フェドートゥイチのお蔭で、今ぢやどうやら分かるやうになりましたからね。尤も、あの方がご自分で教へて下さつたのぢやありません――ある年寄りにお金を拂つて、賴んで下すつたのでございますよ。で、つまりそのお爺さんに習ひましたので。――わたしは圖體こそ大きうございますが、これでまだ若いんですからね。」

マリアンナは暫らく無言でゐた。

「わたしはね、タチヤーナ・オシッポヴナ、」と彼女はまた口をきつた。「何かの職を覺えたいんですけど……でも、この事はまた後でよくご相談しませう。わたし裁縫が下手だから、お料理でも習つたら、豪所女中くらゐにはなれるでせうね。」

タチヤーナはちよつと考へ込んだ。

「豪所女中とはどういふ譯です？　女中などといふものは、金持ちか商人あたりが置くもので、貧乏人は自分で食べるものを拵へますからね。――職工の合宿所の賄ひにでもなりますか……でも、それは本當にどんづまりでございますよ！」

「わたしはたとへ金持ちの家に住まつても、貧しい人達と知り合ひにさへなればいゝんですわ。でも、どうしたらさういふ人と一緒になれるでせう！　かうしてあなたとお話ししてゐるやうな、そんな風ないゝ機會ばかりはないでせうからね。」

タチヤーナは空の茶碗を皿の上へ伏せた。

「それは難かしい事でございますね。」たうとう彼女は溜め息と共に言ひだした。「なか〳〵おいそれとは行きますまいよ。出來るだけのことはお教へしますが――わたしもさう學問のある女ぢやありませんからね。エゴールイチと相談してみませう。まあ、あれがどういふ人だとお思ひにな

ります？ どんな本でも讀んでのけますからね！ どんな事でもすぐにすら〳〵と解いて了ひますよ。」そのとき彼女は、マリアンナが煙草を卷いてゐるのに目をつけた……「ねえ、マリアンナ・ギケンチエヴナ、失禮ですけれど、もし本當に裸一貫になりたいとお思ひになるなら、そんな事はどうしてもやめなくちやなりませんよ。」彼女は煙草を指さした。「なぜと申して、さういふ身分では、つまり臺所女中のやうな身分では、さういふことは出來ませんからねえ。すぐに誰でも――これはお孃さん上がりだなと氣がつきますよ。さうですとも。」

マリアンナは煙草を窓の外へ拋り出した。

「わたしもう吸ひません……そんなことは平氣で止せますよ。普通の女が吸はないといふ事なら、わたしだつて吸つちやならない譯ですもの。」

「それは本當でございますよ、マリアンナ・ギケンチエヴナ、わたし達の方でも、男はそんな道樂をしてゐる者もありますが、女の方は――いたしませんね。さうなんでございますよ！ おや！ ヴシーリイ・フェドートゥイチがお見えになるやうだ。あれはあの方の足音だ。あなた、あの方に聞いてごらんなさいまし。すぐに何もかも決めて下さいますよ――何よりも鹽梅よくね。」

果たして戸の外にソローミンの聲が響いた。

「はいつてもいゝですか？」

「おはいんなさい、おはいんなさい！」とマリアンナが叫んだ。

「これはつい英吉利の癖でね。」ソローミンは部屋へはいりながらかう言つた。「ときに、お氣分はどうです？ まだ今のところ退屈はしませんか？――お見受けしたところ、あなたはこゝでタチヤーナと、お茶會を開いてゐらっしやるやうですね。まあ、この女の言ふことを聞いてご覽なさい。なか〳〵賢い人間ですよ……ところが、今日は工場主がやつて來るんです……どうもをりが惡いですね！ 食事までして行くさうです。仕方がありません！ そこがつまり持ち主ですからね。」

「一體どんな人間です？」ネジダーノフが隅の方から出て來ながらかう訊いた。

「變はつたこともありませんよ……まさか雜巾をしやふるほどの低能でもありませんよ。やはり新人の仲間でね、恐ろしく丁寧なんです――カフスも嵌めてゐますよ。しかし、目がこまかく行き屆く方で、その點ぢや昔人間に負けませんな。人の身の皮をひん剝いてゐる癖に、『どうか恐れ入りますが、今度はこちら側を向けて下さい――こゝん所に

まだ皮が少々のこつてゐます……すつかり綺麗にして了はなければね！』と言つた調子なんです。しかし、僕に對しちや實に手觸りがいゝ――僕が必要だからですね！ たゞ僕がやつて來たのは、今日はもうとてもお目にかゝれさうもないから、それを斷りに來たのです。食事は持つて來させます。それから庭へ顏を出さないやうにして下さい。あなたどう思ひます、マリアンナさん、シピャーギンはあなた方を捜すでせうか、跡を追ふでせうか？」

「そんな事はないと思ひますわ。」とマリアンナは答へた。

「ところが、僕はあると思ひますね。」とネジダーノフが言つた。

「まあ、どちらにしても同じだ。」とソローミンは語を續けた。「初めの間は用心しなけりやなりますまい。そのうちに、うまく納まるでせうから。」

「さう、ですがね、」とネジダーノフが口を入れた。「マルケーロフだけは僕のところを知つてゐなくちやならないんです――どうしても知らせなくちや。」

「何のために？」

「そりや止むを得ないんです、われ〳〵の運動のためにね――あの男はいつでも僕の居どころを知る義務があるんですよ。さういふ約束なんだから。それにあの男なら喋りやしません！」

「ぢや、よろしい。バーゼルを使ひにやりませう。」

「僕の着物は出來るでせうか？」とネジダーノフは訊いた。

「と言つて、つまり變裝のことですか？――そりや無論……無論ですよ。どうも假裝舞踏會じみるな。まあ有り難いことに、高いものでないから助かる。では左樣なら、お休みなさい。――タチヤーナ、さあ行かう。」

マリアンナとネジダーノフはまた二人きりになつた。

二八

はじめ、二人はまたしつかりと手を握りあつた。やがてマリアンナが、「お待ちなさい、わたしあなたの部屋の片づけを手傳つて上げるわ。」と叫んで、またトランクと袋の中から荷物を取り出しにかゝつた。ネジダーノフはその手傳ひをしようとした。けれど彼女はすつかり自分一人でするのだと言つた。「だつて、奉仕といふ事に馴れなくちやなりませんからね。」果たして、彼女は自分で着物をずらりと釘へ掛け並べた。その釘は卓の抽斗から見つけ出して、金鍵のかはりにブラッシュの背中で、手づから壁へ打ち附けたものである。洗濯ものは窓と窓の間にあつた、古い小簞笥へし

まつた。

「これはなあに？」不意に彼女はかう訊いた。「拳銃？　彈丸がこめてあるの？　こんなものどうするの？」

「彈丸なんかこめてやしない……尤も、こつちへお寄越し。あんたは『どうする』つて訊くんだね？　われ〳〵のやうな身分の者が、拳銃なしでゐられると思ふの！」

彼女は笑ひだした。そして一つ〳〵の物をふるつたり、掌ではたいたりしながら、仕事を續けるのであつた。靴までちやんと二足そろへて、長椅子の下へ入れた。幾册かの書物と、一たばの書類と例の詩を書いた小さな手帳は、隅に置いてある三脚机にれい〳〵しく並べた。この机は、いま一方の圓い卓が食卓兼茶卓と命名されたのに對して、書物卓、兼仕事机と呼ばれた。それから彼女は詩作用の手帳を兩手に持つて、目と水平にさし上げると、上の端からネジダーノフを覗きながら、微笑と共にかう言ひだした。

「ねえ、これから仕事の閑な時に、これを一しよに讀み返さうぢやありませんか！　ね？」

「その手帳をおよこし！　そんなもの燒いてしまふ！」とネジダーノフは叫んだ。「それよりほかに仕樣のない代物だ！」

「ぢや、なぜそんなものを持つて來たの、もしさうだとすれば？——いや、いや、わたし燒かせやしないから。もつとも、作者つてものは、たゞそんなことを言つて嚇かすばかりで、決して自分の作品を燒いたためしがないんですつてね。でも、わたしやつぱり自分の部屋へ持つて行つとくわ！」

ネジダーノフは抗議を唱へようとしたが、マリアンナは手帳を持つたまゝ、次の間へ飛び出した——そして今度は空手で引つ返した。

彼女はネジダーノフの傍へ腰をおろした——が、すぐまた立ち上がつた。

「あんたまだわたしの所へ來て見なかつたわね……わたしの部屋へ。見たくなくつて？　あんたの部屋に負けないくらゐよ。行きませう——わたし見せて上げるから。」

ネジダーノフも同じく立ち上がつた——そしてマリアンナの後に續いた。彼女の謂はゆる自分の部屋は、少し彼の部屋より小さかつたが、家具類は少し小ざつぱりして新しく思はれた。窓仕切りには、花をさした硝子の花瓶があつて、片隅には小さな鐵の寢臺が置いてあつた。

「ねえ、あの人はなんて優しいんでせう、あのソローミンさんは。」とマリアンナは叫んだ。「でも、あんまり自分を甘やかし過ぎてはいけないわねえ。こんな住まひはさうしよつちう行き當らなくつてよ。あのね、わたしかう思ふのよ——もしわたし達二人が別々に離れないで、何かの職にありつけたら、そんな風にうまく事が運べたら、どんなにかいゝでせう！　でも、それは難かしいでせうね。」少したつて彼女はかう言ひ足した。「まあ、そのうちに考へてみませう。だつて、どうせあんた彼得堡へは歸らないでせう。」

「僕が彼得堡へ歸つて何をするの？　大學へ通つたり、家庭教師をしたりするのかい？　そんなことはもう何の役にも立ちやしない。」

「まあ、ソローミンさんが何と仰しやるか。」とマリアンナは言つた。「何をどんな風にしたらいゝか、そんな事はあの人の方がうまく決めて下さるわ。」

二人は元の部屋へ歸つて、また互に向きあつて腰をおろした。そしてソローミンや、タチヤーナや、パーエルを讃美したり、シピャーギンの噂をしたり、今までの生活が急に恐ろしく遠い所へ行つて了つて、まるで霧にでも包まれたやうな氣がする、などといふやうな話しもした。それからまた手を握りあつて、さも嬉しさうな視線を交換した。それに續いて、どういふ社會の層へ侵入して行かなければならないか、人から疑はれないやうにするには、どんな態度をとつたらいゝか、などといふやうな話しも出た。

ネジダーノフは、なるべくそんな事を考へないで、ざつくばらんな態度を取れば取るほど、却つて結果がいゝと主張した。

「無論さうよ！」とマリアンナが叫んだ。「だつてわたし達は、タチヤーナの言ひ草ぢやないけれど、裸一貫にならうとしてるんですものね。」

「僕はその意味で言つたんぢやない。」とネジダーノフが言ひかけた。「僕が言はうと思つたのは、自分に無理をしないで……」

マリアンナは急に笑ひだした。

「わたしはね、アリョーシャ、あの人がわたし達二人のことを『裸一貫になつた人』と言つたのを思ひ出して！」

ネジダーノフも同じやうに笑ひながら、「裸一貫になつた人……」と繰り返したが、やがて妙に考へ込んだ。

マリアンナも考へ深い樣子になつた。

「アリョーシャ！」と彼女は口をきつた。

「なに？」

「わたし達二人は少しばつが悪いのね、わたしもそんな氣がするわ。Des nouveaux mariés——新郎新婦つてものは、」と彼女は說明した。「新婚旅行の初めの日に、きつとこんな風な氣持ちがするに相違ないわ。恐ろしく幸福で……何と

も言へないいゝ氣持ちでありながら――そのくせ何だかばつが悪いのよ。」

ネジダーノフは微笑した――しかし、それはわざとらしい微笑であつた。

「でもマリアンナ、僕達が――さういふ意味の若夫婦でないつて事は、あんただつてよく知つてるぢやないの。」

マリアンナは椅子から立ち上がつて、びつたりネジダーノフに向きあつた。

「それはあんた次第よ。」

「と言ふと？」

「アリョーシャ、あんただつて分かつてるでせう――あんたが潔白な人間として、さうだと言つて下されば、わたしあんたを信用するわ。だつてあんたは本當に潔白な人間なんですもの。だから、あんたがわたしを愛してゐると仰しやつたら……つまり、他人の一生に對する支配權を與へるやうな愛し方なのよ……もしあんたがさうだと言つたら――その時こそわたしはあんたのものよ。」

ネジダーノフは顏を赤くして、少しそつぽを向いた。

「僕がさう言つたら……」

「えゝ、その時はね！　でも、あんた自分でも分かつてるでせう、今それが言へないつてことは……えゝ、さうよ、アリョーシャ、あんたは本當に潔白な人だわ。さあ、何かもつと眞面目なお話しをしませう。」

「だつて、僕はあんたを愛してるんぢやないか、マリアンナ！」

「わたし、その事を疑やしませんわ……だから待ちますわ。あゝ、ちよつと、わたしあんたの書物卓を、まだよく片づけてゐなかつたわ。あら、何だか包んだものがある、何だか固いものが……」

ネジダーノフは椅子から躍り上がつた。

「それに觸らないで、マリアンナ……それは……どうか觸らないで。」

マリアンナは肩ごしに彼の方へ首を向けた――そしてびつくりしたやうに眉を吊り上げた。

「これは祕密なの？　內證なの？　あんたに、祕密があるの？」

「さう……さうなんだ。」とネジダーノフは言つた。そして恐ろしく當惑した樣子で――說明といつたやうな形でつけ足した。「それは……肖像畫なんだよ。」

この言葉は思はず彼の口からすべり出たのである。實際マリアンナの手にしてゐる紙包みの中には、ネジダーノフがマルケーロフから貰つた、彼女の肖像がはいつてゐるの

であつた。

「肖像畫？」と彼女は引き延ばしたやうな聲で言つた……「女の？」

彼女は包みを彼に渡したが、その受け取り方がまづかつたので、あぶなく手から辷り落ちさうになつた。と、その拍子に包みが開いた。

「あら、これは……わたしの肖像畫だ！」とマリアンナは生き〳〵した聲で叫んだ。「まあ――自分の肖像畫なら、わたし貰ふ權利があるわ。」彼女はネジダーノフから繪をひつたくつた。「これはあんた描いたの？」

「いや……僕ぢやない。」

「ぢや、誰？　マルケーロフさん？」

「ご推察の通り……あの男だ。」

「それが一體どうしてあんたの手にあるの？」

「あの男が僕によこしたんだ。」

「いつ？」

ネジダーノフはその時の模樣を話して聞かせた。彼が話してゐる間、マリアンナは彼の顏と肖像畫を交る〳〵見くらべてゐた……二人――ネジダーノフとマリアンナの頭には、同じ想念が閃いた。『もしあの人がこの部屋に來てゐたら、あの人はこれを要求する權利があつたらう……』しかしマリアンナもネジダーノフも、自分の想念を聲に出しては言はなかつた……事によつたら、二人とも相手の胸の內に、この想念を直感したからかも知れない。

マリアンナは靜かに肖像を包み直して、卓の上に置いた。

「いゝ人ね！」と彼女は呟いた。「今どこにゐるでせう？」

「どこつて？……家にゐるよ、自分の家に。僕は明日か明後日ごろ、本を取りにあすこへ行くつもりだ、パンフレットを取りにね。僕によこすと言つてゐたんだけれど、きつと出發の時に忘れたんだらう。」

「アリョーシャ、あんたさう思つて――あの人はこの肖像畫を渡すとき、もうすつかり諦めてゐたか知ら……何もかもすつかり？」

「僕にはさう思はれたね。」

「そして、あんたはあの人が家にゐると思つて？」

「勿論。」

「あゝ！」マリアンナは目を伏せて兩手を落とした。「ほら、タチヤーナが わたし達のご飯を持つて來てくれてるわ。」と彼女は不意に叫んだ。「本當にいゝ人ね！」

タチヤーナが食器や、ナプキンや、皿を持つて現れた。彼女は食卓の用意をしながら、工場で起こつてゐる事を話して聞かせた。

「今ご主人が莫斯科から汽車でおいでになつてね、まるで氣ちがひのやうに、工場ぢう上から下へ駈けずり廻つてゐます。それでゐて、何ひとつ譯が分からない癖に、たゞ見せ掛けだけにあんな事をしてるんですよ。ヴジーリイ・フェドートゥイチはまるで赤ん坊あつかひにして、ご主人が何か厭な事をしかけると、早速やりこめなさるんですよ——もうすぐ何もかも抛り出して了ふ、とかう仰しやいますと、こちらはすぐさま尻尾を卷くぢやありませんか。いま一しよにお食事ちうでございます。ご主人はお仲間を一人つれて見えましたが……その人は何を見ても驚いてばかりゐらつしやいますよ。きつとお金持ちなんでせう、そのお仲間は。だつて、始終むつとして、頭を振つてるばかりなんですもの。肥つた方でしてね、もう大變な肥りやうなんですよ。きつと莫斯科の親だま株なんでせうよ。よく譬へにも言ふ、『莫斯科は露西亞の窪地、何でも、そこへ轉げ込む』といふのは本當でございますね。」

「あんたは何でもお氣がつくんですね！」とマリアンナは叫んだ。

「えゝ、えゝ、わたしは目がこまかうございますよ。」とタチヤーナは受けた。「さあ、ご飯の支度が出來ました。どうぞよろしく召し上がれ。わたしは少しこゝに坐つて、あなた方を見物さして貰ひませう。」

マリアンナとネジダーノフは食事にかゝつた。タチヤーナは窓仕切りにうづくまつて、片手で頰杖をついた。

「かうしてお見受け申すと、」と彼女は繰り返した。「あなた方はお二人ともお若くつて、華奢でゐらつしやいますね……あなたがたを眺めてゐると、本當にいゝ心持ちですけれど、何だか悲しくなつて參りますよ！　ねえ、あなたがたはご自分の力に餘る重荷を、背負はうとしてゐらつしやるんですよ！　あなたがたのやうな人を、お役人たちは喜んで牢屋へ抛り込むんでございますよ！」

「大丈夫、脅かしたつて駄目ですよ、小母さん。」とネジダーノフが言つた。「かういふ譬へを知つてるでせう——蕈と言はれる上からは、籠へ入るのを覺悟しな——」

「知つてますよ……知つてますよ。ところが、この節の籠は窮屈で、一旦はいつたら最後、出られないやうになりましたよ！……」

「あんた子供があつて？」マリアンナは話題を變へようと思つてかう訊いた。

「ありますよ、男の子が一人。學校へ通ふやうになりました。女の子も一人ありましたが、可哀さうに亡くなつてしまひました！　飛んだ災難にあひましてね、車に轢かれた

んでございますよ。それも、一息に殺されたのならまだしも！　長いあひだ苦しい思ひをいたしましたつけ。それ以來、わたしは憐れつぽくなりましたよ。元はまるで木か石のやうでしたけれど！」

「ぢや、ご亭主のパーヱル・エゴールイチはどう——別にすきぢやなかつたの？」

「なあに！　それは話しが別でございますよ。何分娘つこの事ですものね。現にあなただつて——この方がおすきなんでせう？　違ひますかね？」

「すきだわ。」

「大すきですか？」

「大すき。」

「どうですかね……」タチヤーナはネジダーノフとマリアンナを眺めたが——別に何とも言ひ添へなかつた。

マリアンナはまた話題を變へなければならなかつた。彼女はタチヤーナに、煙草をやめたことを話した。こちらはそれを褒めた。それから、マリアンナはもう一ど着物のことを頼んだ。また料理を教へるといふ約束も念を押した。

「あゝ、それからもう一つ、太い頑固な糸を手に入れることは出來ないかしら？　わたし靴下が編みたいんですの……ごくざつとしたのを。」

タチヤーナは何もかも望み通りにすると約束して、卓の上を片づけると、例のしつかりした落ちついた足どりで、部屋を出て行つた。

「さあ、これから何をしようかしら？」とマリアンナはネジダーノフに話しかけた。そしてこちらが返事をする暇も待たないで、「かうしたらどう？　本當の仕事は明日から始まるんだから、今夜ひと晩は文學に捧げようぢやありませんか。あなたの詩を讀み返して見ませうよ！　わたし嚴格な批評家になつてよ。」

ネジダーノフは長いあひだ同意しなかつたが……それでも結局まけてしまつた——そして手帳を取つて讀み始めた。マリアンナは彼の傍にちかゞゝと坐つて、朗讀の間ぢうその顏を見つめてゐた。マリアンナの言つたのは本當だつた——彼女は嚴格な批評家であつた。彼女の氣に入つた詩といふのは幾らもなかつた。マリアンナは彼女の謂はゆる『教訓的』な詩よりも、純抒情的な短かいものゝ方を選んだ。ネジダーノフの朗讀は非常に上手とも言はれなかつた。朗吟風にやる勇氣もないけれど、それかと言つて、餘りそつけない調子に墮して了ふのも厭だつたので、結局、虻はち取らずになつてしまつたのである。マリアンナは急に彼を遮つて、あの『よしや死すとも——嘆き少なし』とい

ふ句で始まつてゐる、ドブロリューボフの素ばらしい詩を知つてゐるかと訊ねた。そして、早速その全篇を諳誦したが――やはり大して上手ではなくて、何となく子供じみたところがあつた。

ネジダーノフはその詩を評して、言語に絶した悲痛な惱ましいものだと言つたが、しばらく經つてかう言ひ足した――ネジダーノフ自身は、決してかういふ詩を書くことが出來なかつたらう。なぜかと言へば、自分の墓の上に流される涙を恐れる理由がない……そんなものを流してくれる人がゐないからである。

「あるわ、もしわたしがあんたより長く生きてたら。」マリアンナはゆつくりした調子でかう言つた。そして目を天井の方へ上げて、しばらく無言でゐた後、まるで獨りごとのやうに小聲で訊ねた。

「あの人はどんな風にして、わたしの肖像を描いたんでせう？　心憶えだけでせうか？」

ネジダーノフはくるりとその方へ振り向いた……

「さうだ、心憶えだけなんだよ。」

マリアンナは彼が返事をしたのに驚いた。この疑問はただ心の中だけで考へたやうな氣がしたのである。

「それは不思議ね……」彼女は前と同じ調子で言葉を續けた。「だつて、あの人に繪の方の才なんかないんですもの。――わたし何を言はうと思つたのかしら……」と彼女は聲を高めて言ひ足した。「さう〳〵！　ドブロリューボフの詩のことだつけ。詩つてものはプーシキンのやうな風に書くか、それでなければ、このドブロリューボフの作品みたいなものを書かなくちや駄目だわ。それは詩ぢやありません……だけど、詩に劣らないくらゐ立派なものだわ。」

「ぢや、僕の詩みたいなものは、」とネジダーノフが訊ねた。「初めつから書かない方がいゝのか知らん？　さうかも知れないね？」

「あんたの書いたやうな詩は、お友達には氣に入るでせうよ。それは大變出來がいゝからぢやなくつて、あんたがいい人だからよ――あの詩はあんたによく似てるわ。」

ネジダーノフは苦笑した。

「たうとうあの詩を葬つてしまつたね――ついでに僕も一しよに！」

マリアンナは彼の手を叩いて、意地の惡い人と言つた……やがて彼女は、疲れたから行つて寢ると言ひだした。

「ときにね、」短かいけれど、ふさ〳〵と渦まいた髮をふるひ上げながら、彼女はかう言ひ足した。「わたし百三十七留持つてるのよ――あんたは？」

「九十八留。」

「まあ、わたし達は金持ちなのね……裸一貫になつた人間としては。――ぢや、また明日！」

彼女は出て行つた。けれど幾秒かたつた後、彼女の部屋の戸かほんの心持ち開いて――その隙き間からまづ初め、「左樣なら！」といふ聲が聞こえた。それから今度はもう一層低い聲で「左樣なら！」と言つたかと思ふと、錠前の鍵ががちりと鳴つた。

ネジダーノフは長椅子に腰をおろして、兩手で顏を蔽うた……やがて彼はやにはに身を起こして、戸口へ寄つて扉を叩きはじめた。

「何の用？」といふ聲が中から聞こえた。

「また明日ぢやない――マリアンナ……明日は！」

「また明日。」かういふ低い聲が答へた。

二九

翌日早朝、ネジダーノフはまたマリアンナの部屋をノックした。

「僕だよ。」どなた？　といふ問ひに對して、彼はかう答へた。「もうこつちへ出て來られる？」

「待つて頂戴、いますぐ。」

彼女は出て來るや否や、思はずあつと言つた。最初の一瞬間、彼女は誰やら見分けがつかなかつた。ネジダーノフは小さな釦をつけた、腰の高い、いゝ加減くたびれた、黃ろい南京木綿の長上衣を着て、頭は露西亞風にまん中からぴつたり分け、首には青い手巾を卷きつけ、手には目庇のこはれた帽子を持ち、足には少しも磨いてない牛皮の長靴を穿いてゐた。

「あら、まあ！」とマリアンナは叫んだ。「何て……みつともない恰好でせう！」けれども急に相手を抱きしめて――なほ一そう急に接吻した。「まあ、何だつてあんたはそんなりをしたの？　何だか下等な町の職人か……それとも行商人か、邸番の古手のやうに見えるわ。なぜそんな長上衣なんかにしたの――たゞの百姓外套か、袖なし外套の方がいゝぢやないの？」

「そこなんだよ、」とネジダーノフは言ひだした。彼がかういふ身なりをしてゐると、實際、町人あがりのけちな魚賣りじみてゐた――彼は自分でもそれを感じてゐたので、內心いま〳〵しくもあり、ばつが惡くもあつた。彼はそのばつの惡さを紛らすために、まるで埃でも拂ひ落とすやうに兩手の指を擴げて、胸のあたりをこすり廻してゐた……「百姓外套や袖なし外套では、すぐ見拔かれてしまふつて、あ

のバーゼルがさう言ふんだよ。ところが、この『着り物』になると(これはあの男の言葉を借りたんだが)、まるで生まれてこの方、ほかのものは身に着けた事がないやうに見えるんださうだ。尤も、ついでながら斷つて置くが、これはあまり僕の自尊心を喜ばすやうな評語ぢやないがね。」

「一體あんたはすぐに出かけるつもりなの……始めるつもりなの？」とマリアンナは生き〳〵した調子で訊ねた。

「あゝ、やつてみるつもりだ。もつとも……本當のことを言へば……」

「羨ましいわね！」とマリアンナは遮つた。

「あのバーゼルは何だか不思議な人間だね。」とネジダーノフは言葉を續けた。「何でもかでも心得てゐて、まるで腹の底まで突き刺すやうな目つきをしてるかと思ふと、急におれは一さい無關係だ――何にもかゝり合やしないぞ、といつたやうな顏つきをするぢやないか！　小まめに世話をやく癖に、始終ひやかしてばかりゐるんだ。あの男はね、マルケーロフの所から小册子を取つて來てくれたよ。前からマルケーロフを知つてゐて、セルゲイ・ミハイロヰッチと呼んでゐるんだ。ソローミンのためと來たら、火水の中でも厭だと言はないだらう。」

「タチヤーナだつてさうよ。」とマリアンナが言つた。「どうしてあの人には、みんながあゝ心服するんでせうね？」

ネジダーノフは返事をしなかつた。

「バーゼルが持つて來たのはどんな小册子？」とマリアンナが訊ねた。

「なに……普通のものさ。『四人の兄弟の話し』だの……それからまああり觸れた、いつものやうな物さ。もつとも――今度の方がいゝかな。」

マリアンナは惱ましげにあたりを見廻した。

「でも、タチヤーナはどうしたんだらう？　早くやつて來るつて約束なのに……」

「さあ、そのタチヤーナが參りましたよ。」手に包みを持つてはいりながら、タチヤーナがかう言つた。――彼女は戸の外に立つてゐて、マリアンナの叫び聲を聞いたのである。

「まだお間に合ひますよ……何といふ辛抱のないお人でせう！」

マリアンナはいきなりその方へ飛んで行つた。

「持つて來てくれて？」

タチヤーナは包みをぽんと叩いた。

「それ、この中に……すつかり揃つてをりますよ……たゞちよつと具合ひを見さへすれば……あとはもうこれを着て出かけて行つて――みんなをびつくりさせるばかりでございますよ！」

「さあ、行きませう、タチヤーナ・オシッポヴナ、早く行きませうよ……」

マリアンナは彼女を自分の部屋へ引つぱつて行つた。

一人きりになると、ネジダーノフは二度ばかり、妙にちよこ〳〵した足どりで、部屋の中を行つたり來たりした……(町人といふものは、かういふ歩き方をするものだと、彼はなぜか想像したのである)――そして、自分の着てゐる長上衣の袖や、帽子などを嗅いでみて、顏をしかめるのであつた。彼はまた、窓の傍にかゝつてゐる小さな鏡を覗いて、首をふつた。自分の恰好があまりに見すぼらしかつたのである。『もつとも、その方が結局いゝのだ。』と彼は考へた。それから彼は小册子を二三册とり出して、後ろの衣嚢へつゝ込むと、「なあに……皆の衆、これで構はねえんだよ……なぜつて、おめえ……」と小さな聲で囁いてみた。『どうやら似てるやうだ。』と彼はまた考へた。『何だつて、こんな役者の眞似をするんだ！　この身なりが充分おれを庇つてくれる筈だ。』その時ふと、ネジダーノフはある獨逸人の流刑囚の話しを思ひ出した。この男は露西亞の國を端から端へ拔けて、逃げて行かなければならないのに、露西亞語がまるでから下手だつたのである。けれど、ある田舍町で、猫皮のふちを取つた商人風の帽子を買つて、それを被つてゐたお蔭で、どこへ行つても商人といふ事で通用した――かうして、彼は無事に國境の外へ出られたのである。

この瞬間、ソローミンがはいつて來た。

「はゝあ！」と彼は叫んだ。「コッピイが出來たね！　君、堪忍してくれ給へ。さういふ恰好をしてゐると、どうも『あなた言葉』が使へないや。」

「さあ〳〵、どうぞ……なに、自由にやつてくれ給へ……僕も丁度それを君に言はうと思つてゐた所なんだから。」

「だが、どうも馬鹿に早すぎるぢやないか。たゞしかし、だん〳〵馴れて行きたいといふ希望なら、まあ、それもよからう。だが、それにしても、少し待たなくちゃ。大將もまだ出發しないんだから。まだ寢てゐるんだよ。」

「僕、も少したつて出て行くよ。」とネジダーノフが答へた。「少しばかり近在を歩き廻つて見よう――何か命令があるまでね。」

「それも一理窟だ！　だがね、アレクセイ……かう言つてもいゝね、アレクセイつて？」

「結構――もし何ならリクセイ(百姓訛り)でもいゝよ。」とネジダーノフは笑ひながら言ひ添へた。

「いや、何もさう藥をきかせ過ぎてもいけないよ。ねえ、いますよ！」

君、約束は金より大事だといふから斷つて置くが――君は小冊子を持つてゐるやうだね。そりや誰に分けてやらうと君の勝手だけれど、しかしこの工場では――まつぴらご免だよ！」

「それはなぜ？」

「なぜつて、第一、そんな事は君自身にとつて危險だから。――第二に、こゝでさういふ事はさせないつて、僕主人に約束したんだからね。また第三には、こゝでも何やかや始めたことがあるんだ――學校だとか何とかいつたものをね……で、つまり――それを君にぶち壞して貰ひたくないんだ。君は自分で自分に責任をもつて、どうとも勝手に働くがいゝ――それを僕は邪魔だてしないけれど、工場の職工だけには手を出さないでくれ給へ。」

「大事を取るのはいつでも結構……かね？」皮肉な薄笑ひを浮かべながら、ネジダーノフはかう口を入れた。

ソローミンは例によつて、顏一ぱいに微笑を擴げながら、「さうだよ、アレクセイ君、全くいつでも結構だよ。しかし、これは一たい誰だらう？　僕らは一體どこにゐるんだらう？」

この最後の叫び聲は、このとき閾の上へ現れた、マリアンナに向けられたものであつた。彼女はもうさん〴〵洗ひざらしになつた、色まじりの更紗の着物をきて、肩に黃ろいきれを掛け、頭を赤い頭巾で縛つてゐた。――その後ろからタチヤーナが顏を覗けながら、人の好ささうな表情で、その姿に見とれてゐる。この質素な身なりをしたマリアンナは、前より却つて生き〳〵として、若々しく見えるのであつた。彼女の衣裳は、ネジダーノフのぞろ〳〵した長上衣より、遙かにうつりがよかつた。

「ヴシーリイ・フェドートゥイチ、どうか笑はないで頂戴。」とマリアンナは祈るやうに言つて、罌粟の花のやうにまつ赤になつた。

「さあ〳〵、似合ひのご夫婦が出來ました！」とタチヤーナも叫んで手を叩いた。「でもね、若い衆さん、あんたも結構は結構だけれど、わたしの仕立てた若女房にやかなはない――恰好がとれてゐませんよ。」

『全くだ、あれは素敵だ。』とネジダーノフは考へた。『ああ！　おれはどんなにあれを愛してゐるか、分からないくらゐだ！』

「それにご覽なさい。」とタチヤーナは言葉をついだ。「わたしたち指輪まで取つ換へこをしたんですよ――あの人はわたしに金のを下すつて、わたしから銀のをお取りなすつたんですよ。」

「だつて、百姓の娘は金指輪なんか嵌めないでせう。」とマリアンナが言つた。

タチヤーナは吐息をついた。

「これはわたしが大事にお預かりして置きますからね、ご心配はいりませんよ。」

「まあ、お坐りなさい、二人ともお坐りなさい。」心もち首を傾げながら、絶えずマリアンナを見つめてゐたソローミンが、この時かう口をきつた。「ご承知でせうが、昔は誰か旅へ出かける時、みんな一しよに坐つたもんですよ。あなた方も長い骨の折れる道中を、目の前に控へてをられるんだから。」

マリアンナは、まだやはり赤い顏をしたまゝ、腰をおろした。ネジダーノフも坐つた、ソローミンも坐つた……最後にタチヤーナも『切り株』に腰をおろした。それはそこに突つ立つてゐた一本の薪のことなので。ソローミンは一同の顏を順々に見廻した。

「脇へ離れて眺めよう、

みんながちんと坐つた樣を……」

彼は少し目を細めながらかう言つて、急にから〳〵と笑ひだした。それがいかにも氣持ちのいゝ笑ひかただつたので、誰も腹を立てる者がなかつたばかりでなく、却つて非常に愉快になつたくらゐである。

しかしネジダーノフは突然たち上がつた。

「僕は出かけよう、」と彼は言つた。「今すぐ。しかしこの思ひつきは大變おもしろかつたね。――たゞちよつと假裝の仁輪加くさいけれど。――どうか、心配しないでくれ給へ。」と彼はソローミンの方へ向いた。「君の工場の職工には手を出さないから。少し近在をうろついて、歸つて來るよ――マリアンナ、あんたにも僕の冒險談をして聞かせるよ、但し、話すやうな種があつたらだが。ぢや、さいさきを祝つて握手しよう！」

「その前にお茶でも一杯。」とタチヤーナが口を入れた。

「いや、今ごろお茶三昧でもありますまい！　もし欲しくなつたら――料理屋へでも寄りますよ。でなければ、いきなり酒場へでも。」

タチヤーナは首をふつた。

「このごろ街道といふ街道に、料理屋の殖えた事といつたら、まるで毛皮外套にたかつた虱のやうでございますよ。村はみんな大村ばかりで――たとへばあのバルマーソヲにしても……」

「さやうなら、ご機嫌よう……ぢや、行つてめえりやす！」そろ〳〵例の町人の役割りを始めながら、ネジダ！ノフは

かう言ひ直した。けれど彼が戸口まで近よらない前に、彼のすぐ鼻先へ、バーゼルが廊下からぬつと顔を出した――そして、上から下まで螺旋狀に溝を彫つた、細く長い杖を手渡ししながら、かう口をきつた。

「さあ、これをお取り下さいまし、アレクセイ・ドミートリッチ――道中突いて行つて下さるやうに。この杖は體から離して突けば突くほど、餘計に氣持ちがよろしいので。」

ネジダーノフは無言のまゝ杖をとつて、部屋を出て行つた。バーゼルもそれに續いた。タチヤーナも同じやうに出て行かうとしたが、マリアンナは立ち上がつて、それを引きとめた。

「お待ちなさい、タチヤーナ・オシッポヴナ、わたし、あなたに用があるのよ。」

「すぐに歸つて參ります。それにサモワールも持つて來ますから。あなたのお仲間の方は、お茶も飲まずに行つておしまひなすつた――大變お急ぎだと見えて……でも、あなたなんか、何も自分で苦勞なさる事はないぢやありませんか？　ゆつくりなされば、樣子もはつきり分かる譯でございますからね。」

タチヤーナは出て行つた。ソローミンも同じく立ち上がつた。マリアンナはその方へ背を向けて立つてゐたが、その中にやつと顏をふり向けたとき（彼は恐ろしく長いあひだ、一こともロをきかなかつたのである）、彼の顏にも、自分の方へそゝがれた目の中にも、今まで見たことのない表情が浮かんでゐた。それはもの問ひたげな、落ちつきのない、ほとんど好奇の色に近い表情であつた。――彼女はまごついて、また顏を赤くした。ソローミンは自分の顏いろを相手に讀まれたのが、きまりの惡さうな樣子で、いつもより大きな聲で話しだした。

「さあ、マリアンナ……これでいよ／＼あなた方も始めた譯ですね。」

「あんな事を『始めた』なんて、ヴシーリイ・フェドートゥイチ！　あれが始めたことになるもんですか。わたし何だか急に間が惡くて仕樣がなくなりましたわ。アレクセイの言つたのは本當ですわ、全くわたし達は何かの喜劇でもやつてるやうですね。」

ソローミンはまた椅子に腰をおろした。

「いや、失禮ですが、マリアンナさん……一體あなたはその始めるといふことを、どんな風に想像しておいでなんです？　まさか防塞をこしらへて、その上に旗をたて――共和國萬歲！と喚くことぢやありますまい。それに、そんな事は女の仕事でもありませんからね。――ところが、今日

ルケリヤとか何とかいふ女に、何か一つい〻事を教へるとしませう――それはなか／＼骨の折れる仕事で、なか／＼こつちの言ふことを合點してくれないし、容易に馴染んでもくれない、おまけにこつちの教へようとする事が、まるで不必要なもの〻やうに思ふんですからね。――ところが、いま二三週間たてば、また今度は別なルケリヤと一苦勞しなければならん、その間には子供の體を洗つてやつたり、いろはを教へてやつたり、病人に藥をやつたりする……つまりかういふ事が、あなたの仕事の始まりなんですよ。」

「だつて、それは看護婦のすることぢやありませんか、ヴシーリイ・フェドートゥイチ、そんな事がわたしにとつて……何になるんでせう？」マリアンナは自分の體や、自分の身のまはりを、何やら曖昧な手つきで指さした。「わたしもつと違つたことを空想してゐましたわ。」

「あなたは自己犧牲がしたかつたのでせう？」

マリアンナの目は光りを帶びて來た。

「さう……さう……なんですの！」

「ぢや、ネジダーノフは？」

マリアンナは一方の肩を竦めた。

「ネジダーノフはどうもしませんわ！　わたしたちは一しよに進みます……もし何なら、わたし一人でも構ひませんわ。」

ソローミンはじつとマリアンナを見つめた。

「ねえ、マリアンナさん……ぶしつけな言ひかたを許して下さい……僕の考へでは、凍つたれ小僧の頭を梳かしてやることだつて、立派な自己犧牲ですよ。誰でも容易には出來ない犧牲ですよ。」

「だから、わたしもそれを厭だとは申しませんわ、ヴシーリイ・フェドートゥイチ。」

「あなたが厭だと仰しやらないのは、僕も承知してゐますよ！　さう、あなたはそれが出來るんです。だから――當分のあひだ――さういふ事をしてゐらつしやい。そのうちにまた――變はつたことも出來るでせうから。」

「でもさうするには、タチヤーナさんから習はなくちやなりませんわ！」

「結構ぢやありませんか……お習ひなさい。あなたは煤だらけの顏をして、壺を洗つたり、鷄の羽を拐つたりするんですね……そのうちに祖國を救ふやうなことも、ないとは限りませんからね！」

「あなたはわたしを冷かしてゐらつしやるのね、ヴシーリイ・フェドートゥイチ。」

ソローミンはゆつくり頭をふつた。

「おゝ、可愛いマリアンナさん、飛んでもない、僕があなたを冷かしたりなんぞするもんですか。僕の言ふことは、單純な眞實ですよ。今でもあなた方は——すべて露西亞の婦人たちは、われ〳〵男子よりもずつと實際的で、ずつと偉いんですからね。」

マリアンナは一旦おとした目を上げた。

「わたしもあなたの期待を裏切りたくないと思ひますわ、ソローミンさん……さうしたら——死んでもかまひません！」

ソローミンは立ち上がつた。

「いや、生きて下さい……生きて下さい！　それが何よりです。——ときに、あなた方の家出について、今お宅でどんな風にしてゐるか、別段知りたいと思ひませんか？　何か方法を講じちやゐないでせうか。何なら、バーゼルに一こと耳うちさへすれば——すぐにすつかり探り出してくれますよ。」

マリアンナはびつくりした。

「まあ、あの人は何て非凡な人でせう。」

「さう……かなり感心な男ですよ。——ところで、あなたがアレクセイと結婚したいとお思ひになつたら、それもあの男がゾシマと相談して取り計らつてくれるでせう……覺えておいでせう、さういふ坊さんがあるといふ事を、いつか僕が話したぢやありませんか……しかしまだ——當分——その必要はないでせう？　ないでせう？」

「ありません。」

「なければ——ないとして置きませう。」ソローミンは二つの小部屋——ネジダーノフとマリアンナの部屋——を仕切つてゐる戸口に近づいて、錠前の方へ身を屈めた。

「何を見てらつしやるの？」とマリアンナが訊ねた。

「錠がかゝるかと思つて？」

「かゝりますわ。」とマリアンナは囁いた。

ソローミンはその方へ顏を向けた。——彼女は目を上げなかつた。

「ぢや、別に探りを入れる必要はありませんね、シピャーギン夫婦がどんなつもりでゐるか？」と彼は陽氣さうに訊ねた。「そんな必要はありませんね？」

ソローミンは出て行かうとした。

「ヴシーリイ・フェドートゥイチ……」

「何ご用ですか？」

「どうか聞かして頂戴、あなたはいつも無口な方なのに、わたしにはどうしてそんなによくお話しをなさるの？　わたしそれがどんなに嬉しいか、とてもお分かりにならないでせうね？」

「なぜですつて？」ソローミンは大きなごつ〳〵した手で、彼女の小さな柔かい兩手を握つた。「なぜですつて？　それはきつと、つまり、あなたが大好きだからでせう。さやうなら。」

彼は出て行つた……マリアンナはじつと立つて、その後を見送りながら、しばらく考へてゐたが——やがて、いまだにサモワールを持つて來ない、タチヤーナの所へ出かけて行つた。そこで彼女は——もつとも、茶も飲むことは飲んだけれど——煤だらけになつて壺を洗つたり、雞の羽を拶つたりした。そればかりでなく、どこかの男の子のくしや〳〵に縺れた頭を梳いてやつた。

食事時分に、彼女は自分の住まひへ歸つて來た……ネジダーノフも餘り長く歸りを待たせなかつた。

彼は疲れて、埃だらけになつて歸つて來ると——いきなり長椅子にぶつ倒れた。彼女はすぐにその傍へ坐つた。

「え、どうだつたの？　ねえ、どうだつたの？　聞かして頂戴！」

「マリアンナ、かういふ詩を覺えてゐる？」彼は弱々しい聲でかう答へた。

かくまでに淋しからずば、

人はをかしと思ふらん……

「覺えてる？」

「そりや覺えてるわ。」

「つまりこの詩か、僕の第一回の遠征に、丁度ぴつたりあて嵌まるんだ。——いや、違ふ。全くのところ、滑稽な分子の方が多かつたよ。第一段として、僕は芝居をするくらゐ樂なことはないと思ひ込んぢまつた。ところが、たゞ一つ、あらかじめ思ひ及ばないことがあつたよ。ほかでもない、前もつて何か身の上話しを拵へて置かなければいけなかつたんだ……だつて、どこから來た？何しに來た？と訊かれたとき、何も用意が出來てゐないんだからな。もつとも、そんな事はほとんど必要がなかつた。たゞ酒場へ行つて、ヲートカの一合も振る舞つた上——勝手な出たらめを言へばいゝのさ。」

「で、あんた……出たらめ言つたの？」とマリアンナが訊ねた。

「言つた……出來る限りはね。——第二段として、僕の當たつてみた人間は、みんな、それこそみんな不平を抱いてゐる。しかも、どうしたらこの不平を除く事が出來るか、それは誰一人知らうとさへしないんだからね！　しかしプロパガンダにかけたら、僕はからつきし駄目だつてことが

分かつたよ。小冊子をやつと二冊、こつそり部屋の中へ置いて來たのと――一冊荷車の中へ突つ込んで來たのと、ただそれつきりだ……それがどういふ事になるやら――たゞ神のみぞ知ろしめすだ！ 四人の男に小冊子をすゝめたが、一人は――これ神さまのこと書いた本かね？と訊いて、結局うけ取らなかつたし、一人は、讀み書きを知らないけれど、子供に持つて歸つてやらうと言つた――表紙に繪が描いてあつたもんだからね。いま一人は初めの間『なーる、なーる』と合ひ槌を打つてゐたが、だしぬけに思ひがけなく、しとに惡口を浴びせかけて、これもやはり受け取らなかつた。四人目のはたうとう受け取つて、一生懸命お禮を言つてたが、僕の話した事はからつきし分からなかつたらしい。おまけに一匹の犬はしとの足を咬むし、ひとりの女房は自分の家の闖ぎはから、火搔きをふり上げて脅かしながら、『ちよ、この囚人め！ 莫斯科のごろつきめ！ 手前のやうな奴はくたばつちまへ！』と言ふし、それからひとり無期休暇で歸つてゐる兵隊が、僕の後ろから、『やい、待て！ 一つ手前をぎう〳〵いふ目に合はしてやるから！』と呶鳴るぢやないか。しかも、人の金でたらふく飲んだ奴なんだよ。」

「それからどうして？」

「それからどうしたかつて？――僕は足にまめを拵へちやつたよ。一方の長靴が恐ろしく大きくつてね。いま僕は腹がへつてたまらないんだ――それにヲートカのお蔭で、頭はがん〳〵いふし。」

「あんた澤山のんだの？」

「いや、ほんの少し――飲む眞似をしたゞけさ。しかし何しろ酒場へ五軒はいつたんだからね。だが、僕はあんな忌忌しいものに――ヲートカなんてものに、とても我慢が出來ない。どうして百姓たちはあんなものを飲むのか、實に不可解だね！ いはゆる裸一貫になるために、ヲートカを飲まなくちやならないんなら――まつ平ご免蒙るよ！」

「それぢや、誰もあんたを疑ぐる者はなかつたの？」

「誰もなかつた。たゞ一軒の酒場に、白い眼をした青ぶくれの亭主がゐたが、こいつが僕を胡散くささうに見た、たつた一人の人間なんだ。この男が自分の女房に向いて、『お前あの赤つ毛の……やぶ睨み野郎に氣をつけるだぞ。』と言ふのが聞こえるぢやないか。（僕は自分がやぶ睨みだといふことを、その時まで夢にも知らなかつたよ）。『あれはこそ〳〵だよ。見ろ、あのひねくつた飲み方を！』と來やがつた。この場合『ひねくつた』といふのはどういふ意味か――僕にも分からなかつたが、しかし恐らく褒める言葉ぢやなささうだ。まあ、ゴーゴリの謂はゆる下品くらゐのところだらう――ね、覺えてるだらう、『檢察官』の中にあるぢやないか。それとも、僕がヲートカを卓の下へそつと落とさうとした、それを言つたのかも知れない。あゝ、骨が折れる、唯美派が現實生活に接觸するのは、實に骨が折れるよ！」

「この次には、も少しうまく行つてよ。」とマリアンナはネジダーノフを慰めた。「でも、あなたがご自分の初めての試みに對して、さういふユーモアに富んだ見方をなさるので、わたしも嬉しいわ……だつて、本當はさうくさ〳〵してる譯でもないでせう？」

「いや、くさ〳〵なんかしやしない。面白かつたくらゐだよ。しかし今度この事をすつかり考へてみたら、きつといやあな、淋しい氣持ちがするだらう、それは確かに分かつてゐる。」

「いゝえ、いゝえ！ わたし考へさせやしないわ――自分のした事を話して聞かせてあげるわ。今にすぐご飯が來るでせう。ときに、わたしはタチヤーナが野菜汁を煮た壺を……そりや上手に洗つてよ。わたしすつかりあんたにお話しするわ……すつかり、一つ殘さず。」

彼女は言つた通りを實行した。ネジダーノフはその話しを聞きながら、いつまでもいつまでも彼女の顏を見つめてゐた……で、彼女は幾度か言葉を止めて、なぜそんなに人の顏を見るのかと訊ねたが……彼は返事をしなかつた。

食後、彼女はシュピールハーゲンのものを讀んで聞かせると言ひだした。けれど、まだ一頁と讀まないうちに、彼は急にぱつと飛び上がつて――彼女の傍へ近よると、その足もとに身を投げた。彼女は思はず立ち上がつた。彼は兩手でその膝を抱きしめながら――熱烈な、しどろもどろな、自暴自棄の言葉を吐きはじめた！「僕は死にたいんだ、間もなく死ぬつてことが分かつてゐるんだ……」彼女は身動きもしなければ、手向かひもしなかつた。男のもの狂はしい抱擁に、落ちつき拂つて身を任せながら、やはり落ちつき拂つて、ほとんど劬はるやうに、上からじつと見おろしてゐた。――彼女は、自分の着物の襞の間でのた打ち廻る男の頭へ、靜かに兩手を載せた。けれど、この落ちつき拂つた態度は彼にとつて、突きのけられたよりもつと激しい效果を現した。彼は立ち上がつて、かう言つた。

「堪忍しておくれ、マリアンナ、昨日のことも今日のこともね。たゞ僕があんたの愛に價するやうになるまで、いつまでも待つてゐると、もう一度いつておくれ――そして僕を許しておくれ。」

「わたし、あんたに誓つたんですもの……言葉をたがへるやうな事は決してありません。」

「いや、有り難う、お休み。」

ネジダーノフは出て行つた。マリアンナは自分の部屋の中へ引き籠つた。

三〇

二週間の後、ネジダーノフはやはり同じこの住まひで、一本の蠟燭が貧しくぼんやり點つてゐる、例の三脚机にこごみかゝつて、親友のシーリンに次のやうな手紙を書いてゐた。(もうとうに夜半は過きてゐた。長椅子から床の上へかけて、急いで脱ぎ棄てられた泥だらけの着物が、雜然と投げ出してあつた。小やみのないこまかい雨が、窓の硝子を打つて——幅のある暖かい風が、大きな溜め息のやうに屋根の上を走つてゐた)。

「親愛なるヴラヂーミル、僕はわざと住所を入れないで、君にこの手紙を呈する。そればかりか、この手紙は、わざわざ遠い郵便局まで、使ひの者に持たしてやるのだ。なぜといつて、僕がこゝにゐるのは祕密だからだ。この祕密を打ち明けることは、つまり破滅を意味するのだ。しかも僕ひとりきりではない。たゞ僕がもう二週間ばかり、マリアンナと一しよに、大きな工場で暮らしてゐるといふ事だけ知れば、君はもうそれで澤山なのだ。僕ら二人は、君にこの前の手紙を書いた當日、シピャーギン家から逃げ出した。こゝへ僕らを匿まつてくれたのは、ある一人の友人だが、それを假りにヴシーリイと呼ぶこととしよう。それはここの主腦者で——この上ない立派な人物だ。僕らがこの工場に滯在するのはほんの一ときだ。ただ活動の時機が到來するまで、かうしてゐるつもりだ。もつとも、今までの狀況から判斷すると——その時期はいつ到來するやら、覺束ないものだ! ヴラヂーミル、僕は實に、實に苦しい。まづ第一に言はなければならないが、僕はマリアンナと一しよに家出はしたものゝ——しかし僕ら二人は、今に至るまで——兄妹のやうな暮らしをしてゐるのだ。彼女は僕を愛してゐる……そして、もし僕自身……それを要求する權利があると自覺したら、僕のものになると言つた。

「ところが、ヴラヂーミル、僕はその權利が得られさうもないやうな氣がする! 彼女は僕を信じてゐる。僕の潔白さを信じてゐる——だから、僕は彼女を欺くわけに行かないのだ。僕は彼女以外に誰も愛したことがない、また今後も愛しさうにない——(それこそ、もう間違ひなく分かつてゐる!) しかし、それにしても! 永久に彼女の運命を

自分に結びつけることが、どうして僕に出來よう! 生きた人間を屍に結びつけることが、どうして出來ようぞ! いや、屍ぢやない——半分死にかゝつた人間なのだ! 一體そんなことをして、良心があると言へるだらうか? 君はこれに對して、熱烈な愛情さへあれば、良心なんか沈默してしまふ、とかう言ふだらう。ところが問題はそこなのだ——僕は屍だ。もし何なら、正直な、心がけのいゝ屍だと言つてもいゝ。後生だから、それはいつもの僕の誇張癖だ、などと呶鳴らないでくれ給へ……僕の言つてることはみんな本當なのだ! 本當なのだ! マリアンナは非常に辛抱づよい性質で——今でも自分の信じきつてゐる活動に、全心を呑み盡くされてゐる…… ところが僕は!

「しかし——戀愛や、個人的幸福や——一切さう言つたやうなものはやめにしよう。これでもう二週間といふもの、僕は『民衆の中へ』はいつてゐるが、實際のところ、これ以上ばか〳〵しい事は、君も想像が出來ないだらう。無論罪は僕にあるので、事業そのものゝせゐぢやない。まあ、僕は汎スラヴ主義者ぢやないつもりだから、民衆によつて——民衆との接觸によつて、自己治療をやるやうなことはしない。まるでフランネルの腹卷きか何ぞのやうに、自分の痛い腹へ民衆を當てたりなんかしない……僕は自分の方から民衆に働きかけたいのだ——しかし、どんなにして? どんな風にそれを實行したらいゝのだ? 實地に當たつてみると、僕は民衆の中へはいつた時、たゞ彼らの內面へ潛入して、一生懸命に耳を傾けるばかりで、いざ自分で何か言はなければならないはめになると——まるで二進も三進も行かないのだ! 自分ながら、これぢや駄目だと感じるよ。まるで、大根役者が人の役をやつてゐるやうなものさ。おまけに、餘計な所へ良心の苛責や、スケプチズムが顏を出す——その上、かてゝ加へて、何だかやくざなユーモアを、自分自身に向けたくなるぢやないか……そんな事は實際びた錢一文の價値もありやしない! 思ひ出すのも胸が惡い——現に自分の着てゐるぼろ着物を見ても胸が惡い——全くヴシーリイの言ひ草ぢやないか、假裝舞踏會だ! みんなの說によると、まづ初め民衆の言葉を習ひ覺えて、その風俗や性情を知らなけりやならないさうだが……そんな事は出たらめだ! 出たらめだ! 出たらめだ! それより、自分の言ふことを、信じなくちやならない——さうすれば、自分のすきな事が言へる! 僕は、ある分裂派の豫言者の說敎みたいなものを、幾度も聞いたことがあるが、その男の並べ立てる囈語といつたら、何が何だか譯が分かりやしない。敎會語と、文章語と 俗語のごつた

交ぜで――おまけに露西亞語ぢやなくて、妙な小露西亞語か何かなのだ……『汝』と言ふところを『なんづ』と言つたり、『石』を『えす』と言つたりして、全體に『い』を『え』に發音するのだ。そして『みたま降りたまえぬ……みたま降りたまえぬ……』と、まるで山鷄のやうに、のべつ同じ事ばかり繰り返してゐるのだ。しかしその代はり、目はらん〳〵と燃え、しつかりした聲は陰に籠つて、兩の拳は握りしめられ――全體に鐵ででも出來てるやうに思はれる！　聽き手は一向わけが分からない癖に、神樣のやうに崇め奉つて、その後からついて行くのだ！　ところが、僕は口を開くが早いか、まるで自分が惡いことをして、赦しでも乞うてゐるやうな具合ひなんだ。いつそ分裂派教徒の仲間にでもはいらうか知らん――本當だよ。彼らの教義は別に大したものぢやない……しかし、どこから信仰を得よう、信仰を！　マリアンナは信仰を持つてゐる。朝から働き通して、タチヤーナと二人で急がしさうにしてゐる――こゝにさういふ女房が一人ゐるが、親切で利口な女だ。ついでに言つて置くが、この女房が僕らのことを、裸一貫になりたがつてゐると評して、僕らを裸一貫になつた人と呼んでゐる。――そこで、マリアンナはこの女房と一緒に、まめ〳〵しく動きまはつて、一分間もじつとしてはゐない――まるで蟻だ！　手が赤くなつて、がさ〳〵して來たのを喜んでゐる。そして今にも必要が生じて、絞首臺へ上るのを待つてゐるのだ！　いや、絞首臺どころか！　彼女は靴さへ脱いで了はうとした事がある。いつだつたか跣で出かけて、跣で歸つて來たものだが、その後で長いあひだ、足を洗つてゐるらしい氣配がした。それに見れば、用心ぶかさうにそつと足を運んでゐる――馴れないものだから痛いのだ。しかし、その顏はいかにも嬉しさうに晴れ〳〵として、まるで太陽に照らされたやうな具合ひなのだ、寶ものでも搜し當てたやうな樣子なのだ。いや――マリアンナは偉い！　あゝ、僕は彼女に自分の感情なんか言ひだすと――第一、妙に氣恥づかしくなつて來る、まるで、他人のものに手をかけるやうな氣持ちなんだ。第二に、あの目つき……おゝ、あの少しも抵抗の色のない、信頼しきつたやうな、しかも恐ろしい目つき……『勝手にわたしをお取りなさい……だけど、覺えてらつしやい！……それに、こんなことが何になるんでせう？　一體この世にはもつと立派な、もつと高尚な事がないんでせうか？』つまり言葉を換へて言へば、あの臭い長上衣を着て、民衆の中へいらつしやい……と言つたやうな目つきなんだ。そこで、僕はその民衆の中へ出かけて行く……

「あゝ、そのとき僕は自分の神經質や、敏感さや、感受性や、乃至氣難かしさを、どんなに呪ふか分からない――こんなものはすべて貴族的な親父の遺傳なのだ！　僕の暮らすべき周圍に不適當な生理機關を與へて置きながら、いきなりこの人生へ僕を突き出すなんて、そんな權利が親父にあつたのだらうか？　鳥を孵して、それを水の中へ突つ込んでいゝものだらうか？　唯美派をぬかるみの中へ突つ込むのも、それと同じ理窟だ！　何しろあの忌々しいヲートカ――いはゆる『青い酒』の匂ひを嗅いだだけで、むか〳〵して吐きさうになるやうな、さういふ民衆派なんだからね、デモクラートなんだからね！……

「たうとう大變な事まで言つて了つた。現在の父親を呪ふなんて！　デモクラートになつたのも僕自身の意志で、親父には何の關係もないのぢやないか。

「あゝ、ヴラヂーミル、僕は苦しい、何だか厭な灰色の想念が、僕を訪れるやうになつた！　かう言へば、君は問ひ返すだらう――一體この二週間の間に何か一つでも、喜ばしい出來ごとにぶつ突かからなかつたのか？　たとへ教育はなくつても、善良な生き〳〵した人間に出會はなかつたのか？――かう訊かれた時、何と返事をしたらいゝだらう？　僕は一度さういつた風なものに出會つたことがある……それは非常に立派な人間で――元氣な氣持ちのいゝ若者だつた――しかし、どんなに僕が苦心しても、僕の小册子も、僕自身も、この男には何の用もないのだ――それつきりなのだ！　この工場にパーゼルといふ男がゐる（これはヴシーリイの片腕で、非常にかしこい、非常に狡猾な男で、將來『首腦』となる男だ……この男のことはもう君に知らせた筈だね）、この男に一人友達がある。名をエリザールといふ百姓だが……やはり明晰な頭腦と、何ものにも束縛されない、自由な不羈な魂の所有者なのだ。ところが、僕がこの男に接觸すると――まるで二人の間には高い塀でも突つ立つたやうな具合ひなのだ！　たゞもう『獸目だ！』といつたやうな顏つきをしてゐる。それから、またこんな男にもぶつ突かつた……もつとも、これは怒りつぽい方の仲間で、『もう旦那、くど〳〵曖昧なことを言はねえで、まつすぐに言つて聞かせなせえ――一體お前さんは、有りつたけの土地をよこしなさるのか、どうだね？』そこで僕は『お前、何を言ふのだ、僕が旦那でたまるものかね？』と答へた（そのとき僕は『飛んでもないこつた！』と附け足したやうな氣がする）すると『もしお前がおれ達の仲間なら、お前なんかと話しをしたつて仕樣がありやしねえ。もうおれに構はねえでくれ、後生だから！』と言ふぢやないか。

「それから、またかういふ事がある。それは僕の觀察なんだが、あんまり素直に僕の話しを聞いて、早速小冊子でも受け取るやうな奴だつたら、それはつまり仕樣のないお先つ走りなんだ。時によると、いはゆる『教育』のある、辯口の達者な奴に出くわすこともあるが、こんなのは何か一つ、氣に入つた言葉を繰り返すより藝のない男なんだ。中に一人すつかり僕を惱ました奴がゐる。この男は何でもかでも『產物』なんだ！　何を言つて聞かしても、先生『つまりさういふ產物なんだね！』と來る。くそ忌々しいつたらありやしない！　ついでに、もう一つの觀察を述べて置かう……君も覺えてゐるだらうが、いつだつたか――ずつと前に『無用人』論だの、ハムレット論だのが盛んだつたものぢやないか。ところがどうだらう、さういふ『無用人』が、いま百姓の間にも現れて來たんだよ！　無論、特別なニュアンスを帶びてゐて……おまけに大抵は結核性の體質なんだ。ちよつと面白いタイプで、われ／＼の方へも喜んでやつて來るが、やはり昔のハムレットと同じで、實行には不適當なのだ。あゝ、一體どうしたらいゝのだらう？　祕密出版社でも作れと言ふのか？　しかし小冊子なら、そんな事をするまでもなく、『十字を切つて斧を取れ』と勸めるのや、單に『斧をとれ』と說いてゐるやうな本が、今でもいゝ加減多すぎるくらゐだ。それでは、塡めもの澤山の農民小說でも作つたものだらうか？　おそらく印刷してはくれまい。それとも本當に思ひ切つて斧でも取るか？……しかし、誰に向かつて、誰と一しよに、何のために進むのだらう？　お上の兵隊にお上の鐵砲で、どゞんとやられるためなのだらうか？　それぢやまるで手の込んだ自殺みたいなものだ！　それよりいつそ、自分で自分を片づけた方がましだ。少くとも、いつどんな風に死ぬかといふ事が分かるし――それにどこへ穴を明けるか、自分で場所を選ぶことか出來るからね。

「全くのところ、今どこかで國民戰爭でも持ち上がつたら、僕は早速そこへ出かけて行きさうな氣がする。しかし、それはよその人間を自由にするためではない（自分の國の人民さへ自由でないのに、よその國民を自由にするなんて！）――たゞ自分を片づけるためなんだ……

「僕らをこゝへ匿まつてくれた友人のヴシーリイは、仕合はせな人間だ。彼は僕らの陣營に屬してゐるが――何だか妙に落ちついてゐるのだ。この男は決して急がない。これがもし他の人間なら、うんとやつゝけてやるのだけれど……この男に向いてはそれが出來ない。今にして思へば、本質的なものは信念にあるのではなくて、性格の中に存するのだ。ヴシーリイは側から突つ掛つて行けないやうな性格なのだ。そこで、彼は正しいといふ事になるのだ。彼はしじう僕たちと一しよに――マリアンナと一しよに話しをする。ところが、不思議なことには、僕も彼女を愛してゐるし、彼女も僕を愛してゐるが（この句を讀む時、君はにたりと笑ふだらう、それは分かつてゐるが――しかし全くのところ、さうなのだ！）けれども、僕と彼女とは殆ど話しがないのだ。しかも、ソローミンに對した時には　彼女は議論もすれば說明もする、そして先方の言ふことにも耳を傾けてゐる。僕は別に嫉妬なんかしやしない。それに彼もマリアンナをどこかへ移さうとしてゐる――少くとも彼女の方で、それを懇望してゐるのだ。けれど、二人を見てゐると、僕は苦い心持ちになる。しかし、君はどう思ふ？　もし僕が一ことでも結婚のことを言ひ出せば、彼女はすぐに承諾して――ゾシマ長老が舞臺に現れ、『イザヤに喜びあれ！』云々と、すべて型どほりに行はれる筈だ。たゞ、そんな事をしたところで、僕の氣持ちは輕くならない――狀況は少しも變化しないだらうからね……どんなにしても逃げ道はない！　ねえ、ヴラヂーミル、君も覺えてゐるだらう、以前しり合ひだつた呑んだくれの仕立て屋が、女房の讒訴をする度に言つた言葉だが、憂き世がおれを裁ち損なつたのだ！

「もつとも、こんな事は長く續きさうもないと思ふ。何かあるものが準備されてゐるやうな氣がする……

「一たい僕が自分で『着手』の必要を證明もすれば、それを要求したのではないか？　ところが　僕らは今かういふ風に『着手』しかけてゐるのだ。

「よくは覺えてゐないが、いまひとり僕の友人で、シピャーギン家の親戚に當たる、色の黑い男のことを君に知らせてやつたかしらん？　恐らくこの男なら、手もつけられないやうな大騷動を始めるだらう。

「もうとつくにこの手紙はお了ひにしたかつたんだが――どうも困つたもので、幾ら我慢してみても――やはり詩をひねくりたくなる。マリアンナには決して讀んで聞かせないんだ――あれは詩なんかに對して容赦しないからね。ところが君は……どうかすると褒めてくれることもある。それに何より有り難いのは、決して誰にも喋らないといふことだ。僕は露西亞全體に共通な一つの現象に、驚愕を感じたのだ……まあ、とにかく、その詩をご覽に入れよう。

眠り

わたしは久しい前から、生まれ故郷にゐなかつた……

けれども別に、目だつて變はつたこともない。
たゞ依然たる、死のやうに無意味な沈滯、
屋根は落ち、壁は崩れた家や建てもの、
依然たる泥濘、惡臭、貧窮、そして憂愁！
ときに不遜な、ときに卑屈な、奴隷の眼ざし……
わが民衆は自由になつた。しかしその自由な腕が、
枯れた柳の枝のやうに、ぐたりと力なく垂れてゐる。
何もかも昔のまゝだ……たゞ一つ歐羅巴にも、
亞細亞にも、全世界にも、打ち勝つてゐることがある
……
悲しいかな！　わが愛すべき同胞は曾て知らない、
恐ろしい眠りに落ちてゐるのだ！
あたりのものはすべて寢てゐる。村でも、町でも、
車の上でも、橇の上でも、晝でも夜でも、或ひは立ち
つ、或ひは坐しつ……
商人も官吏も眠り、歩哨の兵も眠つてゐる、
雪空の寒さの日にも——燒くやうな苦熱の日にも！
被告も眠り——法官も鮮をたてゝゐる、
百姓たちも死人のやうに眠つてゐる、刈り入れながら、
耕しながら——眠つてゐる。
刈り束を打ちながら、彼等はやはり眠つてゐる。

父も眠れば母も眠り、家ぢうこぞつて眠つてゐる……
みんな寢てゐる！　打つものも寢、打たれるものも眠
つてゐる！
たゞ皇帝の居酒屋だけは、かつてその目を寒がない。
五本の指で酒壜を握りしめつゝ、
額を極に、踵を高架索につけながら、
醒めざる夢を貪つてゐる、あゝ、わが祖國、聖なる露
西亞！

「どうか許してくれ、僕はこんな佗びしい手紙を君に送る
つもりぢやなかつたのだ。せめて最後だけでも、君の笑ふ
やうなことで結びたかつたのだ（君はきつと無理なリズム
に氣がついたらう。たとへば『貧窮——憂愁……』などゝ
いつた類ひだ！）この次に手紙を書くのはいつだらう？
それにまた書くをりがあるだらうか？　たとへ僕の身にど
んな事が起こるとしても、君は僕を忘れないものと信じて
ゐる——

君の信實なる友　A・N

「P・S——さうだ、わが國の民衆は眠つてゐる……しかし
僕は何だかこんな氣がする、もし何かゞ彼らの目を醒まし
たら——その時は僕らが考へてゐるのとは、まるで違つた

結果が生じるだらう……」
最後の一行を書き終ると、ネジダーノフはペンを投げて
——獨りごちた。「さあ、へぼ詩人、これから早く寢てしま
つて、こんな世迷ひごとを忘れるやうにしろ！」彼は牀の
上へ身を横たへた……しかし、眠りは長いあひだ彼の瞼を
避けたのである。
翌朝、マリアンナがタチヤーナのところへ行く途中、部
屋を横ぎりながら、彼の目を醒ました。けれど彼が、やつ
と着換へを濟ますか濟まさないかに、彼女はもうひつ返し
て來た。その顏は歡喜と不安を現してゐた。彼女は興奮し
てゐるらしかつた。
「まあ、どうでせう、アリョーシャ、T……郡ではもう始ま
つたつて話しよ——こゝからすぐなんだつて！」
「え？　何が始まつたの？　誰がそんなことを言つたの？」
「パーゼルなの。何でも百姓たちが一揆を起こしたんだつ
て——稅を納めないとか言つて、大勢あつまつてるんだと
かいふことよ。」
「それは自分で聞いたの？」
「わたしタチヤーナから聞いたの。——あゝ、そこにパー
ゼルが來たわ。あの人に訊いてご覽なさい。」
パーゼルがはいつて來て、マリアンナの言つたことを裏
書きした。
「T……郡で騷いでゐるつてことは——そりや本當です
よ！」顧髯を震はして輝かしい黑い目を細めながら、彼は
かう言つた。「きつとセルゲイ・ミハイロヴィッチの仕事でご
ざいませう。もうかれこれ五日も家にゐらつしやらないん
ですからね。」
ネジダーノフは帽子に手をかけた。
「どこへ行くの？」とマリアンナが訊ねた。
「つまり……そこへ行くのだ。」目を上げないで眉を寄せ
たまゝ、彼はかう答へた。「T……郡へ。」
「ぢや、わたしも一しよに行くわ。あんた連れてつてくれ
るでせう？　たゞ大きい方の頭巾を被る間だけ、待つて頂
戴。」
「それは女のする事ぢやないよ。」依然として下の方を見
つめたまゝ、ネジダーノフは腹でも立てゝゐるやうに、陰
鬱な調子で言つた。
「いゝえ……いゝえ！……あんたが出かけていらつしやる
のはいゝ事だわ。でないと、マルケーロフがあんたのこと
を、臆病ものだと思ふかも知れないから……だから、わた
しも一しよについて行くの。」
「僕は臆病ものぢやないよ。」やはり陰鬱な調子で、ネジダ

ーノフはかう言つた

「いえ、わたしはね、あの人がわたしたち二人を臆病もの扱ひにするだらうつて、さう言ふつもりだつたのよ。わたしも一しよに行くわ。」

マリアンナは頭巾を取りに自分の部屋へはいつた。パーエルはそつと口の中で、まるで息でも吸ひ込むやうな具合ひに、「えーえ！」と言つて、すぐに姿を消してしまつた。ソローミンの所へ知らせに駈け出したのである。

マリアンナがまだ姿を現さないうちに、もうソローミンはネジダーノフの部屋へはいつて來た、ネジダーノフは、窓硝子に手をあてゝ、その上へ額を載せたまゝ、外の方を向きながら立つてゐた。ソローミンはその肩に觸つた。彼は急にふり返つた。髪をふり亂して、顏も洗つてゐないネジダーノフは、奇怪な氣うとい樣子をしてゐた。もつとも、ソローミンも最近すこし變はつて來た。顏が黃ばんで長くなつて、上の齒が少しのぞいてゐた……彼も同樣に不安な表情をしてゐたが、それは彼の『バランスのとれた』魂が、不安を感じ得る範圍内のことであつた。

「マルケーロフは、たうとう我慢が出來なくなつたと見える。」と彼は口をきつた。「これは碌なことにならないかも知れない。第一——彼自身に取つて……それから、またほかの者に取つてもね。」

「僕どんな樣子か行つて見ようと思つて……」とネジダーノフが言ひだした。

「そして、わたしも。」閾の上に姿を現したマリアンナが、かう言ひ足した。

ソローミンはゆつくりとその方へ振り向いた。

「あなたにはやめて貰ひたいですね、マリアンナ。——あなたは自分で自分を賣した上、われ〳〵一同まで賣すやうになるかも知れません——しかも、何の必要もなく、無意識にやるんですよ。まあ、ネジダーノフ君が行きたいと言ふなら、一人で出かけて行つて、少し匂ひでも嗅がしたらいゝでせう……それもほんの少しですがね！　ところで、あなたなんか何しに行くんです？」

「わたし、あの人に遲れたくないんですの。」

「あなたは足手まとひになるばかりです。」

マリアンナはちらとネジダーノフを見やつた。彼は石のやうな氣難かしい顏つきで、じつと立つてゐた。

「でも、もし危險があつたら？」と彼女は訊いた。

ソローミンは微笑した。

「ご心配はいりません……もし危險があつたら、僕はあなたを出して上げますよ。」

マリアンナは無言のまゝ頭巾をとつて、腰をおろした。

その時ソローミンは、ネジダーノフに話しかけた。

「ぢや、君、本當にちよつと見て來ないか。事によつたら、噂が大仰なのかも知れない。——たゞお願ひだから、愼重にやつてくれ給へ。もつとも、案内のものはつけてやるがね。なるべく、早く歸つて來たまへ。君、約束してくれるね？　ネジダーノフ君？　約束してくれるね？」

「あゝ。」

「いゝかね——きつとだね？」

「こゝにゐる者がみんな、マリアンナをはじめとして、誰も彼も君の命令に從ふならばだ。」

ネジダーノフは別れも告げずに、ぷいと廊下へ出てしまつた。パーエルが闇の中からぬつと出て、鋲を打つた長靴の裏をかた〳〵鳴らしながら、階段づたひに先へ立つて駈けだした。彼がネジダーノフの案内を引き受けてゐたのである。

ソローミンはマリアンナの傍へ腰をおろした。

「あなたはネジダーノフ君が一番しまひに言つたことを聞きましたか？」

「えゝ、わたしがあの人よりも、あなたの言ふことを餘計きくので、それが忌々しいんでせう。それは全くなんですの。わたしあの人を愛してはゐますけれど、それでもあなたの方に從ひますわ。あの人はわたしに取つて大切な人です……だけど、あなたは近しい方なんですもの。」

ソローミンは用心ぶかく彼女の手を撫でた。

「今度の事件は……實に不愉快ですね。」たうとう彼はかう口をきつた。「もしマルケーロフがかゝり合つてゐたら——あの男はもう破滅です。」

マリアンナは身慄ひした。

「破滅ですつて？」

「さうです——あの男は決して中途半端なこともしないし、それに他人の後ろに隱れるやうな眞似もしませんからね。」

「破滅！」とマリアンナはまた呟いた——と、涙がその頰を傳つて流れはじめた。「あゝ、ヴシーリイ・フェドートゥイチ！　わたし、あの方が可哀さうですわ。でも、なぜあの方は最後の勝利を得られないんでせう？　なぜ必ず破滅しなければならないんですの？」

「ほかでもありません、マリアンナ、かういふ仕事では、いつも第一線に立つ人間が破滅するのです、たとへ成功した場合でも……ところが、あの男の企てたやうな仕事では、單に第一線第二線の人達ばかりでなく、第十……第二十の

戰線に立つ者まで破滅するでせうよ……」
「ぢや、わたし達も最後まで待ちおほすことが出來ないんでせうか？」
「あなたの考へてゐられる事ですか？　決して。われ〳〵は自分の目では――この生きた目では、それを見るわけに行きません。しかし精神的の目といふことになれば――それは別問題です。いま、すぐにでも眺めることが出來ますよ。これには何の制限もありませんからね。」
「ぢや、ソローミンさん、なぜあなたは……」
「何です？」
「なぜあなたは、こんな道を通つてゐらつしやるんですの？」
「ほかに道がないからです。といつて、つまり目的といふ點から見れば、僕もマルケーロフも一しよですが――たゞ道が違ふんです。」
「可哀さうなセルゲイ・ミハイロヰッチ！」とマリアンナは萎れた聲で言つた。ソローミンはまた用心ぶかく彼女の手を撫でた。
「もう――澤山ですよ。まだ何一つはつきり分からないんですからね。バーエルがどんな知らせを持つて來るか、それを見てみませうよ。――われ〳〵の……身分では、しつかりしてゐることが肝腎です。英國人は『死を語るな』と言ひますが――いゝ諺ですね。『災難が來たら門を開けろ！』といふ露西亞の俚諺よりいゝですね。何も前から泣いて待つことはないですからね。」
ソローミンは椅子から身を持ち上げた。
「あのわたしに世話してやらうと仰しやつた勤め口は？」
不意にマリアンナがかう訊いた。――その頬にはまだ涙が光つてゐたが、目にはもう悲しみの色がなかつた。
ソローミンはまた腰をおろした。
「一體あなたは、そんなに急いでこゝを出たいんですか？」
「まあ、そんな事はありませんわ！　でも、わたし早く役にたつ人間になりたいと思つて。」
「マリアンナ、あなたはこゝにゐても、ずゐぶん役に立ちますよ。僕らを捨てゝ行かないで下さい、も少し待つて下さい。――あなた何ですか？」その時はいつて來たタチヤーナに向かつて、ソローミンはかう訊いた（こゝで彼がお前言葉をつかふ人間は、バーエルばかりであつた――それも急にソローミンから、『あなた』などと言ひ出されたら、バーエルが恐ろしく悲觀するに違ひないからである）。
「えゝ、何ですか妙な女の方が見えて、アレクセイ・ドミートリッチに會ひたいと言つてをられます。」兩手を擴げて笑

ひを浮かべながら、タチヤーナはかう答へた。「こゝにそんな方はゐらつしやいません、まるでそんな方はゐらつしやいません、とわたしはかう申したんでございます――そんな人は一たい誰だか、わたくしどもはてんで存じません、とかう言ひましたところ、その仁が……」
「一たい誰だね――その仁とは？」
「つまり、その女の人でございますよ。――その仁がいきなり自分の名前を、それこの紙に書いて、これをお見せしてくれ、さうすれば通して下さるに相違ない、もし本當にアレクセイ・ドミートリッチがお留守なら、少し待つても構はない、とかう言ふのでございますよ。」
紙きれには大きな字で、マシューリナと書いてあつた。
「お通しして下さい。」とソローミンは言つた。「マリアンナ、その人がこゝへはいつても、あなたは別にさし支へないでせうね？　やはりわれ〳〵の仲間だから。」
「えゝえ、ちつとも、どういたしまして。」
やがて間もなく、マシューリナの姿が閾の上に現れた――この物語りの第一章で見たのとすつかり同じ服裝で。

三一

「ネジダーノフさんは留守ですか？」と彼女は訊いた。それからソローミンが目に入ると、つか〳〵とその傍へよつて手をさし伸べた。「しばらくでした、ソローミンさん！」マリアンナの方はたゞ横目に睨んだばかりであつた。
「すぐに歸りますよ。」とソローミンは答へた。「しかし、失禮ですが、誰からお聞きになりました……」
「マルケーロフさんから。――もつとも、この事はもう町でも……二三の人に知れてをりますが。」
「本當に？」
「えゝ、誰か喋つたんですわ。――それに人の噂では、ネジダーノフさんも變裝を見拔かれたさうです。」
「だから、假裝會の眞似は駄目だと言つたんだ！」とソローミンは呟いた。
「ご紹介しませう。」と彼は聲を高めて言ひ足した。「シネーツカヤさん、マシューリナさん！――お坐んなさい。」
マシューリナは輕くうなづいて腰をおろした。
「わたし、ネジダーノフさんに手紙をことづかつて來ました。それにソローミンさん、あなたには傳言を頼まれました。」
「どんな傳言を？　誰から？」
「あなたのご存じの人です……いかゞです、あなたの方は……準備は出來ましたか？」

「準備なんか、なんにも出來てやしません。」
マシューリナはその小さな目を、出來るだけ大きく見開いた。
「なんにも？」
「なんにも！」
「ぢや本當になんにも？」
「本當になんにも。」
「その通り言つていゝんですの？」
「その通り言つて下さい。」
マシューリナはちよつと考へて、衣嚢から卷き煙草をとり出した。
「火は――拜借できますか？」
「さあ、燐寸があります。」
マシューリナは煙草をふかし始めた。
「あの人達はもつと違つたご返事を期待してゐました。」と彼女は口をきつた。「それに周圍の樣子も――あなたの所みたいぢやありません。もつとも、それはあなた自身の問題ですけど。わたしがこちらへ來たのは、長く逗留するためぢやありません。たゞちよつとネジダーノフさんに會つて手紙を渡すだけですの。」
「一體どこへお出かけですか？」

「こゝから遠い所です。」本當のことを言ふと、彼女はジェネヴへ出發することになつてゐたのだけれど、それをソローミンに打ち明けたくなかつたのである。彼女はソローミンが餘り當てにならないやうな氣がした上、傍に『よその女』が坐つてゐたからである。獨逸語もろくすつぽ知らないマシューリナを、ジェネヴへ派遣することにしたのは、そこで彼女の知らないある人に、葡萄の蔓を描いたボール紙のきれを半分と、二百七十九留の金を手渡しするためであつた）。
「ときに、オストロドゥーモフはどこにゐます？　あなたも一しよですか？」
「いゝえ？　あの人はすぐこの近所で……ぐづ〳〵してゐます。でも、あの人は打てばすぐ響く人です。ピーメンは決して駄目になるやうな事はありませんから、どうかご心配のないやうに。」
「あなたはどうしてこゝへ來ました？」
「百姓馬車に乘つて……でなくつてどうします？　もう一ど燐寸を貸して下さい……」
ソローミンは燐寸に火をつけて渡した……
「ヴシーリイ・フェドートゥイチ！」かういふ誰かの聲が、不意に戸の蔭から囁いた。「どうかおいでを願ひます！」

「誰です？　何用です？」
「どうぞおいでを願ひます。」外の聲は沁み入るやうな調子で、もう一ど執拗く繰り返した。「あちらへ、どこかよその職工が來て、何かぐづ〳〵言つてをりますが、バーエル・エゴールイチがゐないものですから。」
ソローミンは詫びごとを言つて立ち上がると、部屋を出て行つた。
マシューリナはじつとマリアンナを見つめにかゝつた。そして、こちらで間が悪くなるくらゐ、じつと長いあひだ見つめてゐた。
「ご免なさい。」不意に例の荒い引つ千切つたやうな聲で、彼女はかう口をきつた。「わたしはがさつ者ですから、そんな風に……上手に言ひまはしが出來ないんですの――どうか怒らないで、もしお氣が向いたら、返事を聞かして下さいな。あなたはシピャーギン家を家出なすつた、あの娘さんですの？」
マリアンナは幾分面喰つたが、それでもやはり口をきつた。
「わたしです。」
「ネジダーノフさんと一しよに。」
「えゝ、さうですわ。」

「どうぞ……お手を貸して下さい。後生だから、堪忍して下さいね。あの人が愛してゐる以上、あなたはつまりいゝ人なんですもの。」
マリアンナはマシューリナの手を握つた。
「あなたはネジダーノフをよくご存じですの？」
「えゝ、知つてゐます。彼得堡でよくお目にかゝつてゐました。だからこそ、こんな事も言ふんですよ。セルゲイ・ミハイロヴィッチもよく話してをられました……」
「あゝ、マルケーロフ？　あの人に近頃お會ひになりましたか？」
「えゝ、近頃。今度あの人は出かけました。」
「どちらへ？」
「命令された所へ。」
マリアンナは吐息をついた。
「あゝ、マシューリナさん、わたしあの人の身の上が心配ですわ。」
「第一わたしにさんづけなんかしないで下さい！　さういふ癖はよさなくちやいけません。第二に……あなたは『心配』だと言はれましたが、そんな事もやはりいけません。自分の身の上を心配しなければ――人のことも心配にならなくなつて來ます。自分のことを考へるのも、自分の身の

上を心配するのも――一切やめなくちやなりません。たゞこれだけのことは言へるでせうね……これは今ふいとわたしの頭に浮かんだ事ですけれど、わたしなら――フョークラ・マシューリナならこそ、こんな事も樂に言へるわけですわ。わたしは不器量ですからね。ところがあなたは……あなたは美人なんですもの。だからあなたに取つては、實行が一層むづかしい譯ですわね（マリアンナは目を伏せて顏をそむけた）。セルゲイ・ミハイロギッチがわたしにさう言ひました……わたしがネジダーノフあての手紙を持つてゐることを、あの人は知つてゐたものですから……で、あの人がさう言ふんですの。『工場へ行くのはおよしなさい、その手紙を持つて行つちやいけない。向うの生活を搔き廻してしまふ。およしなさい！　二人はあすこで幸福に暮らしてゐるのだから……勝手にさして置いた方がいゝ！　邪魔をしちやいけない！』つてね。わたしだつて、邪魔をしたくはないんですけれど……でも、この手紙をどうしたらいいんでせう！」

「それはぜひ渡さなくちやいけません。」とマリアンナが引き取つた。「でも、あの人は何て親切なんでせう、あのセルゲイ・ミハイロギッチは！　一體あの人は殺されるんでせうか、ねえ、マシューリナ……それとも、西比利亞ゆきでせうか？」

「いゝぢやありませんか、西比利亞からだつて拔け出されない譯ぢやないし！　それに命を棄てるのが何でせう？　人生つてものは、人によつては甘くも見えますが、また人によつては苦くもありますからね。あの人の生活だつて――大して甘い方ぢやないでせう。」

マシューリナは再びじつと、探るやうな目つきで、マリアンナを見やつた。

「でも、本當にあなたは美人ですね。」たうとう彼女はかう叫んだ。「まるで小鳥ですわ！　ですが、もうアレクセイは歸つて來さうもありませんね……あなたにこの手紙をお渡ししませうか？　待つてゐたつて仕樣がないから！」

「わたしが渡しますわ、どうぞご心配なく。」

マシューリナは片手で頰杖を突いて、いつまでもいつまでも默つてゐた。

「ねえ、」と彼女は口をきつた……「失禮ですが……あなたは心からあの人を愛してゐらしつて？」

「えゝ。」

マシューリナはその重さうな頭を一ふりした。

「さう、ところで、こんな事は訊くまでもありませんわね――あの人があなたを愛してるかどうかなんて。でも、わ

たしもう出かけませう。ひよつと遲れるといけないから。あなた、どうかさう言つて下さい、わたしがこゝへ來て……よろしく言つたつて。マシューリナが來たと言つて下さい。わたしの名前を忘れはなさいませんね？　大丈夫ですね？　マシューリナですよ。ところで手紙は……えゝと、どこへ突つ込んだか知らん？……」

マシューリナは立ち上がつて、そつぽを向くと、方々の衣囊を探るやうなふりをしながら、その間に、小さく疊んだ紙きれを素早く口へ持つて行つて、ぐつと飲み込んでしまつた。「あゝ、大變だ！　何て馬鹿なことをしたもんだらう！　まさか落としたんぢやないだらうねえ？　落としたに相違ない。あゝ、困つたことが出來た！　誰かに拾はれなけりやいゝが……ない、どこにもない。たうとうマルケーロフさんの望み通りになつた！」

「もつと捜してごらんなさい。」とマリアンナが囁いた。

マシューリナは片手をふつた。

「いゝえ、捜したつて仕樣がありません！　落としたんですよ！」

マリアンナは彼女の傍へより添つた。

「ぢや、わたしに接吻して下さいな！」

マシューリナはいきなりマリアンナを抱いて、女とは思はれないやうな力で、自分の胸へしめつけた。

「ほかの人には決してこんな事をしやしなかつたでせう。」と彼女は籠つた聲で言つた。「良心にそむいた事なんですもの……はじめてなんですの！　どうか、あの人に大事を取るやうに言つて下さい……それから、あなたもやはりね。ようござんすか！　今にこゝの人がみんな酷いめに合ひますよ、それこそ酷いめに。二人とも出ておしまひなさい、今のうちに……ぢや、さやうなら！」と彼女は大きな聲できつぱりと言ひ添へた。「あゝ、それからもう一つ……あの人にさう言つて下さいな……いゝえ、なんにもいりません、なんにも。」

マシューリナは戸をばたんと鳴らして、出て行つた。マリアンナはもの思ひに沈みながら、部屋のまん中に取り殘された。

「一體あれはどうした事だらう？」たうとう彼女は口に出してかう言つた。「あの女はわたしよりもずつと、あの人を愛してゐるに相違ない！　それにあの女の謎はどういふ意味なのか知ら？　またソローミンさんも何だつて急に出て行つたきり、いつまでたつても歸つていらつしやらないんだらう？」

彼女は部屋の中をあちこち歩きだした。恐れと、忌々し

さと、驚きの入り混じつた奇妙な感じが、彼女の全幅を領した。なぜ自分はネジダーノフと一しよに出かけなかつたんだらう？――ソローミンが止めたのだ……けれども、一體ソローミン自身はどこにゐるのだらう？　また周圍に起こつてゐるのは何事だらう？――マシューリナがあの危險な手紙を自分に渡さなかつたのは、無論ネジダーノフに對する同情のためだ……けれど、なぜあの女はあゝいふ背命の行爲を決行したのだらう？　自分の寛大さを示さうとしたのかしら？　一體どんな權利があつて？　またなぜ自分はこの行爲にあゝ感動したのだらう？　いや、本當に感動したのだらうか？　醜い女が若い男に興味をいだいてゐる……それは全くのところ、何も不思議なことではないではないか？　それになぜマシューリナは、ネジダーノフに對する自分の愛着が、義務觀念よりも強いと想像したのだらう？　事によつたら、自分はまるでそんな犧牲を望まなかつたかも知れない。一體あの手紙には、何が書いてあつたのだらう？　即刻、運動を開始せよといふ命令なのだらうか、それなら、却つていゝ事ではないか！

ところで、マルケーロフは？　あの人はいま危殆に陷つてゐる……それだのに自分たちは何をしてゐるのだらう？　マルケーロフは自分たち二人に容赦をして、自分たちに幸福の可能を與へようとしてゐる、二人を引き分けまいとしてゐる……これは一體なんだらう？　やはり寛大心だらうか……それとも輕蔑だらうか？

一たい自分たち二人が、あの忌はしい家を逃げ出したのは、たゞ一しよになつて、鳩のやうに睦ごとを交はすためだらうか？

かういふ風に、マリアンナはいろ〳〵と思ひめぐらした……すると、例の苛立たしい忌々しさが、次第に強く彼女の心に湧きかへつて來た。その上に、彼女は自尊心まで傷つけられたのである。なぜみんなが自分を打つちやつて行くのだらう――誰もかれもみんな！　あの『肥つちよ』の女は、自分のことを小鳥だと言つた、美人だと言つた……なぜいつそ人形と言はなかつたのだらう？　それにあのネジダーノフは、なぜ一人で行かないで、パーゼルと一しよに出掛けたんだらう？　まるで後見人が必要なのか何ぞのやうに！　それにいよ〳〵のところ、ソローミンはどういふ信念を持つてゐるのだらう？　あの人はてんで革命家ぢやない！　一體この運動全體に對する自分の態度が眞面目でないなどと、そんな事を考へる者があるだらうか？

かういふ想念が互に追つかけ合つたり、こんぐらかつたりしながら、マリアンナの熟した頭の中でくる〳〵渦卷いてゐた。唇を堅く食ひしばり、腕を男のやうに組んで――彼女はたうとう窓の傍へ腰をおろした。そして椅子の背にも倚りかゝらないで、またもやじつと不動の姿勢を保つてゐた――その全體の樣子が、一分の隙もないやうに張りきつて、いつでもすぐ飛び上がりさうであつた。タチヤーナの所へ行つて働くのは――どうも氣がすゝまなかつた　彼女の欲することはたゞ一つ――待つことであつた！　で、彼女は待つた。執拗に、ほとんど毒々しい氣持ちで。――ときゞ〳〵彼女は自分ながら、自分の氣持ちが奇妙な、わけの分からないものに感じられた……しかし、どうだつて構やしない！　一度などは、何もかもみんな嫉妬のせゐぢやないか、といふ考へさへ浮かんで來た。けれど、あのみじめなマシューリナの姿を思ひ出しただけで、彼女はたゞ肩を竦め、手を振るのみであつた……もつとも、本當にさうしたのではなく、さういふ身ぶりに相當する動きを、心の中に描いただけである。

マリアンナは長いこと待たなければならなかつた。たうとう階段を登つて來る二人の人間の、こつ〳〵といふ靴音が耳に入つた。彼女は急に視線を戸口へそゝいだ……靴音は、次第に近くなつて來る。――と、扉が開いて――パーゼルに片腕を支へられたネジダーノフが、閾の上に姿を現した。彼は死人のやうに眞靑な顏をしてゐた。帽子はなくなつて、おどろに振り亂した髮が濡れて額に垂れかゝつてゐた。目は何ものを映す力もないやうに、あてどもなく前方を見つめてゐた。パーゼルは彼を抱きながら部屋を横ぎつて(ネジダーノフの足は、不正確に弱々しく動いてゐた)、彼を長椅子の上に坐らした。

マリアンナは思はずその場からはね起きた。

「これは一體どうしたんです？　何事です？　病氣でもしたんですか？」

けれどもネジダーノフを坐らしてゐたパーゼルが、半ば身をねぢ向けて、肩ごしに微笑を見せながらかう答へた。

「ご心配なさいますな、すぐなほつて了ひますよ……これはたゞ馴れないせゐなので。」

「一體、どうしたんですの？」とマリアンナは執拗く訊き返した。

「ちつとばかり醉ひなさつたんで。――空き腹に飲みなさつたもんだから、それでまあ、その！」

マリアンナはネジダーノフの方に身を屈めた。彼は長椅子の上へ斜かひに半ば身を横たへて、首をぐつたりと胸の上へ垂れ、目をどろんとさしてゐた……口からはヴォートカの匂ひがぷん〳〵してゐた。彼は醉ひつぶれてゐたのであ

る。

「アレクセイ！」かういふ聲が思はず彼女の口を洩れた。

彼はやつとのことで重い瞼をあげて、につこり笑はうとした。

「あゝ！　マリアンナか！」と彼は呂律のまはらぬ舌で言ひだした。「あんたはいつも口癖のやうに、は……はだか……はだか一貫になつた人間といつてたが――さあ、今こそ僕は本當の裸一貫だ。なぜつて、露西亞の民衆はいつでも酔つぱらつてゐるから……つまり……」

彼は口を噤んだ。それから何やら譯の分からぬ事を、むにや〳〵言つたかと思ふと、やがて目をつぶつて――寢てしまつた。バーゼルはまめ〳〵しく彼を長椅子の上に寢かした。

「ご心配なさいますな、マリアンナ・ギケンチエヴナ。」と彼は繰り返した。「もの〻二時間もお休みになつたら、しやんとなつてお起きになりますよ。」

マリアンナは、どうしてこんな事になつたのかと訊かうと思つたが、いろんな事を訊けば、バーゼルを引き止めることになる。彼女はたゞ一人になりたかつたのである……といふよりも、この上長くバーゼルに、彼の醜態を見られたくなかつたのである。彼女は傍を離れて、窓ぎはへ行つた――すると、バーゼルはすぐに一切を悟つて、長上衣の裾で丁寧にネジダーノフの足を包み、頭の下に枕を當てがつた後、もう一度「何でもありませんよ！」と言つて、爪先だちで部屋を出た。

マリアンナは邊りを見廻した。――ネジダーノフの頭は重々しく枕の中に沈んで、その青白い顏には、まるで危篤な病人のやうに、凝結したやうな緊張感が窺はれた。

『どうしてこんな事になつたのだらう？』と彼女は考へた。

三二

こんな事になつたのは、次のやうな譯である。

バーゼルと一しよに百姓馬車に乘りながら、ネジダーノフは突然おそろしく興奮した心持ちになつた。そして馬車が工場の庭を出て、T……郡さして街道を走りはじめるが早いか――彼は通りがかりの百姓たちに聲をかけて、一人一人呼びとめながら、簡單な辻褄の合はない話しを始めたのである。「何だつて君たちは寢てゐるんだ？　起きたまへ！　もう時が來た！――稅なんかふつ飛ばしてしまへ！地主もふつ飛ばしてしまへ！」百姓たちは、びつくりしてその顏を見る者もあれば、かういふ絶叫には何の注意も拂はず、さつさと通り拔けてしまふ者もあつた。みんな彼を

醉つぱらひだと思つたのである。一人の百姓などは家へ歸ると、「途中で一人の佛蘭西人に出あつただ――何だか知んねえが、わけの分かんねえことを、べら〳〵喋くつてただよ。」と話したくらゐである。ネジダーノフは、自分のしてゐる事が話しにならないほど馬鹿げてゐて、まるで無意味だと悟るだけの分別は持つてゐたが、やがて次第々々に逆上して行つて、分別のあることも馬鹿げたことも、いつさい區別がつかないやうになつて了つた。バーゼルは、一生懸命に彼を落ちつかせようと思つて、そんな事をしてはいけない、飛んでもないことだ、今にもT……郡ざかひの女泉へ着くから、そこで樣子を探ればいゝ、と言つて聞かせた……けれど、ネジダーノフは承知しなかつた……それと同時に、彼の顏は何となく悲しげになつて、ほとんど絶望的の表情さへ浮かべてゐた。二人を曳いてゐる馬は、首筋の逞ましい、鬣をきちんと刈り込んだ、まる〳〵した感じのする、恐ろしく元氣のいゝ馬で、丈夫さうな細い足をせか〳〵と運びながら、まるで重大な事件の起こつた所へ、必要な人物を乘せてゞも行くやうに、絶えず手綱をしやくるのであつた。女泉まで行きつかないうちに、ネジダーノフはふと氣がついた――街道ちかく開けはなしになつた穀物倉の前に、八人ばかりの百姓が集まつてゐる。彼はいきなり車から飛びおりて、その傍へ駈け寄つた。そして、五分間ばかり兩手をふり廻はしたり、とき〴〵途轍もない大聲を出したりしながら、せき込んだ調子で話し續けた。『自由のために！　前へ進め！　自分の胸で押して行け！』などといふ言葉が、數限りなく發しられた不明瞭な言葉の間から、しや嗄れてはゐるけれど、高い調子で際だつて聞こえた。組み合ひの共有物で、從つてからつぽの倉を、たとへ見せかけだけでも、もう一ど一杯にするために、こゝへ相談に集まつて來た百姓たちは、じつとネジダーノフに目をそゝいで、ずゐぶん熱心にその演說を聞いてゐるらしい樣子であつたが――しかし殆ど何一つ合點が行かなかつたに違ひない。その證據には、彼が最後に「自由だ！」と叫んで、百姓たちの傍から飛び出したとき、中でも一ばん目のきくらしい男が、考へ深さうに頭をふつて、「何てやかましい人だべえ！」と言つた。するといま一人の百姓が、「きつと、どこかの所長さまに違えねえ！」と口を入れた。これに對して目のきく百姓は、「知れたこんだよ――でなくつて、あゝ聲を嗄らして、喋くる譯がねえだ。」「今度こそ、おら達の金を拂つてくれるんだべえ！」

當のネジダーノフは百姓馬車に上がつて、バーゼルの傍へ腰をおろしながら、心の中で考へた。『あゝ！　實に馬鹿げ

てる！　しかし、民衆に暴動を起こさせるにはどうしたらいゝか、そんな事は僕らの仲間で誰ひとり知つてるものはありやしない――事によつたら、あれでいゝのかも知れない？　そんな事を詮索してゐる暇はない！　やつゝけろ！　心の中がちく〳〵痛む？　なに、うつちやつて置け！』

馬車は村の通りへ乗り込んだ。とある居酒屋の前にあたる道のまん中に、かなり大勢の人だかりがしてゐた。バーヱルが止めようとするのをふり放して、ネジダーノフはいち早く毬のやうに馬車から飛びおりると、甲高い聲で「諸君！」と叫びながら、群集の中へ割り込んだ……群集は少しばかり道を開いた。で、ネジダーノフは誰の顔も見ずに、まるで腹をたてゝ泣いてゐるやうな聲で、またもや宣傳をはじめた。しかし、今度は倉の前と違つて、まるで意外な結果が現れた。短い油じみた半外套を着て、深い長靴を穿き、羊皮の帽子を被り、髯こそないけれど獰猛な顔つきをした、圖體の大きい一人の若い者が、つか〳〵とネジダーノフの傍へよつて、力いつぱいその肩を擲りつけた。

「えゝだよ！　若え衆！」彼は幅のある聲でかう喚いた。「まあ、待つてくんろ！　乾いた是ぢや口が痛えつてことを知んねえだか？　こつちさ來う！　向うの方がずつと話しがしえゝだ。」かう言つて彼は、ネジダーノフを居酒屋へひつぱり込んだ。殘りの群集もその後からどや〳〵と押しかけた。

「ミヘーイッチ、」と若い者は呶鳴つた。「さあ――十哥がとこ注いでくんろ！　おらのすきなあの盃だ！　友達さ振るまつてやるだによ！　一てえどこの何者で、どういふ種か生まれだか――そんな事あおら知んねえだが、地主どもを小氣味よくやつつけてくれるだ――さあ、飲め。」外側が汗をかいたやうに濡れるほど、なみ〳〵注いだ重い盃を突きつけながら、彼はネジダーノフに向かつてかう言つた。「飲め、お前が本當におら達のことを心配してくれるだら、飲んで見せるがえゝだ！」

「さあ、飲んだ、飲んだ！」と一同は口々に騒いだ。ネジダーノフは洋盃をとつて（彼はまるで惡氣に醉はされたやうであつた）――「諸君の健康を祝す！」と叫びながら、ぐつと一息に飲みほした。「うーふ！」彼はまるで彈丸雨注、銃劍林立の中に飛び込むやうな、自暴自棄の勇氣をふるつて飲んだのである……けれど、その後はどうなつたか――何ものか背中から足へかけて、彼をどやしつけたやうな氣がした。咽も、胸も、胃の腑も、燒け爛れたやうな氣がした。涙が目に滲み出した……嫌惡の痙攣が全身を走つた――彼はやつとの事でそれを押し鎭めた……たゞ何とか

してその苦しみを紛らしたいばかりに、ありたけの聲を出して喚いたのである。薄暗い居酒屋の中は、急にむし暑く、息苦しく、ねと〳〵して來た。まるで恐ろしい人だかりでもしてゐるやうであつた！　ネジダーノフは話しだした。長いあひだ一生懸命に喋つた。もの凄い勢で猛然と叫んだり、まるで廣い板のやうな感じのする掌を叩いたり、誰かのぬる〳〵する鬚を接吻したりした……半外套を着た圖體の大きな若い者も、やはり彼と接吻したが――その時あぶなく肋骨をへし折りさうになつた。けれどこの男は、何かごろつき見たいな者だといふことが分かつた。

「咽笛を引き裂えてくれるだ！」と彼は唸つた。「おら達の仲間に惡いことをする奴あ、誰でもかれでも咽笛を引き裂えてくれるぞ！――それでなけりや――頭の鉢を叩き壞して……きゆうといふ目に逢はしてくれるぞ！　一體おらを誰だと思ふ？　おらあ肉屋をしてゐただから、さういふ仕事ならようく知つてるだぞ！」かう言ひながら、彼は雀斑だらけの大きな拳をつき出した……すると、また「さあ、」と誰かが呶鳴りだした。「飲め！」ネジダーノフはまたこの厭はしい毒盃を飲みほした。しかし、この二度目の盃は實に恐ろしいものであつた！　彼はまるで鈍い鈎針で、五臟六腑を掻き廻はされるやうな氣がした。頭がぐら〳〵して――青い輪がちら〳〵しはじめた。がん〳〵と騒々しいほど耳鳴りがする……おゝ、何といふ恐ろしいことだ！……三杯の洋盃がつき出された……一たい彼はそれを飲みほしたのだらうか？　どす赤い鼻や、埃だらけの頭や、日燒けのした頸や、一面に網目のやうに皺のよつた襟筋が、彼のまはりでうよ〳〵してゐる。――ごつ〳〵した手が彼を掴んだ。

「さあ、精を出した！」と狂暴な聲が喚く。「さあ、話しをしろ！　一昨日も丁度お前のやうなよそ者が、偉さうな講釋を並べたてただよ。――さあ、やれ、この野郎！……」

大地はネジダーノフの足もとで搖ぎはじめた。彼は自分の聲さへ、どこか外の方から聞こえて來るやうな氣がした……これが死なのではなからうか？

と、不意に……すが〳〵しい空氣の接觸を、顏に感じた――もう混雜も、赤い醉ひどれ面も、酒の匂ひも、羊皮外套やタールや革の匂ひも、一切なくなつてゐた……さうして彼はまたバーヱルと並んで、百姓馬車の上に坐つてゐる。彼は初めちよつと身をもがいて、「どこへ行くのだ？止めろ！　僕はまだ、何一つあの連中に言ふ暇がなかつた――よく嚙み碎いてやらなくちやいけないんだ……」と叫んだが、やがてかう言ひ足した。「だが、こん畜生、狸野郎、

お前は一體どういふ了簡なんだ？」パーヱルはそれに答へて、「そりや旦那衆といふものがなくなつて、土地がみんなわつし達のものになつたら結構ですよ――それより上のことはありますまい――しかし、まださういふお布令が出ないのでね。」と言ひながら、そつと馬を後ろへ向ける眞似をしたが――急に手綱でその背中をひつぱたいて、居酒屋の喧々囂々の騒ぎを後ろに聞きながら……まつしぐらに工場を指して走りだした。

ネジダーノフはうと〳〵しながら――馬車に搖られてゐた。風は快くその顏を撫でて、厭な想念の湧き起こる餘裕を與へなかつた……

たゞ、自分の言ひたいだけの事を、すつかり言はして貰へなかつたのが忌々しかつた……けれども、また風が彼の熱した顏を撫でてくれる。

それから――ちよつと一瞬間マリアンナの顏が浮かんで――ちよつと一瞬間やき附くやうな屈辱感が湧き出したが――やがて眠りが襲つて來た、深い死人のやうな眠り……

これらはすべて、パーヱルが後でソローミンに話したことである。自分がネジダーノフの暴飲を止めなかつたことさへ、彼は別に隱さうとしなかつた……さうしなければ、とても彼を居酒屋からつれ出すことが出來なかつたに相違ない。群集が承知しさうもなかつたからである。

「ところで、あの人がへゞれけになつて了つたとき、わたしはお辭儀をして賴みましたよ。『皆の衆、どうかこの若い衆を歸しておくんなさい、ごらんの通りごく年が若いんだから……』とかう言つたところ、やつと放してくれましたよ。だけれど、罰金に五十哥よこせつて言ふものだから、仕方がない、くれてやりましたよ。」

「それはよくした。」とソローミンは褒めた。

ネジダーノフは眠つてゐた。マリアンナは窓の傍に坐つて、前栽を眺めてゐた。――と、奇妙なことには――ネジダーノフとパーヱルの歸つて來るまで、ずつと彼女を興奮さしてゐた、厭な、ほとんど毒々しいくらゐな感情や想念が、一どきに消えてしまつた。當のネジダーノフも決して厭な、忌ましい人間とは思はれなかつた。たゞ彼女は彼を憐れんでゐたのである。彼が蕩兒でもなければ醉漢でもないのは、彼女もよく承知してゐた――で、彼女はネジダーノフが目を醒ました時、彼に向かつて言ふべき言葉を考へてゐた。あまり極り惡がつたり悔んだりしないやうに、何か親しい言葉をかけてやらう、と彼女は考へた。『どうかしてあの人が自分の口から、さういふ災難の降りかゝつた樣子を話すやうに、うまくし向けなくちやならない。』

彼女は別に興奮しなかつたが、しかし、何となく佗びしかつた……遣る瀨ないほど佗びしかつた。彼女は自分の憧れてゐる本當の世界から、かすかな匂ひを吹き送られたやうな氣持ちがしたのである……それ故、かうした粗野で暗黑な現實に、戰慄を感じないではゐられなかつた。一たい自分は何といふ魔神の生贄にならうとしてゐるのだらう？

しかし――そんなことはない！　そんな事のあるべき筈がない！　これはたゞちよつとした偶然の出來ごとで、今に間もなく痕かたもなく濟んでしまふのだ。これはほんの瞬間的な印象で、彼女があれほど驚愕を感じたのは、たゞ餘り不意だつたからに過ぎない。――彼女は立ち上がつて、ネジダーノフの寢てゐる長椅子に近よりながら、寢てゐる間さへ惱ましげに顰めた、その靑白い額を手巾で拭いて、髮の毛を後ろへ拂ひのけてやつた……

彼女はまた可哀さうになつた。それは丁度、母親が病兒を憫れむのと、同じやうな氣持ちであつた。――けれど、彼を見つめてゐるのは少し不氣味な感じがした。――彼女は戸を開けたまゝにして、そつと自分の部屋へ歸つた。

彼女は何の仕事も手につかなかつたので、また腰をおろした――と、再びさま〴〵な物思ひが襲つて來た。時がじり〳〵と溶けて行つて、一分々々と消えて行くのが感じられた。しかも、それを感じるのが、むしろ快いほどであつた――心臟はどき〳〵と鼓動してゐる――彼女はまた期待するやうな氣持ちになつた。

一體ソローミンはどこへ行つたのだらう？

戸がぎいと軋んで――タチヤーナが部屋へはいつて來た。

「何ご用？」ほとんど忌々しさうな調子で、マリアンナはかう訊ねた。

「マリアンナ・ギケンチエヴナ、」とタチヤーナは小聲で言ひだした。「本當にあなた、くよ〳〵なさんなよ！　なに世間ではありふれた事でございますよ。――まだしも有り難いことには　…」

「わたし、ちつともくよ〳〵してやしないわ、タチヤーナ・オシッポヴナ。」とマリアンナは遮つた。「アレクセイ・ドミートリッチは、少し加減が惡いだけで、なんの大したことですか！　……」

「まあ、それなら結構でございます！　ところが、わたしはね、一向マリアンナ・ギケンチエヴナのゐらつしやる樣子がないので、一體どうなさつたかと思ひましてね――でも、萬事さはらずそつとして置け！といふのが、かういふ時の一番の掟ですから、わたしもお邪魔に來る筈ぢやなかつた

のですけれど、工場の方へ何だか――えたいの知れない男がやつて來たものですから。こんな小つぽけな男で、おまけに跛なんですが、それでゐてあなた、すぐアレクセイ・ドミートリッチに會ひたい、と言ふぢやありませんか！何て不思議なことでせう、今朝ほどもあの妙な女が、あの人に會ひたいと言つて來たのに……今度はまた跛なんですからね。――もしアレクセイ・ドミートリッチがお留守ならヴシーリイ・フェドートゥイチに會はしてくれ！　會はないうちは決して歸らない、ごく大事な用件があるのだから、とかう言ふぢやありませんか。わたしはその男も、今朝の女と同じやうに、追ひ返しにかゝりました。――ヴシーリイ・フェドートゥイチもやはりゐつしやらない……お出かけになりました、かう言つたんですけれど、その跛は――いや、歸らない、夜までも待つ……かう言つて庭の中を歩き廻るんでございますよ。――まあ、こちらへ、廊下の方へ出てご覽なさいまし、窓から見えますから……一體あの殿ごはどういふ人間か、ご存じありませんか？」

マリアンナは、タチヤーナの後ろからついて行つた――途中ネジダーノフの傍を通らなければならなかつた――とまたしても病的に顰めた額に氣がついて、また手巾で拭いてやつた。――埃に曇つた小窓の硝子ごしに、彼女はタチヤーナの話した訪問者の姿を見つけた。それは彼女に見覺えのない顔であつた。――けれど丁度その瞬間、家の角からソローミンが現れた。

小さな跛の男は、すばやくその傍へよつて、手をさし伸べた。ソローミンはその手を握つた。明かに、彼はこの男を知つてゐるらしかつた。二人は一しよに姿を隱した……

やがて、もう二人の足音が階段で聞こえた。こちらへ來てゐるのである……

マリアンナはいち早く自分の部屋へ引つ返して、やつとのことで息を繼ぎながら、部屋のまん中に立ち止まつた。彼女は恐ろしかつた……けれど、何が恐ろしいのか？　彼女自身にも分からなかつた。

ソローミンの頭が戸口に覗いた。

「マリアンナ・ヰケンチエヴナ、どうかあなたの部屋へはいらせて下さい。ぜひあなたの會つて置かなければならない人を、案内して來たんです。」

マリアンナはその返事に、たゞ一つ頷いたばかりである。ソローミンに續いて現れたのは――パークリンであつた。

三三

「僕はご主人の親友です。」すつかり慴え上がつて、不安の色に充ち滿ちた顏を隱さうとでもするやうに、マリアンナの前で低く身を屈めながら、彼はかう口をきつた。「そしてヴシーリイ・フェドートゥイチの親友でもあるのです。アレクセイ・ドミートリッチは寢てゐますね。聞けば、體の具合ひが惡いさうですが、僕は殘念ながら、よくない知らせを持つて來たのです。そのうち一部分はもうヴシーリイ・フェドートゥイチに洩らしましたが――とにかく、何か斷然たる處置を取らなくちやならないでせう。」

パークリンの聲は、ちやうど咽の渴きに惱んでゐる人のやうに、絶えず途切れ途切れになつた。彼の竊した報知は、本當に凶報であつた！　マルケーロフは百姓たちに捕まつて、町へ送られたし、商人のゴルーシキンは、例の阿呆じみた番頭に密告されて、逮捕されたとのことである。ところがゴルーシキンも、敗けず劣らずすべての同志を裏切つて、正教會へはいりたいといふ希望を表明したり、フィラレート僧正の肖像畫を中學校へ寄附すると言つたり、『救恤のために五千留の金を投げ出したりした。從つて、彼がネジダーノフの名前を明かしたのは、全く疑ふ餘地がないから、いついかなる時、工場へ警察が手を入れるかも分からない。ヴシーリイ・フェドートゥイチにもやはり危險が迫つてゐる。

「ところで僕はといふと、」とパークリンは言ひ添へた。「まだかうして自由に歩き廻つてゐられるのが、不思議でたまらないんです。もつとも、僕は一度も直接に政治に關係したことがないし、いかなる計畫にも與かつたことはありませんがね！　で、僕は警察の健忘症といふか、でなければ不注意を利用して、あなたがたにこの事を警告に來たんです。そして、いかなる方法を講じたら……一切の不快事を避けることが出來るか、それをご相談したいと思つて。」

マリアンナはパークリンの言葉を最後まで聞き終つたがしかし一向おどろかなかつた――それどころか、落ちつき拂つてゐたくらゐである……とはいへ、本當に何かの方法を講じなければならない！――彼女の最初の動作は、ソローミンに視線を向けることであつた。

彼もやはり落ちついてゐるらしかつた。たゞ唇のまはりの筋肉が、ほんの心もち動いたばかりである――しかも、それはいつもの微笑とは違つてゐた。

ソローミンはマリアンナの視線の意味を悟つた。彼女はソローミンの命令どほり行動するために、その言葉を待つてゐるのであつた。

「これは實際かなり擽つたい事件ですな。」と彼は口をきつた。「ネジダーノフは、僕の考へでは、しばらく身を隱す

のも惡くないでせう。――ついでですが、あの男がこゝにゐることを、どうして君は知つたんです、パークリン君？」

パークリンは片手をふつた。

「ある人間から聞いたんです。ネジダーノフがこの近在を歩きまはつて、宣傳してゐるところを見かけたので、それでまあ、居どころを突き止めたつて譯です。もつとも、惡い目的ぢやないんですがね。――やはり同情者の一人なんで。失禮ですが、」と彼はマリアンナの方へ向いて言ひ添へた。「しかし、全くのところ、ネジダーノフは……非常に不用意でしたよ。」

「今さらあの男を責めたつて、何にもならない。」とソローミンがまた言ひだした。「今あの男と相談することが出來ないのは殘念だが、明日までには病氣も癒るでせう――警察なんてものは、君の考へてゐられるほど、敏捷なものぢやありませんよ。ねえ、マリアンナ・ギケンチエヴナ、あなたも一しよに落ちのびなけりやなりませんな。」

「そりや、もう。」鈍い聲ではあつたが、マリアンナはきつぱりと答へた。

「さう！」とソローミンは言つた。「少し考へなけりやなりませんね――どこへどうして落ちるか、一思案しなけりや。」

「失禮ですが、一つ意見を提出させて下さい。」とパークリンが言ひ出した。「これは僕がこゝへ來る途中、考へついたことなんです。ちよつとお斷りして置きますが、僕はこゝから一里ほど手前で、町から乘つて來た辻馬車を歸してしまひました。」

「そのご意見といふのは？」とソローミンが訊ねた。

「ほかでもありません――今すぐ僕に馬車を貸して下さい……僕はシピャーギン家へ駈けつけることにします。」

「シピャーギン家へ！」とマリアンナは鸚鵡がへしに言つた。「何のために？」

「まあ、見てゐらつしやい。」

「一體あの家をご存じなんですの？」

「いゝえ、ちつとも！　ですが、まあお聞きなさい。そしてようく僕の意見を審議して下さい。自分では殆ど天才的なものだと思ふんですが。――だつて、マルケーロフはシピャーギン氏の義兄でせう、奥さんの兄さんでせう。さうぢやありませんか？　一體、あの貴族が自分の兄を救ふために、何らの方法をも講じないといふ事があるでせうか？そればかりでなく――當のネジダーノフだつて……まあ假りに、シピャーギン氏があの男に腹を立てゝゐるとしても……しかし、何と言つたつて、ネジダーノフはあなたと結

婚したんだから、あの人の親類になつた譯ぢやありませんか。だから、われ〳〵の親友の身に迫つてゐる危險は……」

「わたし、結婚してはをりません。」とマリアンナが口を入れた。

パークリンは思はずぎくりとした。

「何ですつて？　あの間にそれだけの暇もなかつたんですか……しかし、大丈夫、」と彼は言ひ足した。「嘘をついたつて構やしません。どうせ、あなた方はすぐ結婚されるんですからね。全くそれよりほかに考へは浮かびません！まあ、今までシピャーギン氏があなた方を追跡しなかつた、といふ點に注意を拂つて下さい。それからして見ても、あの人には一種の……寛大心があるわけです。お見うけしたところ、あなたはこの言ひ廻しがお氣に入らないやうですね――ぢや、一種の氣取り屋根性がある、と言ひ直しませう。目下の場合、それを利用してならないといふ法がどこにあります？　考へてもご覽なさい！」

マリアンナは頭を上げて、片手で髪を撫でた。

「パークリンさん、そりや、マルケーロフさんのためなら……それともあなたご自身のためなら、何を利用なさらうとご勝手ですが、わたしとアレクセイは、シピャーギン氏の恩惠も保護も受けたくありません。わたし達があの家を捨てゝ出たのは、のめ〳〵無心者として、その戸を叩くためぢやありません。シピャーギン夫婦の寛大心にも、氣取り屋根性にも、わたし達は何の用もありません！」

「それは實に感心なお覺悟です。」とパークリンは答へた（けれど腹の中では『えゝ、何といふ女だ！　まるで頭からひや水を浴びせられたやうな氣持ちだ！』と考へた）。「もつとも、他の一面から考へれば……しかし、僕はあなたのお說に從つてもいゝです。僕は、マルケーロフのことを運動しませう、わが善良なるマルケーロフのことだけ賴みませう！　たゞこれだけのことは申し上げて置きます。あの男はシピャーギン氏にとつてたゞの姻戚で、實際の血は續いてゐないけれど、あなたの方はそれと違つて……」

「パークリンさん、お願ひですから！」

「承知しました……承知しました！　しかし、どうも遺憾の意を表さずにはゐられませんなあ。シピャーギン氏は非常な勢力家ですから……」

「ところで、君は自分自身のことが心配ぢやないですか？」

パークリンは胸を突き出した。

「かういふ危急な場合、自分のことなど考へるべきぢやありません！」と彼は傲然と言ひ放つた。――ところが、彼は全く自分のことを考へてゐたのである。彼はいはゆる先

潜りがしたかつたのである(憐れなる弱者よ!)、自分の盡くした忠勤を多として、必要の生じた場合、シピャーギンが自分のために、一こと口をきいてくれるかも知れない――と彼はかう考へた。――實際、何と强辯しても、自分は事件に關係がある――人の話しを聞いてゐたばかりでなく……自分でも喋つたことがあるではないか!

「君の考へは、僕も悪くないと思ひます。」たうとうソローミンがかう口をきつた。「もつとも、大して成功は期待しませんがね。いづれにしても、やつて見るのはいゝでせう。そのために狀況をまづくするやうな事もないでせう。」

「勿論ありませんよ。――まあ、一ばん悪い場合を想像して、僕が門前ばらひを食はされたとしても……大した災難ぢやありませんからね!」

「それは實際、災難でも何でもありません……(『メルシイ!』とバークリンは考へた――ソローミンは、言葉を續けた)。いま何時だらう? ――四時すぎだ。ぐづ〳〵してゐることはない。馬車は今すぐ拵へさせますよ。バーエル!」

しかし、バーエルの代はりに閾の上へ現れたのは、ネジダーノフであつた。彼は片手で戸口の鴨居に掴まりながら、よろめく足で立つてゐた――そして、力なく唇をあけたまま、どろんとした目つきで、前を見つめてゐた。彼はまるで何も分からなかつたのである。

バークリンは自分の方から彼の傍へよつた。

「アリョーシャ!」と彼は叫んだ。「君は、僕が分かるだらう?」

ネジダーノフはゆつくり目ばたきしながら、相手を見つめた。

「バークリンかね?」彼はやつとの事でかう言つた。

「さうだよ、さうだよ、僕だよ。君、加減が悪いのかね?」

「あゝ……加減が悪いんだ。だが……なぜ君はこんな所にゐるんだ?」

「なぜ僕がこゝにゐるかつて……」けれど、この瞬間マリアンナがそつとバークリンの肘に觸はつた。ふり返つてみると、彼女はしきりに目くばせをしてゐた……

「あゝ、さう!」と彼は大きな聲で言つた。「僕はある重大な用件で、こゝへ來たのだが、またすぐ先へ行かなけりやならない……詳しいことは、ソローミン君に聞いてくれ給へ――それからマリアンナにも……マリアンナ・ギケンチエヴナにもね――二人とも、充分僕の計畫に贊成してをられるんだから。事件は僕らみんなに關係したことなんだ。いや、違ふ、さうぢやない。」マリアンナの目つきと手ぶりに答へて、彼はかう言ひ直した。「事件はマルケーロフに關係したことなんだ――われ〳〵一同の友人マルケーロフだけのことだ。だが、もう失敬しよう! 一分間でも大切だからね――ぢや、君、失敬……また會はう。ヴシーリイ・フェドートゥイチ、ひとつ僕と一しよにあちらへ行つて、馬車の指し圖をして頂けないでせうか?」

「さあ、どうぞ。マリアンナさん、僕はあなたに『しつかりおしなさい!』と言ひたかつたのだけれど、そんな必要はない。――あなたは本物だ!」

「あゝ、さうですとも、さうですとも!」とバークリンが合ひ槌を打つた。「あなたはカトー時代の羅馬婦人です。ウチカのカトー時代のね! しかし、出かけませう、ヴシーリイ・フェドートゥイチ――出かけませう!」

「大丈夫、間に合ひますよ。」ソローミンは大儀さうな冷笑の調子でかう言つた。ネジダーノフは二人を通すために、少し脇へよつた……しかし彼の目の中には、依然として無理解の表情が浮かんでゐた。それから彼は二歩ばかり進んで――マリアンナと向き合ひながら、靜かに椅子へ腰をおろした。

「アレクセイ、」と彼女は言ひだした。「何もかも分かつて了ひました。マルケーロフは自分の煽動した百姓たちに捕まつて、いま町の監獄にはいつてゐます。それから、あんたが一しよに食事をしたあの商人も、やはりさうなんですの。多分わたし達の所へも、警察からやつて來るでせう。バークリンさんはシピャーギンの家へ出かけました。」

「何しに?」やつと聞こえるか聞こえないかの聲で、ネジダーノフは囁いた。しかし、その目にはさつと光りがさして――顏はいつもの表情を帶びて來た。一時に醉ひが醒めてしまつたのである。

「ほかでもありません、あの人が一骨折つてくれるかどうか、試しに行つたんですわ。」

ネジダーノフはきつと身を反らした。

「僕らのために?」

「いゝえ、マルケーロフさんのためですの。あの人はわたし達のことも賴むと言つたんですけど……わたしが承知しなかつたんですの。その方がよかつたでせう、ね、アレクセイ?」

「よかつたつて?」とネジダーノフは問ひ返した。そして椅子から腰を上げないで、兩手を女の方へさし伸べた。「よかつたつて?」かう繰り返して――相手を自分の方へ引き寄せ、その胸に顏を押しあてたかと思ふと、いきなりさめざめと泣きだした。

「どうなすつたの? どうなすつたの?」とマリアンナ

は叫んだ。いつかネジダーノフが、突然もえ上がつた情火に息を切らせ、心臓の痺れるやうな思ひをしながら、マリアンナの前に跪いた時と同じやうに、今度も彼女は慄へをのゝく男の頭に兩手を載せた。――けれど今彼女が感じた心持ちは、あの時とはもうすつかり違つてゐた。あのとき彼女は、男に身を委すばかりになつてゐた――男の心に從はうとしてゐた――そして、たゞ男の方から言ひ出すのを待つばかりであつた。けれども、今は氣の毒に思ふだけで、どうかしてその心を落ちつかせよう――といふよりほかに考へはなかつた。

「どうなすつたの？」と彼女は繰り返した。「何を泣いてらつしやるの？　家へ歸つていらしつた時の樣子が、少し……變だつたからですの？　そんな事がある筈はないわ。それとも、マルケーロフさんが氣の毒なの――わたし達の身の上が心配なの？　それとも、わたし達の希望が消えたのが悲しいんですの？　まさかあんただつて萬事とん〳〵拍子にうまく行くとは思つてなかつたでせう？」

ネジダーノフはいきなり頭を上げた。

「いや、マリアンナ、」急に獻欷の聲を斷ち切るやうにしながら、彼はかう言ひだした。「僕はお前の事が心配なのでもなければ、自分の身の上が氣になるのでもない……しかし、本當に……僕は可哀さうなんだ……」

「誰が？」

「お前なのだ、マリアンナ！　それだけの價値もない人間と、一生の運命を結び合はしたお前が、可哀さうなのだ。」

「それはなぜ？」

「なぜと言つたつて、手つとり早い話しが、僕はかういふ瞬間に泣き得るやうな男なんだからね！」

「それは、あんたが泣いてるんぢやありません、あんたの神經が泣いてるのよ！」

「僕の神經も僕自身も――要するに同じことだ！　まあ聞いておくれ、マリアンナ、僕の目を見てごらん。一體お前はいま僕に向いて、後悔してゐないと言ふことが出來る？……」

「何を？」

「僕と一しよに家出したことを。」

「いゝえ！」

「ぢや、この先も僕と一しよに行く？　どんなところへでも？」

「えゝ！」

「本當？　マリアンナ……本當かい？」

「本當よ。わたしはあんたに手をさし伸べたんですもの。

あんたがこれから先も、はじめと同じやうな人である限り――わたしその手を振り離しはしないことよ。」

ネジダーノフは依然として椅子の上に坐つてゐた。マリアンナはその前に立つてゐた。彼の手は女の體に卷きついてゐたし、彼女の手は男の肩に載つてゐた。『諾か？否だ。』とネジダーノフは考へた……『もとはかうして抱きしめると、この體が少くともじつと動かないでゐたものだが、今は――本人の心にはないのかも知れないけれど――そつとおれの傍を離れようとしてゐる。おれにはそれが感じられる！』

彼は抱擁の手を解いた。すると果たして、マリアンナは殆ど目だたないくらゐ後ろへ下がつた。

「ねえ、どうだらう！」と彼は大きな聲で言つた。「もし僕たち二人が警察の手の入らないうちに……こゝを逃げなけりやならないとすれば……その前に結婚した方がよくないだらうか。ゾシマのやうに早分かりのする坊さんは、ほかにちよつと目つからないかも知れないからね！」

「わたしいつでも。」とマリアンナは言つた。ネジダーノフは注意ぶかく彼女を見つめた。

「羅馬婦人だね！」いやな薄笑ひを浮かべながら、彼はかう言つた。「義務の觀念か！」

マリアンナは一方の肩を竦めた。

「ソローミンさんに相談しなくちや。」

「さう……ソローミンにね……」とネジダーノフは引き延ばすやうに言つた。「しかしあの人にも、恐らく危險が迫つてゐるんだらう。警察は、あの人も押さへるに相違ない。――あの人は僕なんかよりずつと餘計に關係して、ずつと餘計にいろんな事を知つてゐるらしいからね。」

「そりや、わたし分かりませんわ。」とマリアンナが答へた。「自分のことはちつとも話さないんですから。」

『あんたなどと違つて！とかう言ひたかつたんだらう。』とネジダーノフは考へた。

「ソローミン……ソローミン！」長い沈默の後、彼はかう言ひ足した。「ねえ、マリアンナ、僕はかう思ふよ――お前が自分の一生を結びつけた男が、もしソローミンのやうな人間だつたら……それともソローミン自身であつたら、僕はお前を可哀さうだなどと思はなかつたらうよ。」

すると今度はマリアンナが、じつと注意ぶかくネジダーノフを見つめた。

「あんた、そんな事を言ふ權利はなかつたんですわ。」たうとう彼女はかう口を切つた。

「權利がなかつたつて！――その言葉は、どういふ意味に

解釋したらいゝんだらう？　お前が僕を愛してくれるといふ意味なのか――それとも、全體として、僕がその問題に觸れるべきでないといふ意味なのか？」

「そんな權利はなかつたのよ。」とマリアンナは繰り返した。

ネジダーノフは頭を垂れた。

「マリアンナ！」いくぶん調子の變はつた聲で彼はかう言つた。

「なあに？」

「もし僕がいま……もし僕があの問題を持ち出したら……分かつてるだらう？……いや、そんな事をするのは一切よさう……さやうなら。」

彼は席を立つて出て行つた。マリアンナもそれを止めようとしなかつた。ネジダーノフは長椅子に腰をおろして、兩手で顏を蔽うた。彼は自分自身の想念に慴えを感じて、なるべく考へないやうにした。彼が感じるのは、たゞ一つのものばかりであつた――何かまつ暗な冥府の手が、彼の存在の一ばん根もとをひつ掴んで、どうしても放さうとしないのであつた。彼にはちやんと分かつてゐた――いま、隣りの部屋に殘して來た、あの美しく貴い人間は、自分から進んでこちらへはいつて來る氣遣ひがない――それかといつて、こちらから向うへ行くだけの勇氣もない。それに、はいつて行つたところで何にならう？　何を言ふことがあらう？

しつかりした急がしげな足音が、彼の目を見開かした。ソローミンが彼の部屋を横ぎつて、マリアンナの戸口にノックした後、中へはいつて行つたのである。

「謹んで席をゆづるよ！」とネジダーノフは悲痛な聲で囁いた。

三四

もう夜の十時であつた。アルジャノエ村の地主邸の客間で、シピャーギン夫婦とカルロメイッェフが、歌留多の勝負を闘はしてゐるとき、侍僕がはいつて來て、誰やら見知らぬ男の來訪を告げた。客はパークリンといつて、極めて緊急重大な用件で、ボリース・アンドレーイッチに面會を望んでゐるとの事であつた。

「こんなに遲く！」とヴレンチーナ・ミハイロヴナはびつくりした。

「あ？」とボリース・アンドレーイッチが訊ねて――美しい鼻に皺を寄せた。「お前その人の名を何と言つたね？」

「パークリンと仰しやいました。」

「パークリン！」とカルロメイッェフは叫んだ。「全く百姓名前だ。――パークリン（麻）だの……ソローミン（麥）だの……全く田舍式の名前ぢやありませんか、え？」

「それで、」依然として鼻に皺をよせたまゝ、ボリース・アンドレーイッチは侍僕に向かつて言葉を續けた。「緊急重要な用件だといふんだね？」

「さやうに申されました。」

「ふむ……何か無心ものか山師だらう。（「それとも兩方一しよかも知れませんよ。」とカルロメイッェフが口を入れた）大きにさうかも知れん。書齋へお通ししろ。」ボリース・アンドレーイッチは立ち上がつた。「お前、ちよつと行つて來るよ。その間エカルテでもやつてゐておくれ。――それとも待つてゝくれてもいゝよ……すぐ歸つて來るから。」

「僕らはお喋りしてゐますよ……行つてらつしやい」とカルロメイッェフは言つた。

シピャーギンは自分の書齋へはいつて行つた。壁爐と扉の間の壁に身をよせて小さくなつてゐる、パークリンのみじめな痩せひよろけた姿が目に映つたとき、彼得堡の大官に獨特の傲慢な憐憫と嫌惡の交じつた、眞に大臣らしい寛大な心持ちが、彼の全幅を領したのである。

『おや〳〵！　何といふ貧弱な田舍だらう！』と彼は考へた。『おまけに跛まで引いてるらしいぞ！』

「お坐んなさい。」後ろへそらした頭を氣持ちよくしやくつて、極めて上品な次中音を惜しげもなく使ひながら、彼は大きな聲でかう言つた――そして、客よりも先に腰をおろした。「たぶん道でお疲れになつたでせう。まあ、お坐んなさい。こんなに遲くお出かけになるほど、重大な用件といふのはどんな事か、一つご說明を願ひたいもので。」

「閣下、」用心ぶかく肘椅子へ腰をおろしながら、パークリンは口をきつた。「わたしがお屋敷へ推參いたしましたのは……」

「待つて下さい、待つて下さい。」とシピャーギンは遮つた。「あなたにお目にかゝるのは、どうやら初めてぢやないやうだ。たとへ一度でも會つた事のある人なら、わたしは決して忘れませんからね。わたしは何でも覺えてをります。しかし……しかし……しかし……一體どこでお會ひしたか知らん？」

「閣下、仰せの通りでございます。――わたしは彼得堡で……ある男の家でお目にかゝる光榮を有しました。その男は……その男はそれ以來……不幸にして……閣下のご勵氣を蒙りまして……」

シピャーギンは急に肘椅子から身を起こした。

「ネジダーノフ君の所でしたな！　やつと今おもひ出しました。では、あの男の使ひで見えたんぢやありませんか？」
「決して、そんな事ではございません、閣下。それどころか……わたくしは……」
シピャーギンはまた腰を落とした。
「それは結構。もしあの男の使ひで來られたのなら、即刻お歸りを願はなけりやならんところでした。――わたしは自分とネジダーノフ君の間には、どんな調停者も入れるわけに行かないのです。ネジダーノフ君は、到底わすれることの出來ないやうな侮辱を、わたしに加へた人ですからね……わたしは復讐などを超越してゐますが――しかし、あの男のことも、またあの娘のことも、一さい耳に入れようと思ひません――あの娘は感情よりも、寧ろ頭腦の方が墮落してゐるんです（シピャーギンはマリアンナの家出以來、もう三十遍くらゐ、この句を繰り返してゐるのであつた）。恩を受けた家を見捨てゝ素性も知れぬ風來ものゝ情婦になるなんて！　わたしがそのことを忘れてゐるだけでも、彼らには過分なくらゐです！」この最後の一句とともに、シピャーギンは手首を下から上へ動かして、ぱつとはね除けるやうな手つきをした。
「わたしは彼らを忘れようとしてゐるんですよ、君！」

「閣下、わたくしは前にも申し上げました通り、あの人達の使ひとして上がつた譯ではありませんが、しかしそれにしても、閣下にお知らせしなければならない事がございます。あの二人はもう正式の結婚をして、永久に結び合はされたのでございます……」『なに、構ふものか！』とバークリンは考へた。『おれは出たら目を言ふと斷つて置いたが……本當に出たら目を言つちやつた。えゝ、どうともなれ！』
シピャーギンは椅子の背に載せた後ろ頭を、もぞ〳〵と左右に動かした。
「そんな話しはわたしにとつて、少しも興味のないことです、君。馬鹿げた結婚がこの世に一つ殖えた――たゞそれだけの事ですよ。ところで、わたしがあなたのご光來を忝うした、しごく重大な用件といふのは、一たい何でせうか？」
『えゝ！忌々しい局長かたぎだなあ！』とバークリンはまた考へた。『もうおつに氣取るのは澤山だよ、この英吉利づらめ！』
「實はご令閨のご兄弟が、」と彼は聲を高くして言つた。「あのマルケーロフさんが、百姓たちを煽動しようとして、却つてその連中に捕まつて――いま縣知事邸に監禁されてゐられるのです。」

シピャーギンはまたもや椅子から飛び上がつた。
「なに……何と言はれたんです？」と彼は言つたが、もうその聲は大臣級の中低音でなしに――何だか喉にかゝつたやうな、やくざな響きを立てた。
「閣下の義兄が捕縛されて、監禁されてゐらつしやると、かう申し上げたのでございます。――わたしはこの事を聞くや否や、すぐさま馬車を飛つて、こちらへお知らせに上がりましたので。かうすれば閣下に對しても、あの不幸な方に對しても、幾らかお役に立つことが出來るだらうと、かう考へたからでございます。全く閣下はあの方をお助けになることが出來るのですから！」
「ご好意は深く感謝します。」前と同じ弱々しい聲でシピャーギンはかう言つた――そして、蕈のやうな恰好をした呼び鈴を、力まかせに叩きながら、金屬性の響きで家ぢうを一ぱいにした。「ご好意は深く感謝します。」今度は幾分きつとした聲で彼はかう繰り返した。「しかし、わたしは斷言して置きます――神の掟、人間の掟、あらゆる掟を蹂躙した人間は、たとへ、どれほど近い親戚であらうとも、わたしの目から見ると、不幸な人間ではありません、犯罪者です！」
侍僕が書齋へ駈け込んだ。

「お召しでございますか？」
「馬車の用意をしろ！　今すぐ四頭立ての用意をしろ！おれは、すぐ町へ出かける――フィリップとステパンが供だ！」侍僕は部屋から駈け出した。「さうですよ、君。義兄は犯罪者です。だからわたしが町へ行くのも、あれを救ふためぢやありません！　いゝや、どうして！」
「けれども、閣下……」
「これがわたしの主義なんです――だから、無駄な抗辯はよした方がいゝでせう！」
シピャーギンは部屋の中をあちこち歩きだした――バークリンは目を丸くした。
『ちよつ、こん畜生！』と彼は考へた。『お前は自由派だといふ話しだつたが、なんの！　まるで吼え立てる獅子ぢやないか！』
戸がさつと開いて――急ぎ足にはいつて來るものがあつた。先に立つたのは、ヴレンチーナ・ミハイロヴナで、その後にカルロメイッェフが續いた。
「これはまあどうした事ですの、ボリース？　馬車の支度を言ひつけなすつたんですの？　これから町へいらつしやるの？　何事が始まつたんですの？」
シピャーギンは妻の傍に近よつて――右の方の肘と手首

のまん中を握つた。

「お前しつかりしなくちやいけないよ。兄さんが捕縛されたんだ」

「兄さんが？　セリョージャが？　まあ何だつて？」

「百姓たちに社會主義の理論を宣傳したんだ（カルロメイツェフはかすかな叫び聲をたてた）。さうなんだよ！　兄さんは革命を宣傳したのだ。プロパガンダをやつたのだ。ところが、百姓たちは兄さんを捕まへて――突き出してしまつたといふ譯だ。いま兄さんは町で……監禁されてゐるんだよ。」

「何といふ氣ちがひでせう！　でも誰がそんな事を言つたんですの？……」

「この……えゝと……えゝと……何と言つたつけな？……さう、コノバーチン君がその知らせを持つて來て下すつたんだ。」

ヴレンチーナ・ミハイロヴナはパークリンを見やつた。こちらはしを〳〵と會釋した（『實に大した女だなあ！』といふ考へが彼の心に浮かんだ。――かういふ困難な瞬間でさへ……悲しいかな、パークリンは女性美の偉力には、から意氣地がないのであつた！）

「で、あなたは町へいらつしやるおつもり――こんなに遲く？」

「なに、知事はまだ起きてゐるよ。」

「だから、わたしがいつもさう言つてたんですよ――あゝいふ事をしてゐれば、こんな結果になるのは當り前です。」とカルロメイツェフが口を入れた。「かうなるよりほか仕方がないです！――しかし、わが露西亞の百姓は、實に賴もしいものですなあ！　素敵だ！　ご免なさい、奥さん、あなたのご兄弟ではありますが、しかし眞理が何よりも一番ですからな！」

「ボーリヤ、あんた本當にお出かけになるつもり？」とヴレンチーナ・ミハイロヴナが訊ねた。

「わたしはさう確信しますね、」とカルロメイツェフが言葉をついだ。「あの男も――あの家庭教師も――ネジダーノフ氏も、やはりこれに關係してるに相違ありません。僕は首を賭けてもいゝ、みんな一つ穴の貉ですよ！　あの男は捕まらなかつたのですか？　ご存じありませんか？」

シピャーギンはまたちよつと手首を動かした。

「わたしは知らない――また知らうとも思ひません！　時に、」と彼は妻に向かひながら言ひ添へた。「二人は結婚したさうだよ。」

「誰がそんな事を言つたんですの？　やはりこの人？」ヴレンチーナ・ミハイロヴナは再びパークリンを眺めたが、今度は少し目を細めてゐた。

「あゝ、やはりこの人だ。」

「さうして見ると、」とカルロメイツェフが引き取つた。「この人はきつと二人の居どころを知つてるに相違ないです。――君、あの二人がどこにゐるか知りませんか？　どこにゐるか知つてるでせう？　え？　え？　え？　知つてるでせう？」

パークリンは逃げ出しさうな素振りなど、少しも見せてゐないのに、カルロメイツェフはその道を遮らうとでもするやうに、相手の目の前をちよこ〳〵歩きはじめた。「さあ、聞かして下さい！　返事をして下さい！　え？　え？　知つてるでせう？　知つてるでせう？」

「たとへ知つてをりましても、」パークリンは忌々しさうに言ひだした――たうとう癇の蟲が腹の中で動きだして、兩眼がぎら〳〵と光つて來たのである。「たとへ知つてをりましても、あなたには申し上げないでせうよ。」

「おゝ……おゝ……おゝ……」とカルロメイツェフは呟いた。「聞きましたか……聞きましたか！　この男もやはり――この男もやはりあいつらの一味に相違ないですよ！」

「お馬車の用意が出來ました！」はいつて來た侍僕が、大きな聲でかう喚いた。

シピャーギンは元氣のいゝ優美な身振りで帽子をとつた。けれどヴレンチーナ・ミハイロヴナは一生懸命に、明日の朝まで待つやうにすゝめた。外は夜で眞暗だとか、町ではもうみんな寢てゐるだらうとか、そんな事をしたら神經を掻き亂すばかりで、そのうへ風をひく心配がある――かういふ尤も至極な理由を並べて見せたので、シピャーギンもたうとうそれに贊成して、かう叫んだ。

「それでは仰せに從ひませう！」依然として優美ではあるけれど、もう元氣のよくない身振りで、彼は帽子を卓の上へ載せた。

「馬をはづすんだ！」と彼は侍僕に號令をかけた。「しかし、明日の朝は正六時に、ちやんと用意が出來てゐなけりやいけないぞ！　いゝか？――行つてもよろしい！――待て！　えゝと……このお客さまの馬車は歸してしまへ。馭者に金を拂ふんだぞ！　え？　コノバーチン君、君は何か言はれたやうですな？――明日は一しよにお連れしますよ、コノバーチン君！　何ですつて？　どうも聞こえませんな……君はヴートカをあがりますか？――コノバーチンさんにヴートカをさし上げろ！　いやですつて？　お飲みにならない？　さういふ譯なら……フョードル！　この方を

綠いろの部屋へご案内しろ！――お休みなさい、コノ……」

パークリンはたうとう我慢しきれなくなつた。

「パークリンでございます‥」と彼は喚いた。「わたしの苗字はパークリンです！」

「さう……さう。なに、そんな事はどちらでも同じですよ――ちよつと似てるぢやありませんか。それにしても、あなたはその痩せた體格に似合はない、大きな聲を出しますね！　さやうなら、パークリン君……今度は間違はなかつたやうですね？　シメオン君、君も僕と一しよに行つてくれるでせうね？」

「えゝ、そりやもう！」とカルロメイッェフは答へた。

パークリンは綠色の部屋へ案内された。しかも戸に鍵までかけられたのである。彼は寢床の中へはいりながら、英吉利式の錠前にがちりと鍵のかゝる音を聞いた。彼は自分の『素敵な』思ひつきをさん〳〵罵つて――氣持ちの惡い眠りに落ちた。

翌日の朝まだ五時半ごろから、侍僕が來て彼を起こした。やがて珈琲が運ばれた。彼が珈琲を飲んでゐる間ぢう――はでな肩章をつけた侍僕が、盆を手に持つたまゝ、忙しさうに足ぶみしながら待つてゐた。それは『早くしろ――旦那さま方がお待ちかねだぞ』とでも言ひたさうな樣子であつた。それから彼は下へ案内された。もう家の前には荷馬車が廻されてゐた。すぐ傍にカルロメイッェフの幌馬車もあつた。シピャーギンは丸い襟のついた駱駝の外套を着て、入り口の階段に現れた。かういふ風の外套は、シピャーギンが一生懸命に機嫌をとつて、しきりに癖を眞似てゐる一人の高官を除くほか、もうずつと前から誰も着る者がたくなつてゐた。かういふ譯で　重大な公務に關する場合に限り、彼はこの外套を着用することにしてゐるのであつた。

シピャーギンはかなり愛想よくパークリンに會釋して――精力的な手つきで　箱馬車を指さしながら乘車を乞うた。

「パークリン君、どうかわたしと同乘して下さい、パークリン君！　パークリン君の鞄を馭者臺へ置きなさい。わたしはパークリン君を送つて上げるから。」パークリンといふ言葉に力を入れて、Aの字に殊更ら強いアクセントをつけながら、シピャーギンはかう言つた。それは丁度、『お前はこんな渾名を持つてゐる癖に　ちよつと間違つた呼び方をされると、腹を立てるなんて――ぢや、幾らでも言つてやらう！　さあ、これを喚へ！　喉につまるほど喚へ！』とでも言ひたさうな調子であつた。『パークリン君！　パークリン！』この不運な名前は　すが〳〵しい朝の空氣の中で、高々と響き渡るのであつた。朝の空氣はあまりすがすがし過ぎて、シピャーギンの後から出て來たカルロメイッェフに、幾度も佛蘭西語で　brrr! brrr! brrr!　と呟かしたほどである。彼は幌をおろした洒落た馬車に乘りながら、きつちり外套の前をかき合はせた（彼を友人に持つてゐた不幸なセルビヤの公爵ミハイル・アブレノーギッチは、カルロメイッェフのこの馬車を見て、すつかり同じやうなものをベンデルの店から買つたのである。「ご承知ですか、ベンデルを、エリセー原のあの大きな馬車屋を？」と彼はよく言ひ〳〵したものである）。半ば開かれた寢室の窓の鎧戸ごしに、『夜の頭巾』を被つたアレンチーナ・ミハイロヴナが覗いてゐた。

シピャーギンは馬車に乘つて、彼女に手でキッスを投げた。

「パークリン君、君、窮屈ぢやないですね！――さあ、出した！」

「兄のことをお願ひします。どうか容赦して下さい。」といふアレンチーナ・ミハイロヴナの聲が聞こえた。

「大丈夫ですよ、ご安心なさい。」帽子の庇の蔭から勢よく彼女を見上げながら、カルロメイッェフがかう叫んだ。その帽子は彼が自分で工夫した妙な旅行帽で、ちやんと徽章までつけてあつた……「捕まへなくちやならないのは、まるでほかの人間なんですよ！」

「さあ、出した！」とシピャーギンは繰り返した。「パークリン君、君さむくはないですか？――さあ、出した！」

二臺の馬車は走りだした。はじめ十分ばかりの間、シピャーギンもパークリンも沈默を守つてゐた。みすぼらしい外套を着て、くたびれた帽子を被つた不運なシールシュカは、馬車の内部に張つてある瞽澤な青絹を背景にすると、一層みすぼらしく見えるのであつた。ちよつと指がばねに觸つただけで、きり〳〵と卷き上がる華奢な水色の帷や、しなやかな白い羊の毛皮で作つた膝かけや、前の方にとり付けてある桃心木の箱などを、彼は無言のまゝ見廻してゐた（その箱には、書信用の板が自由に引き出せるやうに取りつけられて、そのうへ書棚まで設けてあつた――ボリース・アンドレーイッチは佛蘭西のチェールのやうに、旅行中でも馬車のなかで仕事するのが好きであつた――といふよりも、人からさう思はれるのが、好もしかつたのである）。パークリンは臆した心持ちになつてゐた。シピャーギンはつるつるに剃り上げた自分の頬を掠めて、二度ばかり彼に流し目を投げた――それから、スラヴ式に肉の太い頭文字を唐草にして飾つた銀の煙草いれを、ゆつくりとも〳〵しい手つきで脇の衣嚢から取り出して、相手にすゝめるのであつた……實際一本のシガーが、英吉利製の黄ろい革手袋に

包まれた、人さし指の間に輕く挾まれたまゝ、パークリンの前にさし出されたのである。

「わたしは煙草は頂きません。」とパークリンは呟いた。

「はゝあ！」とシピャーギンは答へて、自分でそのシガーをふかし始めた。シガーは飛びきり上等のレガリアであつた。

「パークリン君……一つぜひ君にお話ししなければならない事があります。」驚りの高い煙の渦をゆる〳〵と、つゝましやかに吸つては吐きだしながら、彼はかう口をきつた……「わたしは……實際のところ、君に對して……非常に感謝してゐるのです……昨日……わたしのとつた態度は……幾分かど立つて見えたかも知れませんが……それはわたしの……性格に合はないことなんです（シピャーギンはわざと不規則な句の切り方をした）。それは敢て誓つてもいゝくらゐです。——しかし、パークリン君！　どうかわたしの……立ち場にもなつてみて下さい——（シピャーギンは　ガーを右から左へ舌で唾へ直した）。現在わたしの占めてゐる位置が……何といふか……人の目に立ちやすい關係上、今度のやうに突然……家内の兄が……あゝいふあるまじき事を仕出かして……自分自身ばかりでなく……わたしの顏にまで泥を塗るなんてことは！　え？　パークリン君！　君は事によつたら、そんな事など何でもないとお思ひかも知れないが　」

「わたしはそんな事など考へもいたしません、閣下」

「君はご存じないですか、一體どういふ譯で……さうしてどこで義兄は捕縛されたんでせう？」

「T……郡だと聞きましたが。」

「誰から聞きました？」

「ある……ある人から。」

「無論、島なんぞから聞かれたのぢやないでせう。——しかし、どういふ人物です？」

「それは　縣知事の祕書の助手から聞きましたので……」

「何といふ名前です？」

「祕書ですか？」

「いや、助手です。」

「その人は……その人はウリャシエーギッチと申しまして、なか〳〵立派な官吏でございます、閣下。——この出來事を聞くとすぐ、わたしはお宅へ伺つた次第なので。」

「ふむ、なるほど、ふむ、なるほど！——わたしは繰り返して言ひますが、實に感謝に堪へんです。しかし、何といふ氣ちがひじみた話しでせう！　實に氣ちがひじみてるぢやありませんか？　え？　パークリン君？　え？」

「全く氣ちがひじみてをります！」とパークリンは叫んだが——その背中には生溫かい汗が、小蛇のやうにうねり始めた。「それはつまり、」と彼は言葉を續けた。「露西亞の百姓に對して全然理解を缺いてゐるからです。マルケーロフ氏は、わたしの知つてゐる限り、非常に善良で高潔な心の持ち主ですが、しかし、露西亞の百姓といふものを、まるで理解してゐられなかつたのです（パークリンはちらとシピャーギンを見やつた。こちらは心持ち彼の方に體を向けて、敵意こそないけれど、冷い視線を浴びせかけたのである）。露西亞の百姓を動かすには、たとへ一揆を起こさせる場合でも、最高權威——つまり皇室に對する恭順の念を利用しなければなりません。何か傳說めいたものを考へ出さなくちや駄目です——あの僭王ドミートリイの話しでも、それが分かるぢやありませんか——つまり、眞っ赤になつた銅錢で、皇室の徽章めいた物を胸に烙きつけて見せなくちやならないのです。」

「さう、さう、プガチョーフのやうにね。」とシピャーギンは遮つた。その調子はまるで『われ〳〵はまだ歷史を忘れちやゐないよ：　さう並べ立てるのはよすがいゝ！』とでも言ふやうであつた。「あれは氣ちがひじみてる！　實際氣ちがひじみてる！」とつけ足して、シガーの先から立ち昇る煙の流れに見入るのであつた。

「閣下！」パークリンは勇を鼓してかう言つた。「わたしはたゞ今、煙草をのまないと申しましたが：それは嘘なのでした——實は頂くのでございます。あなたのお煙草か何とも言へない驚りがいたしますので……」

「え？　何？　何ですつて？」とシピャーギンは、夢から醒めたやうに問ひ返した。そして、パークリンに自分の乞ひを繰り返す暇を與へないで、シガーケースの蓋を開いてさし出した。彼が相手の言葉をはつきり聞き分けてゐながら、たゞ自分の威嚴を示すために、あゝした問ひを頻發したといふ事は、つまりこの行爲によつて明瞭に證明された譯である。

パークリンはさも感謝に堪へないやうに、そつと葉卷きをふかし始めた。

『どうやらいゝ機會らしいぞ』と彼は考へた。けれど、シピャーギンが先手をうつた。

「君はたしか、」と　は無雜作な聲で言ひだした。そして、シガーをと見かう見したり、帽子を後ろから前の方へずらしたりしながら、わざと言葉に間を置くのであつた。「君は確か話しをされたでせう……え？　そら、あの……わたしの……姪と結婚した、君の友人のことを話されたでせう。

――ときゞあの二人に會ひますか？　こゝから餘り遠くない所へ落ちついたんですつて？」

『そうら！』とバークリンは考へた。『シールシュカ、用心しろ！』

「わたしは、後にも先にもたつた一ど會つたばかりでございます、閣下！　あの二人は全く……こゝから餘り遠くない所に住んでをります。」

「君は勿論お分かりでせうが、」とシピャーギンは依然たる調子で言ひ續けた。「もう前にも君に宣言した通り、わたしはあの輕はずみな娘にも、また君の親友にも、今後まじめに興味を持つわけに行かないのです。わたしは偏見など持つてはゐません、どういたしまして！　しかし、君だつて察して下さるでせうが、これはあんまり滅茶苦茶すぎますよ。馬鹿々々しいですからね、實に。もつとも、わたしの考へでは、あの二人を結びつけたのは、何か感情などと言ふものよりも、寧ろ政治上の意見なのでせう……政治上の意見です!!」と彼は繰り返して、眉を竦めた。

「わたしもさう考へてをります、閣下！」

「さう、ネジダーノフ氏は完全な赤色だつた。しかも、感心なことには、自分の所信を隱さうとしなかつたつけ。」

「ネジダーノフは、」とバークリンは冒險を試みた。「實際、前後の思慮もなく夢中になつたのかも知れません。しかし、あの男の心情は……」

「善良なものです。」とシピャーギンが引き取つた。「勿論です……勿論です、丁度マルケーロフと同じやうにね。あの連中はみんな善良な心情を持つてゐますよ。多分あの男も今度の事件に關係したことだらう――そして、やはり卷き添へを食ふくらゐが落ちだらう……あの男のためにも、一肌ぬがなくちやならないかなあ！」

バークリンは兩手を胸に組み合はせた。

「あゝ、是非、是非どうぞ、閣下！　どうかあの男に保護を加へてやつて下さい！　全く……あれはそれだけの價値のある男です……閣下のご同情に價ひする男です。」

シピャーギンはちよつと鼻を鳴らした。

「君はさう思ひますか？」

「それに、たとへあの男のためでなくとも……あなたの姪ごのために、あの男の連れあひのために！」（『あゝ！　ああ！』とバークリンは考へた。『おれは何て出たら目を言つてるんだらう！』）

シピャーギンは目を細めた。

「君はお見うけしたところ、實に友情の深い人らしいですね。それは結構なことです、感心なことですよ、君。――そこで、あの二人はこの近所にゐると言はれるんですな！」

「はい、閣下、ある大きな工場に……」かう言ひかけて、彼は思はず舌を嚙んだ。

「ちえ、ちえ、ちえ、ちえ……ソローミンのところだな！　なるほど、さうか！――もつとも、それは前から知つてゐましたよ。人から聞きましたよ、噂に聞いてゐましたよ……さうなんです。」（シピャーギン氏はそんな事などまるで知つてもゐなかつたし、誰一人そんな話しをした者もなかつたのである。けれど、ソローミンの訪問や、二人の夜半の會見などを思ひ出して、ちよつと鎌をかけてみたのであつた……すると、バークリンはすぐそれに引つかゝつてしまつた）。

もし、それをご存じだとすれば、」と彼は言ひかけたが、またもう一ど舌を嚙んだ……けれどもう遲かつた……シピャーギンが自分の方へ投げた一瞥を見ただけで、彼は自分が初めから終ひまで、猫に捕まつた鼠のやうに弄ばれてゐたことを悟つた。

「もつとも、閣下、」と不幸な男はしどろもどろに言ひだした。「ぜひお斷りして置かなければなりませんが、わたしも詳しいことは一向存じませんので……」

「だから、わたしも別に訊いちやをりませんよ。飛んでもない！　何を仰しやるんです?!　一體わたしを誰だと思つてるんです、また自分を誰だと思つてるんです？」とシピャーギンは傲慢な調子で言つて――それきり大臣級の高みへ引き上げてしまつた。

バークリンはまた自分で自分をみじめな、小つぽけな、袋の鼠のやうに感じた……それまで彼はシピャーギンと反對の方へ葉卷きを向けて、そつと脇の方へ煙をふかしてゐたが、この時すつかり口から煙草をとり出して、喫むのをやめてしまつた。

『あゝ大變だ！』と彼は心の中で唸つた――熱い汗が前より一そう激しく彼の四肢を流れた。『おれは何を仕出來したんだらう！　誰もかれもみんな賣つてしまつた……おれは上等の葉卷き一本で、買收されたのだ、頭がぽつとなつて了つたのだ!!　おれは密告者だ……これからどうしたらこの失策がとり戻せるか知らん？　大變なことになつて了つた！』

けれどもう取り返しはつかなかつた。――シピャーギンは例の『堂々たる』外套にくるまりながら、やはり大臣らしくもの〳〵しい態度で、悠々と居眠りをはじめた……それに十五分とたゝないうちに、二臺の馬車は縣知事邸の前へ止まつたのである。

三五

S……縣の知事は暢氣な、人のいゝ、社交なれた將軍の一人であつた。この種の將軍たちは、驚くばかり綺麗に磨き上げた白い體と、同じくらゐ清らかな魂の所有者で、名家に生まれて立派な教養をうけた、いはゆる粒だつた連中なのである。彼らは決して『人民の牧者』となる準備なんかしないけれど、極めて水際だつた行政的手腕を示すのが常である――そしてろく〳〵仕事もしないで、絶えず彼得堡に憧れて、小綺麗な地方の貴婦人連の尻を追ひ廻しながら、自分の預かつてゐる縣に疑ふ餘地のない利益を貢献して、立派な記憶を殘して行くものである。

知事はたつたいま牀を出たばかりで、絹の寛衣に夜の肌着の前を擴げながら、鏡臺の前に坐つて、まづ、束にするほど掛けてゐる聖像や守りをはづした後、オーデコロンを混ぜた水で、顔や首を擦つてゐた――そこへシピャーギンとカルロメイッェフが極めて重大な、急を要する事件で來訪したといふ取り次ぎがあつた。彼とシピャーギンは非常に親しい間柄で、『君僕』で話し合ふ仲であつた。二人は若い時からの知り合ひで、しじう彼得堡の客間で顔を合はしてゐたが、最近に至つて、知事はシピャーギンの名前を思ひ浮かべるたびに、未來の大政治家に對するやうな心持ちで、尊敬に充ちた『あゝ！』といふ嘆聲を、心の中で發するやうになつた。カルロメイッェフの方は幾分知己が淺いし、從つて尊敬の程度もずつと低かつた。いつ頃からかこの人間に關して、『よからぬ』訴へが知事の耳へ入るやうになつたからである。けれど何はともあれ、出世する人間として、彼を遇してゐた。

知事は來客を書齋へ通すやうに命じて――やはり同じ絹の寛衣を着たまゝ、早速客の前へ現れた。そして、かういふ非公式の服裝で客に接するのを謝りもしないで、さも馴れ〳〵しげに握手した。――もつとも、知事の書齋へはいつたのは、たゞシピャーギンとカルロメイッェフだけであつた。パークリンは客間に殘つた。彼は馬車からおりるとき、ちよつと家に用事があるからと呟いて、その場を辷り拔けようとしたが、シピャーギンが慇懃な態度ではあつたけれど、しつかりと彼を引き止めたのである――カルロメイッェフはその傍へ駈けよつて、シピャーギンに耳うちした。あれを返してはいけません、決して。シピャーギンはぐんぐんパークリンをしよ引いて行つた。尤も、知事の書齋へは連れて入らないで、例の慇懃なしつかりした調子で、こちらから呼ぶまで客間で待つてゐるやうに賴んだ。――パークリンはこゝでもそつと逃げ出さうとしたが……カルロメイッェフの注意を受けた逞ましい憲兵が、戸口に姿を現したのである……で、パークリンはそのまゝそこに殘つた。

「ヴルデマール．僕が何用でこゝへ來たか、無論、想像がつくだらうね？」とシピャーギンが口をきつた。

「いや、つかないね。」と愛すべきエピキュリアンは答へた――そのとき愛嬌のいゝ微笑が、薔薇色をした頰に丸みをつけて、絹糸のやうな口髭で半ば蔽はれた、輝くばかり白い齒を見せたのである。

「え？……だつて、マルケーロフが？……」

「マルケーロフつて、何者だね？」と知事は依然たる表情で繰り返した――彼は第一、きのふ捕縛された男の名前がマルケーロフだといふことを、充分にはつきり覺えてゐなかつたし、第二に、シピャーギン夫人がこの姓を名乘る兄弟を持つてゐることを、すつかり忘れてゐたのである。「一たい君は何だつて立つてるんだね、ボリース？　まあ、かけ給へ。茶でも出さうかね？」

しかし、シピャーギンは茶どころでなかつた。

やうやく彼が事の次第を物語つて、カルロメイッェフと同道で來た理由を說明すると、知事はいかにも情なささうな叫び聲を立てゝ、自分の額をぽんと叩いた。彼の顏は急に悲しさうな表情を浮かべた。

「さうだ……さうだ……さうだ！」と彼は繰り返した。「何といふ氣の毒なことだ！　あの人は僕の所にゐるよ――今日――ほんの當座だけね。君も知つてる通り、僕はさういふ連中を、一晩以上自分の家へ置きやしないんだ。それに憲兵隊長も町にゐないし、さういふわけで、君の兄さんもこゝに引つかゝつたんだよ……しかし、明日は護送することになつてゐる。いや、どうも困つたことだね！――君の妻君も、きつと辛がつてゐるだらう!!　一たい君はどうしてくれと言ふんだね？」

「僕はこゝで、君の前で、兄に面會したいんだが――もー法に違反しないとすれば。」

「減相もない！　君のやうな人間に法律も何もあつたものかね。――僕は實に同情するよ……これは恐ろしいことだ、全く！」

彼は一種特別な手つきで、呼び鈴を鳴らした。副官が姿を現した。

「あゝ、男爵、どうか一つ――その――うまく取り計らつてくれ給へ。」彼は何をどんな風にするかといふことを說明した。男爵は姿を消した。「まあ、どうだらう、君、あの人は危く百姓どもに殺されるところだつたよ。後ろ手に縛

り上げて、荷馬車の中へ抛り込むと――そのまゝどん〳〵連れて來たんだからね！　ところが、あの人は――まあどうだらう！――一向百姓どもに腹も立てなければ、憤慨する模樣もない、本當なんだよ！　全體になか〳〵落ちついた人物で……僕もびつくりしてしまつた。まあ今に君、自分で見てみ給へ。あれは落ちついた狂信者なんだね。」

「それが一番厄介な代物なんですよ。」とカルロメイッェフがしかつめらしい調子で言つた。

知事は額ごしに彼を見やつた。

「あゝ、さう〳〵。君に話したい事があるんですがね、セミョーン・ペトローギッチ。」

「何ですか？」

「別にどうといふ事でもないが、いかんですなあ！」

「と言ひますと？」

「つまり、君の債務者ですね、そら、いつか僕の所へ嘆願に來た百姓ですよ……」

「それが？」

「あれが首を縊りましたよ。」

「いつです？」

「それはいつだつて同じことですよ。――たゞどうもいかんですなあ。」

カルロメイッェフは肩を竦め、氣どつた恰好で體をゆすぶりながら、窓の方へ離れて行つた。この瞬間、副官がマルケーロフを連れて來た。

知事が言つたのは本當であつた。彼は不自然なくらゐ落ちつき拂つてゐた。いつもの氣難かしさうな表情さへその顏から失せて、妙に無關心な疲勞の色に變はつてゐた。義弟の姿を見た時でさへ、その顏つきは依然として同じであつた。たゞ同行した獨逸人の副官の方へ投げた視線の中に、この種の人間に對する昔ながらの憎惡の影が、ちよつと一瞬間閃いたばかりである。彼の外套は二ところばかり引き裂かれて、それが急場の間に合はせに太い糸で綴つてあつた。額と、眉の上と、鼻筋に、小さな引つ掻き傷が出來て、血が乾固まつてゐた。彼は顏を洗はなかつたけれど、髪はきちんと掻きつけてゐた。兩の手首を深く袖口に突つ込んだまゝ、戸口に近く立ち止まつた。その息づかひは規則ただしかつた。

「セルゲイ・ミハイロギッチ！」シピャーギンは二足ばかり近よりながら、興奮した聲で口をきつた――彼は義兄に觸れるだけ左手をさし伸べたが――事によつたら、相手が前へ進んで來たとき、それを止めるためだつたかも知れない。

「セルゲイ・ミハイロギッチ！　わたしがこゝへやつて來たのは、われ〳〵一同の驚愕や、われ〳〵一同の深い悲しみを表明するためではない――それは君も疑ひはしないだらう！　君は自分で自分を破滅させることを望んでゐたが、いよ〳〵本當に破滅さしたのだからね!!　たゞわたしは君に會ひたかつたのだ、君に一こと言ひたかつたのだ……ええ……えゝ……つまり、その……つまり君に常識と、名譽と、友情の聲を聞く可能を與へるためなのだ！　君はまだ自分の運命を輕くすることも出來るんだよ。どうか、わたしを信用してくれ給へ、わたしは自分に出來るだけの事をするつもりだから！――こゝにゐられる尊敬すべき知事閣下も、このことは確かめて下さる筈だと思ふ。」こゝでシピャーギンは聲を張つた。「もし君が自分の迷ひを心の底から悔悟して、必要な場合ひ少しも隱しだてしないで、一切の事情を告白したなら……」

「閣下、」突然マルケーロフが知事の方へ向きながら、かう言ひだした――その聲の響きも、幾分しや嗄れ氣味ではあつたが、落ちつき拂つてゐた。「あなたがわたしをお呼びになつたのは、もう一ど審問でもなさるためだと思つてゐました……しかし、單にシピャーギン氏の希望だけで、わたしをこゝへ呼び出されたのだとすれば、どうか元の所へ引き取らせ下さい。われ〳〵はお互に理解し合ふことが出來ないんですから、この人の言ふことはわたしに取つて、いはば羅典語も同じことです。」

「何ですつて……羅典語ですつて！」とカルロメイッェフが、高慢な甲高い調子で口を入れた。「それぢや、百姓に一揆を起こさせるのは、あれは羅典語ぢやないんですか？　え？　羅典語ぢやないんですか、あれは？」

「閣下、あれは何者です、祕密探偵でもあるんですか？　いやに世話を燒きますね？」とマルケーロフは訊ねた――弱々しい滿足の微笑が、かすかに靑ざめた唇に浮かんだ。

カルロメイッェフはぶつ〳〵言ひながら、足を蹈みならした……しかし、縣知事がそれを押し止めた。

「それは君、自分が惡いんですよ、セミョーン・ペトローギッチ。なぜ自分に關係のない事に口を出すんです？」

「自分に關係のない事ですつて……關係のない事……これはわれ〳〵一同、われ〳〵貴族にとつて、……共通の問題だと思ひますがね……」

マルケーロフはこれが最後だといふやうに、ゆつくりと冷たい視線をカルロメイッェフに浴びせた後、心もちシピャーギンの方へ體をふり向けた。

「もしあなたが、わたしの思想を說明して貰ひたいと仰しやるのでしたら――一つお聞かせしませう。僕の言つたこ

とが百姓たちの氣に入らなかつたとすれば、彼らは僕を縛つて突き出す權利を持つてゐた譯です。それは僕も立派に認めます。それは彼らの自由です。實際、僕自身が彼らのところへ行つたので、彼らが僕の所へ來たのぢやないですからね。また政府にしても――たとへ僕を西比利亞追放したからつて……僕は別に不平を言ひません――もつとも、自分が悪いとは思つてゐませんがね。政府は自分のすべき事をしてゐるのだから、從つてこれは正當防衛です。これでもう澤山でせう。」

シピャーギンは兩手を山形にさし上げた。

「澤山だつて!! 何といふ言葉づかひだ! 政府がどういふ行動をとらうと、そんな事は問題ぢやない――それにわれ〳〵のとやかく言ふべき事ぢやない。ねえ、セルゲイ、あなたは――いや、君は(シピャーギンは相手の胸の琴線に觸れようと決心したのである)、自分の行爲の無分別で氣ちがひじみてゐることを、果たして感じてゐるかどうか、自分の悔悟の念を實地に證明する覺悟が出來てゐるかどうか、またわたしとして君のことを保證し得るかどうか――ある程度まで保證し得るかどうか、つまりそこの所を知らせて貰ひたいんだよ、セルゲイ?」

マルケーロフは濃い眉をよせた。

「僕はもう言つて了ひました……だから、一ど言つたことを繰り返すのは、厭です。」

「しかし、悔悟は? 悔悟はどうしたのだ?」

マルケーロフは急に全身をびくりと慄はせた。

「えゝ、君の『悔悟』なんか措いてくれ給へ! 君は僕の魂の中へもぐり込まうとするのかね? それは――僕自身に任して置いて貰ひたいね。」

シピャーギンは肩を竦めた。

「それ、君はいつでもそれなんだ。理性の聲に耳を傾けようとしないんだからね! まだそつと體裁よく始末をつける可能があるぢやないか……」

「そつと、體裁よく」とマルケーロフは氣難かしげに繰り返した。「さういふ言葉はもう先刻承知してゐるよ! 人に何か卑劣なことをすゝめるとき、君たちの必ず使ふ言葉さ。それかこの言葉の本當の意味なんだよ!」

「われ〳〵はあなたに同情してゐるのに、」とシピャーギンは說論を續けた。「あなたはわれ〳〵を憎んでゐるんですね。」

「結構な同情だ! われ〳〵を西比利亞へ懲役にやる――それが君達の同情なんだ! えゝ、うつちやつてくれ給へ……後生だから、僕に構はないでくれ給へ!」

マルケーロフはそのまゝ首を垂れた。

彼は表面に平靜を裝つてゐたが、心の中は極度にかき亂されてゐた。何よりも彼を苦しめ苛んだのは、裏切られたといふ意識である――しかもその裏切り者は誰だらう? ほかでもない、ゴロプリョーツクのエレメイである! 彼があれほど盲目的に信頼してゐた、あのエレメイである! 飲んだくれのメンデレイがついて來なかつたのは、實際のところ彼を驚かしはしなかつた……メンデレイは酒飲みだから、從つて臆病風を吹かしたのも無理はない。しかし、エレメイが!! エレメイはマルケーロフにとつて、露西亞國民の權化のやうに思はれてゐた……そのエレメイが裏切つたのである! してみると、今までマルケーロフが努力して來たことは、すつかり見當ちがひだつたのだらうか、間違ひだつたのだらうか? ――それにキスリャコーフも、出たらめを並べてゐたのだらうか? ワシーリイ・ニコライッチの命令もノンセンスだつたのだらうか? 彼が一字々々永遠不易なものと信じきつてゐた、多くの社會主義者や思想家の論文や著述も、すべて下らない紙屑だつたのだらうか? 一體そんな事があり得るだらうか?? 披針の刃先を待ちかねてゐる熟した腫物云々、といふ立派な比喩も――やはり一片の空辭に過ぎなかつたのだらうか? 『いや! いや!』――と彼は心の中で呟いた。と、その青銅のやうな頰には、煉瓦色の赤みが微かにさして來た。『いや、あれはみんな本當なのだ、みんな正しいのだ……悪いのはおれなんだ、おれのやり方がまづかつたんだ、おれが間違つたことを言つたのだ、着手の方法が誤まつてゐたのだ! たゞ命令しなければいけなかつたのだ。そして、もし誰か邪魔をしたり、强情をはつたりする者があれば――そいつの額へ彈丸を打ち込みさへすればいゝので、何も詮索だてをする必要はなかつたのだ! われ〳〵と一しよに進まない者は、生きる權利なんか持つてゐない……すべて、間諜などといふものは、犬のやうに殺されるぢやないか、いや、犬よりもつと悪い死にざまをするんだ!』

その時マルケーロフは、自分が捕まつた町の樣子を、まざ〳〵と思ひ起こした……まづ初めは、みんな押し默つて、互に目くばせしてゐたが、やがて後ろの方で誰かの嗾る聲が聞こえ始めた……と、一の百姓が何かお辭儀でもするやうな恰好で、少し横向きに彼の傍へよつて來た。續いてあの思ひがけない混亂が生じた! 彼は手ひどく地べたへ投げ出された……「諸君……諸君……一たい何をするのだ?」すると彼らは「帶をよこせ! ふん縛つてしまへ!」……骨がめき〳〵いふ 力のない怒怒……口の中

も鼻の穴もわる臭い埃の匂ひ……「ぶち込め、ぶち込め……車の中へ。」誰かが厚みのある聲でから〳〵と笑つた……あゝ！

「間違つてゐた……着手の方法が間違つてゐた……」

彼を惱ましぶんでゐるのは、つまりこれなのであつた。自分が轍の下敷きになつたのは、たゞ一箇人の災厄であるから、共同の事業には何の關係もない——それは忍ばれないことはない……しかしエレメイは！　エレメイは！

マルケーロフが頭を胸に垂れて、悄然と立つてゐる間に、シピャーギンは知事を脇の方へ引つぱつて行つて、ちよつと兩手を擴げながら、小さな聲で話しはじめた。彼は二本の指でかはる〴〵額をこまかく叩いてゐたが、それはつまり『あの不しあはせな男はこゝの所が變になつてゐるのだ、』といふことを見せるためらしかつた。全體として、彼はあの氣ちがひに對して同情でないまでも、憐憫の情を呼び起こさうと努めてゐたのである。知事は兩肩を竦めて、目を上へあげたり閉ぢたりしながら、自分の無力を嘆じてゐたが——それでも結局、何やら約束した。「出來るだけの注意は拂はう……きつと、出來るだけの注意を拂はう。……」かういふ洒落た發音の言葉が、香水をぷん〳〵匂はした口髭の間から、柔かく洩れて聞こえた……

「しかし、君も分かつてゐるだらうが、法律といふものはね！」

「勿論、法律はね！」とシピャーギンは嚴肅な服從の表情で引き取つた。

二人がこんな風に、片隅で話しをしてゐる間、カルロメイッェフはもう一つ所にじつとしてゐられなかつた。彼はあちこち動きまはつたり、輕く舌を鳴らしたり、咳き拂ひをしたりして、ありとあらゆる焦燥の徵候を示してゐたが、たうとうシピャーギンの傍へよつて、急がしげにかう口をきつた。

「あなたはもう一人の方を忘れてゐられます。」

「あゝ、さう！」とシピャーギンは大きな聲で言つた。「ありがたう、よく思ひ出さしてくれました。——わたしは次の事實を閣下の耳に入れなければなりません。」彼は知事に向いてかう言つた……（彼が親友ヲルデマールにかういふ尊稱を用ひたのは、反逆者の前で官憲の威光を傷つけないためであつた）。「わたしの義兄の無謀な計畫には二三の枝葉があると考へます。それには充分な根據があるのです。この枝葉の一つは、つまり嫌疑者の一人は——この町から遠くない所にをります。——こゝへ呼んで來るやうに言ひつけてくれ給へ。」と彼は小聲で附け足した。「あちらの客

間の方で、一人待たしてあるから……僕がつれて來たんだよ。」

知事はちらとシピャーギンを眺めて、『何といふ男だらう！』と心ひそかに感服した。命令は發しられた。一分ばかりたつた時、神の僕シーラ・バークリンが彼の目の前に現れた。

シーラ・バークリンはまづ第一に、知事に向つて恭しい會釋をしようとしたが、マルケーロフの姿を見ると、その會釋を中途でよして、半分腰を屈めたまゝ、兩手で帽子を弄りながらもぢ〳〵してゐた。マルケーロフは放心したやうな視線を投げたが、それが誰かといふ事には氣がつかなかつたらしい。またもや深い物思ひに沈んだからである。

「これが枝葉かね？」土耳古玉で飾つた大きな白い指で、バークリンを指さしながら、知事はかう訊いた。

「いや、どういたしまして！」半ば笑ひを帶びた聲で、シピャーギンは答へた。「もつとも、」と彼はしばらく考へてかう言ひ足した。「實は閣下、」と彼はまた大きな聲で言ひ出した。「いま閣下の前に立つてゐるのは、バークリン氏とかいふ人物です。この人は、わたしの知つてをる限り、彼得堡の住人で、かつてわたしの所で家庭教師をしてゐた、ある青年の親友です。その家庭教師は——まことに赤面の至りですが——わたしの親戚に當たる若い娘をおびき出して、家出をしてしまつたのです。」

「あゝ！　なるほど、なるほど。」と知事は呟いて、首を縱にふつた。「わたしもちよつと聞いたことがある……伯爵夫人が話してゐましたよ……」

シピャーギンは聲を高めた。

「それはネジダーノフといふ人物でして、わたしの信ずるところでは、大いに危險思想の疑ひがあるのです……」

「しかも猛烈な赤色です。」とカルロメイッェフが口を入れた

「過激思想の疑ひが充分です。」シピャーギンはもう一度きつぱりと繰り返した。「從つて、この宣傳運動にも、無論、無關係の筈がありません。その男は、バークリン氏の言明したところによると、商人ファレーフの工場にをるさうです……隱れてをるさうです……」

『バークリン氏の言明したところによると、』といふ言葉が耳に入ると、マルケーロフはまたもやバークリンに視線を投げたが、たゞにやりと無關心な薄笑ひを洩らしたばかりである。

「失禮ですが、失禮ですが、閣下、」とバークリンが叫びだした。「それからシピャーギンさん、あなたにも申し上げま

すが、わたしは決して……決して……」

「商人ファレーフの工場といふんだね？」と知事はシピャーギンに問ひかけた。そしてパークリンの方へ向いては『靜かにしろ、君、靜かにしろ。』とでもいふやうに、輕く指を動かして見せた。「一體あの連中は、あの名譽ある顧客連中は、一體どうしたと言ふんだらう？　昨日も一人つかまつたよ、やはり同じ事件でね。君も名前を聞いたことがあるだらう。ゴルーシキンといふ金持ちさ。だが、あんな男に革命は出來さうもないよ。膝をついて卿ひ廻つてゐるんだからね。」

「商人ファレーフは別に何の關係もないよ。」きつぱりと斷ち切るやうに、シピャーギンはかう言つた。「もつとも、あの男の意見は知らないがね。僕が言つたのは、パークリン君の言葉によると、目下ネジダーノフ君の隱れてゐるといふ、工場のことだけに過ぎないのだ。」

「わたしはそんな事を言つた覺えはありません！」とパークリンはまた悲鳴をあげた。「それはあなたが仰しやつたのです！」

「失敬だが、パークリン君、」依然として容赦のないきつぱりした調子で、シピャーギンはかう言つた。「君をしてその『否定』を發せしめる友情に、わたしは敬意を表します。

（『えゝ……何といふギゾーだ！』と知事はこのとき腹の中で考へた）。しかし、敢て自分自身を例にとつて言ひますが、一體わたしの內部に潛んでゐる肉親の感情が、君の友情ほど強くないと思ひますか？　どうしてどうして！……しかし、君、そんなものより一層つよい別種の感情があります。その感情がわれ〳〵の行動一切を指導しなければなりません。それは義務の觀念です！」

『それは義務の觀念です。』とカルロメイツェフが說明した。

マルケーロフは二人の話し手を一瞥した。

「知事閣下、」と彼は口をきつた。「もう一ど重ねてお願ひします。どうかわたしをあちらへ連れて行つて、このお喋りが聞こえないやうにして下さい。」

けれども知事はその時、少々堪忍袋の緒を切らした。

「マルケーロフ君！」と彼は叫んだ。「わたしは君に忠告するが、君のやうな立ち場にある時には、も少し言葉を愼んで、長上に對する尊敬の念を示したらどうです……殊にいま君の義弟の口から發しられたやうな、あゝいふ愛國的感情を表現してゐる場合ひには、なほさらです！——ねえ、ポリース、」と彼はシピャーギンに向かひながら、かう言ひ足した。「君の高潔なる態度を大臣の耳に達し得るのを、僕

は一身の光榮とするよ。——しかし、そのネジダーノフ君といふのは、一たい誰の所にゐるんだね——その工場のどういふ所に？」

シピャーギンは眉を蹙めた。

「同じくパークリン氏の言ふところによると、そこの技師長をしてゐる、ソローミンとかいふ人のところにゐるさうだ。」

見うけたところ、シピャーギンにとつては、哀れなシールシュカを苛むのが、かくべつ滿足に感じられるらしかつた。彼が馬車の中ですゝめた葉卷きも、へだてのない慇懃な應對ぶりも、いくぶん冗談めいたやうな態度を見せた事も、今すつかり取り返しをつけてゐるらしかつた。

「このソローミンも、」とカルロメイツェフが引き取つた。「正眞正銘の過激派で、共和主義者なのでございます——ですから、閣下、この男にも注意をお拂ひになつた方がよくないでせうか。」

「君はその……人達……ソローミンだの……それから、何と言つたか？　その……ネジダーノフなどといふ人達を知つてゐますか？」いくぶん上官めいた調子で、聲を鼻にかけながら、知事はマルケーロフに訊ねた。

「では閣下、あなたは孔子や、チートゥス・リギウスをご存じですか？」

知事は顏をそむけた。

「こんな人とは話しが出來ない。」彼は肩を竦めながらかう言つた。「男爵、こつちへ來てくれ給へ。」

副官が彼の傍へ駈け寄つた。パークリンは隙を見て、躓き躓き、おぼつかない足どりで、シピャーギンの傍へ近よつた。

「一體あなたは何をなさるのです、」と彼は囁いた。「まあ何だつてあなたは、ご自分の姪ごを破滅させようとなさるんです？　姪ごはあの男と、ネジダーノフと、一緒になつてゐられるんぢやありませんか！……」

「わたしは誰も破滅させやしませんよ、君。」とシピャーギンは聲高に答へた。「わたしは自分の良心の命ずる通りにしてゐるだけです。それに……」

「それに妻君の……僕の妹の命ずる通りにね。君は妻君の尻に敷かれてゐるんだから。」とマルケーロフが負けず劣らず聲高に言葉を挾んだ。

シピャーギンは眉毛一本うごかさうとしなかつた……そんな事は彼に取つてあまり下劣すぎたからである。

「まあ聞いて下さい、」とパークリンは囁き續けた——彼の全身は興奮のあまり（事によつたら、臆病のためかも知

れない）小刻みに慄へてゐた。そして眼は憎悪の念に輝き喉もとには涙がこみ上げて來た――それは彼等に對する哀惜と、自分自身に對する憤懣の涙であつた。「どうか聞いて下さい。わたしは先ほどあなたに向いて、姪ごが結婚なすつたと申しましたが、あれは本當ではありません、嘘をついたのでございます！――しかし、當然この結婚は成立すべきものでありますから、もしあなたがそれを妨害なすつたら――警察をさし向けたりなどなすつたら、あなたの良心には一生ぬぐふことの出來ない汚點がつく事になります――そしてあなたは……」

「君のいま傳へてくれた情報については、」とシピャーギンは一そう大きな聲で遮つた。「疑ひを抱く權利を有してはゐるけれど、もしそれが本當だとしたら、却つて適當の處置を取るべき時機を、早めてくれるに過ぎません。ところで、わたしの良心の淨不淨に關しては、どうか君、心配ご無用に願ひたいものですな。」

「その良心はてら〳〵に光つてるよ。」とマルケーロフが口を入れた。「彼得堡の釉藥がかゝつてゐるから、どんな水けに會つても濡れっこなし！　ところで、君、パークリン君、まあ幾らでも腹に足りるだけ耳打ちするがいゝ。しかし、どんなに耳うちして見たところで、何にもなりやしないんだから、馬鹿々々しい！」

知事はかういふ論爭を、いゝ加減に打ち切る必要を感じた。

「わたしの判斷するところでは、」と彼は言ひだした。「皆さんも充分に所懷を披瀝されたやうですから――そこで、男爵、このマルケーロフ氏をあちらへ連れて行つて下さらんか。さうぢやないか、ボリース、君もこれ以上必要はないだらう……」

シピャーギンは兩手を擴げた。

「僕は言ひ得るだけのことを言つてしまつた！……」

「それで結構！……ぢや、男爵！……」

副官はマルケーロフに近づいて、拍車を一つがちやりと鳴らし、手を水平に動かした……それは丁度『さあ、どうぞ！』とでも言ふやうな具合ひであつた。マルケーロフはくるりと踵を轉じて、そのまゝ部屋を出て了つた。パークリンはたゞ腹の中だけではあつたが、悲痛な同情と憐憫の情をこめて、彼の手を握りしめた。

「工場の方へは若い元氣な連中をさし向けよう。」と知事は續けた。「たゞね、ボリース、僕はこんな氣持ちがするんだ――この先生が（と彼はパークリンを腮でしやくつた）、いま君の親戚の娘さんのことを何か言つたが……その人は

工場の方にゐるさうぢやないか……とすれば、一體……」

「その娘はどうしても逮捕する譯にゆかない。」とシピャーギンは考へ深さうに言つた。「事によつたら、考へ直して歸つて來るかも知れない。もし君が許してくれるなら、一筆書いてやつてもいゝが。」

「どうかさうしてくれ給へ。それに、全體として僕を信頼して貰ひたいね……その何とかいふ男はふん縛るが　しかし、婦人に對しては禮を守るよ……その娘さんにもね！」

「けれど、あなた方はあのソローミンの事については、なんにも手配をなさらないんですか？」しじう耳を欹てゝ、シピャーギンと縣知事の短い內證話しを、聞き洩らすまいとしてゐたカルロメイッェフが、哀れな聲でかう叫んだ。「わたしは確言します、あれが一番の張本人なのです！　かういふ事にかけたら、わたしも隨分鼻がきゝますよ……實によくきゝますよ！」

「さう熱くなつちやいけません、セミョーン・ペトローヴッチ。」と知事が苦笑しながら注意した。「タレイランを思ひ出してご覽なさい！　もしどうかう言ふ事があつたら、われ〳〵だつて遲しつこありませんからね。君はそれより自分の……これでも考へたらいゝでせう！」と知事は自分の頸に手をかけて、喉をしめる眞似をした……「さう、ついでだが、」と彼はまたシピャーギンに話しかけた。「この先生だが（と彼はまたもやパークリンを腮でしやくつた）、どうしたものだらう？　見たところ、さう恐れるにも當たらないやうだが。」

「放免してやり給へ。」とシピャーギンは小さな聲で言つて、獨逸語でかう言ひ足した。「こんなやくざ者は逃がしてやるさ！」

彼はなぜかこの言葉が、ゲーテの『ギョッ・フォン・ベルリヒンゲン』から取つたものゝやうな氣持ちがした。

「君、君はもう行つてもよろしい！」と知事は大きな聲で言つた。「もう君に用はありません。――さいなら！」

パークリンは一同に向かつて小腰を屈めると、そのまゝ打ち挫がれたやうな、消えも入りたいやうな心持ちで往來へ出た。あゝ！　あゝ！　あの侮蔑！　彼は跡かたもなく叩き潰されたやうな氣がした。

『あれは一體なんだらう？』名狀しがたい絶望を抱きながら、彼はかう考へた。『おれは臆病もので、裏切りものだらうか？　いや、違ふ……違ふ。諸君、僕は潔白な人間ですよ――僕だつてまるつきり勇氣がない譯ぢやありませんからね！』

しかし、知事邸の入り口の階段に突つ立つて、非難に充

ちた沈んだ目つきでこちらを見つめてゐる、何となく見覺えのあるやうな姿――あれは一たい何者だらう？ あゝ、それはマルケーロフの老僕であつた。察するところ、彼は自分の主人の後について町へ來たものらしく、たとへ牢屋へ行つても、その傍を離れさうもない樣子であつた……たゞどうしてあんなにバークリンを見つめてゐるのだらう？ 何も彼がマルケーロフを賣つた譯ではないではないか！

『おれは自分に何の緣もゆかりもない所へ、何だつて首を突つこんだんだらう？』と彼はまた絕望に充ちたもの思ひを續けた。『どうして自分の店に音なしく、じつとしてゐられなかつたのだ？――もう今となつてはみんなが笑ひ話しにするだらう、いや、或ひは文章に書くかも知れない――何でもバークリンとかいふ男が、なにもかもすつかり喋つて、自分の友達を……敵の手に渡してしまつたつて！』その時ふとマルケーロフの投げた一瞥と、その最後の言葉が思ひ起こされた。『どんなに耳打ちしたつて何にもなりやしないよ、馬鹿々々しい！』――それから例の老僕の悄然と沈みきつた目つき……彼は聖書に言つてあるやうに、『痛く泣きつゝ』例の綠島をさして――フォームシカやフィームシカや、スナンドゥーリヤの許をさして、とぼ〳〵と歩き出した。

三六

丁度その朝、マリアンナが自分の部屋から出た時、ちやんと着物をつけたまゝ、長椅子に腰かけてゐるネジダーノフの姿が目に入つた。彼は一方の手で頭をさゝへ、一方の手を力なげにじつと膝の上へ垂らしてゐた。彼女はその傍へよつた。

「お早う、アレクセイ……あんた着換へをしなかつたの？ 寢なかつたの？ まあ、何て蒼い顏でせう！」

彼の重たげな瞼はゆつくりと持ち上がつた。

「僕は着換へをしなかつたんだ、寢なかつたんだ。」

「あんた加減が惡いの？ それともやはり昨日の名殘りなの？」

ネジダーノフは首を振つた。

「僕はソローミンがお前の部屋へはいつてから、あれ以來眠られなかつたのだ。」

「いつ？」

「昨日の晩。」

「アレクセイ、あんた嫉妬してるの？ まあ、珍らしい！ それに嫉妬なんかするにも、時と場合ひがありますわ！ あの人は十五分くらゐしか、わたしの所にゐらつしやらなかつたわ……それに、わたし達はあの人の從兄のことを、例のお坊さんの事を話してゐたのよ――わたし達ふたりの結婚をどんな風にするかつて。」

「あの人が十五分くらゐしかゐなかつたのは、僕も知つてゐるよ。あの人が歸つて行くところも見たよ。それに嫉妬なんかしてやしない、どうしてどうして！ しかしそれでも、僕はあれ以來ねむられなかつたのだ。」

「なぜ？」

ネジダーノフは暫く默つてゐた。

「僕はずつと考へて……考へて……考へ拔いたんだ！」

「何を？」

「お前のことや……あの人のことや……それから自分自身のことや。」

「それでどんな事を考へついて？」

「言はうか、マリアンナ？」

「言つて頂戴。」

「僕は自分が邪魔をしてゐると考へたんだ――お前にも……あの人にも……自分自身にも。」

「わたしにも？ あの人にも？ あんたは自分で、嫉妬なんかしないと誓つてらつしやるけれど、あんたが何を言はうとしてゐらつしやるか、わたしには想像が出來てよ。でも、自分自身にとは？」

「マリアンナ、僕の內部には二人の人間が潛んでゐて、それがお互に生きさせないやうに、生きさせないやうにしてゐるのだ。だから、いつそ兩方とも生きるのをやめた方がよからうと思つてね。」

「もう澤山よ、アレクセイ、後生だから――何だつて物ずきに自分で自分を苦しめるんでせう――それにわたしまで苦しめてさ？ わたし達は今どういふ方法を取つたものか、それを考へなくちやならない時ぢやないの……だつて、わたし達を打つちやつては置かないでせう。」

ネジダーノフはやさしく彼女の手を取つた。

「僕の傍へお坐り、マリアンナ。そして友達同志として話しをしようぢやないか――暇のある閒にね――手を貸しておくれ。僕たちは話し合ひをして見た方がよくないか、といふやうな氣持ちがするんだよ。もつとも、すべて話し合ひといふものは、大抵もつれを一層ひどくするとか言ふけれど。でも、お前は利口で優しい女だから、すつかり了解してくれるだらう――そして僕の考へつかないやうな事も、お前なら考へつけるだらうからね。まあ、お坐り。」

ネジダーノフの聲は極めて低かつた――そして、一種特別な友情に近い優しさと、ある哀願の表情とが、ひたとマ

リアンナに注がれた視線に現れてゐた。

彼女はすぐにその傍へ腰をおろして、彼の手を取つた。

「いや、有り難う、マリアンナ――では、聞いておくれ。長く手間は取らせないから。僕は昨夜の間にすつかり頭の中で、自分の言はなければならない事を準備して置いたのだ。ぢや、聞いておくれ。――僕が昨日の出來事をひどく氣にしてゐるなんて、そんな事を考へないでおくれ。たぶん僕は恐ろしく滑稽で、少し厭らしくさへ見えたらう。しかし、無論お前は僕のことについて、惡いことや卑しいことなんか、決して考へはしなかつたらう……お前は僕の性質をよく知つてゐるのだからね。僕は昨日の出來ごとを氣にしてゐないと言つたが、あれは嘘だ、出たらめだ……僕はあれが氣になつて堪らない。但し、それは僕が醉つ拂つて、擔がれて歸つて來たからぢやない――つまりあれで僕の無能が、完全に證明されたからなのだ！　しかも凡ての露西亞人なみに、酒を飲む事が出來ないといふやうな問題ぢやない――全體の話しなんだ！　全體の話しなんだ！――マリアンナ、僕はあり體に言つてしまはなけりやならない。二人を結び合はして、一緒にあの家から逃げ出させた事業を、僕はもう信じてゐないのだ。正直なところ、僕はお前の心火に溫められて燃え上がつたその時から、もう冷めかゝつてゐたのだ――信じてはゐない！　信じてはゐない！」

彼は片々の空いた方の手を目に當てゝ、ちよつと束の間口を噤んだ……マリアンナも、やはり一ことも物を言はないで、目を伏せてしまつた……彼の言つたことは彼女に取つて、少しも耳新しい事ではなかつた。彼女はそれを感じた。

「僕は以前から考へてゐた。」片手を目から離しながら、もうマリアンナの方を見ようとしないで、ネジダーノフは言葉を續けた。「事業そのものは信じてゐるけれど、たゞ自分自身を――自分の力や自分の才能を疑つてゐる、とかう思つてゐた。自分の才能は自分の信念と一致しない、といふやうな氣がしてゐた……しかし、この二つのものは別々に引き離す譯にゆかないらしい――それに自分で自分を欺いたところで仕方がない。さうだ――僕は事業そのものさへ信じてゐないのだ。――ところで、マリアンナ、お前は信じてゐるかい？」

マリアンナはぐつと身をそらして、頭を上げた。

「えゝ信じてよ、アレクセイ。心の底から信じてよ――そしてこの仕事に自分の一生を捧げるわ！　最後の息を引き取るまで！」

ネジダーノフは彼女の方へ向き直つて、感激と羨望に充ちた目で、頭の頂きから足の爪先まで見おろした。

「さうだ、さうだ、僕はその答へを期待してゐた。――さあ、これでお前も分かつたらう、もう二人で一緒にすることが何もないのだ。お前自身、一擊のもとに二人の關係を斷ち切つてしまつたんだからね。」

マリアンナは默つてゐた。

「そこで、ソローミンだが、」とネジダーノフはまた口を切つた。「あの男も信じてはゐないけれど……」

「何ですつて？」

「信じてゐない！　あの男も信じてゐない……しかしそんな事はあの男に必要がないのだ。あの男はしづかに前へ前へと進んでゐるからね。街道づたひに町へ行つてゐる人間は、本當にその町が存在してゐるかどうか、そんな疑ひを起こしはしない。たゞすた〳〵と歩いて行くばかりだ。ソローミンが丁度それと同じ事で、それ以上なにも必要がないのだ。ところが僕は……前へ行くことも出來なければ、うしろへ引つ返すのも厭だし、それかと言つて、一つ所にじつと立つてゐるのも辛氣くさい。これで一體たれに向いて、僕の道づれになつてくれなどと圖々しいことが言へるだらう？　棒の兩はじを二人で持てば、荷物がずつと輕くなるといふ諺を、お前も知つてるだらう？　ところで、一人が擔げなくなつたら、いま一人の方はどうすればいゝんだらう？」

「アレクセイ、」とマリアンナが思ひ切りの惡さうな調子で言ひ出した。「あんたは仰山に考へてゐるらしいわ。――だつてわたし達はお互に愛し合つてるんぢやないの？」

ネジダーノフは深い溜め息をついた。

「マリアンナ……僕はお前に頭を下げてゐる……ところが、お前は僕を憐んでゐるのだ――そしてめい〳〵相手の潔白を信じ合つてゐる。これが本當の眞實なんだよ！　二人の間には愛なんかありやしない。」

「まあ、待つて頂戴、アレクセイ、あんたは一たい何を言ふの！　だつて今日、いますぐ、わたし達には追つ手がかかつて來るんぢやないの……わたし達は一緒に逃げなくちやならないのよ、別れたりなんかする時ぢやないわ……」

「さう、ゾシマ長老のところへ行つて、ソローミンの提案どほり結婚させて貰ふんだらう。しかしね、お前の目から見ると、この結婚は一種の旅行免狀にすぎない、警察の方の面倒を脫れる方便にすぎないのだ、それは僕にもちやんと分かつてゐる……けれど何と言つても、それはある程度までお前を束縛するよ……一しよに一つ所で暮らすやうに

ね……また、たとへ束縛しないまでも、少くとも一緒に暮らすといふ希望を豫想するからね。」

「それは一體どういふこと、アレクセイ？　あんたはこゝに殘つてゐるつもり？」

ネジダーノフは思はず、「あゝ。」と口をとらさうとしたが、考へ直してかう答へた。

「い……い……いや。」

「それぢや、あんたはわたしと違つたところへ立ちのくつもり？」

ネジダーノフは、まだ自分の掌に載つてゐる女の手を、ぐつと固く握りしめた。

「保護者もなしにお前一人うつちやつて置くのは、それは罪惡だ——僕が幾らやくざな人間でも、そんな事は決してしないよ。お前には保護者をつけてあげる……その事は心配しないでおくれ！」

マリアンナはネジダーノフの方へ身を屈めた——そして心配さうに顏と顏を寄せながら、彼の目の中を、魂の中を——魂のどん底までも覗き込まうとした。

「あんたどうしたの、アレクセイ？　一たい何を考へてるの？　言つて頂戴！……わたし心配になつちまふわ。だつてあんたの言ふことがあんまり謎のやうで、本當に變なんですもの……それにあんたの顏いろも……あんたがそんな顏つきをしてるのを、わたし一度も見たことがないわ！」

ネジダーノフはそつと女を押しのけて、そつとその手に接吻した。今度は彼女も逆らはうとしなかつた——が、また笑ひもしなかつた——たゞ依然として心配さうに、不安げに男を見つめるのみであつた。

「どうか心配しないでおくれ！　別に何も不思議なことはないのだから。困るのはたゞかういふ事なんだ——人の話しでは、マルケーロフは百姓たちに撲られたさうだ。あの男は百姓の拳固の味を知つて、かなり痛い目を見たといふ事だ……僕は百姓たちに撲られはしなかつた。却つて、彼等は僕と一しよに飲んで、僕の健康を祝してくれたくらゐだ……けれど、彼らは僕の魂を滅茶々々にぶん撲つた。マルケーロフの體よりもつと酷くやられた。僕は初めから蝶つがひのはづれた人間として生まれて來た……それでそいつを直さうと思つたんだけれど、却つてもつと酷く狂はしてしまつたのだ。お前が僕の顏いろの中に讀んだのは、つまりこれなんだよ。」

「アレクセイ。」とマリアンナはゆる〳〵言ひ出した。「わたしに隱しだてするのは、あんたとして罪なことよ。」

彼はわれとわが手を握りしめた。

「マリアンナ、僕の全存在はお前の目からは、まるで手に取るごとく見えてゐる筈だ。僕が何をしようと——前からちやんと言つておくが——全くのところ、お前は決して、決して驚きやしないだらうよ！」

マリアンナはこの言葉の說明を求めようと思つたが、しかしそれもしなかつた……その上、丁度この瞬間に、ソローミンが部屋の中へはいつて來たのである。

彼の動作は平生より敏活で鋭かつた。目は心もち細められ、幅の廣い唇はきつと締まり、顏ぜんたいが妙に尖つて、固い乾いたやうな、幾分あらい表情を帶びてゐた。

「諸君、」と彼は口をきつた。「僕はわざ〳〵言ひに來たんです——もうぐづ〳〵しちやゐられない。早く用意をおしなさい……出掛けなけりやいけません。一時間のうちに、すつかり支度をしてお了ひなさい。これから結婚式を擧げに行くんです。パークリンからは何の知らせもありません。あの男の馬車は、まづアルジヤノエ村で押さへられて、それからこちらへ返されて來ました……當人はあすこへ引き止められたのです。たぶん町へ送つて行かれたのでせう。勿論あの男は密告などしやしませんが、うつかり何を喋り出さないとも限りませんからね。それにあの馬車から足がつくかも知れません。僕は從兄に前から知らせて置きました。パーゼルが君がたと一緒について行つて、立ち會ひ人にもなつてくれます。」

「ところで、あなたは……君は？」とネジダーノフが訊ねた。「一たい君は出かけないの？　見受けたところ、君は旅支度をしてゐるぢやないか。」ソローミンの穿いてゐる深い沼地用の長靴を指さしながら、彼はかう言ひ足した。

「これはその……たゞちよつと……外がぬかるんでるのでね。」

「しかし、僕らのために責任を負ふつもりぢやなからうねえ？」

「そんな氣はない……いづれにしても……それは僕自身の知つたことなんだから。ぢや、もう一時間たつてからね。——マリアンナ、タチヤーナがあなたに會ひたいと言つてゐます。何かあなたのために用意してゐるらしいです。」

「あら！　さう！　わたし自分でもちよつと行つて來ようと思つてたんですの……」

マリアンナは戸口の方へ向かつた。

ネジダーノフの顏には何か奇妙な表情が描かれた。それは慴えと惱みに近いあるものであつた……

「マリアンナ、お前は行くの？」急に氣落ちのしたやうな聲で、彼はかう口をきつた。

彼女は立ち止まつた。
「わたし三十分たつたら歸つて來るわ。すぐ荷ごしらへして了ふから。」
「さう、でも、ちよつとこゝへおいで……」
「どうぞ。——何の用？」
「僕はもう一度お前の顏が見たいのだ。」彼はじつと長いあひた相手の顏を見つめてゐた。「さやうなら、さやうなら、マリアンナ！」彼女はびつくりした。「おや〳〵……一たい僕は何をしてゐるんだらう？　これはたゞちよつと……無考へに口を辷らしたんだ。——お前、三十分たつたら歸つて來るんたらう？　ね？」
「そりや無論よ……」
「さう……さう……ご免よ。寢が足りないもんだから、頭の中がこんぐらかつて了つて——僕もやはりすぐ……旅支度をするよ。」
マリアンナは部屋を出て行つた。ソローミンはその後から行かうとした。
ネジダーノフはそれを押し止めた。
「ソローミン！」
「何だね？」
「手を貸してくれたまへ。君の親切に對してお禮を言はなくちやならない。」
ソローミンは薄笑ひを浮かべた。
「何といふ事を考へ出したもんだ！」けれども、彼はやはり手をさし伸ばした。
「それから今一つお願ひがある。」とネジダーノフは語をついだ。「もし僕の身の上に何か起こつたら、君に望みを置いていゝね——君マリアンナを見すてないだらう？」
「君の未來の妻君かね？」
「まあ、さうだ——マリアンナだ！」
「第一に、僕は君の身の上に何ごとも起こらないと確信してゐる。第二に、君はすつかり安心してくれていゝよ——マリアンナは君に大切なのと同じくらゐ、僕にとつても大切な人なんだから。」
「おゝ！　僕にはそれが分かつてゐる……分かつてゐる……分かつてゐる！　いや、それで結構。ありがたう。——ぢや一時間たつたらね？」
「一時間たつたら。」
「では、それまでに支度をして置かう。さやうなら！」
ソローミンは部屋を出た。そして階段の上でマリアンナに追ひついた。彼はネジダーノフの事で、何かマリアンナに言はうと思つたが——しかしそのまゝ默つてゐた。また

マリアンナの方でも、ソローミンが何か自分に言はうとしてゐる、しかもそれはネジダーノフの事だと悟つたけれど、これもやはり無言を守つてゐた。

三七

ソローミンが出て行くが早いか、ネジダーノフは忽ち長椅子から跳り上がつて、隅から隅へと二度ばかり歩き廻つたが、やがて急に部屋のまん中に立ち止まつて、一分間ばかり化石したやうに考へ込んでゐた。と、不意にぶるつと身を慄はして、例の『假裝會の衣裳』をかなぐり棄て、足で片隅へ蹴とばすと、もとの自分の着物を取り出して着かへをした。——それから三脚卓に近よつて、抽斗の中から封をした二通の手紙と、もう一つ何か小さな品物を取りだした。そしてその一物だけを衣囊の中へ突つこんで、二通の手紙は卓の上へ載せて置いた。やがて、今度は煖爐の前へしやがんで、通風口を開いた……煖爐の中には灰がうづ高く盛り上がつてゐた。それはネジダーノフの祕藏の手帳をはじめとして、すべての書きものゝ名殘であつた。……彼は夜の間にかういふものをすつかり燒きすてたのである。同じ煖爐の中に、マルケーロフから贈られたマリアンナの肖像が、脇の方へ立て掛けられてあつた。察するところ、この肖像をも燒きすてゝ了ふ勇氣がなかつたものらしい！　ネジダーノフはそつとこれを取り出して、封書と並べて卓の上へ置いた。
やがて彼は決然たる手つきで帽子を引つ掴んで、戸口の方へ出て行かうとした……けれどまた立ち止まつて、後へ引つ返すと、マリアンナの部屋へ入つて行つた。そこに彼は一分間ほど佇んで、あたりを見廻してゐたが、つと狹い寢臺に近よつて、その上に身を屈めた——そして聲に立てぬ孤獨な慟哭と共に、寢臺へ唇を押しあてた。しかもそれは枕の方でなく、足もとの方であつた……それから急に身を伸ばして——帽子を目ぶかに被ると、そのまゝ外へ駈け出した。
廊下でも、階段でも、また下でも誰ひとりに出會はさないで、ネジダーノフは前栽の中へ潜り込んだ。それは灰色をした日で、空は低く垂れ、濕つぽい風が草の穗先をそよろと動かし、木の葉をゆすつてゐた。工場の喧々囂々もほかの日の同じ時刻より、何となく低いやうに思はれた。工場の庭の方からは、石炭や、タールや、油の匂ひが漂つて來る。——ネジダーノフは鋭く胡散くさゝうに邊りを見まはした後、いきなり例の林檎の木をさして眞つすぐに歩みを運んだ。それは彼らが工場へ着いた日に、初めて窓の外を覗

いて見た時、彼の注意を惹いた木であつた。林檎の幹は乾いた苔に蔽はれてゐた。ところ〴〵赤みがかつた綠いろの葉を殘して、殆ど素裸になつたがさ〳〵の枝は、肘を折つて祈りを上げてゐる老人の手のやうに、まがりくねつて上の方へ向いてゐる。ネジダーノフはしつかりした足どりで、林檎の根を取り卷いてゐる黑土の上に立つて、例の衣囊にひそめてゐた小さな一物を取り出した。――それから彼は注意ぶかく離室の窓を見やつた……『もしこの瞬間たれかおれを見つけたら、』と彼は考へた。『或ひは延ばさなければならないかも知れない……』しかし、どこにも人影は見えなかつた……まるで何もかも死に絕えて、何もかも彼から顏をそむけ、彼を運命の擧飄に任せながら、どこかへ行つて了つたやうであつた。――たゞ工場が籠つた音でごうごうと鳴り響いて、わるぐさい匂ひを立て、上の方からは針のやうに冷たい、細かい糠雨が落ち始めたばかりである。

その時ネジダーノフは自分の頭上に擴がつてゐる、曲りくねつた木の枝をすかして、無關心に盲目な表情をした、灰色の濡れた空を仰いだ。そして一つ欠伸をして、體をすくめながら考へた。『もうほかに仕方がないぢやないか、今さら彼得堡へ歸つて、牢へはいる譯にも行くまい。』彼は帽子を脫いで拋り出した。そしてもう前から、甘いやうな惱ましい懶さを、全身に强く感じながら、胸に拳銃を押し當てゝ、引き金のバネを引いた……

何かがどんと彼を突いたやうな氣がした、しかも大して烈しい突き方でもなかつた……けれど彼はもう仰むけに倒れてゐた。そして、一たい自分はどうしたのだらう、なぜたつた今タチヤーナの顏が見えたのだらうと、その譯をはつきりさせようとあせつてゐた……彼はタチヤーナの名を呼んで、『あゝ、うつちやつといてくれ！』と言はうとさへ思つたのである。けれど、もう全身が痲痺したやうになつて、顏の上や、目の中や、額の上や、頭の中で、どんよりした綠いろの旋風が渦まき始めた――そして、何かしら恐ろしく重い平つたいものが、永久に彼を地べたへ押さゝつけてしまつた。

タチヤーナがネジダーノフの目に映つたのは、ゆゑない事ではなかつた。彼が引き金を引いた瞬間に、彼女は離室の窓の一つに近づいて、林檎の下に彼の姿を見つけたのである。『まあ、何だつてこんな天氣に帽子も被らないで、林檎の下なんかに立つてるんだらう？』と考へる暇もなく、彼はさながら麥の束のやうに、いきなり仰むけにぶつ倒れたのである。發射の響きは聞こえなかつた――ごく小さな音だつたからである。けれど彼女はすぐさま、何かよくない事だと直感したので、飛ぶやうに二階から駈けおりて、前栽の方へ出て行つた……彼女はネジダーノフの傍まで駈けつけた……

「アレクセイ・ドミートリッチ、どうなすつたのでございます？」

けれど彼はもう暗黑に領せられてゐたのである。タチヤーナは身を屈めた、と、血が目に映つた……

「パーヱル！」と彼女は上ずつた聲でわめいた。「パーヱル！」

幾秒かの後、マリアンナと、ソローミンと、パーヱルと、それに工場の職工が二人、もう前栽の中に立つてゐた。ネジダーノフはすぐ擔ぎ上げて離室へ運ばれ、彼が最後の一夜を送つた長椅子の上へおろされた。

彼は眞靑な顏をして、じつと動かぬ目を半ば閉ぢたまゝ、仰向けに横たはつてゐた――そしてときゞ〴〵喉でもつまつたやうに咽せ返りながら、さもむづかしさうに長く尾を引いて、ぜい〳〵喘いでゐた。生命はまだ彼を見捨てゝ了はなかつた。マリアンナとソローミンは、長椅子の兩脇に立つてゐた。二人とも殆ど當のネジダーノフと同じくらゐ、眞靑な顏をしてゐた。彼ら――殊にマリアンナは――心の底から打ち拉がれ、ゆり撼かされたやうな感じがして、殆ど正氣を失ふほどであつたが、しかし驚きはしなかつた。『どうしてこれを見拔く事が出來なかつたのだらう？』といふ氣持ちもしたが、それと同時に二人とも、『自分達はそれに氣がついてゐた……本當にちやんと見拔いてゐた、』とかうも感じられるのであつた。彼がマリアンナに向かつて、「たとへ僕がどんな事をしても、前からちやんと斷つて置くが、お前は決して驚きはしないだらう。」と言つた時――それからまた、彼の內部に二人の人間が潛んでゐて、それがどうしても具合ひよく折り合つて行けないと言つた時――そのとき彼女の心中に、一種漠とした豫感のやうなものが、もそろと動きはしなかつたらうか？　なぜ彼女はすぐにその時、これらの言葉に注意を向けて、その豫感に思ひを潛めてみなかつたのだらう？　マリアンナはかう反問した――なぜ、ソローミンが、自分の共犯者のやうに思はれて、彼の顏を見やる勇氣もないのだらうか……なぜソローミンも自分と同じやうに、良心の苛責を感じてゐるやうな氣がするのだらう？　ネジダーノフを限りなく、心も遠くなるほど可哀さうに思ひながら、何となく恐ろしいやうな、息づまるやうな――しかも疚しい感じがするのはなぜだらう？　事によつたら、彼を救ふのも滅ぼすのも、自分の心一つではなかつたらうか？　どうして自分たちは二人と

も、たゞの一言も發し得ないのだらう？　殆ど息をするのさへ憚りながら、何やら待ち設けてゐる……それは一たい何だらう？　あゝ！

無論、望みはなかつたけれど、ソローミンは醫者を迎へにやつた。もう黒ずんで來て、血も何もないネジダーノフの小さな傷口へ、タチヤーナは冷たい水に浸した大きな海綿をあてがつて、頭の毛もやはり酢をまぜた冷水で濕してやつた。突然、ネジダーノフはぜい〳〵喘ぐのをやめて、かすかに身を動かした。

「氣がついた。」とソローミンは囁いた。

マリアンナは長椅子の前に膝をついた……ネジダーノフはちらと彼女を見上げた……それまで彼の目は、すべて瀕死の人の例に洩れず、じつと据わつて動かなかつたのである。

「僕はまだ……生きてる。」聞こえるか聞こえないかの聲で、彼はかう言つた。「今度もまた仕損じて……君がたに厄介をかけた。」

「アリョーシャ。」とマリアンナは呻くやうに言つた。

「あゝ、さう……今すぐ……覚えてるかい、マリアンナ、僕の……詩の中に……『花をもてわれを包めよ……』といふのがあつたらう……一體どこに花があるのだ？……しかし、そのかはりお前が傍にゐる……あすこに、僕の手紙の中に……」

彼は不意に全身をびく〳〵慄はせはじめた。

「おゝ、こゝにゐるな……二人とも……お互に……手を出して——僕の前で……早く……出して……」

ソローミンはマリアンナの手を取つた。彼女は頭を長椅子の上に低く垂れて、傷口のすぐ傍に顔をうつ伏せてゐた。

當のソローミンは夜の如く陰鬱に、嚴然と身を伸ばして立つてゐた。

「これで……いゝ……これで……」

ネジダーノフはまたしやくり泣きを始めたが、今度は何だか恐ろしく並みはづれた泣き方であつた……胸がつき出されて、兩の脇腹がげつそり落ち込んでゐた……

彼は明かに自分の手を、二人の握り合はした手の上へ置かうとするらしかつたが、その手はもう死んでゐるのであつた。

「もうご最後です。」戸口に立つてゐたタチヤーナがかう囁いて、十字を切りはじめた。

しやくり泣きの聲は次第に短かく、間遠になつて來た……彼はなほマリアンナを目で捜してゐたが……一種不氣味な白つぽい膜が、彼の目を内側から蔽ひ始めてゐた……

「よろしい……」これが、彼の最後の言葉であつた。

彼はもうこの世の人でなかつた……結び合はされたソローミンとマリアンナの手は、依然としてその胸の上に置かれてゐた。

彼が殘した短い二通の手紙には、次のやうなことが書いてあつた。一通はシーリンに宛てたもので、ほんの十行ばかりしかなかつた。

「さやうなら、懷かしの友よ、さやうなら！　君がこの一葉の紙片を受け取る時には——僕はもうこの世にゐないだらう。どうして、なぜと訊かないでくれ給へ、氣の毒がるにも及ばない。僕は今かうなつて、却つて氣持ちがいゝのだから、さう承知してくれ給へ。君、わが不朽の天才プーシキンをとり出して、『エヴゲーニイ・オネーギン』の中に描かれてある、レンスキイの最後の描寫を讀むがいゝ。『窓は白墨で白く塗られた。あるじはゐない』云々。これですべては終りなのだ。僕はもう君に何も言ふことがない……つまり、餘り澤山いひたい事があるのに、その暇がないからだ。けれど、君に一言も知らさずに、この世を去るのは忍ましくない。でないと、君が僕のことを、生きた人間として思ひ出すだらうからね。それでは二人の友情に對して、罪惡を犯すことになる、さやうなら。生きながらへてくれ給へ。

君の友　A・N」

いま一つの手紙はも少し長かつた。それはソローミンとマリアンナに宛てたもので、中にはかう書いてあつた。

「わが子らよ！

（この言葉のすぐ後は、ちよつと途切れてゐた。何か消してあるやうにも見えたが、恐らく涙が落ちてしみが出來たものらしい）。

「僕がこんな呼び方をするのを、君がたは變に思ふかも知れない。僕自身ほとんど子供だし、君は、ソローミン君は、もちろん僕より年上だ。しかし、僕はこれから死なうとしてゐるので、生の終焉に立つて、自分自身を老人か何ぞのやうに眺めてゐるのだ。僕は君がた二人、殊にマリアンナに對して、實に申しわけがないと思つてゐる。かういふ嘆きをかけた上に（マリアンナ、お前が嘆いてくれるのは、僕にもよく分かつてゐる）、いろ〳〵心配をさせたからだ。しかし、どうもしやうがない。ほかに解決の方法が見つからなかつたのだ。僕は裸一貫になることが出來なかつた。もうかうなつては、自分をすつかり抹殺するばかりだ。——マリアンナ、僕が生きてゐたら、自分に取つても、またお前にとつても、たゞ重荷となるばかりだつたらう。お前は

寛大な性質だから、この重荷をも新しい犠牲として、喜んで受けたに相違ない。しかし、お前にその犠牲を拂はせる權利は、僕になかつたのだ。――わが子らよ、言はゞ他界の手をもつて、君たち二人を結び合はすことを、どうか僕に許してくれ給へ。君達は二人きりになつたら、きつと幸福だらう。マリアンナ、お前もいよ〳〵ソローミンを愛するやうになるだらう――ところが彼は……彼は初めてシビャーギンの家で會つた時から、もうお前を愛し始めたのだ。僕らはそれから二三日たつて、一緒に家出をしたけれど、この事實は僕にとつて、祕密として殘り得なかつた。――あゝ、あの朝！　何といふ晴れやかな、すが〳〵しい、靑春の氣に滿ちた朝だつたらう！　あの朝はいま僕の心に、君がた二人の生活――お前とソローミン君の生活の象徴として、意味ふかく思ひ浮かべられる。僕はたゞ偶然かれの位置を占めてゐたに過ぎないのだ。が、もう筆を擱かなければならない。お前をほろりとさせるのが、僕の目的ではない……僕はたゞ自分を辯解したいと思ふだけだ。明日は非常に苦しい幾分間が訪れるだらう……しかし、どうも仕方がない。ほかに出口はないではないか！　さやうなら、マリアンナ。愛すべき潔白なる少女よ！　左樣なら、ソローミン！　君に彼女を委託する。幸福に暮らしてくれ給へ――他人を益するやうに生きてくれ給へ。マリアンナ、お前はたゞ幸福な時だけ、僕のことを思ひ出しておくれ。やはり愛すべき潔白な人間ではありながら、なぜか生よりも死の方がふさはしかつた男として、僕のことを思ひ出しておくれ。僕の愛が本當の愛であつたかどうか、それは自分にも分からない。しかし、たゞこれだけの事は分かつてゐる――これ以上强烈な感情は、かつてまだ經驗したことがない。もしこの感情を自分と一しよに、墓の中へ抱いて行かなかつたら、死は僕にとつて、もつと〳〵恐ろしく思はれたに相違ない。

「マリアンナ！　もしいつかマシューリナといふ娘に出會つたら（ソローミンはその人を知つてゐる、もつとも、お前も一ど會つたことがある筈だ）、どうかさう言つてくれ――僕が死ぬる少し前に、感謝の念をもつてあの人のことを思ひ出した……かう言へば、あの人はもう分かつてくれるだらう。

「しかし、もうよさなければならない。――僕はいま窓の外を覗いた。慌たゞしく走る雲の間に、美しい星が一つ浮かんでゐる。雲はどんなに早く走つても、その星を隱すことが出來ない。マリアンナ、この星はお前のことを思ひ出させた。――この瞬間、お前は隣りの部屋に眠つて、何一つ知らないでゐるのだ……僕はお前の部屋の戸口へ近よつて、耳を押しあてゝみた。すると、お前の清淨無垢な、おだやかな呼吸が聞こえるやうな氣がした……さらば！　さらば！　さらば、わが子らよ、わが友よ！　君のAより。

「おや、おや、おや！　何だつて僕はこの最後の書き置きに、われ〳〵の偉大なる事業に一言も言及しなかつたのだらう？――つまり、死ぬる前には、もう嘘がつけないからだらう……マリアンナ、この追伸を許してくれ……虚僞は僕の中にあつた――お前の信じてゐるものゝ中ではない！

「あゝ！　まだ言ふことがあつた。マリアンナ、お前は事によつたら、かう思ふかも知れない――あの男はきつと牢へ入るに相違ないので、それが怖さにこの方法を考へ出したのだ、と。――いや、違ふ！　牢獄はさして恐るゝに足りない。たゞ自分の信じない仕事のために獄に下る――それはもう明かに馬鹿々々しいことだ。つまり、それがために僕は自殺するのだ――決して牢が怖いからではない。

「さらば、マリアンナ！　さらば、わが純眞無垢の少女よ！」

マリアンナとソローミンは、かはる〴〵この手紙を讀んだ。それから彼女は二通の手紙を、自分の肖像と共に、衣嚢の中へ收めた。そして、じつと身動きもせずに立つてゐた。

その時ソローミンは聲をかけた。

「すつかり用意はできた、マリアンナ。出かけよう。彼の意志を果たさなけりやならない。」

マリアンナはネジダーノフに近づいて、もう冷えきつた額に口をつけた――それから、ソローミンの方へふり向いて、かう言つた。

「行きませう。」

彼は彼女の手をとつた――そして二人は部屋を出て行つた。

幾時間かの後、警官の一隊が工場を襲つたとき、彼らは無論ネジダーノフを見出だしたか――それはもう空しい骸であつた。――タチヤーナはきちんと取り片づけて、その頭の下へ白い枕をあて、兩の手を組み合はせ、傍の小卓に花束さへも置いたのである。――一切の必要な命令を授かつたバーゼルは、極度に慇懃な、しかも極度の嘲笑に滿ちた態度で警官を迎へた。それゆゑ警察側では、彼に感謝すべきか、それとも拘引して行くべきか、その處置に迷ふくらゐであつた。彼は自殺の行はれた模樣を、詳しく物語つた後、警官たちに瑞西製のチーズや、マデーラ酒を馳走した。けれども、ヴシーリイ・フェドートゥイチと、よそから

來てゐた令孃の居どころについては、知らぬ存ぜぬで押し通してしまつた――そして、ヴシーリイ・フェドートゥイチは急がしい體だから、決して長く留守を明けたことがない、きつと今日あすにも歸つて見えるだらうから、その時はすぐ一分の猶豫もなく、町へ知らせに行くからと誓つて、お茶を濁しておいた。この點にかけたら、彼は實に正確な男であつた！

かういふわけで、警官たちは死體に番人を殘し、後から豫審判事をよこすからと約束して、何ものをも得ずに空しく引き上げた。

三八

かうした出來事があつてから二日後に――例の『分かりの早い』僧侶ゾシマの門内へ、一豪の百姓馬車が乘り込んだ。その中には、もう讀者に知られてゐる一對の男女が坐つてゐた――到着の翌日、彼らは正式の結婚をすました。やがて間もなく二人は委を隱したが、――善良なるゾシマは、自分のした事を少しも後悔しなかつた。ソローミンの見すてた工場には、持ち主に宛てた一通の手紙が現れた。パーゼルがそれを名宛て先に屆けたが、その中には完全正確を極めた事業報告があつて（事業の成績は申し分なかつた）――三箇月の休暇願ひがはいつてゐた。この手紙は、ネジダーノフの死ぬる二日前に書かれたものであつた。この事實から推して、ソローミンはもうその頃から、ネジダーノフやマリアンナと一緒に工場を出て、一時身を隱す必要を感じてゐた事が推測された。自殺事件に關して豫審が行はれたけれど、何一つ發見することは出來なかつた。――死骸は埋葬に附せられた。シピャーギンは今後姪を捜索することを、一さい中止してしまつた。

九箇月の後マルケーロフの公判が行はれた。法廷に於ける彼の態度も、縣知事邸に於ける場合と同樣に、ある程度の品位を保ちながら、いくぶん悄然とした所があつた。いつもの辛辣な調子は大分やはらげられてゐたが――それは小心なためではなくて、もつと違つた高潔な感情が働いてゐたからである。彼は何一つ辯解もしなければ、何一つ後悔もせず、誰ひとり非難もしなければ、誰ひとり指名もしなかつた。目の中の光りが消えて、やつれはてた彼の顏は、たゞ運命に對する服從と、斷乎たる覺悟の表情を浮かべてゐるのみであつた。簡單ではあるけれど、眞つすぐで正直な彼の答へは、裁判官の間にさへ、同情に似た心持ちを呼び起こした。彼を捕縛して、彼に不利な證明をした百姓たちですら、やはりかういふ心持ちを抱いて、彼のことを『さつぱりした』いゝ旦那だと言つた。しかし、彼の犯罪はあまりに明瞭であつたので、到底刑罰を逃れることは出來なかつた――それに彼自身もこの刑罰を、當然のものとして受け入れたらしい。――その他の少數な共犯者について言へば――マリアンナは身を隱してしまつたし、オストロドゥーモフはある町人に殺された。彼はこの町人に暴動を唆かしたところ、相手に突き飛ばされて、『打ちどころが惡かつた』のである。ゴルーシキンは『眞底からの悔悟』に免じて（彼は恐怖と憂悶のあまり、ほとんど氣が狂はないばかりであつた）、ごく輕い刑に處せられた。キスリャコーフは一箇月ばかり拘留された後、すでに放免されて、またもや諸縣を『飛び歩き』はじめたが、警察側でも別にそれを妨げようとはしなかつた。ネジダーノフは死によつて一切を解決した。ソローミンは證據不充分のため、ある程度の嫌疑を殘したまゝ、棄て置かれることになつた（もつとも彼は裁判を避けようとしないで、期日までにちやんと出頭したのである）。マリアンナのことはまるで問題にならなかつた――パークリンは完全に辷り拔けてしまつた。それに、誰もこんな男に注意を拂ふ者がなかつたのである。

一年半すぎて、千八百七十年の冬が來た。彼得堡では、三等官で侍從を兼ねたシピャーギンが、重大な役廻りを演じようと、準備をさ〳〵怠りなく、その妻はあらゆる藝術の保護者となつて、音樂の夜會を催したり、簡易食堂を設けたりしてゐるし、カルロメイッェフ氏は省内で最も有望な官吏の一人と目ざされてゐた――その彼得堡の町で、ヴシーリエフスキイ島のとある通りを、猫皮の襟の貧弱な外套を着た小柄な男が、輕く體を振りながら抉るやうな足どりで歩いてゐた。それはパークリンであつた。彼は最近かなり變はつて來た。毛皮帽子のはしからはみ出した鬢の毛には、幾すぢかの白髮がまじつてゐた――その反對の側から、かなり肥つた背の高い婦人が、歩道づたひに近よつて來た。婦人は黑つぽい羅紗の外套に、きつちりと包まつてゐた。パークリンはその方へそは〳〵した視線を投げたまゝ、傍を通り拔けようとしたが……不意に立ち止まつて、考へ込みながら兩手を擴げた――と、急に踵を轉じて婦人に追ひつくと、帽子の下からその顏を覗き込んだ。

「マシューリナ？」と彼は小聲で訊いた。

婦人は堂々たる態度で、彼をじろりと一瞥した後――一言も發しないで、そのまゝ先へ歩きだした。

「マシューリナさん、ちやんと見ぬきましたよ。」婦人と並んで跛を引きながら、パークリンは言葉を續けた。「どうか、心配しないで下さい、密告なんかしやしませんよ――僕

はあなたに會つたので、嬉しくてたまらないんですから！——僕はパークリンです、シーラ・パークリンです、ネジダーノフの親友です……ちよつと僕のところへ寄つて下さい——こゝからすぐ一足ですから……どうぞ！」

「ヨ　ソノ　コンテッサ　ロッカ　ディ　サント　フィウーメ！（わたしはサントフィウーメのロッカ伯爵夫人です）」と婦人は低い聲で答へたが、その發音は驚くばかり生粋な露西亞語であつた。

「へ、伯爵夫人だつて……何といふいゝ伯爵夫人だらう……まあ、お寄んなさい、ひと喋りしませう……」

「一體あなたは、どこに住んでらつしやるの？」と伊太利の伯爵夫人は、急に露西亞語で訊ねた。「わたし、暇がないんですから。」

「僕はこゝに、この通りに住んでゐますよ。そら、あれが僕の家です、あの灰色の三階だてが。——しかし、あなたは實にいゝ人ですねえ、もう僕に隱し立てなさらないんですものね！　さあ、手を貸して下さい、一緒に行きませう。——あなたはもう前から、こちらへ歸つてゐられるんですか？　全體なぜあなたは伯爵夫人なんです？　何か伊太利の伯爵と結婚でもしたんですか？」

マシューリナはどこの伯爵と結婚をしたのでもなかつた。彼女は少し前になくなつたサント・フィウーメのロッカ伯爵夫人の名義で下附された、旅行免狀を手に入れたので、伊太利語は一ことも分からないし、おまけに生粋の露西亞つ子らしい顏つきをしてゐる癖に、それを持つて平然と露西亞へ向けて出發したのである。

パークリンは自分の佗び住まひへ、彼女を案内した。一緒に暮らしてゐる脊むしの妹が、小さな臺所と小さな控へ室を隔てゝゐる仕切り板の蔭から、客の出迎へに姿をあらはした。

「さあ、スナーボチカ、」と彼は口を切つた。「ご紹介しよう——この方は僕の大の親友なんだ。早くお茶を持つて來ておくれ。」

マシューリナは（もしネジダーノフの名前が出なかつたら、彼女はパークリンの所などへ來る筈ではなかつたのである）、頭から帽子を取つて、例の男のやうな手で、依然として短く切つた髪を撫でつけた。そして一禮しながら無言に腰をおろした。彼女は少しも變はつてゐなかつた。その目の中には、何かしら凝り固まつたやうな悲哀が宿つて、それが彼女の平凡で無愛想な顏に、一種しんみりした表情を添へてゐた。

スナンドゥーリヤは湯沸の用意に駈け出した——パークリンはマシューリナの眞むかひに座を占めて、輕く相手の膝

を叩きながら目を伏せた。やがて口を切らうとした時には、まづ咳き拂ひをしなければならなかつた。彼の聲は途ぎれて、目には涙の露が浮かんだ。——マシューリナは椅子の背に靠れかゝらないで、眞つすぐにじつと坐つたまゝ、强情にそつぽを眺めてゐた。

「さう、さう、」とパークリンは口を切つた。「いろ〳〵の事がありましたねえ！　かうしてあなたを見てゐると、いろんな事やいろんな人を思ひ出しますよ……死んだ人や生きた人の事をね。——ついでですが、僕の鸚鵡夫婦も死にましたよ……さう〳〵、あなたはあの夫婦をご存知なかつたんでしたつけね。——ちやうど僕が豫言した通り、二人とも同じ日に死にましたよ。——ネジダーノフ……可哀さうなネジダーノフ！……あなたは確かご存じの筈ですね……」

「えゝ、知つてゐますわ。」相變はらずそつぽを向いたまま、マシューリナはかう言つた。

「それからオストロドゥーモフの事もご存じですか？」

マシューリナはたゞ一つ頷いたばかりである。彼女はもつとネジダーノフの話しを續けて貰ひたかつたけれど、思ひ切つてそれを頼む勇氣もなかつた。——こちらはすぐに相手の心を察した。

「あの男が書き置きの中に、あなたのことを書いてゐるとかいふ事ですが、一たいそれは本當なんですか？」

マシューリナはすぐに返事をしなかつた。

「本當です。」やつと彼女はかう答へた。

「いゝ男でしたね！　たゞ自分の柄にない事に首を突つこんだんです！——あの男は僕などと、どつこいどつこいの革命家でしたからね！　あの男がいよ〳〵どんな人間だつたか、あなたお分かりですか？——現實主義のロマンチストなんですよ！　あなた僕の言ふことが分かりますか？」

マシューリナはちらとパークリンに一瞥を投げた。彼女は相手の言ふ事が分からなかつた——それに分からうと努力する氣にもならなかつたのである。パークリンが圖々しくも、自分をネジダーノフに比べようとするのからして、途轍もない奇妙なことに思はれるのであつた。——けれど彼女は、『まあ今は勝手に自慢さして置かう』と考へた。（もつとも、彼は少しも自慢などしてはゐなかつた、それどころか、むしろ彼の考へでは、自分を卑下してゐるくらゐであつた）。

「いつかシーリンとかいふ男が、こゝを訪ね當てゝ來ましたよ。」とパークリンが話をついだ。「ネジダーノフが死ぬる前に、この男にも手紙を出したんださうです。で、この

男が、そのシーリンが、何か故人の書きものが見當たらないだらうか、とかう訊くのです。ところが、アリョーシャの荷物はすつかり封印をして了つてあるし……それに書きものなんか見つからなかつたんですからね。何もかも燒いてしまつたのです——詩まで燒いて了つたのです。——あの男が詩を書いたつてことは、あなたも或ひはご存じなかつたでせうね？僕はそいつが惜しいのです——中にはかなりいゝものもあつたに相違ないですから。さういふものもみんな、あの男と一緒に消えて了つたのです、大きな渦卷きの中へまき込まれて——永遠に亡びてしまつたのです！たゞ友達の間に追憶が殘つてゐるばかりですが、それも當の友達がご同樣に消えて了つたら、それでおしまひですよ！」

パークリンは暫く口を噤んだ。

「その代はりシビャーギン夫婦は、」やがてまた彼は言葉を續けた。「覺えてゐますか、あの寬大ぶつた、えらさうな、蟲づの走るやうな名士たちを——あの連中はいま權勢と名譽の頂上に立つてゐます！」

マシューリナは『シビャーギン夫婦』を少しも覺えてゐなかつた。けれどパークリンは夫婦のものを——殊に夫の方を——心の底から憎んでゐたので、彼等ふたりを『やつゝける』機會を逸する譯に行かなかつたのである。

「何でも先生たちの家には、何とも言へない高尚な調子が充ち滿ちてゐるさうですよ！　しじう善德の話しばかりしてゐましてね!!　たゞ僕はかういふ觀察をしましたよ——あまり善德の話しばかりしてゐる家は、ちやうど病人の部屋でやたらに香を焚きすぎたやうなものです。きつとその前に、何か祕密な惡事を働いたに相違ありません！　どうも胡散くさいですよ！——可哀さうなアレクセイを破滅さしたのもあいつらです、あのシビャーギン夫婦です！」

「ソローミンはどうしました？」とマシューリナは訊いた。

——彼女は急にこの男から彼の話しを聞くのが厭になつて來た。

「ソローミンですか！」とパークリンは叫んだ。「あの男は豪いですよ。きれいに辷り拔けました。前の工場をよして、選りぬきの職工連を引つこ拔いてしまひましたよ。——あそこに一人……したゝか者がゐましてね、パーヱルとかいふ名前だつたが。　そいつも連れてつて了ひましたよ。今では何でもどこか——ペルミあたりに自分の工場を拵へて、小さなものだけれど、組み合ひ組織でやつてゐるさうです。あの男は決して自分のしようと思つた事を、投げるやうな人間ぢやありません！　こつ〳〵と木に穴をあける奴ですよ！　嘴は細いけれど、その代はり丈夫に出來てゐ

まさあ。まつたく偉いです！　何よりも肝腎なのは、社會的病所を一時に癒して了はうとしない事です。なぜつて、われ〳〵露西亞人はどんな國民だと思ひます？　今にも何かが——それとも誰かがやつて來て、われ〳〵一同を一遍でなほしてくれるだらう、われ〳〵の傷口を癒やしてくれるだらう、われ〳〵の病氣をまるで蟲齒のやうに引つこ拔いてくれるだらうと、始終いまか〳〵と待つてゐるんですからね。一體この魔法つかひは誰でせう？　ダーキニズムか？　農村か？　アルヒープ・ペレペンチエフか？　外國との戰爭か？　何でも結構！　たゞ蟲齒さへ拔いてくれりやいゝんです!!　これはつまりみんな不精なのです、億劫なのです、淺はかなのです！——ところが、ソローミンはそんな人間ぢやない、どうしてあの男は蟲齒なんか引つこ拔きやしない——あの男は偉い奴です！」

マシューリナは手でちよつと合ひ圖をした。それは丁度『つまり、あんな人間はぺけにしちやへばいゝのよ。』とでも言ふやうであつた。

「ぢや、あの娘は？」と彼女は訊ねた。「わたし名前を忘れちやつた——ほらあの時——ネジダーノフと一緒に——家出をした？」

「マリアンナですか？　えゝ、あれは今そのソローミンの妻君になつてゐます。もう結婚してから一年以上になります。初めのうちはたゞ名義だけでしたが——今では本當の妻君になつたさうです。さやう——」

マシューリナはまたもや手で同じやうな合ひ圖をした。

以前かの女は、マリアンナに嫉妬を感じたものである。けれど今では、どうして亡き人の思ひ出に背くことが出來たのだらうと、憤りの念を抱いてゐるのであつた……

「多分もう赤ん坊があるんでせうね。」と彼女は無雜作に言ひ足した。

「さうかも分かりません、僕は知らないです。——だが、あなたはどこへ行くんです、どこへ？」彼女が帽子に手をかけるのを見て、パークリンはかう附け足した。「まあ、お待ちなさい。今にスナーポチカがお茶を出しますから。」

彼は本當にマシューリナを引き止めたかつたと言ふよりも、積もり積もつた胸のもやもやを、すつかり吐き出してしまふ機會を逸したくなかつたのである。——パークリンは彼得堡へ歸つて以來、あまり世間の人、殊に若い人に會はないのであつた。ネジダーノフの事件にすつかり懼え上がつた彼は、非常に用心ぶかくなつて、世の中から遠ざかるやうにしてゐた——それにまた若い人達の方でも、うろん臭い目で彼を見るやうになつたのである。一人の男など

は面と向かつて、彼を裏切り者と言つて痛罵したことさへある。かと言つて、老人連と近づきになるのは、彼自身あまり氣が進まなかつた。かういふ譯で、時とすると、幾週間も幾週間も、沈默を守つてゐる事があつた。妹の前では心の底を割つて見せなかつた。が、それは妹に理解の能力が缺けてゐると考へたためではない――おゝ、決してそんな事はない！　彼は妹の智力を高く評價してゐたのである……たゞ妹に對しては眞面目に、全然正直に話しをしなければならない。もし彼が漫罵を逞しうして、『から鐵砲を放し』始めるが早いか、彼女はすぐに一種特別な、注意ぶかい、憐れむやうな目つきで、じつと兄を見つめる――すると彼は妙に間が悪くなつて來るのであつた。しかし、人間といふものは、果たして輕い漫罵なしに生きて行かれるものだらうか？　たとへひよろ〳〵矢でも、敵に一矢むくいなくてはゐられない！　そのために彼得堡の生活は、パークリンにとつて厭でたまらなくなつて來た。で、彼はもう、莫斯科へでもひつ越さうかと考へてゐたのである。さまざまな計畫や、思索や、空想や、時に滑稽で時に皮肉な言葉などが、堰きとめられた水車場の水のやうに、彼の内部に溜まつて行つた　水門を上げる譯にゆかないので、水は淀んで腐るばかりであつた。――そこへマシューリナが舞ひ込んだのである……で、彼は水門を上げて、ひた喋りに喋りはじめた。

彼得堡の町、彼得堡の生活、ひいては露西亞の國全體が、いかに痛罵せられたことだらう！　誰に對しても、何ものに對しても、聊かの容赦もなかつた！　けれどマシューリナには、さういふ事はさして興味がなかつた。とはいへ、彼女は一さい言葉も返さなければ、相手の話しを遮らうともしなかつた……ところが彼にとつては、それ以上何も必要がなかつたのである。

「さやう、」と彼は言つた。「敢て申し上げますが、面白い世の中になつて來ましたね！　世間は沈滯しきつてゐるし、人間はみんな地獄のやうな倦怠に苦しんでゐます！　文學はまるつきり空つぽで、玉でも轉がせさうに廣々としてゐるし、批評の方はどうかといふと……もし若い一流の批評家が、『牝雞は卵を生む性質を有す』と言はうと思へば、この偉大な眞理を叙述するために、まる二十頁くらゐ書き潰しても、まだ言ひ足りないほどなんですからね！　敢て申し上げますがね、この先生がたは羽根蒲團のやうにふくふくしてゐる癖に、水につけたパンのやうにぐちや〳〵して――口角泡を飛ばして論じたてるのは――月並みなことばかりなんですよ！　科學の方は……はは！　わが國に

も碩學カントがをりますが、但し、それは技師のカラーについてるきりでさあ！（カントは襟を意味する）藝術の方もご同樣です！　どうですか、今日あたり音樂會へお出かけになつたら？　國民的歌手のアグレマンツキイが聞かれます……大變な人氣ものですよ……しかし、粥をつめた鯉が――いゝですか、粥をつめた鯉ですよ――こいつがもし聲を授かつてゐたら、きつとあの先生そつくりの唄ひ方をするでせうよ！　しかも、例のスコロピーヒンが――ご存じですか、露西亞の古いアリスタルク（古ギリシャの批評家）を？――その先生までが奴さんを褒めたてゝるんですからね！　これは西歐の藝術とはまるで違ふ、てなことを言つてね！　先生わが國のやくざ畫師まで褒めたてるんですよ！　曰く、わが輩も以前は西歐のために、伊太利畫家のために感激を呼び醒まされたが、今ではロッシーニを聞いても、『えゝ！　えゝ！』と考へるし、ラファーエルを見ても、『えゝ！　えゝ！』と考へた……この『えゝ！　えゝ！』だけで、わが國の青年たちにはもう澤山だ、とかうなんです。すると、その青年たちも、スコロピーヒンの後について、『えゝ！　えゝ！』を繰り返してるんです――しかも、どうでせう、それで恐悦がつてるんですからね！　ところが、それと同時に、人民は貧困の極に達して、苛斂誅求に惱まされてゐます。そして、改革の成功した點は何かと言へば、百姓たちがみんな帽子を被つて、女房どもが頭巾を被るのをやめたくらゐなものです……しかも、飢餓！　淫酒！　高利貸しの跋扈！」

けれどその時、マシューリナが欠伸をした。――で、パークリンは、もう話題を變へなければならないと悟つた。

「あなたまだ聞かしてくれませんでしたね。」と彼は話しかけた。「一體あなたはこの二年間どこにゐて、何をしてゐたんです――そして、いつこつちへ來たのです――またどうして、どんな譯で伊太利人に化けたんです……」

「あなたがそんな事を知る必要はありません。」とマシューリナは遮つた。「そんな事が何になります？　だつてもう今ぢや、そんな事はあなたの專門外ぢやありませんか。」

パークリンは何かにちくりと刺されたやうな風であつた――彼は當惑の情を隱すために、わざとらしいぶつきら棒な聲をたてた。

「まあ、どうともご隨意に。」と彼は言つた。「僕は現代青年の目から見ると、時世おくれの人間です。それは自分にも分かつてゐます。全くその通り、僕はもう……あの線内へはいる譯に行かないんですからね……」彼はしまひまで言ひ終らなかつた。「さあ、スナーポチカがお茶を持つて來ました。一つお茶でもあがりながら、僕の話しを聞いて下

さい。事によつたら僕のお喋りにも、何か面白いことがあるかも知れませんよ。」

マシューリナは茶碗をとつて、砂糖のかけを囓りながら、お茶を飲みはじめた。

パークリンはもう今度こそ、あけつぴろげにから〳〵と笑つた。

「まあこゝに巡査がないからいゝやうなものゝ、伊太利の伯爵夫人だなんて……えゝと、何とか言ひましたつけね？」

「ロッカ・ディ・サント・フィウーメ。」熱い茶を吸ひ込みながら、マシューリナは少しも動じないで、もの〳〵しくかう答へた。

「ロッカ・ディ・サント・フィウーメ！」とパークリンが繰り返した。「しかも、それで砂糖を囓りながら、お茶を飲むんですからね！　どうもあんまり平仄が合はなさ過ぎますよ！　さつそく警察に睨まれるでせうよ。」

「現に國境でも、」とマシューリナは言つた。「何だか制服を着た妙な男が付き纏つて、うるさくいろんな事を訊くもんだから、わたしもう我慢がしきれなくなつて、『後生だから、いゝ加減にしてどいておくれ！』と言つてやりましたわ。」

「あなたはそれを伊太利語で言つたんですか？」

「いゝえ、露西亞語で。」

「ところで、そいつはどうしました？」

「どうつて？　分かりきつてますよ、行つて了ひました。」

「大出來！」とパークリンは叫んだ。「よう〳〵伯爵夫人！　どうぞもう一杯！　そこで、僕はかういふ事を言ひたかつたのです――あなたはさつきソローミンのことを、そつけなくあしらつてお了ひになりましたが、僕は敢てかう申しますよ。あの男のやうな、あゝいふ人間こそ本ものなんです。あゝいふ人間は一時に嚙み碎く譯に行かないけれど、あんなのが本ものなんですよ、全く。そして未來は彼らのものです。あれは英雄ぢやない。またどこかの變人が――亞米利加人だか英吉利人だか覺えてゐないけれど――われわれ貧弱な連中に對する教訓として、ある本の中に書きたてたやうな、『勞働の英雄』とさへ言へません。あれは頑丈で、灰色で、單色をした、民衆の人です。今どきは、つまりそんな人間が必要なんです！　まあ、ソローミンを見てごらんなさい。日の如く聰明で――魚の如く健康です……これが果たして奇蹟でないでせうか！　今までの露西亞はどんな風だつたと思ひます――感情と意識を有する生きた人間は、必ず病人と相場が決まつてゐたんですからね！　ところがソローミンはと言ふと、心はわれ〳〵と同じ惱みをなやみ、われ〳〵と同じ憎みを憎んでゐる――たゞ彼の神經は沈默を守つて――からだ全體が當たり前に動いてゐる……つまり、あの男を偉いといふ所以です！　まあ、考へてもごらんなさい、理想がありながら獸辯を弄せず、教育がありながらしかも民衆出で、單純でありながら腹に分別がある……これ以上何がお望みなんです？……」

「あなたは餘り氣にしない方がいゝですよ。」とパークリンはます〳〵いきり立つて、言葉を續けた。マシューリナがもうとつくに聞くのをやめて、またもやどこか脇の方を見つめてゐるのに、一向氣がつかなかつたのである。「いまわが露西亞の國に、汎スラヴ主義者だの、官吏だの、大小さま〴〵の將軍だの、エピキュリアンだの、模倣者だの、變人だの、いろんな連中がうよ〳〵出て來たのを、餘り氣にしない方がいゝですよ――（僕はハヴローニヤ・フルイシチョーヴといふ奥さんを知つてゐましたが、その人がだし抜けに何のきつかけもなく、佛蘭西正統派の信者になつて、自分が死んだら死體を解剖してくれ――さうすれば心臓にアンリイ五世の名前が書いてあるから、とみんなに吹聽してゐましたつけ……それがハヴローニヤ・フルイシチョーヴの心臓に書いてあるんですからね！）かういふ變人がゐるからつて、何も氣にすることはありません。たゞ本當の昔ながらの道は、ソローミンのやうな人間――灰色で、平凡で、しかも狡猾なソローミン式の人間がゐる所にある、とかういふことを記憶して下さい！　僕がこれを言つた時のことを思ひ出して下さい――千九百七十年の冬、恰も獨逸が佛蘭西を蹂躙せんとしつゝあるとき――また……」

「シールシュカ、」といふスナンドゥーリヤの小さな聲が、パークリンの後ろから聞こえた。「兄さんは未來に對する議論をするとき、わたし達の宗教や、その影響のことを忘れてらつしやるやうだわ……それに、」と彼女は早口に言ひ添へた。「マシューリナさんは、兄さんの言ふことなんか、聞いてゐらつしやらないやうですもの……それよか、お茶でももう一杯おすゝめした方がいゝわ。」

パークリンははつとなつた。

「あゝ、さうだ、あなた――本當に一ついかゞですか？……」

けれどマシューリナは、黒目がちの視線をゆつくり彼の方へ向けて、もの思はしげに口を開いた。

「パークリンさん、わたしあなたにお訊ねしようと思つてたんですが、もしやあなたの所に、何かネジダーノフの書いたものか――それとも、寫眞のやうなものでもありませんか？」

「寫眞があります……ありますよ。しかも、かなりよくとれてるやうです。——卓の中にあつた筈だ——すぐに捜してあげませう。」

彼は卓の抽斗を掻き廻しはじめた——スナンドゥーリヤはマシューリナの傍へ近よつて、長いあひだ同情をこめた目で、じつとその顏を見つめてゐたが、ちやうど自分の仲間か何ぞのやうに、その手を握りしめた。

「あつた！　見つかつた！」とパークリンが叫んで、寫眞を手渡した。マシューリナはろく〳〵見もしなければ、ありがたうとも言はないで、顏をまつ赤にしながら、す早く衣囊へ押し込んだ。そして帽子をとると、戸口の方へ歩きだした。

「もうお歸りですか？」とパークリンは言つた。「どこにお住まひです、せめてそれだけでも……」

「行き當たりばつたりですよ。」

「なるほど、あなたは僕に知らせたくないんですね。ぢやお願ひだから、せめて一つだけ教へて下さい——あなたはやはりワシーリイ・ニコラーイッチの命令で動いてゐらつしやるんですか？」

「そんな事を訊いて何になさるの？」

「それとも誰かほかの人——シドール・シドールイッチあたりの？」

マシューリナは返事をしなかつた。

「それとも、誰か無名の人でも指し圖してゐるんですか？」

マシューリナはもう、一あし閾を跨いでゐた。

「事によつたら、無名の人かも知れませんわ！」

彼女はばたりと戸をしめた。

パークリンは長い間この閉された戸の前に、身動きもしないで立つてゐた。

「無名の露西亞！」たうとう彼はかう呟いた。

——了——

初戀ひ

客はもう疾くに散じてしまつた。時計は十二時半を打つた。部屋の中に殘つたのはたゞ主人と、セルゲイ・ニコラーイッチと、ヴラヂーミル・ペトローヴッチばかりである。

主人は呼び鈴を鳴らして、夜食の殘りを下げるやうに命じた。

「ちや、いよ〳〵決まりましたね。」肘椅子にふか〳〵と身を埋めて、シガーに火をつけながら、彼はかう言ひ出した。「各々自分の初戀ひ物語りをしなくちやならないんですよ。さあ、まづあなたの番です、セルゲイ・ニコラーイッチ。」

セルゲイ・ニコラーイッチは眉も睫も白つぽい、ふつくらした顏だちの、まる〳〵とした男であつたが、まづ主人の方を眺めて、それから目を天井へ向けた。

「僕には初戀ひなんてものはありません。」彼は到頭かう言つた。「僕はいきなり第二の戀ひから始めたんですよ。」

「それはどうして？」

「なに、ごく簡單ですよ。僕は十八の年に、はじめて一人のごく可愛いお孃さんの後を追ひ廻したものです。ところが、僕の追ひ廻し方といつたら、まるでそんな事なんか珍しくもない、と言つたやうな風だつたのです。全く、その後いろ〳〵な女の尻を追ひ廻しましたが、それとちつとも變はつたところがなかつたですよ。もつとも、僕は六つのとき自分の保姆に、最初にして最後の戀ひをしたことがあります——しかし、それはもう大昔のことで、二人の間にあつたこまかい事は、僕の記憶から消えて了つてゐます。それによし覺えてゐたところで、誰がそんなものを面白がるもんですか！」

「それぢや、どうしたものでせう？」と主人が口を切つた。「わたしの初戀ひにしたつて、大して興味をそゝるやうなものがないんですよ。僕はアンナ・イヴーノヴナ——つまり今の家内と知り合ひになるまで、誰にも戀ひをした事がないんですからね——それに、すべてがすら〳〵と事もなく運んだのです。兩親が話しをしてくれると、われ〳〵二人は早速すきになり合つて、猶豫なしに結婚してしまつた——かういふ譯ですから、わたしの話しは一口で濟んで了ひます。だからね、諸君、打ちあけた話しをすると、わたしが初戀ひの問題を持ち上げたのは、つまりあなた方に望みをかけてゐたのです——あなた方はまだ老人とは言へな

いけれど、大して若くもない獨身仲間ですからね。ヴラヂーミル・ペトローギッチ、あなたは何か面白い話しを提供して下さるでせうね？」

「わたしの初戀ひは全く世間なみのものぢやありません。」とヴラヂーミル・ペトローギッチは、やゝ口ごもりながらかう答へた。黑い髮に白いもののまじつた四十男であつた。

「あゝ！」主人とセルゲイ・ニコラーイッチは聲を揃へてかう言つた。「それは尙さら結構……話してお聞かせなさい。」

「よろしい　いや、いけません。話すのはよしませう。わたしは話し上手の方でないから、かさ〳〵してあつけないものになるか、だら長い調子の合はないものになるか、どちらかです。もし何なら、すつかり覺えてゐるだけのことを手帳に書いて——それを讀んでお聞かせしませう。」

ふたりの友は初め承知しなかつたが、ヴラヂーミル・ペトローギッチは、どこまでも自說を主張した。二週間の後、彼らが再び相會したとき、ヴラヂーミル・ペトローギッチは約を果たした。

彼の手帳には次のやうな事が記されてあつた。

一

わたしは當時十六歲であつた。それは千八百三十三年の夏のことである。

わたしは莫斯科で兩親の手もとに暮らしてゐた。父母はカルーガ門に近いネスクーヂヌイ公園に面した、一軒の別莊を借りてゐたのである。わたしは大學へはいる準備をしてゐたが、あまり急がずにぼつり〳〵勉强した。

誰ひとりわたしの自由を束縛するものはなかつた。殊に最後の家庭教師と別れて以來、わたしはしたい放題の事をした。その家庭教師は佛蘭西人であつたが、自分はまるで『爆彈のやうに』露西亞三界へ落ちて來たのだと考へて、そればかり始終くよ〳〵氣にしてゐた。そして恐ろしい表情を顏に浮かべながら、每日朝から晚まで、寢牀の中でごろごろしてゐるのであつた。父のわたしに對する態度は優しかつたけれど、大して氣のない優しさであつたし、母は他に子供がなかつたにも拘らず、わたしに殆ど注意を向けなかつた。ほかの心配にこゝろを奪はれてゐたからである。父はまた若くて、極めて美しい人であつたが、勘定づくで結婚したのである。母は父より十も年上なのであつた。彼女は悲しい生活を送つてゐた。ほかでもない、絕えず興奮したり、嫉妬を起こしたり、腹を立てたりしてゐたのである——けれどそれは父の目の前ではなかつた。母はひどく父を恐れてゐたし、父は父で嚴格な、冷たい、よそ〳〵しい態度を取つてゐた…… わたしはあれほど上品に取りすましして、自から賴むことの深い、自己の權力を絕對に信じ切つてゐる人を、またと二人みたことがない。

この別莊で過ごした最初の二三週間を、わたしはいつまでも忘れないであらう。その頃うらゝかな日和がずつと續いてゐた。わたし達は五月九日、ちやうど聖ニコライの日に、町からそこへ引つ越したのである。わたしは散步をした——時には別莊の庭の中、時にはネスクーチヌイ公園、時にはまた城門の外まで出掛けて行つた。いつも何かの本——例へばカイダーノフの萬國史教科書——を持つて出たが、しかしそれを開けて見ることはごく稀で、大抵は聲たか〳〵と色々の詩を朗吟した。その頃ずゐぶん澤山の詩を諳記してゐたのである。血潮は體の中で湧き返つて、胸はやるせない氣持ちで一杯だつた——それは何とも言へないスキートな、しかも滑稽なものであつた。わたしは始終おど〳〵と何ものかを待ち受けて、あらゆるものに驚異を感じ、たえず何ものかに對して心構へをしてゐた。ちやうど朝燒けのころ、岩燕が鐘樓の周りを飛びめぐるやうに、空想はいつも同じ幻の周圍を恐ろしい速力で旋回しながら、遊び戲れてゐるのであつた。わたしは、もの思ひに沈んだり、くよ〳〵とふさぎ込んだり、どうかすると涙さへ流した。けれども、時には嬲々たる詩の文句や、時には夕ぐれの美しさに呼び醒まされる、かうした涙や憂愁の隙間を透して、湧き立つやうな若々しい生の喜びに充ちた感情が、さながら春の若草のやうに萌え出すのであつた。

わたしは一頭の乘馬をもつてゐた。よくそれに自分で鞍を置いて、一人でどこかへ遠乘りに出かけた。そして全速力で走らしては、自分を武術競技に出た昔の騎士か何ぞのやうに想像したり（そのとき風がわたしの耳もとで、いかに樂しく鳴つたことだらう！）または大空をうち仰いで、その輝かしい光りと紺碧の色を、一ぱいに開け放した胸へ吸ひ込んだりした。

今から考へてみると、女の姿とか、女の愛の幻影とかいふものは、その當時ほとんど一度も、はつきりした輪廓をもつて、わたしの心に浮かんで來なかつたやうである。しかし、わたしの考へたすべてのもの、わたしの感じたすべてのものには、何かしら新しい、言葉に盡くせないほど甘美な、女性的なあるものに對する豫感——半意識的な羞恥に充ちた豫感が潛んでゐるのであつた。

この豫感、この期待は、わたしの體全體に滲み渡つた。わたしはこの感情を呼吸した。この感情は血の一滴々々にこもつて、ありとあらゆる血管を流れ走つた……しかも、

それは間もなく實現せらるべき、運命を擔つてゐたのである。

わたし達の別莊は、圓柱列のついた木造の地主屋敷と、二軒の低い離室で出來てゐた。左がはの離室は、安ものゝ壁紙を造る小さな工場になつてゐた。わたしは二三度そこへ見に行つた。髮の毛をくしや〳〵に掻き亂して、油じみた寬衣を着た、痩せつぽちの子供が十人ばかり、榮養不良らしい顏つきをして、四角な形をした印刷機の板を締める、木製の挺の上に絕えず飛びかゝりながら、自分たちの脾弱い體の重みで、色さま〴〵な壁紙の模樣を捺し出してゐるのであつた。右手の離室は空いてゐて、貸し家に出してあつた。ある日——五月九日から三週間ばかりたつた時——この離室の窓の鎧戸が開かれて、その中から二人の女の顏が覗いた——どこかの家族が越して來たのである。今でも覺えてゐるが、丁度その日食事の時に、母が侍僕に向かつて、新しく隣りへ越して來た人は誰かと訊ねた。ザセーキナ公爵夫人といふ名前を聞くと、母は初め幾らか敬意を響かせながら、「あゝ公爵夫人……」と言つたが、やがてまたつけ足した。「きつとどこかの貧乏な公爵夫人か何かだらう。」

「辻馬車三臺で越していらつしやいました。」恭しく皿をさし出しながら、侍僕はかう言つた。「自用車はお持ちにならないやうですし、椅子卓も、ごくお粗末なものばかりで。」

「さう、」と母は答へた。「それでもまあ結構だよ。」

父は冷たい眼つきでちらと母を眺めた。母はそれなり口を噤んだ。

實際、ザセーキナ公爵夫人は、裕福な身の上であらう筈がなかつた。彼女の借りた離室は、思ひきつて古ぼけた、ちつぽけな低い家だつたので、幾らでも小金を持つた人なら、あんな家に住む氣にはならない筈だつたからである。——もつとも、わたしはその時、こんな話しを氣にも止めないで聞き流した。公爵といふ稱號も、わたしに何の感銘も與へなかつた。わたしは少し前にシルレルの『群盜』を讀んだばかりだからである。

二

わたしは毎晩、鐵砲をもつて庭をうろつきながら、鴉の番をする習慣があつた——わたしはこの用心ぶかい、貪慾で狡猾な鳥に對して、ずつと前から憎惡の念を感じてゐたのである。丁度この話しのあつた當日、わたしはいつものやうに庭へ出かけた——そして、並み木といふ並み木を空しく

歩きつくした揚げく（鴉はわたしの姿を見分けて、遠くの方でちぎれ〳〵に鳴くばかりであつた）、ふと、低い垣根に近よつた。それは右手の離室の向う側に延びて、その家に附屬してゐる狹い帶のやうな庭と、わたし達の領分を區切つてゐるものであつた。わたしは首を垂れながら歩いてゐた。突然、人の話し聲が耳にはいつた。わたしは垣根ごしに向うを一目見ると——思はず化石したやうになつた……異樣な光景がわたしの目に映つたのである。

わたしからほんの四五歩はなれた所に——青々とした木苺の繁みに圍まれた草原の上に、縞のはいつた薔薇色の着物をきて、白い布を頭に被つた、背の高いすらりとした少女が立つてゐた。その周りには四人の青年が近々とより添つてゐた。少女は小さな灰色の花で、順々に彼らの額を叩くのであつた。わたしはこの花の名前を忘れたけれど、子供らに馴染みの深いものである。それは小さな袋のやうな恰好をしてゐて、何か固いものにぶつつけると、大きな音を立てて爆じけるのであつた。

青年たちは喜んで額をさし出してゐた。この少女のものごしには（わたしは脇の方から見てゐたのである）、何とも言へない魅力に富んだ、命令するやうな、同時に撫でいつくしむやうな、人を馬鹿にしたやうな、しかも愛くるしい何ものかが感じられたので、わたしは殆ど驚きと滿足のために、聲を立てて叫ばないばかりであつた。そして、自分もあの美しい指で額を叩いて貰ひたい、そのためにはすぐにその場で、世界ぢうのものを何もかも投げ出したつて構はない、といふやうな氣もちがした。鐵砲はわたしの手をすつて草の上へ落ちた。わたしは何もかも忘れて了つて、そのすらりとした姿や、細い首や、美しい手や、白い布の下からのぞくやゝ亂れた白つぽい髮や、半ば閉された利口さうな目や、睫や、その下に續く優しい頬……かういふものを貪るやうに見つめてゐた。

「君、君、」不意に誰かの聲が、わたしの傍でかう言つた。「一體よそのお孃さんを、そんな風に見てもいゝもんですかね？」

わたしは全身をびくりとさせて、癇癪したやうになつて了つた……すぐ傍の垣根の向うに、黑い髮を短かく刈り込んだ、どこかの男が立つてゐて、皮肉な目つきでわたしを眺めてゐた。丁度この瞬間、少女もわたしの方へふり向いた……活潑に動く生き〳〵した顏に輝いてゐる、大きな灰色の眼がわたしの目にはいつた——と、不意にこの顏全體が小刻みに慄へて笑ひだした。白い齒がちらと光つて、眉は妙にをかしく釣り上がつた……わたしはかつと赤くなつ

て、地べたから鐵砲を拾ひ上げると、甲高いけれど意地わるいところのない笑ひ聲に追はれながら、自分の部屋へ逃げ込んで、ベッドの上へ身を投げ出し、兩手で顏を蔽うた。心臟は恐ろしいほど胸の中で躍つてゐた。わたしは堪らなく恥かしくもあれば、また面白くもあつた。わたしは曾て知らぬほどの興奮を感じた。

ひと休みすると、わたしは頭を撫でつけ服を拂つて、お茶を飲みに下へおりた。若い少女の姿がわたしの目の前をふは〳〵してゐた。心臟は躍るのをやめたけれど、妙に氣持ちよく締めつけられるやうであつた。

「お前、どうしたの？」だしぬけに父がかう訊いた。「鴉は撃てたかい？」

わたしはすつかり話して了はうとしたが、自分で自分を抑へて、たゞにつこり笑つただけである。寢る支度をしながら、自分でもなぜか分からないで、三度ばかり一本足でぎり〳〵つと廻つた。それからポマードをつけて牀へはいると、まるで死人のやうに、一晩ぢうぐつすり眠つた。夜明け前にちよつと目を醒まして、少し頭を持ち上げながら、歡喜の目をもつてあたりを見廻した後——また寢入つてしまつた。

三

『どうかして、あの家と知り合ひになりたいものだな！』翌朝目をさますが早いか、まづわたしの頭に浮かんだのは、かういふ考へであつた。

お茶の前にわたしは庭へ出たが、あまり近く垣根へは寄らなかつた。そして誰にも會はなかつた。

お茶を飲んだ後で、わたしは別莊の前の通りを、幾度か往つたり來たりした——そして、遠くの方から窓の中を覗いて見た……すると、カーテンの蔭に彼女の顏が見えたやうな氣がしたので、わたしはびつくりして、そこ〳〵にその場を立ち去つた。『だが、どうしても近づきにならなくちやならない。』ネスクーチヌイ公園の前に據がつてゐる砂原の上を、あてもなく歩きながら、わたしはかう考へた。『だが、どんなにして？　これが問題なのだ。』わたしは昨日の邂逅の顚末を、こまかな端々まで思ひ浮かべた。どういふ譯か、彼女がわたしに笑ひを浴びせた時のことが、殊さらはつきり思ひ出されるのであつた……

けれど、わたしが胸を躍らせながら、いろ〳〵な計畫を描いてゐる間に、運命はもうわたしのために心配してくれてゐた。

わたしの留守に、母は新しい隣人から手紙を受け取つた。それは郵便局の告知書か、それとも安葡萄酒の栓にしか使はれないやうな、茶色の封蠟でしめをした灰色の紙に書かれてあつた。いかにも無學らしい文體と、だらしのない筆蹟でしたゝめたこの手紙をもつて、公爵夫人は母に保護を願ひ出たのである。わたしの母は公爵夫人の言葉によると、彼女とその子供の運命を掌中に握つてゐる、二三の名士と昵懇の間柄だとのことであつた。彼女は重大な訴訟事件を起こしてゐたのである。

「妾こと見分ある叔女として、」と彼女は書いてゐた。「見分ある叔女たる御許さまにおすがり參らせ候。このきかいを利用いたし候は、妾として心好きことに存じ候。」そして終りに、公爵夫人は母に向かつて、訪問の許しを乞うてゐるのであつた。わたしが歸つた時、母は不愉快な氣もちになつてゐるらしかつた。父が不在だつたので、誰も相談相手がなかつたのである。『見分ある叔女』、しかも公爵夫人に對して、返事をしないわけには行かなかつた。けれど何と言つて返事をしたものか——母は決しかねたのである。佛蘭西語で書くのは不似合ひらしく思はれるし、それかと言つて、露西亞語の正字法にかけては、母自身もあまり得意でなかつた——彼女は自分でもそれを承知してゐたので、恥ぢさらしをしたくなかつたのである。

母はわたしの歸りを喜んで、すぐさま公爵夫人の所へ行つて、母はいつでも自分の力に及ぶ限り、奥さまのお役にたちたいと思つてゐるといふことを、口頭で述べた上、午後一時ころお出でをお待ちしてゐると、傳へるやうに言ひつけた。

わたしの祕密な心願がかうも思ひがけなく、急に充たされたといふことは、わたしを喜ばしもすれば、また驚かせもした。とはいへ、わたしは自分の全幅を領した困惑の念を、色にも現さなかつた——そして、新しいネクタイとフロックコートをつけるために、まづ自分の部屋へ赴いた。わたしは家にゐるとき、まだジャケツを着て、折り襟をつけてゐた——自分では厭で〳〵堪らなかつたのだけれど。

四

わたしが無意識に體ぢうを慄はもながら、狹くるしいだらしのない離室の控へ室へはいつた時、くすんだ銅いろの顏に、豚のやうに小さい氣難かしさうな目をした、白髮頭の老僕がわたしを出迎へた。額から顴顬へかけて、わたしなど生まれてこの方見たこともないやうな、深い皺を浮かべた老人である。しやぶりさしにした鰊の骨を、皿に載せ

て運んでゐたが、次ぎの間へ通ずる扉を足で閉めながら、引きちぎつたやうな聲でかう訊いた。

「何のご用ですね？」

「ザセーキナ公爵夫人はお宅でせうか？」とわたしは訊ねた。

「ヴニファーチイ！」ひゞの入つたやうな女の聲が、次ぎの間からかう叫んだ。

老僕は無言のまゝわたしに背を向けた。と、錆びた定紋入りの釦を、たつた一つだけ殘してゐる四季施の背が、ひどく耗れてゐるのがまざ〳〵と目に映つた。彼は皿を床板の上へ置いて行つてしまつた。

「警察へ行つて來たかい？」と同じ女の聲が繰り返した。老僕は何やらぶつ〳〵言つた。「え？……誰が來たつて？」といふ聲がまた聞こえた。「隣りの坊つちやんだつて？ ――ぢや、お通し。」

「どうぞ客間へお通り下さいまし。」下男は再びわたしの目の前へ現れて、皿を床から取り上げながらかう言つた。

わたしは身づくろひをして、『客間』へはいつた。

わたしは餘り綺麗でない、小さな部屋の人となつた。椅子卓はまるで大急ぎで並べたやうな、貧乏くさいものであつた。一方の肘かけの折れた窓際の安樂椅子には、古い綠いろの着物をきて、まじり色の毛糸の肩かけを首のまはりに卷いた、年ごろ五十ばかりらしい、素頭の醜い婦人が坐つてゐた。彼女の小さな黑い目は、いきなり貪るやうにわたしの顏へ吸ひついた。

わたしはその傍へよつて會釋をした。

「失禮でございますが、あなたがザセーキナ公爵夫人でゐらつしやいませうか？」

「え〻、わたしがザセーキナ公爵夫人です。あなたはVさんのご子息でゐらつしやいますか？」

「え〻、さうです。わたしは母の用事でお宅へ上がつたのです。」

「どうぞお掛け下さい。ヴニファーチイ！ わたしの鍵はどこへ行つたの、見なかつたかい？」

わたしはザセーキナ公爵夫人に、彼女の書面に對する母の返事を傳へた。彼女は太い赤い指で窓仕切りをこつ〳〵叩きながら、じつとわたしの言ふことを聞いてゐた。わたしが口上を終つたとき、彼女はもう一度わたしに目を注いだ。

「どうも有り難う、ぜひ參上いたします。」たうとう彼女はかう口をきつた。「でも、あなたはまだ本當にお若くてゐらつしやいますね！ お幾つですか、失禮ながら？」

「十六です。」わたしは思はず口ごもりながら答へた。

公爵夫人は衣囊の中から何か一ぱい書き込んだ、油じみた書類を取り出して、それを鼻のすぐ傍へ持つて行きながら、いぢり廻しにかゝつた。

「結構なお年ですこと。」椅子の上であちこち體をねぢ向けたり、もぞ〳〵身動きしたりしながら、彼女は不意に言つた。「どうぞあなた、ご遠慮なく。宅ではざつくばらんですからね。」

『あまりざつくばらん過ぎる。』思はず嫌惡の念が湧きでるのを感じながら、彼女の不恰好な姿を隈なく見廻し見廻し、わたしはかう考へた。

この瞬間、客間の別な戸がさつと開いて、きのふ庭で見かけた娘が閾の上に現れた。彼女は片手を上げた。と、その顏には薄笑ひが閃いた。

「これはわたしの娘でございます。」少女の方を肘でさしながら、公爵夫人は紹介した。「ジーノチカ、この方はお隣りのVさんのご子息だよ。失禮ですが、あなたのお名前は？」

「ヴラヂーミル。」わたしは席を立つて、興奮のあまり聲をかすらせながら、返事をした。

「ご父稱は？」

「ペトローヴッチ。」

「さうですか！ わたし達の知り合ひに警察の署長がありましたが、やはりヴラヂーミル・ペトローヴッチと申しましたよ。ヴニファーチイ！ 鍵を捜さなくともいゝよ。わたしの衣囊にあつたから。」

娘は相變らず薄笑ひを浮かべたまゝ、かすかに目を細めて、首を少し横に傾げながら、いつまでもわたしを見つめてゐた。

「わたし、もうヴルデマール（ヴラヂーミルの佛蘭西風の呼び方）さんに會つたわ。」と彼女は口をきつた、（彼女の銀鈴のやうな聲の響きは、何か甘いやうな冷たい感じとなつて、わたしの背筋を走つた）。「あなた、わたしにかう呼ばして下さるわね？」

「そりやもう。」とわたしはしどろもどろに答へた。

「それはどこで？」と公爵夫人が訊いた。

公爵令孃は母の問ひに答へなかつた。

「あなた今お急がしくつて？」彼女はわたしから目を離さないでかう言つた。

「いゝえ、少しも。」

「ぢや、毛糸を卷く手傳ひをして下さらなくつて？ こつちへいらつしやい、わたしの部屋へ。」

彼女は一つうなづいて見せて、ずん〳〵客間から出て行つた。わたしもその後からついて行つた。

わたし達のはいつた部屋には、幾らかましな道具が置いてあつて、その並べ方にもより多くの趣味が感じられた。もつとも、わたしはこの瞬間、ほとんど何にも氣のつく餘裕がなかつた。わたしはまるで夢でも見てゐるやうに身を動かしながら、何だか馬鹿々々しいくらゐ緊張した幸福感を、からだ全體に感じるのであつた。

公爵令孃は腰をおろして、赤い毛糸の束を取り出した。そして、自分の前の椅子をわたしに指さして、一生懸命に糸の束を解きほぐすと、それをわたしの兩手にかけた。そのあひだ始終、妙にふざけたやうな、ゆつくりした態度で、ほんの心もち開いた唇に、相變はらず晴れやかなずるい薄笑ひを浮かべながら、じつと沈默を守つてゐた。彼女は折り曲げた歌留多の札に、毛糸を卷きはじめた。と、不意に何とも言へない晴れやかな目で、ちらとわたしの顏を照らしたので、わたしはわれともなしに目を伏せた。大抵しじう細め加減になつた彼女の目が、ときゞ一ぱいに見開かれると——顏つきがすつかり變はつてしまつた。まるで光りの波がその上に漂るやうな風であつた。

「ヴルデマールさん、あなた昨日わたしのことを何とお思ひになつて？」暫らくたつて彼女はかう訊いた。「きつと惡い女だとお思ひになつたでせう？」

「僕は……お孃さん……僕は何も考へませんでした……どうしてそんな事か……」とわたしはどぎまぎしながら答へた。

「實はね」と彼女は言ひ返した。「あなたはまだわたしをご存じないでせうけれど、わたしそりや不思議な女なのよ。わたしはいつでも、みんなに本當のことを言つて貰ひたいの。あなたは十六だとかいふ事ですが、わたしは二十一なんですもの。ね、ごらんなさい。わたしの方がずつと年上でせう。だから、あなたはいつだつて、わたしに本當のことを言はなくちやならないわ……そして、わたしの言ふことをきかなくちや。」と彼女は言ひ足した。「わたしの顏をご覽なさい。なぜ見ないんですの？」

わたしは餘計どぎまぎして了つたが、それでもたうとう目を上げた。彼女はにつこり笑つたが、それは前と違つて、好意のこもつた微笑であつた。

「わたしをご覽なさい。」優しく聲を潜めながら、彼女はまたかう言つた。「わたし自分の顏を見られても厭ぢやないわ……わたしあなたの顏が氣に入つたの。わたし今に二人が仲よしになりさうな氣がするわ。ところで、あなたわたしが氣に入つて？」と彼女はずるさうな調子でつけ足した。

「お孃さん……」とわたしは言ひかけた……

「第一、これからわたしをジナイーダ・アレクサンドロヴナと呼んで頂戴。第二に——子供の癖に——（彼女は言ひ直した）——若い男の癖に——自分の感じたことを眞つ直に言はないなんて、何といふ意氣地のない話しでせう？　そんな事は大人のすることよ。ね、あなた、わたしが氣に入つたでせう？」

彼女がわたしにこんな距てのない話しぶりをするのは、實に氣もちのいゝことであつたけれど、わたしは少しむつとした。わたしは自分が子供でないことを相手に見せようとして、出來るだけ磊落な、眞面目くさつた顏つきをしながら、かう口をきつた。

「勿論、非常に氣に入りました、ジナイーダ・アレクサンドロヴナ。そして僕はそれを隱さうと思ひません。」

彼女はゆつくり〳〵間を置くやうに頭をふつた。

「あなたには家庭教師がついてゐますか？」と彼女は不意に訊ねた。

「いゝえ、家庭教師なんか、もうとうからゐません。」

わたしは嘘をついた。例の佛蘭西人と別れてから、まだ一月も經たないのであつた。

「おゝ！　なるほどさうらしいわ——あなたはもうすつかり大人よ。」

彼女は輕くわたしの指を叩いた。

「手を眞つ直にしてゐらつしやい！」かう言つて、彼女はせつせと糸卷きにかゝつた。

彼女が目を上げないのをいゝことにして、わたしは仔細に觀察を始めた。初めのうちはそつと盜み見してゐたが、やがてだん〳〵大膽になつた。彼女の顏は昨日よりもつと美しく思はれた。何から何まで纖細で　聰明らしく、可憐な感じに滿ちてゐた。彼女は白い卷きカーテンを下げた窓に背を向けてゐた。日の光りはこのカーテンを通してさし込みながら、彼女のふさ〳〵とした金髮や、いかにも無垢らしい首筋や、すつとした撫で肩や、靜かな優しい胸のあたりに、柔かい光線を注いでゐた。——じつとその樣子を眺めてゐるうちに、彼女はわたしにとつて限りなく貴い、限りなく近しいものになつて來た！　わたしはもう前から彼女を知つてゐて、彼女と知り合ひになるまでは、何一つ知りもしなければ、まるで生活もしなかつたやうな氣がした……彼女はもうだいぶ着古したじみな物を着て、前掛けをかけてゐた。わたしはこの着物や前掛けの襞を、喜んで一つ〳〵撫でたいやうな氣もちがした。わたしは敬虔の念を抱きながら、彼女の靴に額をつけたいとさへ思つた……

『いま自分はかうして、彼女の前に坐つてゐる。』とわたし

は考へた。『彼女と近づきになつた……あゝ、何といふ幸福だらう！』わたしは歡喜のあまり、危く椅子から飛びおりさうになつたが、丁度うまいものを食べてゐる小さな子供のやうに、足を少しばた〳〵させたばかりで濟ました。

わたしは水の中の魚のやうに、いゝ氣もちになつてゐた。もう一生この部屋から出たくない、この場所を見棄てたくないやうな氣がした。

彼女の臉はそつと持ち上がつた。そして、再び晴れやかな彼女の目が、優しくわたしの前に輝きはじめた。彼はまた薄笑ひを浮かべた。

「あなたは一生懸命にわたしを見てゐらつしやるのね。」と彼女はゆつくり言つて、指を立てて脅かす眞似をした。

わたしは赤くなつた……『この人は何でも分かるんだ、何でも見てるんだ。』といふ考へが、わたしの腦裏に閃いた。『またどうして分からない筈があらう、どうして見えない筈があらう！』

不意に、何か隣りの部屋でがたんと音がした——サーベルががちや〳〵と鳴りだした。

「ジーナ！」と客間で公爵夫人が叫んだ。「ベロヴゾーロフさんが猫の仔を持つて來て下すつたよ。」

「猫の仔！」とジナイーダは叫んで、いきなりぱつと椅子から立つが早いか、わたしの膝へ毛糸の玉を投げ出して、部屋の外へ駈け出した。

わたしも同じやうに立ち上がつて、毛糸の束と玉を窓仕切りの上へ載せると、客間の方へ出て行つた。と、思はずびつくりして足を止めた。部屋の眞中には斑の小猫が、足を擴げながら横になつてゐた。ジナイーダはその前に膝をついて、用心ぶかくその顏を持ち上げてゐた。公爵夫人の傍には、赤ら顏に目の飛び出した、白つぽい髮を渦卷かせた、いかにも元氣らしい輕騎兵が、窓と窓の間の壁を殆ど一ぱい塞ぎながら立つてゐた。

「何てをかしな猫でせう！」とジナイーダは繰り返した。「目も灰色でなくつて綠いろだし、それに耳も何て大きいんでせう！ 有り難う、ギクトル・エゴールイチ！ あなたは本當に親切ね！」

わたしはその輕騎兵が、昨日見うけた青年たちの一人だと心づいた。彼はにつこり笑つて會釋したが、その拍子に拍車をうち合はせて、サーベルの鐶をがちやりと鳴らした。

「あなたは昨日、耳の大きい斑の小猫がほしいと仰しやつたものですから……そこで、この通り手に入れました。綸言汗の如しですからね。」かう言つて、彼はまた會釋した。

小猫は弱々しく細い聲を立てて、床を嗅ぎ廻し始めた。

「お腹が空いてるのよ！」とジナイーダは叫んだ。「ヂニファーチイ、ソーニャ！ 牛乳を持つておいで。」

古ぼけた黃ろい着物をきて、色の褪めた布を首に卷いた小間使ひが、牛乳の皿を手に持つてはいつて來た。そして皿を小猫の前へ置いた。猫はびくりと身慄ひして、目を細めながら、びちや〳〵舐めにかゝつた。

「何て小つちやな赤い舌でせう。」頭をほとんど床へ押しつけるやうにして、脇の方から猫の鼻さきを覗き込みながらジナイーダはかう言つた。小猫は腹がくちくなると、氣取つた樣子で前足を踏みかへながら、喉を鳴らしはじめた。ジナイーダは立ち上がつて、小間使ひの方へ向きながら、無雜作にかう言つた。

「あつちへ持つてお行き。」

「猫の禮に——お手を。」と輕騎兵は作り笑ひをしながら言つた。そして、新しい軍服にきつちりと包んだ逞しい體を、ぐつと一つそり返らした。

「兩方とも。」とジナイーダは答へて、彼に兩方の手をさし伸べた。輕騎兵が接吻してゐる間、彼女は肩ごしにわたしを眺めてゐた。わたしは一ところにじつと立つてゐた。そして、笑つたものか、何か言つたものか、それとも默つてゐたものか——見當がつかなかつた。突然あけ放した玄關の扉ごしに、家の下男のフョードルの姿が目に映つた。彼はわたしに合ひ圖をして見せた。わたしは機械的にその方へ出て行つた。

「何の用？」とわたしは訊いた。

「あなた樣を呼んで來いと、お母さまが仰せつけになりましたので。」と彼は小聲で囁いた。「あなたが返事をもつてお歸りになりませんので、大層ご立腹でございます。」

「でも、僕そんなに長くこゝにゐたかい？」

「一時間あまりになります。」

「一時間あまり！」わたしは思はず鸚鵡がへしに言つた。そして客間へ取つて返すと、みんなに會釋して足ずりをした。

「あなた、どこへ？」輕騎兵の後ろから顏を覗けながら、公爵令孃はかう訊いた。

「僕うちへ歸らなけりやならないんです。ぢや、さう申しませうね、」とわたしは老夫人に向かひながら言ひ足した。「一時すぎにおいで下さるつて。」

「えゝ、さう言つて下さい、坊つちやん。」

公爵夫人は急がしさうに煙草入れを取り出して、騷々しい音を立てながら嗅ぎはじめたので、わたしは思はずびく

りとなつた。

「さう言つて下さい。」涙つぽい目をしよぼ〳〵させて喉を鳴らしながら、彼女はかう繰り返した。

わたしはもう一度會釋して、くるりと踵を轉じると、そのまゝ部屋を出て行つた――自分の後ろを見送られてゐると意識したとき、こく年の若い人間が經驗するやうな、ばつの惡さを背なかに感じながら。

「よくつて、ヲルデマールさん、ちよい〳〵遊びにいらつしやいよ。」とジナイーダは叫んで、また笑ひだした。

『一體何だつてあの女は笑つてばかりゐるんだらう？』一言も口をきかないで、不感服らしい樣子をしてゐるフォードルを從へて、家へ歸る道々わたしはかう考へた。

母はわたしに小言をいつて、あんな公爵夫人などの所で、何をいつまでもしてゐたのだらうと不思議がつた。わたしは何も返事をしないで、自分の部屋へ引つ込んだ。わたしは急に悲しくて堪らなくなつた……そして、泣き出すまいと自分で自分を抑へつけた……わたしはあの輕騎兵が嫉ましかつたのである。

五

公爵夫人は約束どほり母を訪問した。が、母の氣に入らなかつた。わたしはその席に居合はさなかつたけれど、食事のとき母が父に話したところによると、このザセーキナ公爵夫人は、『極めて俗な女』に見えたとのことである。彼女はセルギイ公爵にとりなしてくれと、うるさく母に頼み込んだ。彼女はしじう何かの訴訟や後ぐらい事件――『卑しい金錢上の事柄』に關係してゐるのであつた――彼女はきつと恐ろしいまやかしものに相違ない、とかう母は言つた。もつとも、母は公爵夫人を娘と一しよに、明日食事に招待した（『娘と一しよに』といふ言葉を聞くと、わたしは皿の中へ鼻をつゝ込むやうにした）。何といつても、隣り同志ではあり、名のある人だから、と彼女は言ひ添へた。

父はそれに對して、その夫人が何ものか、今やつと思ひ出したと言つた。彼は若い時分、亡くなつたザセーキン公爵を知つてゐた。それは立派な教育を受けてゐたけれど、頭の空虛なやくざもので、巴里に長く暮らしてゐるために、社交界では巴里つ子と呼ばれてゐた。彼は非常な金持ちであつたが、全財產を歌留多で叩き上げてしまつた。そして何のためか分からないが、恐らく金のためであらう、どこかの小役人の娘と結婚した――（もつとも、今すこしいゝ相手も選べたのだけれど、と父は言ひ添へて、冷やかな微笑を洩らした）。結婚後、投機に手を出して、すつかり身代

を耗つてしまつたのである。

「どうかお金の無心でもしなければいゝが。」と母は言つた。

「それは大いにありさうな事だね。」と父は落ちつき拂つて答へた。「あの女は佛蘭西語を話すかい？」

「そりや酷いんですよ。」

「ふむ。もつとも、そんな事はどうでもいゝ。お前は娘さんも招待したとか言つたね。誰かがさう言つたが、恐ろしく綺麗な教育のある娘ださうだ。」

「へえ！　してみると、おつ母さんに似なかつた譯ですね。」

「それから親父にもね。」と父は言つた。「親父はやはり教育があつたが、しかし馬鹿だつたよ。」

母は溜め息をついて、考へ込んだ。父は口を噤んだ。この會話の間、わたしは酷くばつが惡かつた。

食後、わたしは庭へ出かけたが、今度は鐵砲なしであつた。わたしは『ザセーキンの庭』へ近よるまいと誓つたけれど、打ち勝ち難い力が、わたしをその方へ引いて行つた――しかも、それは容しくなかつた。垣根の傍まで行くか行かないかに、わたしはジナイーダの姿を見つけた。今度は彼女一人きりであつた。彼女は手に本を持つて、ゆるゆると小徑を歩いてゐた。わたしには氣がつかないらしかつた。

わたしは危くやり過ごすところであつたが、急に氣がついて咳きばらひをした。

彼女はふり返つたが、別に立ち止まらうともせず、丸い麥藁帽子についた、幅の廣い水色のリボンを手で拂ひのけて、わたしの方を眺めながら輕くほゝゑむと、また目を本の方へ注いだ。

わたしは帽子を取つて　しばらくその場でもじ〳〵してゐたが、やがて、重い心を抱きながら立ち去つた。『僕は彼女にとつて何者だらう？』とわたしは（なぜだか分からないが）佛蘭西語で考へた。

聞き覺えのある足音が、わたしの後ろに響いた。ふり返つてみると――父が例の輕快な足どりで、わたしの方へ來るのであつた。

「あれが公爵令孃かい？」と彼は訊ねた。

「さうです。」

「一體お前はあの人を知つてるのかね？」

「けさ公爵夫人の所で會ひました。」

父は歩みを止めたが、急に踵でくるりと一廻りして、もと來た方へひつ返した。ジナイーダの傍まで行くと、彼は

恭しく會釋をした。彼女も同じく會釋を返したが、幾らか驚いたやうな色を顏に浮かべて、本を持つた手を下へおろした。わたしは、父を目送してゐる彼女の樣子に氣がついた。父はいつも一種獨特の、優美なさつぱりした身なりをしてゐた。けれどこの時ほど、彼の姿がすらりと恰好よく見えた事もなければ、その鼠色をした帽子が、心もち薄くなつた髪の上に、この時ほど美しく載つかつてゐる事もなかつた。

わたしはジナイーダの方へ行かうとしたが、彼女はわたしに目をくれないで、また本を讀み〳〵向うへ行つてしまつた。

六

わたしはその晩一晩ぢうと翌朝一ぱい、妙に氣落ちのしたやうな癲癇狀態ですごした。今でも覺えてゐるが、わたしは勉强しようと思つて、カイダーノフを手にとつたが——しかし、この有名な教科書のだら長い行や頁が、徒らに目の前をちらつくばかりであつた。わたしは續けさまに十度くらゐ『ユリウス・シーザーは軍事上の勇氣をもつて聞こえたり。』といふ一句を讀み返したけれど——何一つ頭へはいらないので、たうとう本を投げ出してしまつた。食事の前に、わたしはまたポマードをつけて、またフロックコートとネクタイをつけた。

「なぜそんな事をするの？」と母が訊ねた。「お前はまだ大學生になつてゐないぢやないか。おまけに、試驗が受かるかどうか、それさへ分かりもしないのに。第一、ついこなひだジャケツを拵へたばかりぢやないか。あれだつて棄てて了ふわけには行きませんよ！」

「お客さまが見えるんでせう。」わたしは殆ど絶望したやうに囁いた。

「何て馬鹿な！　あれが何でお客さまなもんですか！」

もう兜を脱ぐよりほか仕方がなかつた。わたしはフロックコートをジャケツに着換へたが、ネクタイだけははづさなかつた。

公爵夫人親子は食事の三十分ばかり前にやつて來た。老婦人は、もう馴染みになつてゐる例の綠いろの着物の上から、黃ろいショールをかけ、火のやうなリボンをつけた流行おくれの室內帽を被つてゐた。彼女はすぐさま手形の話しを持ち出して、溜め息つくづく自分の貧しい境涯を訴へた。そして、少しも體裁を構はず無遠慮に『せがみ』立てるのであつた。彼女は自分の家にゐる時と同じやうに、騷々しく嗅ぎ煙草を嗅いだり、勝手氣まゝに椅子の上で體の向きをかへたり、もぞ〳〵動き廻つたりした。自分が公爵夫人だといふ事は、まるで彼女の頭に浮かんで來ないらしかつた。

そのかはりジナイーダは、いかにも公爵令孃らしく、思ひきつて嚴つい、ほとんど高慢な態度を持してゐた。その體にはさもものゝしげな冷たい表情が、じつと凝つて動かなかつた。——わたしは人違ひかと思ふくらゐであつた。あの目つきも、あの微笑も、まるで見いだすことが出來なかつた。もつとも、彼女のこの新しい姿も、やはり美しく思はれたけれど……

彼女は薄靑い緣のついた輕い紗の着物をきてゐた。髪は英吉利風に、長い束をなして兩頰の上に垂れてゐた。この髪の結び方が、彼女の冷たい顏の表情によくうつつた。

父は食事の間ぢう、その傍に坐つてゐた。そして、獨特の優美な、落ちついた、しかも慇懃な態度で、彼女をもてなしてゐた。彼は時々その顏をちらと見やつた——すると彼女も、とき〴〵父を見返したが、それは實に奇妙な、ほとんど敵意をもつた目つきであつた。二人は佛蘭西語で話しをした——今でも覺えてゐるが、わたしはジナイーダの發音の美しさに一驚を喫した。公爵夫人は食事の間も、相變はらず少しも遠慮しないで、やたらにむしや〳〵食べては、その食ひ物を賞めちぎつた。母はいかにもこの二人が厄介ならしく、妙に沈んだ投げやりな調子で返事をしてゐた。父はとき〴〵ほんの心もち眉をひそめた。ジナイーダもやはり母の氣に入らなかつた。

「何だか高慢ちきな娘ね。」と彼女は翌日かう言つた。「まあ考へてもご覽なさい——何を自慢する事があるんだらう——あんなグリセットみたいな顏をして！」

「お前は、グリセット（佛蘭西下級のお轉婆娘）を見たことがない筈だが。」と父が注意した。

「えゝ、有り難いことにね！」

「勿論ありがたいことさ……だが、それでどうしてグリセットの事がとやかく言へるんだね？」

ジナイーダはわたしの方に、まるつきり注意を向けようとしなかつた。食後まもなく、公爵夫人は暇を告げた。

「どうかあなた方のお引き立てを願ひます、マリヤ・ニコラーエヴナ、それからピョートル・ヴシーリッチも。」と彼女は父母に向かつて唄ふやうな調子で言つた。「どうも仕方がございません！　もとはいゝ時もありましたが、それも過ぎてしまひました。これでわたしも、華族と言はれる身分ですけれど、」彼女はいやな笑ひ方をしてかう言ひ添へた。「食べるものもないのに、名譽なんか何になりませう！」

父は恭しく一禮して、彼女を控へ室の戸口まで見送つた。わたしは尻きれとんぼのやうなジャケツを着て、じつとそこに立つたまゝ、まるで死刑でも宣告されたものゝやうに、床を見つめてゐた。ジナイーダの態度が、すつかりわたしを悄氣させて了つたのである。けれど、わたしの驚きはどうだつたらう——彼女はわたしの傍を通り過ぎながら、以前の優しい表情を目に浮かべて、早口にかう囁いた。

「今夜八時に家へいらつしやいな、よくつて、きつとよ……」

わたしが兩手を擴げたばかりで、返事をする暇もないうちに——彼女はもう白いスカーフを頭から被つて、ずんずん行つてしまつた。

七

正八時に、わたしはフロックコートを着こんで、頭の前を高く擡き上げて、公爵夫人の住まつてゐる離室の玄關へはいつた。例の老僕が氣むづかしげにわたしを睨んで、しぶしぶ牀几から腰を持ち上げた。客間では陽氣な人聲が聞こえてゐた。わたしは戸を開けると、思はず驚いて一歩しさつた。部屋のまん中に置かれた椅子の上に、公爵令孃が突つ立つて、男物の帽子を目の前に捧げてゐると、そのまはりには五人の男が犇めきあつてゐた。彼らは帽子の中へ手を突つ込まうとしてゐたが、ジナイーダはそれを上へ〳〵と持ちあげて、一生懸命にゆすぶつてゐた。わたしの姿を見ると、彼女は大きな聲を立てた。

「待つて頂戴、待つて頂戴！　新しくお客さまが見えたから、あの方にも札を上げなくつちや。」かう言つてひらりと椅子から飛びおりると、彼女はわたしのフロックコートの袖口をつかまへた。「おはいんなさいつてば。」と彼女は言つた。「何を立つてらつしやるの？　皆さん、ご紹介いたします。この方はヲルデマールさん、お隣りの息子さんです。それからこちらは、」わたしの方へ向いて、順々に客を指さしながら、彼女はかう言ひ足した。「マレーフスキイ伯爵、お醫者さまのルーシンさん、詩人のマイダーノフさん、豫備大尉ミルマーツキイさん、それから輕騎兵のベロヴゾーロフさん、この方にはもうお會ひになりましたわね。どうぞ、お互に仲よくなすつて。」

わたしはすつかりまごついて了つて、誰にもお辭儀をしなかつたほどである。醫師のルーシンは、あのとき庭で容赦なくわたしに恥をかゝした、例の色の黑い男だと見分けがついた。ほかの人達はみんな初對面であつた。

「伯爵！」とジナイーダは言葉を續けた。「ヲルデマールさんの札を書いて下さいな。」

「それは不公平です。」と伯爵は輕い波闘なまりで言ひ返した。洒落た身なりをした黑髪兒で、表情の豐かな蒼色の眼と、白い細い鼻をして、小さな口の上に華奢な髭を蓄へてゐた。「この人はわれ〳〵と一しよに賭けをしなかつたんですから。」

「不公平ですとも、」豫備大尉といはれた紳士は、ベロヴゾーロフと一しよにかゝ繰り返した。大尉は年のころ四十前後、醜いほどのあばた面で、黑ん坊のやうに髪が縮れた上に、猫脊で足が曲がつて、肩章のない軍服の胸をはだけてゐた。

「札をお書きなさいつて言ふのに。」と公爵令孃は繰り返した。「そりやもう暴動ですわ！　ヲルデマールさんは、初めてわたし達と一しよにおなりになつたのだから、今日はこの方に規則をあてはめる譯に行きません。ぶつ〳〵言はないで書いて頂戴、わたしさうしたいんですから。」

伯爵は肩を竦めたが、おとなしく一禮して、指環を一ぱい嵌めた白い手にペンをとり、小さな紙ぎれを引き裂いて、その上に名を書きはじめた。

「少くとも、ヲルデマール氏にわけを說明さして頂きませう。」とルーシンが嘲るやうな聲で言ひだした。「でないと、すつかりまごついてをられるやうだから。實はね、君、僕らは賭けごとをして遊んでゐるんですが、公爵令孃が罰を受けられる事になつたので、當たり籤を引いた人は、令孃の手を接吻する權利を得るわけなんです。わたしの言つたことが分かりましたか？」

わたしはちらと相手の顏を見たばかり、相變はらず氣が遠くなつたやうな恰好で、その場に突つ立つてゐた。ジナイーダはまた椅子の上へ飛びあがつて、またもや帽子を振りはじめた。一同はその方へ手をさし伸べた——わたしも人々の後に續いた。

「マイダーノフさん、」と令孃は背の高い青年に聲をかけた。それは瘦せた顏に小さな眼をしよんぼりさせた、黑い髪を長く延ばした男であつた。「あなたは詩人だから、寬大でなくちやいけないわ。あなたの札をヲルデマールさんに讓つてお上げなさい。さうすれば、あの人のチャンスが一つきりでなくて、二つになる譯ですからね。」

しかし、マイダーノフはかぶりを振つて、髪をゆり上げた。わたしは一番あとから帽子へ手を突つ込んで、一枚の札をとつて開いて見ると……あゝ！　その札の上に『接吻』の二字を見た。その時わたしの心はどんなだつたらう！

「接吻！」とわたしは覺えず叫び聲をあげた。

「ブラーヴー！　この人の當たりだわ。」とジナイーダが引き取つた。「まあ、嬉しいこと！」彼女は椅子からおりて、何とも言へない晴れ〳〵した甘い目つきで、わたしの顔を覗き込んだ。わたしは心臓が躍り出しさうであつた。

「あなたも嬉しくつて？」と彼女はわたしに訊ねた。

「僕ですか？……」とわたしはしどろもどろに言つた。

「その札を僕に賣つて下さい。」不意にわたしの耳のすぐ傍で、ベロヴゾーロフが喚きだした。「百留出すから。」

わたしは忿怒に滿ちた目つきで、輕騎兵將校に答へたのでジナイーダは手を叩くし、ルーシンは「大出來！」と叫んだほどである。

「しかし、」と彼は言葉を續けた。「わたしは式部長として、すべて規則どほり行はれるやうに、監視する義務があります　ヴルデマール君、片膝おつきなさい。われ〳〵の仲間でさういふ事に決まつてるんですから。」

ジナイーダはわたしの前に立つて、もつとよくわたしを見ようと思つたらしく、首を少し横に傾げながら、もの〳〵しげに片手をさし伸べた。わたしは目の中が暗くなつた。わたしは片膝つかうとしたが、思はず兩膝とんとついて、思ひきり無器用にジナイーダの指に唇をつけた。そのために相手の爪で、鼻のさきに輕いひつ掻き傷をこしらへて了つた。

「よろしい！」とルーシンは叫んで、わたしを助け起こした。

賭けごとの遊びは續けられた。ジナイーダはわたしを自分の傍に坐らせた。彼女はありとあらゆる罰の方法を考へ出した！　一ど彼女は『立像』をして見せなければならなくなつたが――そのとき彼女は醜男のニノマーツキイを臺座に選びだして、つゝぷしに寢るやうに命令した。しかもそのうへ、顏を胸に押し當てなければならなかつたのである。崩れるやうな笑ひ聲は、少しも途切れることがなかつた。

格式のやかましい貴族屋敷に成長して、淋しく生眞面目に教育された少年のわたしは、かういふ騷音や叫聲や、ほとんど亂暴なくらゐ無遠慮な浮いた氣分や、これまで曾てなかつた未知の人々との交際などで、まるですつかりのぼせ上がつた。わたしはまるで酒に醉つたやうであつた。そして誰よりも一ばん大きな聲で笑つたり、喋りたてたりし始めた。で、何かの相談のために、イヱールスキイ門あたりから呼びよせられた小役人と、次ぎの間で話し込んでゐた老夫人までがわざ〳〵出て來て、わたしを見たほどである。けれどわたしは、すつかり有頂天になつて了つてゐた

ので、誰の冷笑も誰の白眼も、いはゆる牛の角に蚊が止まつたほどにも思はなかつた。

ジナイーダはどこまでもわたしに優先權を與へて、少しも傍から放さうとしなかつた。何かの罰に當たつたとき、わたしは彼女と一しよに並んで、同じ絹のショールにくるまつた事もある。その時わたしは彼女に自分の祕密を打ち明けさせられた。今でも覺えてゐるが、わたしたち二人の頭は、突然むし暑い、半ば透明な、薫りの高い靄に包まれた。その靄の中で、彼女の目がちか〳〵と柔かく輝き、開いた唇が熱い息を洩らし、白い齒が光り、髪の毛の端がわたしの顏をくすぐり、きつけた。わたしは默つてゐた。彼女は神祕めかしく、狡猾さうな微笑を浮かべてゐたが、たうとうかう囁いた。「え〻どう？」わたしはたゞ赤くなつて、笑ひながらそつぽを向いた。そして、息をつくのさへ憚つてゐた。

賭けごとにも倦きたので――わたし達は、繩廻しの遊び（繩の輪の中に鬼が坐つて、その輪を廻しながら、周圍者の手を打つ。打たれた者が鬼はつて鬼になる遊戯）をした。あゝ！わたしがついうつかりして、彼女から強くはげしく指を打たれたとき、わたしはどんなに深い歡喜の念を覺えたらう！　わたしはその後で、わざとぼんやりしてゐるやうな振りをしたが、彼女はわたしをからかつて、わたしのさし出した手に觸れようともしなかつた！

しかし、わたし達がその晩して遊んだのは、まだ〳〵それくらゐの事ではなかつた！　わたし達はピアノも彈けば歌も唄ひ、踊りもをどれば、ジプシイの群れの眞似までした。ニルマーツキイは熊に仕立てられて、鹽水を飲まされた。マレーフスキイ伯爵は、色んな歌留多の手品をして見せたが、結局、歌留多をすつかりかき混ぜて、ギスト（歌留多遊びの一種）の切り札をすつかり自分に取り込んでしまつた。それに對してルーシンは『彼に祝辭を呈するの光榮を有』した。マイダーノフは自作の劇詩『殺戮者』の一節を朗誦した（時代はロマンチズムの全盛期に取つてあつた）。彼は黑い表紙に血のやうな色で表題を書いて、この作を出版しようと考へてゐた。それからわたし達は、イヱールスキイ門から來た小役人の膝から帽子を盜んで、身のしろ金のかたとして、彼に哥薩克をどりを踊らせたり、ヴニファーチイ老人に婦人帽を被せたり――ジナイーダが自分で男の帽子を被つたり……一々數へきれないほどである。たゞベロヴゾーロフだけは、腹立たしげに肩をひそめたまゝ、いつも隅の方にひつ込み勝ちであつた……どうかすると、その目が充血して顏がまつ赤になり、今にもみんなに飛びかゝつて、わたし達を木つぱのやうに、四方八方へ投げ散らしさうな氣配を

示した。けれど、ジナイーダが一目その顏を見やつて、指で脅かす眞似をすると、彼はまたもとの片隅へ潛り込むのであつた。

たうとうわたし達はへと〳〵になつて了つた。公爵夫人は、彼女の言葉を借りると、この上もなくまめな質で――どんなに騷がれようと平氣であつたが――それでもやはり疲勞を感じて、休みたいと言ひだした。夜中の十一時すぎに夜食が出たが、それは古いこつ〳〵になつたチーズと、ハムを刻み込んだ妙な冷たい饅頭きりであつた。けれどわたしにはその饅頭が、どんな上等のパイよりもうまく思はれた。葡萄酒は一壜きりで、しかもどす黑い色をして、口の所がふくらんだ、何だか變なものであつた。それに中の酒も薔薇いろの色粉の匂ひがした。もつとも、誰もそれを飲むものはなかつた。へと〳〵に疲れて、氣の遠くなるほど幸福な感じを抱きながら、わたしは離室を出た。お別れにジナイーダはわたしの手を堅く握つて、またもや謎のやうな微笑を洩らした。

重くしめつぽい夜氣が、わたしの熱した顏にさつと匂つた。どうやら、夕立ちの起こりさうな氣配であつた。黑い雨雲がむく〳〵と湧き出して、見る〳〵うちに煙のやうに輪廓を變へながら、空を覆つてゐた。そよ風が暗い木立ちの中で不安げに身慄ひして、どこか遠い地平のかなたでは、神鳴りが獨りごとのやうに、腹立たしげに、鈍い聲で口小言をいつてゐた。

わたしは裏玄關から自分の部屋へはいつて行つた。わたしの附き人になつてゐる侍僕が、床の上に寢そべつてゐたので、わたしはその體を跨がなければならなかつた。侍僕は目をさましたが、わたしの顏を見ると、母がまたわたしのことで腹を立てて、迎へに人をやらうとしたが、父がそれを止めたと報告した（わたしは今まで一度だつて、母に挨拶をして祝福を受けずに、牀へはいつた事がなかつたのである）。けれど、どうも仕樣がなかつた！

わたしは侍僕に向かつて、自分で着換へをして寢るからと言つて――蠟燭のあかりを消した。しかし、わたしは着換へもしなければ、牀にも就かなかつた。

わたしは椅子に腰をおろして、まるで魔法でもかけられたやうに、長い間じつと坐つてゐた。わたしの感じ味はつたことは、實に新しく、實に甘美なものであつた……わたしはほんの微かに目をあたりへ配りながら、身動きもせずに坐つたまゝ、靜かに息をついてゐた。そして、時には今夜のことを思ひだして、言葉もなく笑つたり、また時には『自分は戀ひをしてゐるのだ、これがさうなのだ、これが戀

ひなんだ。』と考へながら、心の中でぞつとするのであつた。ジナイーダの顏は靜かに目の前の闇を漂つてゐた――ふわり〳〵と漂ひながら、いつまでも消えて行かなかつた。彼女の唇は依然として謎のやうな微笑を浮かべ、目は少し斜かひにわたしを見つめてゐた。もの問ひたげな、考へぶかさうな、優しい目つき……丁度わたし達が別れる瞬間と、そつくりそのまゝであつた。

たうとうわたしは立ち上がつて、爪先だちで寢臺に近より、着換へもしないで、用心ぶかく枕に頭を載せた、丁度あら〳〵しい動作でもつて、自分の內部に充ちてゐるものを、驚かしはせぬかと心配するやうに……

わたしは横になつたが、目を閉ぢようともしなかつた。間もなくわたしは、絕えず何か弱々しい光りが、部屋の中へさし込むのに氣がついた……わたしは半ば身を起こして窓の方を眺めた。窓の格子は、神祕らしくぼんやりと白く見える硝子の上に、くつきりと浮かび出してゐた。夕立ちだ――とわたしは思つた。それは本當に夕立ちであつた。けれど、それは非常に遠いところで降つてゐるので、雷鳴さへ聞こえないくらゐであつた。たゞ無數に枝の分かれたやうな長い稻妻が、絕えず空に鈍く光つてゐるばかりであつた。それは光るといふよりも、寧ろ死にかゝつた鳥の翼のやうに、ぴく〳〵とひつ吊りながら、慄へてゐるのであつた。

わたしは起き出して窓に近よると、そのまゝ朝まで立ちつくしてゐた……稻妻は一瞬間もやまなかつた。それは俗に言ふ雀の夜（短か夜七月十日頃）であつた。わたしは啞のやうに沈默した砂原や、ネスクーチヌイ公園の黑い木立ちの大塊や、弱い稻妻の閃く度に慄へるやうな、遠い建て物の黃ろつぽい正面などを見つめてゐた……じつと見つめたまゝ――どうしても目を離すことが出來なかつた。この音もない稻妻の控へ目がちの閃きは、丁度わたしの心中に燃え上がつてゐる、言葉もない祕密な衝動に呼應するやうに思はれた。

やがて、夜は白みはじめた。朝燒けは眞紅の斑紋となつて現れた。日の出が近くなるにつれて、稻妻も次第に薄れて、短くなつて行つた。やがてそのわなゝきが、いよ〳〵間遠になつて、遂にさし昇る日の生眞面目な、疑ひを許さぬ光りの中に溺れて、消えてしまつた……

わたしの心の中でも、稻妻が消えてしまつた。わたしは非常な疲れと靜けさを感じた……けれどジナイーダの姿は、依然として勝ち誇つたやうに、わたしの魂の上を翔けめぐつてゐた。とはいへ、これも――この姿も、やはり落ちついたやうに見えた。それは沼べの草から離れた白鳥の

如く、自分をとり卷く醜いものから離れ去つたやうな感じであつた。で、わたしは眠りに入る前に、信頼に滿ちた尊崇の念を抱きながら、名殘りにもう一度その姿に口つけした……

おゝ、つゝましき感情よ、感動せる魂の柔かき響きよ、その優しさと靜けさよ、初戀ひの感激の溶くるが如き喜びよ——いましらは今そもいづこ、あゝ、そもいづこ？

八

翌朝わたしがお茶に下へおりたとき、母はわたしに小言をいつた——けれど、期待してゐたほどでもなかつた——そして、ゆうべ何をして遊んだか、その樣子を話すやうに言ひつけた。わたしはいろ〳〵な細部をはぶいて、全體に極めて無邪氣な感じを與へようと努めながら、言葉すくなに返答をした。

「それにしても、あの人達はちやんとした人間ぢやありません。」と母は注意した。「だから、お前もあんな所へ出入りなんかしないで、眞面目に勉強して試驗の準備をおしなさい。」

わたしの勉强に對する母の心づかひが、僅かこの數語に限られてゐるのを知つてゐたので、わたしはそれに抗辯する必要もないと思つた。けれど、茶の後で、父はわたしの腕をとつて、一しよに庭へ出かけながら、わたしがザセーキンの家で見たことを、すつかり詳しく話させた。

父はわたしに奇妙な感化力を持つてゐた——そして、わたし達の關係も奇妙なものであつた。彼はほとんどわたしの教育に干渉しなかつたが、それかといつて、わたしを侮辱するやうな事もない。彼は、わたしの自由を尊重して——もしこんな事が言へるとすれば、わたしに對して慇懃な態度さへとつてゐた……たゞ、彼はわたしを餘り近く寄せつけないのであつた。わたしは彼を愛し、彼に見とれてゐた。わたしの目には、父が男といふものの模範のやうに思はれたのである——もし彼の手が絶えずわたしを押しのけるのを感じなかつたら、わたしはどんな熱情をもつて彼に愛着したか分からない！　その代はり氣さへ向いたなら、彼は殆ど一瞬の間に、わづか一擧手一投足の勞をもつて、限りない信頼の念をわたしの心に呼び醒ます力を持つてゐた。わたしの魂の扉は開かれた——わたしは幽明な友達か、寛大な黨陶者に對するやうな氣もちで、父を相手に一生懸命しやべり始める：けれどやがて、彼はまた突然わたしを振り棄てて了ふのであつた——彼の手は再びわたしを押しのけた——優しく柔かな動作ではあるが、とにかく押しのけるには違ひなかつた。

父もときゞ、快活な氣もちに襲はれることがあつた。そのとき彼はまるで子供のやうに、わたしと巫山戲たり跳ねまはつたりするのを辭さなかつた（總じて彼は、はげしい肉體の運動を愛してゐた）。一度——後にも先にもたつた一度！——父は何とも言へぬ優しい愛情を、わたしに示したことがある。その時わたしは、ほとんど泣き出さないばかりであつた……しかし、かうした快活の發作も、優しい愛情も、痕かたもなく消えてしまふ——そして、たつた今二人の間に起こつたことは、未來に對して何の希望も繋がせなかつた——わたしはまるで夢でも見たやうな氣もちであつた。ときゞ父の賢さうな、美しい、はれゞした顏をじつと見てゐると…わたしの心臟は慄へをのゝいて、全身が彼の方へ靡き寄るやうな氣もちがした：父はわたしの心中を察したかのやうに、通りすがりにわたしの頰を輕く叩いて——それなり向うへ行つてしまふか、それとも何か仕事をはじめる。そして、ほかの人に見られない一種獨特の態度で、急に全身石のやうに冷たくなつて了ふ。するとわたしも萎縮してしまつて、同じやうに冷たくなるのであつた。

わたしに對する彼の愛情の極めて稀な發作は、わたしの言葉にこそ出さね、一目でそれと知られる哀願の力で、喚び起こされたものでは決してない。それはいつも、思ひがけなくやつて來るのであつた。その後、父の性格を考へてみた時、わたしはかういふ結論に到着した——父はわたしや家庭生活などに、かゝづらつてゐる暇がなかつたのである。彼はもつと別なものを愛してゐて、この別なものを充分に享樂してゐたのである。

「できるだけのものを自分で取れ。そして、自分を他人の手に任しちやいけない。自分が自分自身のものになるといふこと——そこに人生の一切の妙味があるのだ。」と彼はある時わたしにかう言つた。またある時、わたしは若い民衆主義者として、彼の前で自由を論じはじめた（彼はその日、わたしの言葉でいふと、『善良な』氣もちになつてゐた。さういふ時は彼を相手にして、何でも喋ることが出來た）。

「自由、」と彼は繰り返した。「一たい自由を人間に與へるものは何か、お前、それを知つてるかい？」

「何です？」

「意志だ、自分の意志だよ。こいつが自由よりもつと貴い權力さへ與へてくれるのだ。欲するといふことが完全に出來たら——自由な體にもなれれば、命令を下すことも出來

るのだ。」

父は何よりも先に、何よりも多く生きることを欲した――そして彼は生きた……事によつたら、自分は長く人生の『妙味』を享樂することができないと、その時から豫感してゐたのかも知れない。彼は四十二で死んだのである。

わたしはザセーキンの家を訪問した顚末を、詳しく父にもの語つた。彼はベンチに腰をかけて、鞭の先で砂に何か書きながら、半分は注意ぶかく、半分は放心したやうな風で、わたしの話しを聞いてゐた。彼はとき〴〵笑ひ聲をたてて、妙にはれ〴〵した、ふざけたやうな目つきでわたしを覗きながら、簡單な質問や反對でわたしをからかつた。わたしは初めジナイーダの名前さへ、思ひきつて口にする勇氣がなかつたけれど、たうとう我慢しきれないで、盛んにその讃美をはじめた。父は依然として、笑ひを洩らしてゐた。彼はしばらく考へ込んでゐたが、やがて伸びをして立ち上がつた。

わたしは父が家を出るとき、馬に鞍を置くやうに言ひつけたのを思ひ出した。彼は優れた乘り手で――レリー氏などよりずつと早くから、悍馬を馴らすのに妙を得てゐた。

「僕も一しよに行つていゝ、お父さん？」とわたしは訊ねた。

「いけない。」と彼は答へた。その顏は例の無關心なやさしい表情を浮かべた「もし何なら一人でお行き。そして、わたしは行かないからつて、馭者にさう言つておくれ。」

彼はくるりとわたしに背を向けて、足早に向うへ行つてしまつた。わたしはその姿を目送してゐたが――やがて父は門外へ消えてしまつた。そして塀に添うて動いてゆくその帽子が見えた。父はザセーキンの家へはいつて行つた。

父はそこに一時間以上ゐなかつた。それからすぐに町へ出かけて、やうやく夕方に歸つて來た。

食後、わたしは自分でザセーキン家へ行つた。客間へはいつて見ると、老公爵夫人が一人きりしかゐなかつた。わたしの姿を見ると、編み針の先で、室内帽の下から頭を搔きながら、だしぬけに願書を一枚淸書して貰へまいかと頼んだ。

「えゝ、しますとも。」とわたしは答へて、椅子の端に腰をおろした。

「でも、氣をつけてね。なるべく、字を大きく書いて下さいよ。」薄よごれた一枚の紙を渡しながら、公爵夫人はかう言つた。「そして今日ぢうに願へませんか、坊つちやん？」

「今日ぢうに書きますとも。」

隣室の戸が心もち細めに開いて――その隙間からジナ

イーダの顏が覗いた――靑ざめたもの思はしげな表情で、髮は無雜作に後ろへ撥ねのけてあつた。彼女は大きな冷たい目でわたしを見ると、そのまゝ靜かに戸を閉めた。

「ジーナ――え、ジーナ！」と老夫人が言つた。ジナイーダは返事をしなかつた。わたしは夫人の願書を持つて歸つて、一晩ぢうそれにかゝつてゐた。

九

わたしの『狂戀』はその日から始まつたのである。今でも覺えてゐるが、わたしは新しく勤めにでも就いた人のやうな氣もちを經驗した。わたしはもうたゞの少年ではなくなつて、戀ひする人となつたのである。わたしはこの日から自分の狂戀が始まつたと言つたが、なほその上に、わたしの苦しみもやはりその日から始まつたと、かうつけ加へることが出來る。

ジナイーダが傍にゐないと、わたしは鬱々として樂しまなかつた。何一つ頭にはいらなくなつて、仕事といふ仕事は手につかなかつた。毎日朝から晩まで、一生懸命に彼女のことを考へてゐた……わたしは鬱々として樂しまなかつた……しかし、彼女の前に出ても、わたしの心は休まらなかつた。わたしは嫉妬したり、自分のつまらなさを意識したり、馬鹿々々しく膨れたり、馬鹿々々しく奴隷のやうに服從したりした――が、それでも打ち勝ち難い力がわたしを彼女の方へ引いて行つた。わたしはいつも無意識な幸福の戰慄を包みながら、彼女の部屋の閾を跨ぐのであつた。わたしが彼女に戀ひしてゐるのを、ジナイーダはすぐに見ぬいた。それにわたしも隱さうなどと思はなかつた。彼女はわたしの熱情を興あることに思つて、からかつたり、甘やかしたり、苦しめたりした。他人のために最大な歡喜と、深い悲哀の唯一の源泉となり、何の責任もない絕對の力を持つた原因となるのは、快いものである――ところがわたしはジナイーダの手にかゝると、まるで柔かい蠟のやうなものであつた。

もつとも、彼女に戀ひしてゐたのは、わたし一人ではない。彼女の家を訪れてゐたすべての男は、彼女のために夢中になつてゐた。――彼女は彼ら一同を鎖に繫いで、自分の足下に跪づかせてゐたのである。彼らの心中に時には希望、時には不安の念を呼び醒ましたり、自分の氣紛れで自由に彼らを操つたりするのが（それを彼女は、人と人とをぶつつけ合はすと言つてゐた）、彼女を樂しませるのであつた――しかも、彼らはそれに逆らはうなどとは夢にも思はず、喜んで彼女に服從してゐた。彼女の生き〴〵とした美

しい體の中には、狡猾さとのん氣さ、技巧と單純、平靜と活潑、かういふものの混じりあつた、一種特別な魅力が溢れてゐた。彼女の一言一行、彼女の一擧手一投足には、微妙な輕やかな美が漂つて、すべて何から何まで、獨特な遊びの力が感じられた。彼女の顏も絕えず變化して、やはり始終たはむれてゐた。それは殆ど同時に冷笑と、もの思ひと、情熱を現してゐるのであつた。風のある晴れた日の雲の影のやうに、輕い敏捷な種々さま〴〵な感情が、絕えず彼女の目や唇を掠めてゐた。

ジナイーダの崇拜者は一人々々、彼女にとつて必要なのであつた。ベロヴゾーロフは（彼女はこの男のことを『わたしの猛獸』と呼んだり、時にはたゞ『わたしの人』と呼んだりしてゐた）、彼女のためなら喜んで火の中へでも飛び込みかねなかつた。自分の知力やその他の才能に自信を持てない彼は、絕えず彼女に結婚を申し込んで、ほかの者はたゞ空なお喋りをしてゐるに過ぎないと、遠まはしに匂はすのであつた。マイダーノフは彼女の魂の詩的琴線に應じた。ほとんどあらゆる文士の例に洩れず、かなり冷たい人間でありながら、彼は一生懸命にジナイーダを崇拜してゐると、當人に誓つたばかりでなく、恐らく自分自身にさへ、それを信じさせようとしてゐた。そして、はてしもない無數の詩をもつて、彼女に對する讃美を表白しては、妙に不自然なしかも眞劍な感激の調子で、それを彼女に朗讀して聞かせた。彼女はそれに同情もすれば、また少しからかひ氣味でもあつた。彼女はあまりこの男を信用してゐなかつたので、さん〴〵彼の眞情を吐露した作品を聞いた揚げく、プーシュキンを朗讀させるのであつた。それは彼女の言葉を借りると、空氣を清めるためなのである。ルーシンは皮肉やで、露骨なことを平氣で言ふ醫者であつたが、彼女を見拔いてゐる點では、誰よりも一番であつた――そして、蔭でも、目の前でも、しじう彼女の惡口を言つてゐたが、彼女を愛してゐることでも人後に落ちなかつた。彼女はこの男を尊敬してゐたけれど、それかと言つて、決して容赦をしなかつた――そして、時々かくべつ意地わるさうな滿足の色を浮かべながら、お前だつてやはりわたしの手のうちに握られてゐるのだ、といふことを感じさせるやうにした。

「わたしは心といふものを持たない弄媚女なのよ。わたしは役者の生まれつきなんだから。」ある時わたしのゐる前で、彼女はルーシンに向いてかう言つた。「ね、よくつて！ぢや、わたしに手を出して頂戴。わたしがピンを突き刺して上げるから。あなたはこの若い人に對して、恥づかしいとお思ひになるでせう。そして、ずゐぶん痛いでせう。それでも、あなたは笑はなくちやいけませんよ、ね、正直やさん。」

ルーシンは赤くなつて顏をそむけながら、唇を嚙みしめたが、結局それでも手をさし出した。彼女は針を突き刺したが、果たして彼は笑ひだした……すると彼女はかなり深く針を刺し込んで、空しくあちこち反らせようとする相手の目を覗き込みながら、から〴〵と笑ふのであつた……

ジナイーダとマレーフスキイの關係が、わたしには一番わかりにくかつた。彼は美貌でもあつたし、器用で利口でもあつたが、しかし十六歲の少年に過ぎないわたしでさへ、彼の內部に何かしら怪しい、ごまかし者らしい所があるやうに思はれた。わたしはジナイーダがそれに氣づかないのに驚いた。しかし、事によつたら、彼女はこのごまかしに氣がつきながら、別段それを厭がらなかつたのかも知れない。不規則な教育、奇妙な交友や習慣、しじう附きまつてゐる母親、不如意な境遇、不規則な家庭、若い令孃に與へられてゐる自由、周圍の者に立ち勝つてゐるといふ意識――これらすべてのものが、彼女の半ば輕蔑したやうな無頓着な態度や、なげやりな性質を助長したのである。どんなことが起こつても――ヲニファーチイが來て砂糖がないと告げても、何かやくざな世間の蔭口が洩れて來ても、客同志が喧嘩をはじめても、彼女はたゞふさ〴〵と波うつた毛を一ゆりして、「下らない！」と言ふだけで――大して氣にもかけなかつた。

その代はり、わたしはよく全身の血が一度にどつと、頭へのぼるやうな氣がする事があつた。たとへば、マレーフスキイが狐のやうに狡猾らしく體を搖すぶりながら、ゆら〴〵と彼女の傍へよつて、優美な恰好で、彼女の椅子の背にもたれながら、得意らしい媚びるやうな微笑を浮かべて、彼女の耳にひそ〴〵と囁く――けれど、彼女は胸の上へ兩手を組んで、注意ぶかく彼を眺めながら、自分でも笑ひ〴〵首を振つてゐるやうな時である。

「あなたはマレーフスキイを家へ入れるなんて、いゝもの好きぢやありませんか？」ある時わたしは彼女にかう訊いた。

「だつて、あの人はあんな立派な髭をしてるんですもの。」と彼女は答へた。「でも、そんなことは、あなたに關係したことぢやないわ。」

「あなたはひよつと、わたしがあの人を愛してるなんて、そんな事を考へてやしなくつて？」また別な時に彼女はかう言つた。「いゝえ、わたし上から見おろさなくちやならな

いやうな、そんな人を愛する譯にゆかなくつてよ。わたしはね、自分でわたしを取つて拉ぐやうな人でなくちや駄目……ところが、そんな人にぶつ突かる氣づかひはないわ、有り難いことにね！ わたし誰の腿にもかゝりやしないわ、決して！」

「ぢや、あなたは決して戀ひをなさらないんですね？」

「あなたを？ 一體わたしがあなたを愛してゐなくつて？」と彼女は言つて、手袋の先でわたしの鼻を叩いた。

全く、ジナイーダはさん〳〵わたしを慰みものにした。三週間といふもの、毎日わたしは彼女に會つてゐたが——彼女がわたしにし向けない事と言つたら、殆どないくらゐであつた。彼女はあまり家へ遊びに來なかつたが、わたしもそれを格別殘念に思はなかつた。わたしの家へ來ると彼女は社交界の令孃——公爵令孃に早變はりするのであつた。それにわたしも彼女を避けるやうにしてゐた。母の前で尻尾を出すのが怖かつたのである。母はジナイーダに對して、恐ろしく惡感を抱いて、不愉快な氣もちでわたし達を監視してゐた。父の方は、わたしもそれほど怖くなかつた。彼はわたしに氣のつかないやうな風であつた。彼女とはあまり話しをしなかつたが、その話しは何か特別かしこくて、意味ありさうに思はれた。わたしは勉强もやめてしまつた。近郊を散歩したり、遠來りに出かけるのさへ中止した。ちやうど足を縛られた兜蟲のやうに、わたしは絶えずなつかしい離室のまはりをくる〳〵廻つてゐた。わたしはいつまでもそこを離れたくなかつたのだけれど……しかし、それは不可能であつた。母がしじう口小言をいふし、時には當のジナイーダが、わたしを追ひ拂ふからであつた。その時わたしは自分の部屋へ閉ぢ籠るか、それとも庭の一番はづれまで行つて、高い石造溫室の崩れ殘りに攀ぢ登つて、往來へ向いた壁に足をぶら下げたまゝ、幾時間も幾時間もじつと坐つて、何一つ見ようとせずに、いつまでもいつまでも前の方を眺めてゐた。

わたしの傍では、埃だらけになつた蕁麻の上を白い蝶が幾羽か、ものうげに飛びちがつてゐた。元氣のいゝ一羽の雀が、ほど遠からぬ半こはれの赤煉瓦の上に止まつて、絶えず全身をくる〳〵廻しながら、尾を一ぱいにひろげて、いら〳〵させるやうな鳴き聲を立ててゐた。いまだにやはりわたしを信用しない鴉の群れは、裸になつた樺の木の高い高い梢に止まつたまゝ、時々かあ〳〵と鳴いてゐた。太陽と風はその疎らな枝で靜かに戲れてゐる。ドンスキイ修道院の鐘の音が、とき〳〵靜かに佗びしく響いて來た——わたしはじつと坐つて、見かつ聞いてゐた——すると、何

か名狀しがたい感じがわたしの全幅を充たした。その中には憂愁も、歡喜も、未來の豫感も、希望も、生の恐怖も、その他ありとあらゆるものが含まれてゐた。けれどわたしはその時、さういふ事が一さい分からなかつたから、自分の內部に醱酵してゐるものに、何一つ名をつける事が出來なかつたであらう——それとも、これらすべてのものを、たゞ一つの名で呼んだかも知れぬ——それはジナイーダといふ名であつた。

ところが、ジナイーダはまるで猫が鼠をおもちやにするやうに、絶えずわたしを弄んでゐた。彼女はわたしに媚態を見せて、わたしを興奮さしたり、とろけるやうな氣持ちにしたりするかと思ふと——また急にすげなく突き放してしまふ——するとわたしは傍へ近よることも、その顏を眺めることも出來なくなるのであつた。

今でも覺えてゐるが、彼女は四五日つゞけてわたしに冷淡な態度を示した。わたしはすつかり臆病になつて、おづおづ離室へ駈け込みながら、なるべく老公爵夫人の傍についてゐるやうにした。もつとも、丁度その時分、夫人は恐ろしく怒りつぽくなつて、しじうがみ〳〵呶鳴つてゐた。手形に關する事件がうまくゆかないで、もう二度も巡査と言ひ合ひをしたのである。

ある時、わたしは例の垣根づたひに庭を通つてゐるとージナイーダの姿が目に映つた。彼女は兩手を突いて草の上に坐つたまゝ、身動きもしないでゐた。わたしはそつと立ち去らうとしたが、彼女は急に頭を上げて、命令するやうな手つきをして見せた。わたしはその場に立ち竦んだ。わたしは初め彼女の合ひ圖が分からなかつた。彼女はもう一度おなじことを繰り返した。わたしはすぐさま垣根を飛び越えて、大喜びで彼女の傍へ走つて行つた。けれど彼女は目つきでわたしを制して、二歩ばかり距てた小道を指さした。どうしていゝやら分からないでもじ〳〵しながら、わたしは道ばたに膝をついた。彼女の顏が餘りに靑ざめて、痛ましい悲哀と深い疲勞の色が、その一つ〳〵の輪廓に現れてゐるので、わたしは心臟をしめつけられるやうな氣がした。わたしは思はず、

「どうしたのです？」と呟いた。

ジナイーダは手をさし伸べて何かの草を拐り、ちよつと一つ齒で嚙むと、そのまゝぽんと向うへ投げてしまつた。

「あなたは本當にわたしを愛してて？」たうとう彼女はかう訊いた。「さう？」

わたしは何とも返事をしなかつた——それに、何のために返事をする必要があらう？

「さう。」依然としてわたしを見つめながら、彼女は繰り返した。「そりやさうね。まるで同じやうな目だわ。」かう言ひ足して考へ込んだが、不意に兩手で顏を隱した。「わたし、何もかも厭になつた。」と彼女は囁いた。「世界の果てへでも行つて了ひたい。わたしこんな事は我慢できない、わたしには納まりがつけられない……それに、一たい何がこの先わたしを待つてゐるのだらう！……あゝ、苦しい……本當に何て苦しいことだらう！」

「どういふ譯で？」とわたしはおづ〳〵と訊ねた。

ジナイーダは返事をしないで、たゞ肩を竦めたばかりである。わたしはやはり膝をついたまゝ、深い憂悶を抱きながら、彼女を見つめてゐた。彼女の言つた一こと一ことは深くわたしの心に刻みつけられた。わたしはその瞬間、彼女を悲しませないためなら、喜んで命を投げ出しさうな氣もちがした。わたしはじつと彼女を見つめてゐた——そして、なぜそんなに苦しんでゐるのか分からないなりにも、彼女が堪へ難い悲哀の發作に驅られて庭へ出ると、いきなり足を薙がれたやうに、大地へ身を投げるありさまを、まざ〳〵と心に描いてみた。——

あたりは一面光りに滿ちて、靑々としてゐた。風は木立ちの葉をそよがせ、とき〳〵ジナイーダの頭上に伸びた木蕚の長い枝を搖すぶつてゐた。どこかで鳩がくつくと啼いてゐる——蜜蜂はまばらな草の上を低く飛び交ひながら唸つてゐた。上の方には靑空が優しくひろがつてゐる——わたしは何とも言へないほどもの悲しかつた……

「わたしに何かの詩を聞かして頂戴な。」とジナイーダは小聲に言つて、肘つきをした。「わたしね、あなたが詩の朗讀をするのが好きよ。あなたの朗讀はまるで歌だけれど、そんな事はかまはないわ、若い證據ですもの。『グルジヤの丘に』（プーシュキンの詩）を讀んで頂戴な——でも、まづ坐らなくつちや。」

わたしは腰をおろして、『グルジヤの丘に』を朗誦した。

「戀はざるを得ざるが故に。」とジナイーダは繰り返した。「だから、詩はいゝのね、この世にないことを言つてくれるから。そして、實際あるものより優れてゐるばかりでなく、ずつと眞實に近いものを聞かしてくれるから……戀はざるを得ざるがために——戀ひをしたくないと思つても、しずにゐられないんだわ！」彼女は再び口を噤んだが、急にびくりとなつて立ち上がつた。「さあ、行きませう。マイダーノフがお母さんの所へ來てゐるから。わたしに自作の劇詩を持つて來てくれたんだけれど、うつちやつて出てしまつたの。あの人もやはり今しよげてゐるわ……でも、仕方がない！　あなたもいつか分かるでせうが……でも、わたしに腹を立てないで頂戴！」

ジナイーダは忙しさうにわたしの手を握つて、先に立つて駈けだした。わたし達は離室へ歸つた。マイダーノフは出版されたばかりの自作の詩『殺戮者』を朗讀し始めた。けれども、わたしは碌々聞かなかつた。彼は四脚の長短韻を調子に乘つて喚きたてた。脚韻は目まぐるしく入れかはつて、まるで小鈴のやうに、空な仰々しい響きを立てた。わたしは絶えずジナイーダの顏を見つめながら、彼女の言つた最後の言葉を解かうと努めてゐた。

「あるは密かに、戀ひを爭ふ人ありて
　思ひもよらず汝が胸を、とりこにせしや？」

不意にマイダーノフが鼻聲で叫んだ——と、わたしの目はジナイーダの目と出會つた。彼女は視線を伏せて、かすかに顏を赤らめた。彼女が顏を赤らめたのに氣づいて、わたしは思はず驚きのために、體ぢうが冷たくなつた。わたしはもう前から彼女に嫉妬してゐたが、この瞬間彼女は戀ひに落ちたといふ想念が、稍妻のやうにわたしの頭に閃いた。『あゝ、どうしよう！　彼女は戀ひに落ちた！』

10

わたしの本當の苛責は、その瞬間から始まつたのである。わたしは千々に心を碎きながら、さま〳〵に思ひめぐらしたり、考へ直したりした——そして、出來るだけ祕密を守りながら、絶え間なくジナイーダを觀察してゐた。彼女にはある變化が生じた——それは明白であつた。彼女は一人で散歩に出かけて、長い間さまようてゐた。時によると、客に顏を見せないで、幾時間も幾時間も、居間に引き籠もつてゐることがあつた。以前こんなことは絶えてなかつたのである。わたしは急に圖拔けて洞察力がついた——少くともついたやうな氣がした。

『あの男ぢやないかしら？　それともひよつとあの男ぢやなからうか？』心の中で彼女の崇拜者たちを一人々々あらためながら、わたしはかう自問するのであつた。マレーフスキイ伯爵は（こんな事を認めるのは、ジナイーダのために恥づかしかつたけれど）、誰より一ばん危險な人物として、內心ひそかに注意してゐた。

わたしの觀察力は自分の鼻の先だけしか屆かなかつた。そしてわたしの祕密政策は、誰の目をも欺くことが出來なかつたらしい。少くとも醫師のルーシンは、すぐにわたしの腹の底まで見拔いてしまつた。もつとも、彼自身も最近樣子が變はつた。痩せが目立つて、やはりよく笑ひはする

けれど、その聲が妙に籠もつて、毒々しくぶつきら棒に響いた——以前の輕い皮肉と、ことさら取つてつけた露骨な話しぶりは、自ら意識せざる神經的な苛だたしい調子に代はつて了つた。

「ねえ、君、何だつて君はさうしよつちう、こゝへお百度を踏むんです？」ある時ザセーキン家の客間で、わたしとさし向かひになつた時、彼はわたしにかう言つた（公爵令孃はまだ散歩から歸つて來ないし、母夫人のがみ〳〵言ふ聲は、中二階で響いてゐた。彼女は小間使ひと言ひ爭つてゐるのであつた）。「君は若い間に勉強したり、仕事をしたりしなくちやならん筈でせう——一たい君は何をしてゐるんです？」

「僕が家で勉強してるかどうか、そんな事はお知らせするわけに行きません。」とわたしは言ひ返したが、その調子には幾分尊大なところもあれば、幾分うろたへたやうな所もあつた。

「何が勉強どころですか！　君の頭の中にあるのは、まるつきり違つた事なんですからね。がまあ、わたしも敢て言ひ張りますまい。君の年頃ではそれが當たり前だから。しかし、君の選擇はきつい失敗ですね。一體この家がどんな家か、君にはそれが分からないんですか？」

「僕はあなたの言ふことが分かりません。」とわたしは答へた。

「分かりませんて？　それぢやいよ〳〵いけない。わたしは義務として君に注意して置きますよ。われ〳〵のやうな年寄りの獨身ものなら、こゝへやつて來たつて構ひません。われ〳〵はびくともする事ぢやないですよ。何しろ揉まれ拔いた人間だから、矢でも鐵砲でも持つて來いですよ。ところが、君はまだ皮が柔かいから、こゝの空氣は毒ですよ——まあ、わたしの言ふことを信じて下さい。傳染するかも知れませんよ。」

「それは何のことです？」

「何もかにもありませんよ、一たい君はいま健康ですか？　ノーマルな狀態でゐますか？　君のいま感じてをられること——一體そんな事が君のためになりますか、いゝ事ですか？」

「一たい僕が何を感じてると言ふんです？」とわたしは言つたが、心の中では、醫師の言ふ事がもつともだと自認した。

「え、君、」何かわたしにとつて非常に侮辱的なものが、この言葉の中に含まれてでもゐるかのやうに、醫師は意味ありげな表情をして語をついだ。「君なんかにそんな策略が

廻らせるもんですか、君の心にあることは、ありがたい事は、ちやんとすつかり顏に書いてありますよ。もつとも、何もぐづ〳〵言ふ事はありやしない。かう言ふわたしだつて、もし……（醫師は齒を食ひしばつた）……もしわたしが君と同じくらゐな變人でなかつたら、こゝへのこ〳〵やつて來る筈ぢやないんですよ。たゞ一つ不思議なことがあるんです——どうして君のやうな賢い人が、自分のすぐ傍で起こつてゐる事に氣がつかないんでせう？」

「一體どんな事が起こつてるんです？」とわたしは抑へて、全身の注意を緊張さした。

醫師は妙に嘲るやうな同情の色を浮かべて、じつとわたしを見つめた。

「だが、わたしだつて褒めたものぢやない。」と彼は獨りごとのやうに言つた。「この人にそんな事を言ふ必要がどこに有るんだ。一口に言へば、」と彼は聲を高めて言ひ添へた。「繰り返して言ひますが、こゝの雰圍氣は君のためになりません。そりや、こゝは面白い。しかし世の中はさまざまですからね！　溫室の中だつて氣もちのいゝ匂ひがしてゐる——しかし、その中で暮らすわけには行かない。ね！　わたしの言ふことをきいて、またマイダーノフにお歸りなさい。」

公爵夫人がはいつて來て、醫師に齒痛を訴へはじめた。やがてジナイーダがはいつて來た。

「ねえ、ドクトル、」と公爵夫人は言ひ足した。「一つこの子を叱つてやつて下さい。一んち氷を入れた水ばかり飲んでゐるんですよ。一體こんな事をしていゝものでせうか、あんな弱い胸をしてゐる癖に？」

「なぜそんなことをなさるんです？」とルーシンが訊ねた。

「さうしたら一體どうなるんですの？」

「どうなるかですつて？　風を引いて死ぬかも知れませんよ。」

「本當ですか？　まあ？　なに、構やしないわ——それか當たり前だわ！」

「おや〳〵！」と醫師は呟いた。公爵夫人は出て行つた。

「おや〳〵。」とジナイーダは口眞似をした。「一たい生きるといふ事は、そんなに面白いものでせうか？　まあ、周りを見てご覽なさい……どうでせう——これでいゝんですの？　それともあなたは、わたしには分からない、感じがないとでも思つてらつしやるの？　わたしはね、氷のはいつた水を飲むのが、いゝ氣もちなんです。一瞬の滿足のためにこの人生を犧牲にするのは間違つてゐる、などと眞面目

な顏をしてお說教なさるのは、それはあなたのご勝手ですけれど――わたし、もう幸福なんてことは口にしようとも思ひません。」

「まあ、その、」とルーシンは言つた。「氣まぐれとわがままの……この二語であなたの全部は盡きてゐますよ。あなたの性格はこの二つの言葉にすつかり含まれてゐます。」

ジナイーダは神經質に笑ひだした。

「お氣の毒さま、一足おくれましたよ、ご親切なドクトル。あなたの觀察はあまり確かぢやありませんね。少し時代に遲れてゐらつしやるわ。――まあ、眼鏡でもおかけなさい。わたしいま氣まぐれどころぢやないんですの。あなた方をからかつたり、自分でも馬鹿を盡くしたり……そんな事が何の面白いものですか！――ところで、わがまゝといふ事については……ねえ、ヲルデマールさん、」彼女は急にわたしの方へ向いて、とんと足を踏み鳴らした。「そんな悲しさうな顏をしないで頂戴。わたしは人から同情されるのが大嫌ひなんだから。」彼女は足早に出て行つた。

「毒ですよ、こゝの雰圍氣は君に毒ですよ。」ルーシンはもう一度わたしにかう言つた。

一一

その晩ザセーキンの家へいつもの連中が集まつた。わたしもその仲間であつた。

會話はマイダーノフの劇詩のことに及んだ。ジナイーダは心から正直に褒めた。

「でも、どんなものでせう？」と彼女はマイダーノフに言つた。「もしわたしが詩人だつたら――もつと違つた主題を選ぶと思ひますわ。こんな事は馬鹿々々しい話しかも知れませんが――ときゞ妙な考へが頭に浮かぶんですの。夜明け前、空が薔薇色や鼠色になつて來る時分、目が醒めて寢られないやうな時など、殊にさうですわ――例へばわたしが……あなたがた笑ひはなさらないでせうね？」

「決して！　決して！」わたし達は聲を揃へて叫んだ。

「わたしはね、」胸の上へ手を組んで、脇の方へじつと目を注ぎながら、彼女は言葉を續けた。「夜、靜かな河の上で、大きな舟に乘つてゐる大勢の若い娘を書きますわ。月が晃晃と照つてゐると、白い着物をきて、白い花輪を被つた娘達が、みんなで歌をうたつてるんですの、まあ、何か讃美歌のやうなものをね。」

「分かります、よく分かります。さあ、後を言つて下さい。」とマイダーノフが意味ありげな、空想的な調子でかう言つた。

「すると不意に岸の上で――騷々しいもの音や、高い笑ひ聲や、把火のはぜる音や、羯鼓の響きが聞こえる……それは酒神の使ひ女が群れを作つて、唄つたり叫んだりしながら、走つて來るんですの。まあ、そこの情景を描寫するのは、それはもうあなたの仕事よ、詩人先生……たゞわたしね、把火の火がまつ赤で、恐ろしく煙を立ててゐて、酒神の使ひ女達の目が、花輪の蔭から光つてゐなくちや厭なの。そして、花輪も黑つぽくなくちやいけないわ。それから虎の皮や盃も忘れちや駄目よ――それから金を使ふの、うんと澤山に金を。」

「どこに金がなくちやいけないんでせう？」平つたい髮の毛を後ろへ振りのけて、鼻の孔をふくらませながら、マイダーノフがかう訊いた。

「どこにですつて？　肩にも、手にも、足にも、どこにもかしこにも。何でも昔は、女が金の輪を踝に嵌めたさうぢやありませんか。酒神の使ひ女は、舟の中の娘たちを自分の方へ呼ぶんです。娘たちは讃美歌をうたふのを止めて了つた、と思つて下さい――續けて歌ふことが出來なくなつたからです――けれど、身動きもせずにじつとしてゐます。水の流れは舟を岸の方へ押して行きます。すると、不意にその中の一人が、靜かに立ち上がるぢやありませんか……こゝの所はよく書かなくちやなりませんわ――一人が月光の中で靜かに立ち上かる樣子や、ほかの友達がびつくりする樣子などね……その娘が舟ばたを跨ぐと、酒神の使ひ女達は、忽ちそれを取り卷いて、夜の闇の中へ連れて行つてしまふ……こゝの所で煙りが大きく渦まいて、何もかも入り亂れてしまふ樣子を、書いて貰ひたいんですの。ただ、みんなの甲高い叫び聲が聞こえるばかり、そして岸の上には娘の花輪がとり殘されてゐる……」

ジナイーダは口を噤んだ。（「おゝ！　彼女は戀ひに落ちた！」とわたしはまた考へた）。

「それだけですか？」とマイダーノフが訊いた。

「それだけ。」と彼女は答へた。

「それは大きな劇詩の題材にはなりかねますが、」と彼は勿體ぶつてかう言つた。「しかし、抒情詩の材料として、あなたの想を拜借しませう。」

「ロマンチックなものですね？」とマレーフスキイが訊ねた。

「無論ロマンチックなものです、バイロン風のね。」

「僕の考へでは、ユーゴーの方がバイロンよりいゝですよ。」と若い伯爵は無辯作に言つた。「そして面白いです。」

「ユーゴーは第一流の作家です。」とマイダーノフが答へ

た。「僕の友人のトンコシェーフも、自分の書いた『エル・トロヴドール』といふ西班牙を舞臺にした小説で……」

「あゝ、それはあの疑問點が逆立ちをしてゐる本ですの？」とジナイーダが叫んだ。

「さうです、西班牙ぢやさういふ習慣になつてるもんですから。詰り僕が言はうと思つたのは、トンコシェーフは……」

「まあ！　あなた方はまた古典主義やロマンチズムの議論を始めるんですか。」ジナイーダはまたもや彼を遮つた。「それより何かして遊びませう……」

「賭けですか？」とルーシンが引き取つた。

「いえ、賭けは退屈ですわ。較べごつこでもしませう。」（この遊びはジナイーダが自分で考へ出したものである。何か一つ題を出して、みんながそれを何かに比較する。そして、一番いゝ比喩を考へ出した者が、賞を貰ふことになつてゐた）。

彼女は窓に近よつた。太陽はたつた今しづんだばかりで、空にはまつ赤な長い横雲が高く浮かんでゐた。

「あの雲は何に似てるでせう？」とジナイーダは訊ねた。そしてわたし達の答へも待たずに、自分でかう言つた。

「わたしあの空は、クレオパトラがアントニイを出迎へに乘つて行つた、金の舟に張つてある眞紅の帆に似てると思ふわ。ねえ、マイダーノフさん。あなたこの間わたしにその話しをなすつたでせう？」

わたし達はみんな『ハムレット』の中のポロニアスのやうに、あの雲は全くその時の帆に似てゐる、それ以上の比喩は誰ひとり考へつけない、とかう決めてしまつた。

「その時アントニイは幾つだつたでせう？」とジナイーダは訊ねた。

「きつと若かつたに相違ありません。」とマレーフスキイが口を入れた。

「さうです、若かつたですよ。」とマイダーノフが確かめるやうに裏書きした。

「失禮ですが、」とルーシンが叫んだ。「アントニイはもう四十越してゐましたよ。」

「四十越して？」ちらと彼を見やりながら、ジナイーダはかう繰り返した。

わたしは間もなく家へ歸つた。――『彼女は戀ひに落ちた。』わたしの唇はわれともなしに囁いた……『けれども、誰に？』

一二

日は流れ去つた。ジナイーダはいよ／＼奇妙に、いよい

よ不可思議になつて行つた。ある時、わたしが彼女の部屋へはいつて見ると、籐椅子に腰かけて、尖つた卓の縁に頭を押しつけてゐた。彼女は急に身を伸ばした……その顏は一めん涙に濡れてゐた。

「あら！　あなたですの！」彼女は殘忍な微笑を浮かべながらかう言つた。「こつちへいらつしやい。」

わたしは傍へよつた。彼女は、わたしの頭へ手を載せたかと思ふと、いきなり、髪の毛をひつ掴んで捩ぢ廻し始めた。

「痛い……」たうとうわたしはかう言つた。

「あら！　痛いんですつて！　ぢやわたしは痛くないと思つて？　痛くないと思つて？」と彼女は言つた。

「あつ！」わたしの頭から一束の毛を引き拐つたのを見て、彼女は不意にかう叫んだ。「わたしまあ何をしたんだらう？可哀さうなヴルデマールさん！」

彼女はそつと拐りとつた毛を揃へて、指のまはりへ巻きつけ、指輪のやうな恰好にした。

「わたし、あなたの髪の毛をロケットに入れて、しじう肌身につけてゐるわ。」と彼女は言つたが、その目には依然として涙が光つてゐた。「さうすれば、幾らかあなたの氣もすむでせう……ぢや今日はさやうなら。」

わたしは家へ歸つた。すると、そこに不愉快な事件が待ち構へてゐた。母は父と言ひ合ひをしたのである。母は何か言つて父を詰つてゐたが、こちらは例の通り、冷たい慇懃な調子で、沈默を守つてゐた――そして、間もなく外出してしまつた。わたしは母が何を言つたのか、よく聞きとれなかつた。それに、そこどころの騒ぎではなかつたのである。たゞ一つ覺えてゐるが、父との言ひ合ひがすんでから、母がわたしを自分の居間へ呼んで、わたしの頻繁なザセーキン家訪問に不滿を述べ、公爵夫人のことをどんな事でもしかねない女と言つた。わたしは母の手に接吻して（それは會話を打ち切らうと思ふとき、いつもわたしの出す奥の手だつたのである）、自分の部屋へ引き上げた。ジナイーダの涙はすつかりわたしをまごつかせた。わたしは何を考へていゝのかまるで分からないで、たゞもう泣き出さないばかりであつた。わたしは年こそ十六であつたけれど、やはりまだねんねえだつた。わたしはもうマレーフスキイのことなど考へもしなかつた（もつとも、ベロヴゾーロフは日に／＼險惡になつて行つて、まるで狼が羊を狙ふやうに、このすばしつこい伯爵を睨んでゐたけれど）。わたしは何ごとも、誰のことも考へなかつた。わたしは空想に沒頭してしまつて、絶えず淋しい場所を求めてゐた。殊に氣に

入つたのは、半ば崩れたあの温室である。よく高い塀の上へのぼつて、そこに腰をおろし、いかにも淋しく佗びしい不幸な青年といふ恰好で、じつと坐つてゐると、われながら自分が可哀さうになつて來るのであつた——この苦い感覺が限りなく喜ばしかつた。わたしはそれを一生懸命に貪り吸つた！……

ある時、わたしがこの塀の上に坐つて、じつと向うの方を眺めながら、鐘の響きに耳を傾けてゐると……不意に何かがわたしの體を傳つて走つた——そよ風でもなければ、身ぶるひでもなく、何かの息吹きとでも言はうか、何ものかの接近に對する直感とでもいはうか、さういつたやうなものであつた……わたしは目を伏せた。と、下の道路づたひに輕い鼠いろの着物を着て、薔薇色の傘を肩にしたジナイーダが、急がしげに歩いてゐる姿が見えた。彼女はわたしを見つけて立ち止まり、麥藁帽子の緣を持ち上げて、天鵞絨のやうな目をわたしに向けた。

「そんな所で何をしてらつしやるの、そんな高い所で？」何だか妙な微笑を浮かべながら、彼女はかう訊ねた。「さうさう、」と彼女は話をついだ。「あなたは始終、わたしを愛してゐると誓つてらつしやるけど、もし本當に愛してゐらつしやるなら、わたしの傍へ——この往來へ飛びおりてご覽なさい。」

ジナイーダがこの言葉を言ひも終らぬうちに、わたしはまるで誰かに後ろから突かれたやうに、もう塀から飛びおりてゐた。塀の高さは二間以上あつた。わたしはまづ足から土に觸れたけれど、はずみが餘り强かつたので、自分の體を支へることが出來なかつた。わたしはそこにぶつ倒れて、ちよつと一瞬間氣を失つた。やがてわれに返つたとき、まだ目をあけないうちから、自分の傍にジナイーダの存在を感じた。

「わたしの可愛い子供。」わたしの上へ屈みかゝるやうにしながら、彼女はかう言つた——その聲には不安げな優しさが響いてゐた。「どうしてあんたはこんな事が出來たの、どうしてわたしの言ふ事なんか聞いたの……だつてわたしもあんたを愛してるんぢやないの……さあ、お起きなさい。」

彼女の胸はわたしの胸の傍ちかく呼吸し、その手はわたしの頭に觸れてゐた。と、不意に——あゝ、わたしはその時どんな氣もちがしたらう！——彼女の柔かい爽やかな唇が、わたしの顏一面にキッスを印しはじめた……わたしの唇にも觸れた……けれど、その時ジナイーダは、多分わたしの顏の表情から見て、目こそ開けないでゐるけれど、わ

たしが意識を恢復したのを察したのであらう、急に身を起こしてかう言つた。

「さあ、お起きなさい。いたづらつ子さん、あなた向う見ずね。何だつてこんな埃の中にいつまでも寢てるの？」わたしは立ち上がつた。「まあ、あんな所へおつぽり出してるわ。そんなにわたしを見ないで頂戴……ほんとに何て馬鹿々々しい！　あなた打ちはなさらなくつて？　きつと蓐麻に刺されなすつたんでせう？　わたしを見ちやいけないつて、さう言つてるぢやありませんか……まあ、この人は何も分からないんだわ。まるで返事をしやしない。」と彼女は獨ごとのやうに言ひ添へた。「ヴルデマールさん、家へお歸んなさい。そして、體でも綺麗におしなさい。わたしの後からついて來ちや承知しなくつてよ。でないと、わたし怒つちまつて、もう決して……」

彼女はしまひまで言ひ終らないうちに、すばやく向うへ行つてしまつた。わたしは、道のまん中に踞んで了つた……足が言ふことを聞かなかつたのである。蓐麻に刺された手がピリ〳〵して、背はずき〳〵と痛み、頭はふら〳〵した。けれど、わたしがそのとき經驗した幸福感は、もう二度とわたしの生涯に繰り返されなかつた。それは甘い痛みとなつて、わたしの體ぢうに溢れてゐたが、やがて歡喜に滿ちた跳躍と叫喚となつて迸り出た。全くわたしはまだねんねえであつた。

一三

この日わたしは、何とも言へないほど愉快な誇らしい氣もちでゐた。そして、自分の顏にジナイーダの接吻の感觸をまざ〳〵と保ちながら、歡喜の戰慄をもつて、彼女の言葉を一つ〳〵思ひ浮かべ、この思ひがけない幸福を、心の底から愛でいつくしんでゐたので、この新しい感覺の原因を作つた彼女を見るのが、恐ろしいくらゐであつた。いな、寧ろ見たくないほどであつた。もうこれ以上運命から要求するものは何もない、今はたゞ『ようく最後の息をついて、一思ひに死んで了ひさへすればいゝ。』と言つたやうな氣もちがした。

その代はり翌日離室へ出かけながら、わたしは非常な困惑を感じた。自分は祕密を守ることが出來るぞと、他人に知らせたがつてゐる人によく見受けられる、つゝましやかな墮落の假面のもとに、この氣もちを隱さうとしたけれど、その努力は無駄であつた。ジナイーダは一向わく〳〵した樣子もなく、ごく淡泊にわたしを迎へた。そして、ちよつ

と指で脅かす眞似をして、どこも打ち身は出來なかつたか、と訊いたばかりである。わたしのつゝましやかな磊落さも神祕めいた氣もちも、忽ち一瞬間に消えてしまつた。が、それと同時に、當惑の情もなくなつた。勿論、わたしは何も特別なものを期待してはゐなかつたが、しかしジナイーダの落ちつき拂つた素振りは、わたしの頭から冷水を浴びせたやうな具合ひであつた。自分はあの人の目から見ると赤ん坊なのだ！　わたしはかう悟ると――苦しくてたまらなくなつた！　ジナイーダは部屋の中を行きつ戻りつしてゐたが、わたしの顏を見る度に、ちらりと笑顏を見せるのであつた。けれど彼女の思ひはどこか遠くを馳せてゐる、それはわたしにも明瞭であつた……

『自分の方から昨日のことを話しかけようか、』とわたしは考へた。『きのふあんなに急いでどこへ行つたのか、すつかり樣子を突き止めるために訊いて見ようか……』けれどわたしはたゞ片手を振つただけで、片隅に腰をおろした。

ベロヴゾーロフがはいつて來た。わたしは彼の來訪を喜んだ。

「おとなしい馬がどうも見つからなかつたです。」と彼はいかめしい聲で言ひだした。「フライターグが一頭うけ合ふと言つてゐますが、僕は信用できないんです。何だか心配でね。」

「何がそんなに心配なんですの？」とジナイーダは訊ねた。「一つ伺ゝたいもんですわ。」

「何ですつて？　だつて、あなたはうまく乘れないぢやありませんか。萬一どんな事がないとも限りませんよ！　それにまた急にえらい事を考へ出したもんですね！」

「えゝ、そんな事はわたしの勝手ですわ、わたしの野獸さん。さういふ譯なら、ピョートル・ヴシーリッチにお願ひしませう……」（わたしの父はピョートル・ヴシーリッチと言つた。わたしは不思議なことに思つた。彼女は父の好意を信じきつてゐるやうに、かるゞゝと自由に父の名を口にするではないか）。

「さうですか、」とベロヴゾーロフは言つた。「ぢやあなたはあの人と一しよに、遠乘りをするおつもりですな？」

「あの人と行くか、ほかの人と行くか――そんな事はあなたにとつて同じぢやありませんか。たゞあなたと一しよぢやありませんよ。」

「僕と一しよでない、」とベロヴゾーロフは繰り返した。「どうぞご隨意に。いたし方がありません。とにかく僕は馬を手に入れてさし上げます。」

「たゞね、よござんすか、變てこな牛みたいなものをつれて來ちゃ厭ですよ。前もつてお斷りして置きますけれど、わたしうんと駈けたいんですから。」

「なにまあ、駈けられますよ……しかし、一體おつれは誰ですか、マレーフスキイですか？」

「あの人と一しよに行つたつて、さし支へないぢやありませんか、野獸さん？　まあ、安心おしなさい、」と彼女は言ひ足した。「そんなに目を光らせないで頂戴。わたしあなたも連れてつて上げますわ。あなただつてご存じでせう、今わたしにとつてマレーフスキイなんか――び、び、びいだわ！」彼女は頭をふつた。

「あなたは僕を慰めようと思つて、そんな事をおつしやるんでせう。」とベロヴゾーロフはぶつゝ言つた。

ジナイーダは目を細めた。

「あなたはそんな事で慰められるの？　おや……おや……おや……大變な勇士だこと！」ほかに言葉が見つからないやうな風で、たうとう彼女はかう言つた。「ヴルデマールさん、あなたはわたし達と一しよにいらしつて？」

「僕……大勢の中へ出るのは……すきでないから……」わたしは目を上げないでかう呟いた。

「あなたは差し向かひの方がご所望なんですね？……まあ自由なものには自由を與へよ、救はれたものには……天國を與へよだわ。」と彼女は嘆息しながら言つた。「ぢや、ベロヴゾーロフさん、これから行つて一骨折つて頂戴な。馬は明日までにいるんですから。」

「だつて、お金はどこから手に入れるつもりだね？」と公爵夫人が口を入れた。

ジナイーダは眉をひそめた。

「わたし、お母さんに貸して下さいと言やしないわ。ベロヴゾーロフさんがわたしを信用して、立て替へて下さるでせうよ。」

「立て替へて下さる、立て替へて……」と公爵夫人は呟いたが、だし抜けに喉一ぱいの聲で叫んだ。「ドゥニャーシカ！」

「お母さん、わたし呼び鈴を上げたぢやありませんか。」と令孃は注意した。

「ドゥニャーシカ！」と老夫人は繰り返した。

ベロヴゾーロフは一禮した。わたしは彼と一しよに辭し去つたが、ジナイーダは別に引き止めようともしなかつた。

一四

翌朝わたしは早く起きて、杖を一本こしらへると、城門の外へ赴いた。一つ出かけて行つて、悲しみを紛らしてやらう、といふ氣もちなのであつた。それはうらゝかに晴れ

渡つた日で、しかもあまり暑くなかつた。樂しい爽かな風が地上を戲れて、すべてのものを輕くゆすぶりながら、しかも不安の感じを與へるやうな事もなく、ほど〳〵に音を立てて吹いてゐた。わたしは長いこと山や森をさまよつた。自分を不仕合はせ者と感じたので、思ふさま憂愁にひたるつもりで、家を出たのである――けれど、靑春と、うら〻かな日和と、爽かな空氣と、急がしい足の運びが齎す快さと、厚い草の上に靜かに身を橫たへる享樂感と――かういふものが最後の勝利を占めた。かの忘れ難い言葉や接吻の思ひ出が、再びわたしの心を一ぱいに滿たして來た。ジナイーダは何と言つても、わたしの斷乎たる精神や、英雄的行爲を正當に評價しないわけに行かない、かう考へるとわたしは愉快であつた……

『あの人の目には、ほかの者の方が優れて見えるかも知れない。』とわたしは考へた。『が、なに構やしない！　そのかはり、ほかの者はたゞすると言ふだけだが、自分はちやんとやつてのけた！　それにあの人のためなら、まだ〳〵あれくらゐの事ぢやない、もつと〳〵偉いことをして見せる！』

わたしの想像力は活動を始めた。わたしは自分が彼女を敵の手から奪ふ光景や、血まみれになつて牢屋から彼女を救ひ出すあり樣や、遂に彼女の足もとで死ぬる場面などを、心に描きはじめた。わたしは家の客間にかゝつてゐる、マレク・アデルがマチルデを抱へて走る畫面を思ひ出した――が、すぐにその場で、細い白樺の幹にせか〳〵と登つて行く、大きなまだらの啄木鳥の姿に氣を取られて了つた。啄木鳥はまるでコントラバスの頸の蔭から顏の覗ける樂師のやうに、絕えず不安げに木の蔭から、時には左、時には右と、かはる〴〵嘴をさしのぞけるのであつた。

それからわたしは、『白雪ならで』を歌ひだしたが、いつの間にか當時流行のローマンス『そよ風の戲るる時われ君を待つ』になつてしまつた。それからわたしは、ホミャーコフの悲劇に出て來る、エルマークの星に寄する言葉を、こわ高に朗吟しはじめた。また、何か感傷的な調子の詩を作らうと試みて、全篇を結ぶべき最後の一行さへ考へついた。それは、『おゝ、ジナイーダ、ジナイーダ！』といふのであつたが、しかし結局何にもならなかつた。

そのうちに食事の時刻が來た。わたしは谷へおりて行つた。狹い砂の道がその間をうねつて、町の方へ續いてゐた。わたしはこの細道を傳つて歩きだした……ふと、馬の蹄の籠もつたやうな響きが後ろの方に聞こえた。わたしは後ろをふり返ると、思はず立ち止まつて帽子をとつた。父とジナイーダの姿が目に入つたのである。二人は馬を並べて進んでゐた。父は全身を彼女の方へ屈めて、片手を馬の首に突つぱりながら、何やらしきりに話してゐた。彼は微笑を含んでゐた。ジナイーダは嚴つい表情で目を伏せて、じつと脣を嚙みしめたまゝ、無言に彼の言葉を聞いてゐた。初めわたしが見たのは、この二人きりであつたが、暫らく經つて谷の曲がり角から、輕騎兵の制服を着て外套を持ち、泡だつた黑馬に跨がつたベロヴゾーロフが現れた。逸物らしい馬は首を振り鼻を鳴らして、躍るやうな恰好をしてゐた。乘りては手綱を押さへたり拍車を當てたりしてゐた。わたしは脇へよけた。父は手綱をしめて、ジナイーダから體を引いた。彼女は靜かに目を上げて父を見た――かうして二人は駈け去つた……ベロヴゾーロフは洋劍をがちや〳〵鳴らしながら、二人の後から疾驅した。

『あの男は蝦のやうにまつ赤だ。』とわたしは考へた。『ところが彼女は……なぜあんな靑い顏をしてゐるのだらう？午前ちう乘り廻してゐるのに――あんな靑い顏をしてゐるなんて？』

わたしは歩みを早めて、ちやうど食事の前に家へ歸り着いた。父はもう着物をあらため顏を洗つて、さば〳〵した樣子で母の肘椅子の傍に腰を落ちつけ、なだらかな響きのい〻聲で、『評論雜誌』の雜錄欄を讀んで聞かしてゐた。けれど母は一向身を入れないで聞いてゐた。そしてわたしの顏を見るが早いか、どこに一ぢ姿を隱してゐたのかと訊いた後、得體の知れない人間と、どこかわけの分からない所をほつつき廻るのは、大嫌ひだとつけ足した。わたしは一人で散歩してゐたのだ、と答へようと思つたが、ふと父の顏を見ると、なぜか口を噤んでしまつた。

一五

それから五六日の間、わたしは殆どジナイーダを見なかつた。彼女は病氣だとふれ出してゐたが、それでもこの離室の定連が――彼女の言葉を借りて言ふと――當直にやつて來るのを妨げなかつた。たゞマイダーノフだけは例外で、彼は感激する機會がなくなると同時に、忽ち意氣沮喪して退屈さうな風になつた。ベロヴゾーロフは上着の釦をきつちり掛けて、まつ赤な顏をしながら、氣難かしさうに片隅に坐つてゐた。マレーフスキイ伯爵の華奢な顏には、いつも何だか不氣味な微笑が漂つてゐた。彼は本當にジナイーダの寵を失つたので、今では特別勉强して老夫人のご機嫌をとつてゐた。そして、彼女と一しよに貸し馬車で、モスクワ總督の所へ出かけて行つた事さへある。もつとも、こ

の訪問は不成功に終つて、マレーフスキイは厭な思ひをさせられた。總督は伯爵に向かつて、彼と交通部の將校との間に起こつた、あるいざこざを持ち出したのである――で彼はそれに對して、あの時はまだ無經驗だつたからと、言ひ譯をしなければならなかつた。

ルーシンは毎日二度づゝやつて來たが、長いあひだ坐つてもゐなかつた。わたしは最近かれと言ひ合つて以來、多少この人を恐れるやうになつたが、それと同時に、眞底から彼に引きつけられるやうな氣がした。あるとき彼はわたしと一しよに、ネスクーチヌイ公園へ散歩に出かけた。彼は恐ろしく人がよくて親切で、色んな草や花の名稱や性質を說明してくれた。と、不意に何のきつかけもないのに、ぽんと額を叩いてかう叫んだ。

「あゝ、おれは馬鹿だつた。あの人を弄娼女だと思つてゐたんだからなあ！　どうやら人によつては――自分を犧牲にするといふ事が、氣もちのいゝものと見える。」

「それは一たい何のことですか？」とわたしは訊ねた。

「君には何も言ひたくないです。」とルーシンはぶつきら棒に答へた。

ジナイーダはわたしを避けるやうにしてゐた。わたしの姿を見ると――それはわたしも氣がつかずにゐられなかつた――彼女は不快な印象を受けるらしかつた。彼女は無意識にわたしから顏をそむけた……全く無意識なのである。それがわたしには辛かつた。それがわたしを苛むのであつた！　けれどどうにも仕方がなかつた――わたしは彼女の目に入らないやうに努めながら、たゞ遠方からそれとなしに見張りをしてゐたが、それはいつも必ず成功するとは行かなかつた。彼女には依然として何か不思議な變化が起こつてゐた。顏がすつかり違つてしまつて、全體に別人のやうになつて來た。

この變化が格別わたしを驚かしたのは――ある靜かな暖かい晩のことであつた。わたしは枝をひろげた接骨木の木蔭で、低いベンチの上に腰かけてゐた。わたしはこの場所がすきだつた。そこからジナイーダの部屋の窓が見えたからである。わたしはじつと坐つてゐた。頭の上の黑ずんだ繁みの中で、一羽の小鳥が忙しげにがさ〳〵動いてゐる。と、灰色をした猫が背中を伸ばして、そつと庭へ忍び込んだ。はじめて姿を見せた兜蟲はもう明るくはないけれど、まだ透明な空氣の中で、重々しげに唸つてゐた。わたしはじつと坐つて窓を眺めながら、今にも開きはしないかと心待ちにしてゐた。と、果たして窓があいた。そしてジナイーダが姿を現した。彼女は白い着物をきてゐたが、その顏

も、眉も、手も、まつ白に見えるほど靑ざめてゐた。彼女は長い間じつとしてゐた。そして、ひそめた眉の下から、じつと、まつ直に、長いあひだ見つめてゐた。わたしは今まで彼女のこんな目つきを見たことがなかつた。やがて、彼女は兩手を固く〳〵握りしめて、それを脣や額へ持つて行つた――と、不意に指をひろげて、耳の上から髮を拂ひのけ、さつと一振りふり上げた。そして、何か決然たる態度で、頭を上から下へしやくるやうにした後、ぱたりと窓をしめた。

三日ばかり經つて、わたしは庭で彼女に會つた。わたしは脇の方へ避けようとしたが、彼女の方からそれを引き止めた。

「手を貸して頂戴。」以前の優しい調子で、彼女はわたしにかう言つた。「もう長い間お喋りをしなかつたわね。」

わたしは彼女を見やつた。その目は靜かに光つて、顏は薄ものを通して見るやうにほゝ笑んでゐた。

「あなたはやはり加減がよくないんですか！」とわたしは訊いた。

「いゝえ、今はもうすつかりよくなりましたわ。」と彼女は答へて、小さな紅薔薇を摘み取つた。「たゞ少し疲れたけれど、それも今によくなるでせう。」

「ぢや、また元のやうになつて下さいますか？」とわたしは訊ねた。

ジナイーダは薔薇を顏へ持つて行つた――わたしは鮮かな花びらの反映か、彼女の頰へ落ちたやうに思はれた。

「一體わたしは變はつたでせうか？」と彼女は訊ねた。

「えゝ、變はりました。」とわたしは小聲で答へた。

「わたしあなたに對して冷淡でしたわね――わたし自分でも分かつてるわ。」とジナイーダは言ひだした。「けれど、そんな事を氣にしちやいけなくつてよ……わたし、ほかに仕樣がなかつたんだから……でも、こんな話しをしたつて仕樣がないわ！」

「あなたは僕に愛されるのが厭なんです――それだけの事ですよ！」わたしは思はず陰鬱な激越した調子でかう叫んだ。

「いゝえ、愛して頂戴。だけど、前のやうな風でなしにね。」

「ぢやどんな風に？」

「友達になりませう――それでなくちやいけないわ！」ジナイーダはわたしに薔薇の花を嗅がせた。「ねえ、わたしはあなたよりずつと年上なのだから――あなたの叔母さんになつてもいゝくらゐだわ、全く。まあ叔母さんでないまでも、姉さんは間違ひのないところよ。ところが、あなたは

……」

「僕はあなたの目から見れば子供なんですよ。」とわたしは遮つた。

「えゝ、さう、子供よ。だけど、可愛い利口ないゝ子で、わたし大すきなの、あゝ、かうしませう！　わたし今日からあなたをお小姓にとり立ててあげるわ。よくつて、お小姓といふものは、ご主人の傍を離れてはならないつてことを、忘れないで頂戴な。さあ、これがあなたの新しい位のしるしよ。」わたしのジャケツの釦穴に薔薇をさしながら、彼女はかう言ひ足した。「わたしの寵愛のしるしよ。」

「でも、前はもつと違つた寵愛をうけてゐましたよ。」とわたしは呟いた。

「あら！」とジナイーダは言つて、脇の方からわたしを眺めた。「この人の覺えのいゝこと！　しかたがないわ！　わたし今だつて構はないわ……」

かう言つてわたしの方へかゞみ込みながら、彼女はわたしの額に清らかな落ちついた接吻を印した。

わたしはたゞその樣子を眺めてゐた。彼女は急にそつぽを向いて、「さあ、お小姓さん、わたしの後からついてらつしやい。」と言ひながら、ずん〳〵離室の方へ歩きだした。わたしはその後に續いたが、心中たえず不思議に思つた。

『一體』とわたしは考へた。『この慎ましい分別のある令孃が、以前のジナイーダと同じ人か知らん？』彼女の歩きぶりまで、前より靜かになつたやうに思はれた――そして彼女の姿全體も一きは威嚴を增して、一層すらりとして來たやうに感じられた……

あゝ！　この時わたしの心中に、どんな新しい力をもつて愛が燃えたつたことだらう！

一六

食後にまた、客人たちが離室に集まつた――そして公爵令孃もその席へ姿を現した。一座はわたしにとつて忘れることの出來ない、あのはじめての晩と同じやうに、すつかり顏ぶれが揃つてゐた。ニルマーツキイまでがのこ〳〵やつて來た。マイダーノフはこのとき誰よりも早く出席した――新しい詩を持つて來たのである。また賭けごとの遊びが始まつたけれど、もう前のやうに奇妙な思ひつきや、馬鹿ふざけや、騷々しさがなくなつて――ジプシイ風の分子が消え失せてゐた。

ジナイーダは一座ぜんたいに新しい氣分を添へた。わたしは小姓の權利で、彼女の傍に坐つてゐた。いろ〳〵あつた中で、彼女は籤に當たつた者が夢の話しをするやうに提

議した。けれど、それはうまく行かなかつた。夢は面白くなかつたり（ベロヴゾーロフは馬に鯉を食はせたところ、その首が木の首になつた夢を見た）、不自然だつたり、いかにも拵へものらしかつたりした。マイダーノフはまるで小說のやうな話しで、わたし達を饗應してくれた。その中には、墓穴が出て來たり、竪琴を持つた天使が出て來たり、ものいふ花が出て來たり、ものの音が遠くから漂つて來たりした。ジナイーダは了ひまで言はせなかつた。

「もう話しが創作になつた以上、」と彼女は言つた。「みんな何か作り話しをすることにしませう、きつと自分で考へ出した話しでなくちや駄目よ。」

最初の番にあたつたのは、またもやベロヴゾーロフであつた。若い輕騎兵はもじ〳〵しながら、

「僕は何も考へ出すことが出來ません！」と叫んだ。

「何てつまらない事を！」とジナイーダは抑へた。「まあ、例へば、あなたにお嫁さんがあるとでも想像してご覽なさい――そして、あなたがお嫁さんとどんな風に暮らすか、わたし達に話して聞かして頂戴。あなたはきつとお嫁さんを押し籠めてしまふでせうね。」

「押し籠めてしまふでせう。」

「そして、ご自分もその傍についてるんでせう？」

「必ず一しよについてゐます。」

「よろしい、ぢやもしお嫁さんがそれに飽きて、あなたに背くやうな事をしたら？」

「僕は殺してしまひます。」

「もしお嫁さんが逃げ出したら？」

「おつかけて行つて、結局やはり殺します。」

「なるほどね、ぢや、かりにわたしがあなたの奥さんだつたら？　その時あなたはどうなすつて？」

ベロヴゾーロフはしばらく默つてゐた。

「そしたら僕が自殺します……」

ジナイーダは笑ひだした。

「あなたの歌はどうしても、大して長くなりさうもないわね。」

二度目の籤はジナイーダに當たつた。彼女は目を天井に向けて考へ込んだ。

「ね、よござんすか、」たうとう彼女は言ひだした。「わたし、こんな事を考へ出しましたの……どうか立派な宮殿を想像して下さい。夏の夜で、すばらしい舞踏會があるんですの。その舞踏會の主は若い女王で、どこもかしこも金だの、大理石だの、水晶だの、絹だの、灯だの、ダイヤモンドだの、花だの、香だの、そのほかありとあらゆる贅澤な

品々が思ふ存分飾られてゐるんですの。」
「あなたは瞥澤がおすきですか？」ルーシンが遮つた。
「瞥澤つて綺麗なものだわ。」と彼女は言ひ返した。「わたし、何でも綺麗なものがすき。」
「美しいものよりも？」と彼は訊いた。
「何だかひねくつた質問ね、わたしには分からないわ。まあ、邪魔をしないで頂戴。それでね、すばらしい舞踏會なの。客が大勢集まつて、それがみんな若くて、美しくて、勇ましくつて、しかもみんな夢中になるほど女王に戀ひしてるんですの。」
「客の中に婦人はゐないんですか？」とマレーフスキイが訊ねた。
「ゐません――でも、待つて頂戴――ゐますわ。」
「みんな見つともないのばかり？」
「美人なのよ。けれど、男はみんな女王に戀ひしてるんですの。女王は背が高くてすらりとして、その黒い髪の上には、小さな金の頭飾が載つてゐます。」
わたしはジナイーダを見つめた――その瞬間、彼女かわれ〳〵一同よりずつと優れたものに感じられ、じつと据わつて動かない眉や白い額から、何とも言へない輝かしい叡智と威嚴が流れ出してゐるので、わたしは心の中で『その女王はあなた自身です！』と考へたほどであつた。
「みんな女王の廻りに群らがつて、」とジナイーダは續けた。「みんなありたけの智惠を絞つて、媚びの言葉をふり撒いてゐます。」
「女王はお世辭が好きなんですか？」とルーシンが訊ねた。
「たまらない人ね！　いつも横褌ばかり入れて……誰だつてお世辭の嫌ひな人はないわ！」
「ぢや、もう一つ、最後の問ひをお許し下さい。」とマレーフスキイが口を容れた。「女王には、お婿さんがありますか？」
「わたしそんな事は考へもしなかつたわ。いゝえ、お婿さんなんかいりやしないわ。」
「勿論です、」とマレーフスキイが引き取つた。「お婿さんなんかいるものですか！」
「Silence（默）」佛蘭西語の下手なマイダーノフがかう叫んだ。
「有り難う。」とジナイーダは彼に言つた。「そこで女王はかういふ言葉を聞いたり、音樂に耳を傾けたりしながら、客の方は少しも見ようとしないんです。上から下まで――天井から床まである六つの窓が開けはなされて、その外には、大きな星の輝く暗い空と、大きな木の繁つた暗い庭が

見えてゐます。女王はじつと庭を眺めてゐるんですの。そこには、木立ちの傍に噴水があつて、闇の中に白く見えてゐるのですが、それがひよろ〳〵長く伸びて、まるで幻のやうに思はれるんです。女王は人聲や音樂の響きの間から、靜かな水のせゝらぎを聞きながら、じつと見つめてこんな事を考へてゐます――皆さん、あなた方はみんな上品で、賢くて、それに金持ちです。あなた方はわたしを取り巻きながら、わたしの一こと一ことに戰々兢々として、みんなわたしの足もとで、死にもしかねない勢ひでゐらつしやる。わたしはあなた方を支配してゐるのです……ところが、あすこの噴水の傍には、あのさら〳〵と鳴る水の傍には、わたしの愛してゐる人が――わたしを支配してゐる人が、たゝずんでゐるのです。その人はきらびやかな着物もきてゐなければ、寶石もつけてゐません。誰もその人を知つてゐる者はないのです。けれどその人はわたしを待ち受けて、わたしの行くことを信じきつてゐます――えゝ、わたしは行きますとも。わたしがその人の所へ行きたいと思ふ時に、わたしを引き止める力はこの世にありません。わたしはその人と一しよにゐるのです。その人と一しよに庭の闇の中に、木立ちのさゞめきのもとに、噴水のせゝらぎの蔭に姿を消すのです……」
ジナイーダは口を噤んだ。
「それは作り話しですか？」とマレーフスキイが狡猾さうに訊ねた。
ジナイーダはその方をふり向きもしなかつた。
「諸君、」不意にルーシンがかう言ひだした。「もしわれわれがその客人たちの中にゐて、泉のほとりに隱れてゐる、その仕合はせ者のことを知つたら、一體どんなにしたでせう？」
「待つて頂戴、待つて頂戴。」とジナイーダは遮つた。「あなた方が一人々々どんな風になさるか、わたし自分で言ひますわ。あなたはね、ベロヴゾーロフさん、その男に決鬪を申し込みなすつたでせう。マイダーノフさん、あなたは諷刺詩をお書きになるでせう……もつとも、違ひます――あなたに諷刺詩は書けないから、バルビエ風の長たらしい長短韻を作つて、それを『電信』（詩の名）にお載せになるでせう。ところであなたは、ニルマーツキイさん、その人に金をお借りになるでせう……いえ、日歩で金をお貸しになるでせう。あなたはね、ドクトル……」と彼女は言ひ淀んだ。「さあ、あなたのことは分からないわ、あなたは何をなさるでせう？」
「わたしは侍醫の職務として、」ルーシンは答へた。「女王

をお諫め申しますよ――そんなお客どころでないやうな時に、舞踊會などなすつてはいけませんてね……」

「もしかしたら、それはもつともかも知れませんわ。ぢや、あなたは、伯爵？」

「わたしですか？」例の氣味の惡い微笑を浮かべながら、マレーフスキイは言つた……

「あなたはその人に毒のはいつたお菓子を薦めなさるでせう。」

マレーフスキイの顏はかすかに引つ吊つて、一瞬間、猶太人のやうな表情を帶びたが、すぐ樣から〳〵と笑つた。

「ところで、ヲルデマールさん、あなたのことになると……」ジナイーダは言葉を續けた。「でも、もう澤山だわ。何かほかのことをして遊びませう。」

「ヲルデマール君は小姓といふ資格で、女王が庭に駈け出すときに、その長い裳を捧げるでせうよ。」とマレーフスキイが毒を含んだ調子で言つた。

わたしは思はずかつとなつた。けれどジナイーダはわたしの肩にす早く手を載せて、半ば椅子から身を起こしながら、心もち慄へる聲で口をきつた。

「伯爵、わたしは無禮なことを言ふ權利など、決してあなたにさし上げたことはありません。ですから、もうお引き取りを願ひます。」彼女は戸口を指さした。

「飛んでもない、お孃さん。」とマレーフスキイは呟いて、まつ靑になつてしまつた。

「公爵令孃の言はれる通りだ。」とペロヴゾーロフは叫んで、同樣に身を起こした。

「わたしは全くこんな事など思ひもかけなかつたんです。」とマレーフスキイは言葉を續けた。「わたしの言葉には何もそんな……ことはないやうに思はれますが。あなたを侮辱するなんて、そんな事は夢にも考へなかつたんです……どうかお許し下さい。」

ジナイーダは冷たい視線を彼に浴びせて、ひやゝかな薄笑ひを洩らした。

「ぢや、まあ殘つてゐらつしやい。」無雜作な手つきをしながら、彼女はかう言つた。「わたしにしても、ヲルデマールさんにしても、腹なんか立てる事はなかつたんですわ。あなたはちよつと皮肉を言つただけで……それでいゝ氣もちになつてゐらつしやるんですからね。」

「ご免なさい。」マレーフスキイはもう一ど繰り返した。

わたしはジナイーダの手つきを思ひ浮かべて、たとへ本當の女王でも、あれ以上の品位を見せながら、無禮者に戸口を指さして見せることは出來まいと、またもやかう考へるのであつた。

この些細な事件のあつた後は、賭けごとの遊びも長くは續かなかつた。みんな少しばつが惡くなつて來たが、それは直接この事件のためといふよりも、何か充分はつきりしない、重くるしい別な感情のためであつた。誰一人それを言ひだす者はなかつたけれど、みんな自分自身の內部にも、仲間の腹の中にも、それを感じたのである。マイダーノフは自作の詩を朗讀した――すると、マレーフスキイは仰々しい熱心を見せながら、それを褒めたてた。

「先生、今度は善良に見られたくて堪らないんですよ。」とルーシンがわたしに囁いた。

間もなくわたし達は辭し去つた。ジナイーダは急にもの思ひに沈んでしまつた。公爵夫人は召し使ひをよこして、頭痛がすると言はせた。ニルマーツキイはレウマチを訴へはじめた……

わたしは長いあひだ寢つくことが出來なかつた。ジナイーダの物語りが、わたしの心を打つたのである。

『一體あの中に暗示が含まれてゐたのだらうか？』とわたしは自問した。「一たい誰を、そして何を暗示したのだらう？　もし本當に何か暗示するやうな事があるとすれば……どうして思ひきつて言ひ出せるものか？　いや、いや、そんな事のあらう筈がない。」熱い頰をかはる〳〵枕へあてゝ寢がへりしながら、わたしはかう囁いた……けれどわたしは、あの話しをしてゐる時のジナイーダの表情を思ひ出した……それから、ネスクーチヌイ公園でルーシンが口をとらせた叫び聲や、わたしに對する彼女の態度の急激な變化を思ひ出して――想像の糸口を失くしてしまつた。「それは一たい何者だらう？」この一言がまるで闇の中にしるされたものゝやうに、わたしの目の前に立ち塞がつてゐた――それはまるで低い不吉な雲が、わたしの頭上に垂れかかつたやうな氣持ちであつた。わたしはその壓迫を感じた――そして、今にもそれが嵐に變はるのを待ち構へてゐた。最近わたしは多くの事に馴れて來た。ザセーキン家でさんざん色々のことを見せられたからである――だらしのない生活、安蠟燭の燃えさし、こはれたナイフやフォーク、陰氣くさいヲニファーチイ、だらしのない恰好をした小間使ひ、當の公爵夫人のものごし恰好――かうした奇妙な生活は、もうわたしを驚かさなくなつて了つた……けれど、今おぼろげながら感じられるジナイーダの變化――これだけにはわたしも馴れることが出來なかつた……男たらし――あるとき母が彼女のことをかう言つた。男たらし――それはわたしの偶像ではないか、わたしの神ではないか！　この一